ウッドストックへの道
THE ROAD TO WOODSTOCK

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CONTENTS

序　章　プロローグ Prologue 7

第1章　ブルックリン Brooklyn 15

第2章　ココナツ・グローブ The Grove 31

第3章　ウッドストック、ニューヨーク Woodstock, New York 61

第4章　ウォールキル Wallkill 85

第5章　ニューヨーク・シティ New York City 123

第6章　ダウンタウン Downtown 143

第7章　ヤスガー農場 Yasgur's Farm 167

第8章　ベセル Bathel 207

第9章　1969年8月13日〜14日 August 13-14,1969 235

第10章　1969年8月15日 August 15,1969 261

第11章　1969年8月16日 August 16,1969 293

第12章　1969年8月17日 August 17,1969 337

第13章　祭りの後 The Aftermath 367

終　章　エピローグ Epilogue 389

謝辞 Acknowledgments 406

彼らは今？ Where Are They Now? 409

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

その先の何処かに
もう後戻りできない地点がある
めざすべきはそこなのだ

——フランツ・カフカ

From a certain point onward there
is no longer any turning back.
That is the point that must be reached.

——KAFKA

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

序章

Prologue

プロローグ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

いま月曜日の朝、10時だ。1969年8月18日。ジミ・ヘンドリックスは4万人の観客に向かって演奏している。もうすでに50万人ほどの人々が、昨日の晩に会場を後にしていった。ある者は職場に、ある者は〝ウッドストックの混沌〟という報道に心配する家族のもとへ戻っていったのだ。ステージから見ていても、去っていく人の数がどんどん増えているのがわかる。ジミもそれに気づいたのか、マイクで会場にいる人々に声をかける。

「行きたければ行っていいぜ。俺たちはジャムってるだけさ。去るもよし、手を叩いてくれるのもよしさ！」

雲が切れて合間から陽の光りが差しこみ、彼は空を見上げる。ひさしぶりに見る光りだ。

「まだ空の教会が俺たちの上にあるぜ。見えるだろ」、つぶやくように彼は言う。

ステージの周辺に群がっている人々の目は、ジミと彼の、ジプシー・サン&レインボーズに釘付けだ。みんな徹夜か、それ以上の時間ずっと起きているに違いない。僕らもまた、ここ数日間でほんの数時間寝たきりという状態だ。ジミの爪の先には泥がついているが、房飾りのついた白のレザー・ジャケットをまとった姿は、王様のように輝いている。まだ10代のパーカッショニスト、ジェリー・ヴェレスは流れる汗をぬぐおうともせず、恍惚(こうこつ)とした表情でコンガを打ち鳴らす。紫色の衣裳のジュマ・サルタンはマラカスを振り、ばちで太鼓を叩き、時々苦行僧のように顔をゆがめている。ジミの軍隊時代からの古い友人、リズム・ギターのラリー・リーは房のついた緑色のスカーフで、頭からすぐ目の上までを覆っている。そしていつも崩れぬリズムでジミの信頼を預かるベーシスト、ビリー・コックスはカラフルなターバン姿――まさにジプシーたちだ。エクスペリエンスの凄腕(すごうで)ドラマー、ミッチ・ミッチェルは一時も休まずにリズムを刻み続けている。

ジミは曲の間にチューニングしながら、「チューニングがしっかりしているのはカウボーイ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

だけさ」と、言ってクスリと笑みをもらす。ジョークをとばしていたかと思えば、次は「そこの黄色いパンツの女の子！」、とゆうべからシッポリとつるんでいた娘に声をかける彼。そして行くぞ、とバンドを一瞥し、手を振ると、〝ギターが俺を未知のどこかへ連れていくんだ〟とでも言わんばかりに、新しいギター・リフの中にはまりこんでいく……。

そしてまた冒険から帰ってきた彼。数は少ないが熱狂的なファンたちに視線を送り、思いをこめた口調で、感謝の言葉を口にする。

「みんなよく辛抱したよな――でもこの3日間はその価値があったぜ！　少しの愛と理解と、ごきげんなサウンドがあれば、どんなイカしたことができるか、きみたちは世界に示したんだぜ！」。

「ヴードゥー・チャイルド」から彼は急に「星条旗よ永遠なれ」のメロディを弾き始めた。その時からだ。一生に一度お目にかかれるかどうかの、ユニークでスリリングな〝体験〟を僕らがしようとしていたのは！　ビリー・コックスとラリー・リーは注意を受けた少年のように、直立不動の姿勢をとった。フィードバック、そしてディストーション。ジミはアメリカ国歌をズタズタに切り裂き、思うがままに自分だけのバージョンに仕立てなおしていく。

轟音が足元から爪先まで、まるで竜巻のように僕を、そこに居合わせたすべての人間を包み、どこかへ連れていく。電流のような感動が背骨を走り、そして僕は感じた。もう僕らの国歌は、これから先、二度と同じままではいられない、と……。

ジミはその瞬間、僕たちの集合的意識体験にプラグインしたのだ。サウンド・タワーからほとばしるサウンド、それは60年代に育ってきた僕ら、若いアメリカ人が感じてきた混乱と動揺、激情、そのすべてを表現していた。気がつくと僕たちはロケット弾が炸裂し、爆弾が落下する戦場にいた。警官隊と衝突し、怒号を浴びせる群衆の間を行進するデモの隊列の中にいた……。ジミのギターは僕らを

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

そんな光景の真っただ中へと連れていく。その「星条旗」は戦争に、社会的、人種的差別に加担する人々への激しい抗議であり、と同時に、この社会の至るところにできた亀裂を、今こそ修復すべき時だ、と呼びかけていた。

ここにたどり着くまでの旅の途中には、そんな啓示のような瞬間がいくつもあった。これまで世界の誰ひとり見たことがなかった奇蹟のような3日間。それは献身的で疲れを知らぬ人々が、夢と理想と、最高のアイディアと、何物にも屈しないタフな笑顔を持ち寄って作ったのだ。

お腹の中で新しい生命を育みながら、人知れず雨の中に立って、その瞬間を楽しんでいたジョーン・バエズ。フリーステージで、これまで会ったこともない若者たちとジョイントを回していたジェリー・ガルシア……僕の胸の中でいろんなシーンがフラッシュバックする。ステージの前に陣取って、身動きできなくなった若者たちに食べ物を配りに現れたホッグ・ファームの人々。午前3時に夜更かしの大群衆をウットリさせたクロスビー、スティルス&ナッシュの必殺ハーモニー、「青い眼のジュディ」。ステージに乱入したアビー・ホフマンを手にしたギターで一撃したピート・タウンゼント。〝ハイヤー!〟——司祭と信者たちのようなやりとりで、会場全体をさらなる高みへと導いたスライ&ザ・ファミリー・ストーン……。

残っているのはどんな連中なのだろう? そう思って会場を見回すと、疲れ、憔悴しきった人々、ハードコアなファンたち、そして〝何があっても、もうここから帰りたくない!〟という様子の人々。

僕はステージからのブリッジを渡って、トレイラー・オフィスへ戻った。この素晴らしい祭りの後には、きっと厳しい後片付けが、僕を待ち受けているのだろう……でも、それに取りかかる前にたとえ数分間でも、僕にはひとりになる時間がほしい。この4日間でとった睡眠はたった6時間。そのつ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

けが体に来ているのがよくわかる。

僕のパートナーたち、ジョン・ロバーツ、ジョエル・ローゼンマン、アーティ・コーンフェルドの3人はもうNYCに行っているようだ。そういえば、この間ジョンとジョエルの姿は見かけなかったし、ほとんど連絡もこなかった。彼らは良い時間を過ごせたのだろうか？　アーティがどんなだったかは知っている。大波のような大群がフェンスを越えてくるのを止めることができず、ささやかな僕らのパーティにやってきた何万、何十万という人たちが、もうチケットを買ったりはしないとわかった時、彼は一瞬、パニック状態におちいった。でも、じきに立ち直ると、誰かにLSDを盛られてイッてしまうまでの間、彼は到着したアーティストたちをステージまでエスコートし、映画の撮影に同意してくれるよう説得してまわっていたのだ。彼は〝人生最良の時を過ごした！〟と笑顔を浮かべていた。

あれは僕らみんなの人生最良の時だった。

故郷へ帰る旅――ウッドストック・ジェネレーション

僕にとってのウッドストックは、いくつものことをテストする時間だった。僕らの世代の人々は、本当にお互いを信じることができるのだろうか？　闘いながら何らかの世界を創り上げることができるのだろうか？　そんな役割をまかされたら、どうやって実現していけばいいのか？　頭に思い描く平和なコミュニティは、実際に生きることができるのだろうか？――僕はできると信じていた。この計画を始めた時から、僕たちがきちんと心をこめて仕事して、準備したグラウンドを正しいトーンで整えれば、そこに来る人々はいつもより気高い姿を見せて、何か素晴らしいことをしてくれるだろう

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

──僕はそう信じていた。

ウッドストックは僕らの連帯を象徴する言葉になった。それが僕にとっては何よりも素晴らしいことだ。みんなが通じあって、笑顔で結ばれていく！──それはフェスティバル運営側の誰も、そこに来た誰も、来られなくて悔しい思いをした誰も、そして後で知って心動かされた何百万という誰もが感じたことだった。

あの8月の週末、アメリカという国が混沌と混迷の中で激しく揺れ動いていた時、若者たちは最高の笑顔を最良の態度で、自分たちの望む社会の姿を世界に示してみせたのだ。たとえそれがわずかな時間だったにしても。時も、場所も、気持ちも、僕らも、すべて正解！　結果は、人間であることの喜びの確認、人間性の祝福だった。僕が知るかぎり、あれは人々の喜びが、時の最大のニュースになった数少ない瞬間だろう。

マックス・ヤスガーの600エイカーの土地で、人々は警戒心や猜疑心を捨てて、ひとつの大きな家族になった。みんなが音楽を楽しみ、互いの存在を喜び、交通の大渋滞、暴風雨に襲われても大勢の人々と一緒に耐え、人生観を一変するような体験をした。どんな災害、どんな難問に直面しても人々はくじけず、かえって結束を強めた。僕らはたがいをありのままの姿で、兄妹たちとして認め、たくさんのハグをかわした。僕たちは持っているすべてを分かちあい、すべての人を讃え、一緒にサバイバルしたのだ。

ジミ・ヘンドリックスがセットを終える。

僕はトレイラーを出て、自分のオートバイに乗ると丘のてっぺんへ向かった。僕のBSAヴィクター はスタートがかかりにくいと厄介な定評があるが、その朝は一発でエンジン・オン！　泥の海と化

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

したフィールドへ乗りいれると、捨てられた〝都市〟にはあたり一面、悪臭が立ちこめている。頂上に着くと、ステージ・クルーがジミの機材を運び出し、何百人かが荒れ果てた会場のゴミを片付け始めているのが見えた。

まわりの泥の海に浮かぶ船の甲板。そんな風に見えるステージの上では、疲れの限界をとっくに超えたクルーがコードを巻き、機材をケースにしまっている。白く大きなキャンバス地の屋根のステージ・カバーの残骸が、マストから引きちぎられた帆のように、風にはためいている。だとすると、あれはネバー・ネバーランドへ向かう船だ。僕らを大冒険の旅に連れていき、今はまた故郷へ帰るのだ。ステージの向こうには、みんなの喉の渇きを癒してくれた飲み水の源、湖の水面が前よりずっと低くなっているのが、ここからでもはっきりとわかる。まわりの丘はと見回せば、キャンプ場から旅の終点へと向かう人々の長蛇の列。すぐ後には、もう人の列も売り子たちの姿も消え、ガランと骨組みだけが残った出店のスタンド。やっと通れるようになった道を、清掃トラックやバキューム・カーが続々と会場へ近づいている。左手のハルド・ロードには木々の間から、人々の服やマーケットのペイント、まだ鮮やかな色の洪水が見える。

僕はエンジンを止める。あたりにはズタズタになったデッキチェア、泥まみれのベッドロール、壊れたサンダルの片方、ひしゃげたメロン……長かったお祭りウィークエンドの証拠品だ。そう、僕らはきっと全員がテストを受け、みんながそんな祝福の時、祝祭の場所を求めていたことを証明してくれたのだ。

僕らをここへ連れてきた、あのマジカルな旅。その途中で何百という不思議な仲間が加わり、疲れも見せずに動き続け、どんな不可能も可能に変えていってくれたのだ。ここから僕たちはどこへ行くのだろう。この先には、きっと膨大な赤字問題、ウッドストック・ベンチャーズ社の内紛問題……問

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

闇は山積みだ。
でも、今は、ウッドストックが起こった。その事実だけで僕にはもう十分だ。

りのーかんあたりを見回しながら、僕は思い出す。金曜日、オレンジ色の袈裟を着たリッチー・ヘイヴンスがステージに立ち、力強い輝きで人々をひとつにした時のことを。コンサートの最初の出演者は彼だった。といっても、そうなったのは単純に彼と彼のバンド以外、あの時出られる人間がいなかったからだ。一緒にステージへの橋を渡って行った時、彼の目には、その前にいた大群衆への驚きが、そして憧れの色が浮かんだものだ。だって、どこまでも、どこまでも続く、あの人の波……〟でも、僕は当然のように言ったものだ。

〝なあに、僕たちは故郷へ帰ってきただけさ〟。

ウッドストックは、みんなが待ちわびていた故郷へ帰る旅、ホームカミングの旅でもあった。リッチーが歌いだし、手にしたギターをトーキング・ドラムのようにリズミカルに弾き始めた時、あの時はじめて、僕は〝すべてがうまくいく！〟と確信した。ショーは始まり、僕らはホッと大きな息をつき、またそれぞれの戦闘位置へ駆け出した。それまでの10か月、僕たちがしてきた七転八倒の不思議な旅は、この瞬間へ辿りつくためだったんだ――その圧倒的な喜びで、胸が痛くなるのを感じながら。

突然、誰かがそばにトラックを停め、僕は夢のような時間から目覚めた。

〝マイケル！　今、アーティから電話があって、ウォール街でみんながきみの来るのを待ってる。すぐ行ってこいよ、大至急だ！〟

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

第1章

Brooklyn

ブルックリン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

マンハッタンの南、バワリーの薄暗く、タバコの煙たちこめるファイブ・スポット・クラブの隅で、僕はジョン・コルトレーンがエッジから旅立つのを見つめているところだ。その演奏は限界を知らない。自分の内側からわきあがるままを、とどめることなくサックスは歌い上げ、それがどこまで遠くに自分を連れていくのか、彼は見ようとしている。それがどこまで行こうと、先に何が待ちうけていようと少しもかまわずに。そこには危険もあるだろうが、うまくいくかもしれない。エッジの先には、そんな素晴らしくエキサイティングな何かがひそんでいるのだ。めざすべき場所はそこなんだ……。僕にとって、ブルックリン生まれの16歳のガキにとって、それはまったく新しい考え方だった。ひとつの型にはまらず、ルールにとらわれず、わきあがるインスピレーションに身をまかせて、その一瞬一瞬を生き、動き、表現すること。それはまだ書かれていない僕の人生の手引きとなって、いつか僕を助け、導いてくれるだろう……。

僕が育った1940年代の終わりから50年代のブルックリンのベンソンハーストには、多くのイタリア系とユダヤ系の家族が住んでいた。両親のハリーとシルヴィア・ラングは東ヨーロッパからアメリカにやってきた移民の子孫で、僕たちは近所のミドル・クラスの家族たちと同じように質素な生活を送っていた。父親は暖房設備を扱うラング・エンジニアリングを経営する自営業者で、母はその帳簿係だった。父は昔からなかなかの発明家で、若い時には海軍の潜水艦のバラスト・システムを考案して設計したり、石炭を動力源にする工場で排出される煙から有毒物を排除するシステムを開発したりしていた。もし、僕と姉のアイリスが産まれていなかったら、彼はもっと冒険に満ちた人生を送っていたに違いない。

[illegible]自分の力で生きることの大切さを教えてくれた。それはまさに彼

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

自身の生き方だった。問題は自分で解決するのだ、それが何であろうと。早くから彼は僕に困難な状況に遭遇した時の戦術をさずけてくれた。

〝攻め続けるんだ、動き続けるんだ〟、〝一歩さがって冷静な頭で考えるんだ、そして自分の直感を信じろ〟。

それは彼の人生哲学だった。そしてやがて僕の導きの言葉にもなるのだった。

ふたりが一緒になった当初から、僕の両親はさまざまな新しい事業を試みていた。成功した事業もあれば、うまくいかなかったのもあるけれど、その中でいちばんクールだったのは、アッパー・ウエストサイドで始めた「スポットライト・クラブ」というラテン・ナイトクラブの経営だ。50年代はマンボが大流行で、キューバやプエルトリコからやってきたミュージシャンがたくさん客を集めていた。スポットライト・クラブは長く、薄暗いスペースの壁一面に沿ってバーがあり、後ろは広いダンス・フロア、バーのはずれにバンドのステージがあった。昼間に見るとインテリアはとても悲しい感じだったけれど、夜になると豪華に光り輝いていた。階下は広い地下室があって、その広々としたスペースに、あの偉大なバンドリーダー、ティト・プエンテがドラム・セットを預けていた。エル・レイの名で知られていた彼はラテン音楽を大衆化して、後のサルサ・ミュージックの隆盛への道を開いた巨人だ。スポットライト・クラブで初めて彼と会ったのは、僕がまだ11歳か12歳の時で、ちょうどドラムを叩き始めた頃。ハンサムで真っ黒の髪の彼は僕にもっと演奏するように励ましてくれて、自分のドラム・セットを叩かせてくれた時もあった。その時期の彼がとばしたいちばんの人気曲のひとつが「オイ・コモ・ヴァ」。10年ほど後に、ウッドストックに出演して有名になったサンタナがカバーして再ヒットさせた、僕にはとても思い出深い曲だ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

僕が子供だった頃に、ロックンロールが最初の爆発をした。エルヴィス・プレスリー、バディ・ホリー、チャック・ベリー、リトル・リチャード、ビル・ヘイリーとコメッツの「ロック・アラウンド・ザ・クロック」が大きなインパクトをくれた。僕の家の近所ではストリート・コーナーでのハーモニーがさかんだった。僕がスティックボールをして遊んだ、同じブロックの友だちは町で人気のドゥワップ・シンガーだった。

家族の中で楽器を演るのは僕だけで、ロックンロール・バンドに参加したのは12歳の時。さっそくドラム・キットをかついで、あちこちを飛び回り、数えきれない階段を上り下りして、ベイ・パークウェイのジューイッシュ・コミュニティ・ハウスなどの〝豪華なホット・スポット〟で演奏したものだ。この時の体験が音楽とかかわる興奮を教えてくれた最初だろう。僕は通っていたセス・ロウ・ジュニア・ハイスクールでもバンドでドラムを演奏していた。でも、ユニフォームを来て町をパレードするのはイヤでイヤで仕方なかった。僕が最初にスクール・バンドでパレードしたのはセント・パトリックス・デイの5番街パレード。僕は60丁目へ出ると、急いで左折して、後も振りかえらなかった。こうして僕の最初で最後のパレードは終わった。

毎年、夏になるとニューヨーク・シティの北90マイルのキャッツキル・マウンテンにあるサリバン・カウンティのサマー・キャンプに出かけた。僕は自然の中にいるのが好きだった。ことに草原を馬で駆け回るのが大好きだった。11歳の最後のキャンプの年に、僕は納屋の手伝いをしていたなまけ者を〝きみのかわりに僕たちが馬の散歩をさせてあげるよ〟とかたらって、馬を連れ出して他のキャンパーたちとトレイル・ライドに出かけた。彼は僕にその夏の間中、白黒のまだら模様のあるボビーという名の馬を貸してくれた。ボビーの背中に乗ってギャロップで緑の中を駆けながら、僕は〝自

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

出」というタグを胸いっぱい吸いこんだ。その夏、僕はカウンセラーのトレーニング中の女の子と、納屋で最初の甘ずっぱい体験もした。

冬になると僕の家族はマイアミまで車でロード・トリップに出かけ、秋にはカナダへドライブ。道すがら紅葉を見物して楽しんだものだ。両親は姉のアイリスと僕を連れて長距離ドライブに出かけるのが好きだった。僕は親父とドライブの楽しさを分かちあい、彼は僕が11か12歳の時に運転のこつを教えてくれた。仮免許を取った日、彼は僕をマンハッタンのミッドタウンまで連れていき、ブルックリンの家までのやばい渋滞の道を僕にドライブさせてくれた。まもなく運転試験に合格すると、僕はオートバイを買った。僕はちょっといかれた少年だった。風の抵抗をへらすため、シートにうつぶせの姿勢で走り、ベルト・パークウェイに出るとエンジンを全開にしてレーサー気分で走るのが大好きだった。何年かして、このままではいつか必ず事故を起こして自分は死ぬだろうと思った僕は、町で運転するのをやめた。しかし、レーシングをする時の体から抜け出るようなラッシュ体験は忘れられず、その後ももう一度感じてみたいと思い続けていた。

14歳になってまもなく、友だちのアーウィン・ショロスと僕は最初のポットを体験した。アーウィンの兄のマーティは後にイスラエルで急進派のラビ僧になり（80年代にはボブ・ディランの息子の成人式の司祭をしている）、イースト・ヴィレッジで時代にはるか先んじてカルドロンというファンキーな玄米食レストランをやっていた。マーティが僕らに及ぼした影響はかなり大きなものだった。彼は東洋哲学に傾倒して、とてもボヘミアン風の生活を送り、そしてある日、アーウィンにポットをくれたのだ。その頃、ポット、つまりマリファナはジャズ・ミュージシャンやビート世代のアーティストたちにはおなじみのものだったが、まだ一般にはほとんど知られていなかった。ある秋の午後、僕

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

らは学校のすぐそばにあるセス・ロウ公園で火をつけた。自分が初めて味わったそのジョイントのことはよくおぼえている。それは黄色のペイパーで巻かれていて、火をつけて吸っていると中の種がポンポンと音を立ててはじけた。まだ育成液とか種の除去とか、そんなことを知るずっと前の話だ。

だが、最初、僕はハイの酩酊感を感じることはできなかった。マーティはアーウィンに、吸いこみ、そこでしばらく息を止めることを教えていた。ついにハイを感じるまで何度試したかはおぼえていないが、そうなった時、僕は何時間とも思える間、笑い続けたものだ。「ああ、わかったぞ!」という感じだった。アーウィンと僕はハイになって、音楽を聴いた。笑って、そしてお腹がすいた。ポットを試し、そしてやがてしたLSD体験は、それまで乗ったどんなオートバイや車よりも、僕を遠いところへ連れていってくれたのだ。

週末になると僕は茶色の封筒に入って売られていたマリファナを買うようになり、自分の部屋にこもって、金曜の夜のラジオ局WJZのシンフォニー・シドのプログラムを聴いた。このジャズDJは僕をチャーリー・パーカー、ジョン・コルトレーン、セロニアス・モンク、マイルス・デイヴィス、ディジー・ガレスピー、マックス・ローチ、セリア・クルズたちにターン・オンしてくれたものだ。僕は自分の部屋の窓辺に腰かけて、ジョイントに火をつけると、煙を裏道に吐きだした。僕はストーンしてジャズを聴くのが大好きだった。時々、夜のその番組を聴いていると、シンフォニー・シドは「眠くなってきたよ。でも誰かリスナー諸君の中に俺を起こしておいてくれるような何かを持っている人がいたら、ラジオ局に寄ってくれたまえ。歓迎するよ」と言うのだ。ほどなく彼はマリファナ所持で逮捕され、WJZ局を解雇された。

まもなく僕らは学校に通うのをやめた友だちのケニーが、やはりポットにはまっているのを知った。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

そこで彼の家に行って、僕らはハイになったた。彼の両親はほとんど家にいなかったのだ。ある日、ケニーの家から自宅に帰ると母が僕につめよった。押し入れを掃除していて、彼女は何オンスか入った容れ物を見つけたのだ。捨てられてはたまらない、と思った僕は急いで弁明をすることにした。本棚からエンサイクロペディア・ブリタニカを引き出すと、カナビス・サティヴァの項のページを開いて、そこに載った学術的記述を僕は彼女の鼻先につきつけた。ハイをするようになってまもなくその事典をチェックした僕は、それがなかなか好ましいものであることを知っていたのだ。淡々とした科学的記載という文章で、エンサイクロペディアは実に明解にマリファナが中毒性ではないと断定していた。「ママ、僕は自分が何をしているかわかっているよ」と僕は彼女に言った。「マリファナの吸引がハード・ドラッグにつながる、というのは迷信だよ。それをやると楽しくなるし、新しいものの見方ができるんだ。それにママは僕がアルコールを飲まないのは知っているじゃないか」。

この会話でとりあえず、対決はおあずけとなり、父親が帰宅すると僕らはキッチンのテーブルを囲んで、さらにこの問題について話し合った。僕の両親はとても理性的な人たちだった。もちろん喜んだわけではなかったが、彼らはそれが害のないことを率直に認めてくれた。とどのつまり、ふたりは禁酒法の時代を生きてきたわけだし、父親は短い間だったが密造酒製造の手伝いをしたこともあったのだ。1958年、59年、学校では〝気をつけよう、マリファナの使用は麻薬中毒への危険な入り口!〟なんていう麻薬撲滅キャンペーンが行われていた。だが、本格的なキャンペーンの時代はまだ始まってはいなかった。教育界のお偉方はコミック・ブックやロックンロールを攻撃し、青少年非行の蔓延を恐れるのに忙しかったのだ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

意識の扉の向こうへ――初めてのトリップ

16歳になって、LSD－25、スイスのバーゼルに本拠を置くサンズ社が最初に製薬して発表した薬を僕は発見した。しかし、1961年では、まだその存在は世間にはほとんど知られていなかった。ハーバード大学の教授、ティモシー・リアリーが〝ターン・オン、チューン・イン、ドロップ・アウト〟のキャンペーンを始めたのはまだ先のこと。このドラッグが非合法になるのは、まだ5年先のことだった。初めてケニーの家で試してみようと言われた時も、それがどんなトリップになるか、僕にはまったくわかっていなかったのだ。彼は澄んだ青い液体の入った小さなガラスの容器を取り出した。どこでどうやって彼が手に入れたのか、誰が彼に摂取方法を教えたのか、まったくおぼえていない。スポイトで、少量を角砂糖にしみこませ、僕は口の中に投げこんだ。それを舌の上で溶かし、僕は待った。

そして、いきなりすべての五感がとぎすまされたように、世界のすべてはスーパークリアーに、スーパーリアルになった。いや、それはとぎすまされたという以上の感覚だった。すべてがフォーカスされて合わさっていく……あの時の感覚は忘れようったって忘れられるものではない。僕はアシッドをやって音楽を聴くようになった。クラシック音楽であれ、ジャズであれ、インド音楽であれ、後になってはまったジミ・ヘンドリックスのようなサイケデリック・ミュージックやマザーズ・オブ・インベンションであれ、その状態で聴くとそれぞれの音楽世界の内側に吸いこまれ、まるで僕自身が音楽になるようだった。

LSDは僕の心を開いて、事物の新しい考え方を教えてくれるようになった。僕はヘルマン・ヘッ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

セの『シッダールタ』やカリール・ジブランの『預言者』、オルダス・ハクスリーの『知覚の扉』（ジム・モリソン、レイ・マンザレクがその本にちなんで自分たちのバンド名をザ・ドアーズにしたのは有名な話だ）などの本を熱心に読み始めた。

突然、僕は自分が旅をしていることに気づいた。アシッドをとると、それまで自分が普段なれっこになっている楽で心地よいゾーンを離れ、感覚のエッジに立つことになる。理性のコントロールを放棄して自分のスピリットへと向かう旅だ。最初にアシッドをやった時から、僕は意識と無意識の間の扉を、自分と宇宙との間の扉を開けているような気がしたものだ。僕はまわりのすべてを見て、そこに僕がいるのを感じた。僕はすべてのものとつながっていたのだ。自分がトリップをしている時の、変性意識状態にいる感覚はとても不思議で、快適なものだった。一緒にトリップをしていると、その急激な感覚の変化が恐ろしくなって、混乱し、いわゆるフリークアウトしてしまう人もいたが、僕はその変化をいつも落ち着いて受け止め、その人たちを連れて不快ではない場所へ着地させることもできた。

それは学習体験であり、啓示の機会ではあっても、パラノイアでは絶対になかった。僕は一度もバッド・トリップを体験しなかった。

二度目か三度目にアシッドを試した時のことだ。僕と友人たちは地下鉄に乗って、マンハッタンへ出かけることにした。列車のドアのわきの席に座って見ていると、向かいの席にいた男がウサギになった。彼は鼻をこすりだし、続いてひげを、耳をひっかきはじめた。それでも僕はフリークアウトしなかった。僕は不思議な出来事をそのまま全部受け入れた。午前4時、タイムズ・スクエアで地下鉄をおりて、僕らは人気のないマンハッタンのビルの谷間へさまよいだした。僕は意識の変化が見せて

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

くれるパノラマに夢中になっていて、ふと気がつくと、まわりに友人たちの姿はなく、僕はひとりになっていた。それから何マイル歩いたのだろう。僕は深い森の中にいる自分を見つけた。ベンチに腰をおろして、それから僕は何時間も自然と交感した。

見上げると太陽が昇っていた。頭上を影でおおっていたのがエンパイア・ステート・ビルディングだと気づいたとたん、僕は現実世界に引き戻された。僕はフィフス・アベニューの〝町角の小教会〟の隣の小さな公園にいただけだった。

グリニッチ・ヴィレッジの青春

11年生の学期が終わった夏、僕はグリニッチ・ヴィレッジを発見した。それまで2、3回はマンハッタンのダウンタウン、ワシントン・スクエア・パークを中心に広がるこのエリアに行ったことはあったが、家族と一緒にクリストファー・ストリートの劇場に『三文オペラ』を見に行って、歩きまわったぐらいだった。だが1961年、ケニーと彼のガールフレンド、キャシーとヴィレッジ・コーナーという小さな場所で待ち合わせて、出かけた僕はたちまちあたりの雰囲気や、文化、そこの人たちに夢中になってしまった。ケニーとキャシーと一緒に現れたのは20代なかばの美しい黒人女性、ポーリーン。ゴージャスな赤毛のキャシーと彼女はウエスト・ブロードウェイ500番地のアパートで共同生活をしているとのことだった。ポーリーンと僕は意気投合、たちまち熱い仲になった。こうして僕は彼女たちのアパートに転がりこみ、その夏のほとんどを彼女と過ごしたのだ。

キャシーとポーリーンは〝ワーキング・ガール〟だった。ポーリーンは彼女自身の女の魅力を使って仕事にしているのではなく、ウエスト・ブロードウェイのアパートから電話でブッキングやアポイ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ソートをとり、〝ガールズ〟をデートのお相手たちの待つ、いろいろな場所に車で運ぶなど、〝マダム〟として組織を動かしていたのだ。彼女が何をしているのか僕は深くは考えなかった。これは彼女の生活で、彼女が生計を立てるのにしていること、と割り切って見ていたのだ。当時、僕は他にもいろいろなガールフレンドとつきあっていたが、ポーリーンと一緒にいるのは特別な時間、特別な体験だった。夜になると彼女は〝ガールズ〟がしたように、ハイヒールをはき、体の線にフィットしたカクテルドレスを着た。高級コールガール・スタイルとでもいえるそのファッションは、とてもエレガントで、野暮ったさのひとかけらもなかった。彼女たちには、はぶりのいいビジネスマンたち、上客がゴマンとついていた。サービス料は一回のデートで数百ドル。当時としては、それは大変なお金だった。

ガールズはヴィレッジと今日ではソーホーと呼ばれる地域の間にある小さなビルに一緒に住んでいた。ソーホーは当時まだ、問屋の倉庫などが並ぶ商業エリアだったが、少しずつ広いスペースと安い家賃に目をつけたアーティストたちが、ロフトに改造して住みはじめたところだった。ポーリーンのアパートは、フロアにマットレスを置き、窓やランプはスカーフでおおって暗くし、ろうそくをともし、一日中音楽を流し、とてもボヘミアン風なスペースだった。僕らはアパートには寝に帰るぐらいで、そこではあまり長い時間を過ごさなかった。午後の時間は普通にレオタードとスカート姿、かつらをつけてポーリーンはヴィレッジを案内してまわってくれた。夜は、たいがいヴィレッジ・コーナーからスタートして、ヴィレッジ・ヴァンガードやファイブ・スポットにジャズを聴きに行った。4、5人のミュージシャンが、地図も持たず、これからどこに行くかも決めないで即興でする音の旅……どうしてあんなことができるのかと、僕はいつも見つめるばかりだった。時にはふたりでジャズやR&Bのクラブをチェックしにハーレムまで足を運ぶこともあった。

ポーリーンの世界のすべてに僕は魅せられていた。ビート・ジェネレーションに始まったカウンタ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ーカルチャーのシーンは発展し、今はフォーク・シーンに変わろうとしていた。画家や写真家、アウトサイダー、はみだし者たち——社会で高い地位につくことなどに目もくれず、自分たちの好きなこと、関心のあることだけを追求する人たちの中にいるのはとても刺激的だった。こうしたローカルな住民たちのための店を開き、小さいが魅力的なビジネスを始める人たちも増えていた。イースト・ヴィレッジのセント・マークス・プレイスに開店した「ディファレント・ドラマー」はヴィンテージな古着を売るお店だった。

人々の服装はこれまでとは、大きくスタイルを変えようとしていた。僕は髪をのばしはじめた。ヴィレッジのとても魅力的なライフスタイルは僕の目を見開かせてくれた。それは僕が知っていたベンソンハーストのそれとはまったく異なる、実に新鮮なものだった。

およそ2か月ほどたったある日、ポーリーンが言った。「あなた、わたしに恋をしはじめたんじゃない？　だけど、わたしたちはもう長続きしないと思うの……」。僕の無邪気さを笑い、そして彼女は釘を刺した。「これ以上あんまりつきまとってほしくないのよ」。胸がズキンと痛くなった。でも、これまで彼女がくれたたくさんのやさしさを思うと、僕には返す言葉もなかった。もうそれから二度とポーリーンと会うことはなかった。でも、ふたりでともに過ごしたその夏は僕を変えた。彼女が開けてくれた扉、それは二度と閉まることはなかった。

ハイスクールのシニア・イヤー、学生指導のボンハム先生のおかげで、僕は早く大学に入る機会にめぐまれた。ニューヨーク大学が、ハイスクールの夜学コースをとるならという条件で、1月からの入学を認めてくれたのだ。こうして1962年になると、僕は大学のあるヴィレッジへと通いはじめた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

両親はこの一連の出来事に大喜び。大学は彼らには長い間の夢だったからだ。そして当時、NYUの授業料はまだそんなに高くなかったのだ。その夏、僕はブリッカー・ストリートにある「ヴィレッジ・コブラー」というこじゃれたブティックでバイトを始めた。ちょっと変わったイアリングや革製品、手作り工芸品などいろいろなものをそろえて売っていた。フォーク・シーンが花開いていたヴィレッジの真ん中にいられるのが嬉しかった。フォーク・ミュージックは若者世代をひきつけ、そのメッカになっていたヴィレッジのあちこちのクラブには、たくさんの若いシンガー・ソングライターたちがアメリカ中から集まってきていたのだ。すでにボブ・ディランはコロンビア・レコードからデビュー・アルバムを出していたが、ヴィレッジに暮らし、ご近所をまわって歌っていた。僕はブリッカー・ストリートとマクドゥガル・ストリートに点在する「カフェ・ワ？」、「ビターー・エンド」、「ガーズ・フォークシティ」、「ガスライト」などのコーヒーハウスやクラブに出かけ、ボブ・ギブソン、フィル・オクス、ジャック・エリオット、フレッド・ニール、デイヴ・ヴァン・ロンクなどの歌手の演奏をかたっぱしから聴いてまわった。ワシントン・スクエアには週末になるとギターやバンジョーを、あるいはボンゴを持ってやってくる若者たちでいっぱいになった。もちろん他のあらゆる種類のアーティストやディーラーたちも。時計の針が真夜中を過ぎると、そこでは簡単にグラス（スコア）を入手することができた。

マクドゥガル・ストリートのコーヒーハウス、「リアンツィ」の窓辺に腰かけて僕はよく表を通りすぎるカラフルでクレイジーな人たちを見物したものだ。まだヒッピー時代は到来していなかったが、その走りとなるフリーキーな人々があらわれだしていた。僕はスーパー8を手に入れ、ヴィレッジのストリート・ライフを撮影してドキュメンタリー映画を作ることにした。「リアンツィからの眺め」とタイトルまで決めていたのだが、その映画が完成することはなかった……。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

12月の僕の18歳の誕生日の前に、僕は徴兵の通知状を受け取った。1962年、アメリカはまだ正式に宣告されていない戦争だったが、状況は少しずつエスカレートしていた。アメリカはこれまで40年も続いている東南アジアの混乱に加担する理由などない、と僕は考えていた。それに僕にはベトナムの人々を敵と思う理由なんかなかった。僕は精神分析医のもとに、僕が兵隊として精神的に不適格であるという診断書を書いてもらおうと3週間かよいつめた。僕が目上の人間、権威への敬意を一切持ちあわせず、命令されたという理由だけで他の人類の仲間に発砲したりしない人間であることは明白。精神科医は〝この者、軍隊には良き候補者と思えず〟と診断書に書いてくれた。これでもう、この件は落着と思ったのだが、また通知状が届き、開けてみると〝ブルックリン、バロー・ホールでの身体検査に出頭せよ〟とある。

すべての検査、テストを終えた僕は、誰かがやってきて列から僕をひっぱりだし、「おまえはわれわれが求めている人間ではない！」と言うのを、いまかいまかと待っていた。だが、そんなことは起こらなかった。そこには軍服姿の係官が僕らにつきそっていたが、ついに僕は座っていた席の列から飛び出し、階段を駆けおりて、精神科の医者のオフィスを探した。見つけると僕はドアから中に入るなり、「いいですか、あなたは僕の持ってきた診断書に目を通していないでしょう！　とにかく陸軍は僕を入隊させたいとは思わないでしょう！」と闖入（ちんにゅう）に驚いて目をパチクリしているドクターの前で言い放った。僕は腰をおろし、精神科医に向かって、自分が道義的にこの戦争に反対であること、どんな殺人も許されるとは思わないこと、など自分の信じるところを勢いよく、まくしたてた。これは

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ベトナムでの戦闘が本格化するかどうかという、まだまだ最初の時期だった。つまり、アメリカ軍はまだ兵隊の収集にそれほど躍起になってはいなかったのだ。徴兵が回避できない状態になったのは、これから4年も、5年も先のこと。長い討論の果てに、ドクターは僕の検査書に〝見送り〟の判を押した。

徴兵センターからはそれっきり何の連絡もなかった。自分が信じない戦争で戦うなんてまっぴらごめんだ。そしてその混乱の10年の終わりに、ウッドストックで何十万という僕と同じ考えを持った若者たちが集まり、平和を叫ぶことになろうとは……僕はその時、まったく予想もしていなかったのだ。

＊**三文オペラ**　ドイツ人劇作家ベルトルト・ブレヒトが書き、1928年、ベルリンで初演され、大ヒットしたミュージカル。クルト・ワイル作曲の小編成コンボで演奏される劇中歌は1955年に始まったヴィレッジのオフ・ブロードウェイ劇場での公演が3千回のロングランになる間、「マック・ザ・ナイフ」としてルイ・アームストロング、ボビー・ダーリンの歌で大ヒットし、ジャズ・スタンダードとなった。戯曲の風刺と諧謔に満ちた社会矛盾を告発する手法はボブ・ディランを初め、ヴィレッジのソングライターたちに大きな影響を与え、また小劇場ミュージカル路線の可能性をアメリカ演劇界に示した最初の作品としても画期的だった。

＊**ビート・ジェネレーション**　1944年、ニューヨークのコロンビア大学やタイムズ・スクエア周辺で出会った若い詩人、作家たちは、1956年アレン・ギンズバーグの詩集『吠える』、1957年ジャック・ケルアックの小説『オン・ザ・ロード』が発表されたのをきっかけに、その新しい生き方、これまでの社会通念を払拭する価値観で、文学のみならず、ファッション、ライフスタイルでも若者たちに大きな衝撃と影響を与え、ニューヨークのグリニッチ・ヴィレッジ、サンフランシスコのノースビーチに見物客が訪れるなど、社会的現象にもなった（参考文献『ジャック・ケルアック／放浪天使の歌』スティーヴ・ターナー著・室矢憲治訳・河出書房新社、等）。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

右上より時計回りに
僕の両親ハリー＆シルヴィア・ラングと
姉のアイリス（1941年頃）
両親と僕（1949年頃）
アイリスと僕。ベンソンハーストにて（1949年頃）
エルヴィスに憧れた12才の僕

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

第2章

The Grove

ココナツ・グローブ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

襲いかかるように激しい雨が屋根のないステージに降りそそぎ、客席のムードはどんどん険悪になっている。彼らのいらだちは今のマイアミの湿度と比例して高くなるばかりだ。数人のできそこないどもがコーラの瓶や石を投げ始めるのにはマイッた。「でっかい音で鳴る音楽をやれ！」——それが彼らの怒りの声だ。だがこんな雨の中でステージに電気楽器を使うグループを上げるわけにはいかない。それでもいかれたイギリス人のヴォーカリストが自分たちのバンド、クレイジー・ワールド・オブ・アーサー・ブラウンは演ってもかまわないぜ、と言いだした。

「一度、感電を体験してみたかったんだ！」と彼は僕の手をつかんで、しつこくせがむ。「きっとビューティフルだぜ！」。僕はアーサーがフライになって飛び上がるさまを想像して思う。なにがビューティフルなものか！

いま必要なのは誰かパワフルなアコースティック・アクトを演れる人間だ。

雨がやんできたので、スタッフはステージの上にたまった雨をモップで始末する。ステージといってもそれは2台の平らなトレイラーを合わせたもの。その時、バックステージで腰をおろして、出番を待ちながら、クールにタバコをふかしている男が僕の視界にとびこんできた。そうだ、彼、ジョン・リー・フッカーこそマイ・マン！　僕が求めている男だ！

20分後、50歳のベテラン・ブルースマンはさっきまであれほど手のつけられなかった客たちを、子供のようにあやつっている。きっと彼はこれまで、もっとひどい修羅場をくぐりぬけてきたに違いない。まぶかにポークパイ・ハットをかぶり、サングラスをかけたまま、彼はトレードマークのような唸り声で「ブギー・チラン」を歌い、叩きつけるようにギターでビートを刻んでいる。続いては雨の中で歌う男のトーキング・ブルース——もちろん即興の作品だ。観客はもう魔法をかけられたように、うっとりと聴きいっている。そうだ、これが真の音楽のパワーってやつだ。人々の心を打ち、そして

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

覚えてしまう、目には見えない計りしれぬ力を音楽は持っているのだ。
ジョン・リーのセットが終わりかけたその時、ひとりの少女が舞台にのぼってきた。
そして彼女は、ジョン・リーの足元に花束を置いた。

1964年の春、僕はフロリダのタンパ大学に転入した。タンパの町には大勢の宇宙飛行士（アストロノーツ）がいたが、それ以外は何もたいしたものはなかった。僕は頑張ってはみたのだが、6か月がせいいっぱいだった。何もかもあまりにストレートで、あまりにガチガチ――僕にとけこめというのは無理な話だった。そしてニューヨークへ、NYUへと僕は戻った。とはいうものの、暖かな南の気候は一度知ると癖になる。こうしてそれからもフロリダにはよく出かけた。ベンソンハーストの友人、ボブ・ウエストと車でマイアミに行った時はスリリングな体験をした。その頃はまだ、ニューヨークのナンバープレートをつけた車で南部に走るのは勇気がいる時代だった。南部の黒人たちの選挙登録を助け、人種差別の廃止を唱える公民権運動の活動家や支援学生たち、フリーダム・ライダーズと名乗る人々が北部から旅してくると、地元の保守的白人たちが暴力で歓迎して、誘拐やリンチ事件も多発――各地でトラブルが絶えなかったのだ。なにを隠そう、僕の姉のアイリスもこの運動に積極的に参加。大学で法律の学位を取った彼女は、夫の弁護士、ポール・ブレストと2年間ミシシッピーに住み、学校での分離教育撤廃を推進する援助団体LDFの活動をしていたのだ。

南部では北部からの人間、ことに長髪の人間には鋭いまなざしが向けられた。ボブと派手な車体のスポーツカー、コルヴェットを走らせ、フロリダに向かう途中、僕らはサウス・カロライナで、とある道端の食堂に立ちよった。僕らはかなり長く髪をのばしていた。カウンターに座って、コーヒーを注文して、店の中をあらためて見回すとミルクの販売機の上にこんなサインがあるではないか――

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

〝KKKはおまえたちを見ているぞ!〟クー・クラックス・クランといえば狂信的な活動で恐れられる白人至上主義団体ではないか。北部では漫画の風刺ネタではおなじみの名前――こうして思わず自分たちのいる場所を忘れて、ふきだしてしまった僕たち……。するとそれが店に居合わせた地元のこわもてたちの目にとまってしまった。たちまち、あたりは映画『イージー・ライダー』の場面さながらに、険悪なムードに一変。や、やばいぜ、こ、これは……僕らは店を飛び出して、車へと駆けだした。案の定、血気さかんな奴らが、僕らが走りだした後をピックアップ・トラックで追跡する始末。でも残念ながら、僕らの車はアッというまに彼らのトラックをブッちぎったのだ。コルヴェットを運転してきた幸運を、僕らはどんなに感謝したことだろう。

こうして何度目かの南へのトリップで、マイアミの南、マイアミ大学キャンパスのそばにある、ゆったりムードのトロピカル・コミュニティ、ココナッツ・グローヴに僕らは足を踏み入れた。アートの匂いふんだんで、犬が道路の真ん中で昼寝しているような、なんともたまらなくレイドバックした雰囲気がそこには流れていた。ココナッツ・グローヴの発見は、僕にはその旅の大きな収穫だった。

ここは住むには最高の場所じゃないか……。

南の風の吹く土地で――ニュービジネスの試練

1965年、NYUの秋の学期中、ついに僕は学校生活に終止符を打つことにした。もう、たくさん。僕はマイアミに移り、ヘッド・ショップをオープンすることに決めた。これまで両親がさまざまなニュー・ビジネスに挑戦するのを見てきた僕だ。彼らがこの新しいラインを知っていたかどうかはとにかく、僕だってトライしてみてもいいではないか? 彼らがしてきたように僕だって、自分の足

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ぶつかって学んでいくのだ。

「学校にいたってなんにもならないんだ」。僕は彼らに言った。「僕は世界に出ていきたいんだよ」。

いつものように、ふたりは困ったという表情をみせたものの、僕の決心を尊重してくれた。その学期で僕はNYUを去り、春の間、どんなヘッド・ショップにしようか、アイディアを練り、たくさんのコンタクトをとった。当座の生活はちょっとポットを売った金でまかない、いろんなおかしな仕事をして貯めたお金、成人式で親族からもらった金、あわせて4、5千ドルで銀行口座を作った。とりあえずそれだけあれば、品物を買いつけ、場所を借りて店をスタートするにはたりるだろう。

僕がNYUでの最後の学期の授業に通っていた時、エレン・レミッシュと再会した。最初に彼女と会ったのは子供時代、彼女の父親の眼科医院でのことだった。うりふたつの双子の姉とエレンはアッパー・ウエストサイドの大きなアパートメントに住んでいた。彼らはアパートの部屋を貸して、そこにはいつもおもしろい人々が出入りし、一種のカウンターカルチャーのサロンになっていた。そこには絶えずエネルギーが躍動していた。エレンと僕は恋に落ちた。そして僕と一緒にフロリダへ引っ越すことになった。彼女はたくさんの絵かきや、ヘッズたちを喜ばせるような素敵な小物を作る手作りアーティストを知っていた。僕らはショップ用にそれらを集めはじめた。

すでにとてもヒップな起業家、ジェフ・グリックがイースト・ヴィレッジにヘッド・ショップを開店していた。その最初のヘッド・ショップでは、ローリング・ペイパーやパイプや、ヘッズたちのためのさまざまなグッズが売られていた。ジェフはまたピーター・マックスの初期のポスターやサイケデリック・アートも扱っていた。彼はとても寛大な態度で、このビジネスに必要ないろいろな仕入れ先を教えてくれ、僕をピーターに紹介してくれた。ピーターに自分のプランを話すと、彼はアッパー・ウエストサイドのマンションに呼んでくれ、僕の店用のポスターをたくさん選んでくれた。とて

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

もたくさん。だけど残念なことに僕の予算は微々たるもの……僕はその中から6枚のポスターを買うのがせいいっぱいだった。それでも、ありがたいことに彼は気持ち良く僕を励ましてくれた。こうして親友になった僕とピーター。その友情は今日にいたるまで続いている。

エレンと僕は四角い箱型の車を借り、荷物を全部積みこむと、マイアミへ旅立った。だが、1966年の秋、いくら探してもココナッツ・グローヴには空き物件は見つからなかった。その代わり、サウス・マイアミのマイアミ大学の近くに手頃な空き店舗があった。こうして、サンセット通りに「ヘッド・ショップ・サウス」がオープンした。ストリートのロックンロールとともに。そう、開店にあたり、地元のバンドに店の前で派手に演奏してもらうよう手配していたのだ。この作戦は大成功、店の中には身動きもできないほど大勢の人がやってきた。まだ南フロリダのキッズたちは見かけはストレートで、ニューヨークやサンフランシスコのようにたくさん、髪を長くのばした連中はいなかった。それでも彼らは熱心に店をチェックしてまわっていた。

そして運の悪いことに、地元の警察署長とワッケンハット・エージェントの調査員もそれにおとらず、熱心に店内を視察していた。彼らはDEA（麻薬取締局）と同様の力を持つ、悪名高き私設探偵局だった。オープニングの日に姿を見せたかと思うと、もうその翌日には無許可営業のかどで僕らは閉店を命じられてしまった。ココナッツ・グローヴとは大違い。ここはとても右翼的で保守的な地域だったのだ。僕らはその土地柄にはそぐわない、排除すべき余所者たち、というわけだ。

僕はすぐにこの処置は不当だと訴えを起こした。公聴会は僕らに敵意を持ったたくさんの住民たちと数人のフリーク仲間がやってきて満員。マイアミ大学の教授が僕らの権利を擁護するべく証人席に立ってくれたが、その演説は高尚すぎてチンプンカンプン、結局、営業許可の申請もあっさり却下さ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

もたくさん。だけど残念なことに僕の予算は微々たるもの……その中から6枚のポスターを買うのがせいいっぱいだった。それでも、ありがたいことに彼は気持ち良く僕を励ましてくれた。こうして親友になった僕とピーター。その友情は今日にいたるまで続いている。

エレンと僕は四角い箱型の車を借り、荷物を全部積みこむと、マイアミへ旅立った。だが、1966年の秋、いくら探してもココナッツ・グローヴには空き物件は見つからなかった。その代わり、サウス・マイアミのマイアミ大学の近くに手頃な空き店舗があった。こうして、サンセット通りに「ヘッド・ショップ・サウス」がオープンした。ストリートのロックンロールとともに。そう、開店にあたり、地元のバンドに店の前で派手に演奏してもらうよう手配していたのだ。この作戦は大成功、店の中には身動きもできないほど大勢の人がやってきた。まだ南フロリダのキッズたちは見かけはストレートで、ニューヨークやサンフランシスコのようにたくさん、髪を長くのばした連中はいなかった。

それでも彼らは熱心に店をチェックしてまわっていた。

そして運の悪いことに、地元の警察署長とワッケンハット・エージェントの調査員もそれにおとらず、熱心に店内を視察していた。彼らはＤＥＡ（麻薬取締局）と同様の力を持つ、悪名高き私設探偵局だった。オープニングの日に姿を見せたかと思うと、もうその翌日には無許可営業のかどで僕らは閉店を命じられてしまった。ココナッツ・グローヴとは大違い。ここはとても右翼的で保守的な地域だったのだ。僕らはその土地柄にはそぐわない、排除すべき余所者たち、というわけだ。

僕はすぐにこの処置は不当だと訴えを起こした。公聴会は僕らに敵意を持ったたくさんの住民たちと数人のフリーク仲間がやってきて満員。マイアミ大学の教授が僕らの権利を擁護するべく証人席に立ってくれたが、その演説は高尚すぎてチンプンカンプン、結局、営業許可の申請もあっさり却下さ

隣には北の銀行ビルに、ジョン・C・リリー博士のドルフィン・リサーチ・センターがあり、そこでドクター・リリーは、イルカたちのコミュニケーションを研究する初期リサーチに没頭。銀行の巨大な金庫を改造した海水タンクに入り、イルカたちと一緒にLSDトリップをしていた。

僕と同じあやまちを繰り返さないように、今回は前もって僕は店の開店許可証を申請しておいた。"ギフト・ショップ"の名目で。初めのころはボブ・ウェストが僕とエレンの店を手伝ってくれた。店には4つの部屋があり、そこに商品を並べた。ガラスのケースにトルコ製の水パイプやエキゾチックなパイプ、いろいろなローリング・ペーパー類。さまざまな関連グッズを陳列した。1966年。ポスターアートは大流行だった。僕たちは壁から天井まで部屋の一面をマルクス・ブラザーズや映画「乱暴者」のマーロン・ブランド、アレン・ギンズバーグ、ボブ・ディラン、レニー・ブルースといった伝説的アイドル、人気スターのモノクロ・ポスターで飾った。ピーター・マックスのポスター。そしてフィルモアやファミリー・ドッグのロック・ショーの素晴らしいポスターやチラシを作ったサンフランシスコ・アーティストたちのポスターも。それぞれの部屋の戸口には天井からビーズの長いカーテン。ある部屋ではストロボ・ライトが点滅し、また別の部屋ではブラック・ライトがスペースを紫色に染めて、脈打った蛍光ポスターの魅力を客に教えた。レコードは休みなくかけて、店にはいつもビートルズ、ストーンズ、マザーズ、ディラン、バーズが鳴り響いていた。週末はたくさんの上がりがでた。金曜の夜はパーティ・タイム。僕らは真夜中まで店を閉めなかった。いつのまにか、僕らの店はマイアミで広がっていくカウンターカルチャーのセンターになっていたのだ。

店を閉めている時は、友人たちの場所を回り、そこでたむろしては、料理をしたり、音楽を聴いたり、ハイになったりした。中古のVWのバンを買ったが、グローヴを回るのにぴったりの車だった。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ウファリ・フロントの窓をあけっぱなしにして僕たちは神秘的な真夜中クルーズを楽しんだ。アシッドをやったり、思いきりきめて、海辺へ出たり、灯台へ行って、町あかりを眺めたりした。

少しずつ、僕とエレンの関係はうまくいかなくなり、ある日彼女はニューヨークへ帰っていった。それから、数か月して僕はソニア・マイケルとつきあいはじめた。彼女は20代後半の地元のアーティストで金髪の美しい女性。彼女はスタジオを、画家でドラムやビブラフォンを演奏するミュージシャン、DKことドン・カイダーとシェアしていた。このDKを通じて、僕はまもなく将来のウッドストックのパートナー、アーティ・コーンフェルドと会うことになった。ソニアとDKは共同で彼らの名前からつけたソードー・ポスターズというポスター会社で、ゴージャスな蛍光ポスター、〝スピード〟、〝ルーシー・イン・ザ・スカイ〟、〝マッシュルーム・マウンテンズ〟なんて作品を作り、売っていた。僕らはアメリカ中にできてきたヘッド・ショップにポスターを卸し、彼らのポスターは大人気だった。

店のまわりはにぎやかなシーンができていった。1967年には店の裏に「リベリタリアン・ウォッチドッグ」というアンダーグラウンド・ペイパーのオフィスが設けられ、雑誌の発行が始まると、たちまち警察がやってくるようになった。それまでにも、彼らは店に来る客たちを、信号無視の道路横断でつかまえたり、ささいな理由であれこれ僕らにちょっかいをしてきたが、地元のTVニュースの特番〝マイアミ麻薬事情〟で僕と店が取り上げられると、さらにいじめが激しくなった。67年の6月13日に放映されたその特集はデイド・カウンティの若者たちのドラッグ使用をリポートするからと、店にやって来た取材班のインタビューを受けた僕が――16歳のガキンチョのように映っていた――店のグッズは人々のサイケデリック体験を助けるためさ、なんて話していた。ポット使用者たちは身元

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

を隠すため、ライトを暗くして取材に応じていた。だが、南部で新しいムーブメントを広げようとしていた僕たちは、僕たちが何をしているか、店を通して知ってもらえれば嬉しいと思っていたのだ。

まもなく店のまわりにはバイクに乗った警官たちの一団が現れるようになり、金曜と土曜の夜には向かいの街角で、またなんやかやと理由をつけて客や僕らに罰金チケットを切った。僕を逮捕したかったのだろう。だが、何か月かそんな状態が続くうちに僕は中の何人かの警官と仲良しになった。年齢も同じぐらいの気品のある連中で、素直に好奇心を示す彼らと僕は気さくに話ができるようになっていった。この時のひとり、"ボブ・ザ・コップ"は後でウッドストックに駆けつけ、助けの手になってくれたものだ。

地元の政治家たちは、ドラッグの使用をストップしようと画策し、秘密裏にココナッツ・グローヴ全域での一斉捜索計画をもくろんでいた。主任判事のオフィスで働いていた僕らの友人に感謝だった――事前にこの計画、90人の名前と住所が載った捜索リストを手に入れることができた。リストには店の名はあがっていなかったが、僕の家の26丁目の住所が載っていた。その家で僕はよくパーティをやっていたのだ。ちょうどその頃、僕はサウス・グローヴの、ジャスミンの香り漂うトロピカルな雰囲気に魅かれ、美しいアドービー煉瓦でできたスペイン風ハウスを見つけ、そのオーナーの南部貴族の老婦人から借りる約束をして、引っ越しの最中だった。予定の大捜索、一掃作戦の実行日までに僕は荷物のほとんどすべてを新しい住処の方へ運び終えた。ただし、オマワリたちを"楽しませてあげよう"とわずかな品物を残して……。

そうして、予定日の晩、手にかねて用意の捜索令状を持って、彼らは26丁目の僕の家に到着した。そこで彼らを迎えたのは、にぎやかに音楽を鳴らすレコード・プレイヤーと、ノンストップで

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

点滅するストロボ・ライトだった。お待ちしていました！　サイケデリックランドにようこそ！

僕らは捜索リストに載っていた他の人たちにも、このことを伝えていたから、全員が捜査対象となる〝ブツ〟を避難させていて、令状のごやっかいになる者はひとりも出なかった。何十台ものパトカーがフロリダ・ファーマシーの駐車場に待機して、いまかいまかと大逮捕劇の時が来るのを待っていた。一方、僕らはみんなココナッ・グローヴの通りを自転車やバイクでまわっていた。そしてふたを開けてみれば、それは映画のキーストン・コップスの爆笑劇。TV映画『ドラグネット』の犯罪ドラマにはならなかった。グローヴの街路を一列になってパトカーは進み、長髪のバイカーたちはその反対方向に進んで、彼らに手を振ったのだった。彼らがこの夜、逮捕したのは僕らからのメッセージが届かなかったほんの数人だけだった。

マイアミ・アンダーグラウンドから愛をこめて

ヘッド・ショップ・サウスがマイアミ・アンダーグラウンドの発信基地になりはじめると、僕はこの地域にもっと多くの音楽を届けたいと思うようになった。誰もが僕らが聴いていたアルバムのバンドの生の演奏を聴きたがった。1967年の初めにグレイトフル・デッドらが中心でサンフランシスコ、ゴールデン・ゲイト・パークで行なわれた最初のビー・インはやがてニューヨークのセントラル・パークでも開催されるようになった。それを聞いた僕はグローヴの小さな公園で僕らの部族のギャザリングを呼びかけた。いくつかの地元のバンドが演奏し、素敵な集まりが実現した。若者たちが公園のあちらこちらで輪になってギターを弾き、お香の香りや紫の煙があたりに漂っていた。

ニューヨークやシスコからツアーしてくるバンドはイメージという名の大きなロック・クラブでラ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

イヴ演奏をやっていた。もっとビッグなグループはグローヴのウォーターフロントにあった元パン・アメリカン航空の格納庫を改造してできたディナー・キー・オーディトリアムで公演した。しかし、この会場は１９６９年の３月、ドアーズのコンサート中、ステージでジム・モリソンが性器を露出して公然わいせつ罪で逮捕されると、それ以後ロック・グループの使用を許可しなくなってしまった。

67年の終わりに僕はキー・ビスケインの野外劇場でいくつかのショーをプロモートした。同じ年のモンタレー・ポップ・フェスティバルで大評判を巻きおこしたラヴィ・シャンカールも出演してくれた。僕はコンサートを開くには面白い場所をさがした。エヴァーグレイズのセミノール・インディアン居留地もその候補地のひとつ。ここなら警察の目を気にせず、安心してグラスを吸うこともできるだろう。僕は部族の長老たちに面会し、開催の可能性を相談してみることにした。彼らは僕のアイディアを気にいってくれたが、結局これはタイミングが合わず、お流れになってしまった。

ティモシー・リアリーからジェリー・ガルシアまで、アンダーグラウンド・シーンに関わるたくさんの人々が、マイアミに来ると僕のお店に立ち寄ってくれた。12月のある日、急進派のオピニオン雑誌、ザ・リアリストの編集発行人、ポール・クラスナーが寄ってくれた。その数年前、僕は社会リサーチのニュー・スクールで〝ミッキーマウスからグリーン・ベレーまで〟という彼のクラスを聴講したことがあったから、その時以来の出会いだった。彼と同行して現れたのはキャプテン・アメリカ、その人。アビー・ホフマン。アビーは自己紹介をして、その瞬間から僕らは通じ合えると感じた。彼は抜群のユーモアの持ち主で、カウンターカルチャーの動きを社会にもっと幅広く伝えたいと情熱を持って、活動していた。彼らはキーズにいる間にイッピー党（ユース・インターナショナル・パーティ）の旗揚げを夢見だしていた。アビーと僕はまた後で、ニューヨークで道を交えることになり、そ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

こから彼はウッドストックで大きな役割をはたすことになっていくのだった。

アビー・ホフマン　マイケル・ラングと初めて会ったのはウッドストックの一年ほど前、彼がココナッツ・グローヴで経営していたヘッド・ショップで会ったんだ。俺はなんかの集会で演説をして、その後、もう何日か逗留することにした。気候も暖かだったし、ちょうど「リヴォルーション・フォー・ザ・ヘル・オブ・イット」を書いていたところだったからな。奴はこんなフェスティバルをやりたいんだって、まだ夢のようなアイディアを俺に話すんだ。まだなんにも実現の具体性も可能性もない頃だったから、小さなヘッド・ショップの持ち主がイッちゃって、何か勝手な夢をほざいてやがるって聞き流していたものさ。でも実現したら文化にも衝撃を与えるすごいイベントになりそうな、スケールのでかい夢だった。そしたら、あの野郎、本当にやっちまったんだ!

当時のマイアミでもうひとつ、人々を魅きつけて、ちょっとしたシーンになっていたのが海水水族館。TVの人気番組「わんぱくフリッパー」で有名になったイルカたちの住処だった。彼らのトレーナー、リック・オーバリーは動物保護運動のパイオニアになった人物で、イルカたちの話をする時の彼はどこか神秘家めいていた。リックはイルカたちが知性を持った高等生物体であり、彼らがコミュニケーションを求めていることに早くから気づいていた。フリッパー役のキャシーが鬱状態になって"自殺をした"直後、リックは夢で啓示体験をする。イルカたちをタンクに閉じこめておくのは非人間的な行為だと感じ、その後の生涯をイルカたちを解放し、保護する巡礼の旅に捧げた。親友になったフレッド・ニールは音楽を通じて彼らと通じ合えると信じ、こうしてたくさんの友人がココナッツ・グローヴにフレッドとイルカたちを訪ねてやってきていた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

リック・オーバリー　フレッドが水の中に頭をつっこみ、下から泡が上がってくるのを見て、ああ、彼は水中のイルカたちに歌っているのだなと思った。あの時のことはよくおぼえている。フレッドは12弦ギターを弾いて聞かせようとしたんだ。イルカたちは水面に上がってきて、彼があるコードを弾くとギターを叩くんだ。「彼らを魅きつけるのは音のトーンだ」って、彼はよく言っていた。イルカたちに音楽を聞かせてやりたいからって、ジョニ・ミッチェル、ランブリン・ジャック・エリオット、デヴィッド・クロスビーや他何人かのすごい連中を連れてよくやってきたんだ。まわりの人たちはロングヘアーの連中が集まってきて、いったい何をしているんだって、いぶかしげな眼で見ていた。あっちこっちで寝転がってトリップしていたんだ。

リックは僕の家の近くに住んでいて、知り合うとすぐ友だちになった。前の年にあったモンタレーで起こったことが刺激になって、フロリダで最初の音楽のフェスティバルをやろうってふたりで決心したのだ。野外ステージを作って、何日間かモンタレーのようにいろんなジャンルの音楽をやるミュージシャンを集めようってことになった。僕の家のキッチンがオフィスになり、ジョイント・プロダクションという名の会社を共同パートナーとして立ち上げ、さらにドラマーや弁護士の友人が参加した。グレイトフル・デッドが4月に3日間、「イメージ」で演奏した後、そこのオーナーで、マーシャル・ブレヴィッツという男が電話をかけてきて、フェスティバルの話にかませてくれと言ってきた。

　あちこち見てまわり、会場はハランデールのガルフストリーム・パーク競馬場に決まった。パーム・ツリーに囲まれたそこは年に一度のフロリダ・ダービーで有名なサウス・フロリダ最古の競馬場だった。1マイルの土のトラックの内側には芝生があり、座席のある大きな観客スタンドがあった。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

4月の競馬シーズンが終了するとすぐにガルフストリームの管理会社と僕らは契約を交わした。マーシャル・ブレヴィッツは3週間以内にコンサートが実施できるなら、金を出すと条件を出してきた。そこで僕らは5月18日と19日を開催日に決定した。彼は「ニューヨークのウィリアム・モリス社のブッキング・エージェント、ヘクター・モラレスに会うといい」、と教えてくれた。そこで早速、僕は飛行機でその男に会いにニューヨークへ飛んだ。

「たった3週間で、そんなでかいショーをやりたいって言うのか？」。2万5千人の観客を見こんでいて、それぐらいの客を満足させる6つか7つのビッグ・ネームのアーティストと契約したいんだ、と僕が言うとヘクターは繰り返した。「気でも狂っているのか！」。

でも時間をかけて話し、僕は彼から協力の約束をとりつけることができた。こうして僕らは一連のとてもインパクトのあるタレントたちと出演契約をかわした。ジョン・リー・フッカー、チャック・ベリー、マザーズ・オブ・インベンション（フランク・ザッパ！）、ブルー・チアー、クレイジー・ワールド・オブ・アーサー・ブラウン、そしてジミ・ヘンドリックス・エクスペリエンス！　その春、彼らは全米ツアー中で、僕らのイベントはすべりこみでツアー最後のショーになった。このラインアップに地元のグループを加えて、フェスティバルのプログラムは完璧なものになるだろう。こうしてタンパのラテン色の濃いポップ・ロックバンド、ブルース・イメージ、マイアミのフリージャズ・コンボ、チャールス・オースティン・グループ、それにガレージ・バンドのイーヴルの出演が決まった。

サウンド機材を集め、ステージの準備もしなければいけない。時間の余裕もなかったので、競馬場内を走らせてそのままそれをステージにできる長いフラットベッドのトラックを借りることにした。3つのステージをつくって並べ、ひとつのステージが終われば、となりで次のアクトが始まり、その間に前のステージは機材を片付け、急いで次の出演者のセッティングにかかるというアイディアだ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

サウンド面の問題はマイアミ随一のクライテリア・スタジオに相談してみよう、ということになった。それまでは主にジャズやR&Bの一流アーティストがレコーディングに使用してきたスタジオだが、ちょうどグレイトフル・デッドがそこで数曲レコーディングしたばかり。当時南部でメジャー・スタジオのひとつに数えられていたクライテリアは、やがてデレク＆ザ・ドミノスの『いとしのレイラ』、オールマン・ブラザーズ・バンドの『イート・ア・ピーチ』を産んだスタジオとして、その名を広く知られるようになった。DKはクライテリアのレコーディング・エンジニア、スタンリー（スタン）・ゴールドスタインを紹介してくれ、彼はこのイベントの力になって僕らを助けてくれたばかりか、ウッドストックのチーム作りでも中心になって活躍してくれたのだ。リックと僕はクライテリアに彼、スタンを訪ねていき、フェスティバルで必要な機材をその場で次々、決定していった。

クライテリアのボス、マックス・エマーマンが僕らを信頼してくれて、機材の貸し出しを快く許してくれ、スタンがフェスで働くことにゴー・サインを出してくれたのもラッキーなことだった。その日、その場で鋭い直感で事を運ぶスタンの即興的能力は、とても印象に残った。こいつは新しい試みを恐れずにやれる奴だ、と僕は瞬時に感じた。フィルムメイカーのボブ・デイシーとも会った。彼はフェスティバルの撮影を喜んでするといってくれた。結局、出演者のすべてが決まったのはフェス開催日の数日前。宣伝の時間はまったくといっていいほどなかった。大急ぎでヘンドリックスの肖像をフィーチャーしたものなど、3種類のポスターを作り、町をまわって配った。土曜日と日曜日の午後から夕方までの両日のショーを見られるチケット代は5ドル。ブースを貸し出していろんなグッズが販売ができるような手配も急いだ。

フェス開催の前の日に父親が来てくれたので、僕は会場に案内して僕らの計画を説明した。父はまかなく最重要な問題を僕に訊いた。「それでどうやって採算をとるつもりだい？」僕は答えるかわり

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

に、競馬場の馬券売り場を指さした。「賭けだね」と言うつもりだったのだが……彼らは芝生の上で一緒に笑いころげた。

マイアミ・ポップ・フェスティバル

5月18日は魔法のような日だった。開場すると2万5千人の客が次々と芝生の上に毛布を広げ、スタンドを埋めていったのだ。レース・トラックの西側に設置したステージはそのスタンドに向けてセットしてあったのだ。正午に音楽はスタートした。まるでニューヨークかサンフランシスコからやってきたようなフリーク風の人たちもいたが、それはほんのひとにぎり。ほとんどの客はストレートな身なりの大学に通っていそうな若者たちだった。フォート・ランデイル紙はこんな見出しで記者のフェス体験記を載せた。記事のタイトルは〝不思議に礼儀正しいフラワー・チルドレン／あやしい連中と肘を寄せ合いながらの記者レポート〟。

〝ヒッピーあるいはフラワー・チルドレン、彼らをなんと呼ぼうと、この世代の若者たちが注目すべき何かを持っていることは明白だ。彼らは見知らぬ人間にもやさしく、礼儀正しく接する好ましい若者たちだ。記者は薄気味悪い一団の中にいた、いちばんだらしのない服装でいちばん髪の長い若者たちとも短い会話をかわしたが、彼らはみな快活で、行儀をわきまえ、やさしい言葉づかいをするので驚いた。彼らは口々に彼らがもっとも好きな音楽を聞くために、そして彼らと好みを同じくする人々と会うために、そこにやってきたのだと語っていた〟。

この新聞の肯定的な見解とは反対にマイアミ・ヘラルド紙は、ヒッピーたちがこの地域に集まるようになれば付近の不動産の価値を損ないかねない、と警告を発していた。さらに記事は、このフェス

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ティバル開催中に8トラックのテープレコーダーとテープが車から盗まれるという事件が発生した、などいくつかのささいな窃盗事件を報告していた。肝心なフェスの内容にはまったくふれずに……。

ほとんどの出演者は2セット演奏したが、ヘンドリックスはそうではなかった。ジミとバンドは空港での迎えの車をミスってしまい、マザーズの演奏中に一行が到着していないことに僕たちは気づいた。パニック状態でマイアミ国際空港にいたエクスペリエンスのツアー・マネージャー、ジェリー・スティッケルズに呼び出しをいれると、一行が空港で立ち往生していることが判明。そこでヘリコプターを一台チャーターして、彼らをフェス会場まで輸送してもらうことにした。まもなく、頭上からプロペラの回転する音が聞こえてきた。ジミとノエル・レディング、ミッチ・ミッチェルはステージの上空から、またとない派手な演出のように会場に姿を見せてくれた。

その瞬間、より恍惚としていたのは僕だったか、それとも観客だったろうか……僕にはわからない。白いフリルのいっぱいついたシャツに黒のフェードラ帽をかぶってステージに立ったヘンドリックスは、燃え上がるようなセットを演ってくれた。その夕方、ステージの足元から見ていると、観客全員が呆然とステージの彼らの演奏に見入っている様子がよく見えた。エクスペリエンスがSTPのエクスペリエンスをしていたことを僕は後で知った。

ミッチ・ミッチェル（ジミ・ヘンドリックス・エクスペリエンスのドラマー）ある男が俺たちのところにやって来て〝気付け薬だよ！〟と、なにか元気なエネルギーをくれるものを渡していった。しばらくすると、なんか幻覚剤の一種だってわかってきた。見上げるとパウダーをくれた奴はステージから6メートルほど上の照明タワーの上にいた。すると突然、俺も彼と同じぐらい高いところにいて、会場を見下ろしながらドラムを叩いていた。あきらかにパウダーは俺たちが考えていたも

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

のとは違うものだったんだ。ふと見ると、ジミもそこにいた。それで俺たちは視線をかわしながら、うなずきあったんだ……。あれはまさにトワイライト・ゾーンそのものだったな。

ジミのほとんどのパフォーマンスがそうであったように、この時の演奏も録音されていた。「フォクシー・レディ」、「ファイア」、「ヒア・マイ・トレイン・ア・カミン」そして「パープル・ヘイズ」の熱演が海賊盤になってこの後、何年も出回っていた。今日でもインターネットには、「ジミ・ヘンドリックス＆エクスペリエンスの、もっともミステリアスで、もっとも魅惑的なライヴ演奏！」、「他のどんなプレイヤーもなしえなかった最高のセットを聴かせてもらった！」と新しいファンたちの熱狂的なコメントが並ぶ。ドキュメント映像以外にも、これまでヘンドリックスを追いかけてきたＡＢＣ－ＴＶがこの時の演奏も一部を撮影していた。ジミと仲良しだったロック・フォトグラファーのリンダ・イーストマン（後のポール・マッカートニー夫人）もエクスペリエンスのすばらしい瞬間をキャッチしている。ヘンドリックスのサウンド・エンジニア、エディ・クレイマーも――彼は69年ウッドストックのすべての演奏のレコーディングを行った――このフェスティバルの様子を自分のカメラにおさめていた。

何十年も後、ロサンジェルスのピーターソン・ミュージアムでは、このフェスでジミが弾いたギターを展示したが、あの日このギターを持ち帰ったのは、誰あろうフランク・ザッパだった！

「まんまと手に入れたよ！」とザッパは語っていた。「ヘンドリックスが叩きつけてネックをへし折ると、ライターの液体燃料をふりかけ、火をつけ、ステージからほうり投げた、あのギターをな」。ザッパは燃えて溶けたピックガードを取り替え、ネックを直して、ちゃっかり弾いていたのだ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

土曜日のショーは豪華な花火の打ち上げで終わった。最後は夜空にピース・マーク、見守る2万5千人の観客にとっても僕らにとっても、それは最高のフィナーレだった。すべてがこんなにうまくいったことが信じられない気持ちだった。だが、翌日はそうはうまくいかなかった……。

この時期、サウス・フロリダは長い間、雨が降らず、干ばつが続いて人々を苦しめていた。そして降雨の兆候がないのを理由に僕らは、万が一の雨や嵐で公演がキャンセルされる可能性を考えて普通は興行主催者たちが加入する、かなり高額な災害補償の保険に入らずにいたのだ。しかし、そんな計画があったことなど僕らの間で誰が知ろう、地方政府は土曜日にエバーグレイズの上空に科学薬品を打ち上げ、雲を集めて降雨をうながすオペレーションを実施していたのだ。かくして作戦が成功したのか、日曜日は嵐がやってきて、激しい土砂降りの雨に、あられ、かみなりが風速50メートルという強風をともなって、僕らを襲った。雨は昼も夜も降り続け、地上4インチ。おかげで客足は遠のき、入場者の数は前日から激減となった。このトラブルに加えて、偽造チケットが出回っていたことが発覚。二日間の売り上げに大きなダメージを与えた。

日曜日、どうにか早い時間に2、3のグループが演奏したものの、その後はシット!! と空をあおぎ、叫ぶしかなかった。かろうじて雨の合間をぬって、マザーズ・オブ・インベンションがステージに上がったが、その先行きを脅かすかのように上空には暗い雲がどんどん集まるばかり。

「本降りになる前に屋根のあるスタンドのほうへ移動したほうがいいぜ」、と芝生席の客たちにザッパは呼びかけたが、人々は動く気配もない。「もっとも座って雨に濡れるのも楽しみ、というのなら、まあ、自由に楽しんでくれ！」。

僕らは楽しむどころではなかった。土砂降りが一段落するまで、ステージの演奏を中止して、ひたすら待つだけ。何時間かそんな状態が続くと、ひとりの男がからっぽのステージにのぼってきて、濡

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

れねずみの観客たちに「立ち上がって、暴動を起こせ！」と呼びかける始末……やれやれ、やってられん……。

ボロボロになってもへこたれるな――フェスの悲喜劇

ジョン・リー・フッカーがステージに上がる前に、僕は彼に現金で750ドルを支払う約束をしている。そのお金をチケット売り場へ行って取ってこなければいけない。そしてボックス・オフィスのドアを開けると、そこではやばい光景が待ち受けていた。警備の主任を頼んだジョン・エックが、切符売り場の売り上げ金を集めにきていた警備輸送会社の運転手を脅しているではないか！　エックはこわもての男で、後にエック・コマンド・ナイフの発明で有名になった奴だ。それは長く細いナイフで持ち手部分が極端に細くなっている。誰かに突き刺しでもすれば、刃の部分から手前はぽっきり折れてしまうだろう。エックはこの雨のおかげで僕らが財政的にうまくいってないのを感じ、現金が金庫からすっかり消えてしまう前に自分のギャラを取ろうとしていたのだ。一方、輸送会社の男は切符の半券と現金の入った手提げ箱を、入場ゲートを回って集めるのが与えられた使命。聞いていなかったエックのむちゃな突然の要求に、簡単に応じるわけにはいかない。ふたりは向き合って激しい言葉の応酬をしていた。いまにも銃を取り出しそうな剣幕、そしてよりによってそんなふたりの真ん中に僕は飛びこんでしまったのだ……。一瞬、僕は凍りついたが、表ではもっと危険なことが起こりそうだということを思い出した。こんなことでおじけづいている場合ではない。とっさに僕は大声で部屋の空気を一変させる。

「よし、そこまでだ！」両手を上にあげて、僕は大声で言った。「これはまだわれわれの金だ。演奏

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

が両面できるようになるまで、いかなる理由があろうとそれまで何人も、これを何処にも持ち去らせるわけにはいかない。いいか、また戻ってくるから、それであらためてきちんとかたをつけよう」。何を言われたのかと、彼らが脳細胞を駆使して理解しはじめようとしている間に、僕は現金をひっつかみ、ダッシュで楽屋に戻りジョン・リーの姿を探した。こうして、彼がステージに上がり、あのすばらしい目録のセットで人々を圧倒すると、僕は約束どおり問題にかたをつけるために、ボックス・オフィスに戻ったのだった。

スタン・ゴールドスタイン　大変なことになっていたシーンをマイケルは鎮静化したんだ。一触即発でOK牧場の決闘にもなりかねなかったのに。あの日、何もかもがボロボロになりかけている中で、あいつはあいつの輝きで事態を救ったんだ。困難な状況をあんな風に乗り切るなんて、と見ていて尊敬の気持ちがわいてきた。彼は冷静さを失わず、立派に役割を果たしつづけられる男さ。最善の力を発揮するんだ。見ていてワクワクすることもあったよ。問題が発生して走りまわるだけで何もできない奴、パニックで叫びだす奴、こっそり姿を隠す奴、彼のまわりの誰ひとりどうしたらいいのかわからなくなっていても、マイケルは敢然と立ち向かっていったんだ。あの姿にはほれぼれしたね。

ジョン・リー・フッカーの演奏でホッと一息ついたものの、雨はいっこうにやまなかった。そして、また長い中断があって、もうこれ以上は待てないという時間になって、その日の最後のバンド、クレイジー・ワールド・オブ・アーサー・ブラウンをステージに送り出した。彼らはバンド名に恥じないどころか、それ以上のクレイジーな世界を見せてくれ、演奏の最後をグループ最大のサイケデリッ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ク・ヒット・ナンバー「ファイア」で締めくくった。ヘンドリックスがギターを燃して、客席にほおりこむなら俺も……とでも思ったのか、アーサーはステージからオルガンを蹴り落とした。後で聞いたところによれば、夜明け方のまだ薄暗い時間に、彼がひとりフォート・ランデイルまでとぼとぼと歩いていく姿が目撃されたとか……。あの時、オルガンと一緒にアーサーは正気まで蹴り落としてしまったのだろうか？　コンサートが終わると、出演バンドのいくつかはホテルに戻り、バーでパーティを始めた。

ノエル・レディング（ジミ・ヘンドリックス・エクスペリエンスのベーシスト）マイアミ・ポップ・フェスティバルでの俺たちの演奏は最高にきまったな。二日目のショーは雨でお流れになってしまい、ジミと俺はホテルに行ってジャムを演ったよ。普段からクレイジーなアーサー・ブラウンやスティーヴ・ポール（原注・クラブ・オーナーでアーティスト・マネージャー）、マザーズ・オブ・インベンション、ブルー・チアーなんて連中が集まってきて、みんなでにぎやかにやったよ。

エディ・クレイマー（サウンド・エンジニア）「レイニー・デイ、ドリーム・アウェイ」はあの日、ジミがマイアミで書いた曲だ。忘れもしない、車のバック・シートで書いていたよ。僕らはガルフストリーム・パークから出て来たところで車を停めたんだ……すごい嵐みたいなどしゃ降りで立ち往生せざるをえなかったのさ。するとあいつはその場で書き始めたんだ。〝雨の日なんか、夢と忘れてしまえ〟……まさに、そいつはあの時の気分さ。

ショーが終わっても、頭が痛い状態はいっこうに終わらなかった。ジョイント・プロダクションは

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

大勢の人間に借りていた金を返せなかったからだ。スタンはおそらくクライテリアに出してもらった機材の費用や自分のギャラ、もろもろを僕らが払えなくなることに気づいていたのだと思う。それでも、彼は一生懸命、頑張り続けてくれた。

スタン・ゴールドスタイン　トラックの中の一台を全部ケータリング用に使っていた。僕はそのトラックに自分の道具類を置かせてもらっていた。ヘンドリックスのマネージャーたちは、雨だから彼の演奏はできないと決めたんだ。そして、なんと彼ら、ジミの機材を全部そのトラックに積みこみ、走ってどこかに消えてしまったんだ。そんなことが起こっているなんて僕は知るわけもない。ショーが終わって、道具類を乗せたトラックを探した。だってすべての音響機材をかたすのに、それが必要なんだ。ところがトラックはもう影も形もないじゃないか。何日かたって、マイアミ国際空港で見つかったよ、すっかり封がされていた。知らせを聞いて駆けつけ、後部ドアを開けると、ムッとするようなひどい悪臭――みんなの食事用に買ってあったデリ・フード、コールスロー、ポテト・サラダ、コンビーフやパストラミ・サンドが、何日も陽光の中で置き去りにされた車の中で……。トラックの中にあったのはそれだけ。置いてあった僕の道具類は、ジミとともに去りぬ、さ。

フェスティバルが終わってしばらくすると、僕らはたくさんの未払いになっている請求書と格闘しなければならなかった。フェスティバルの演奏の録音テープや映像記録は、結局僕らのものにはならなかった。僕らが支払いをするまで、録音チームや撮影者の手元に保管されたまま。そして僕らはついに支払えずに終わったのだ。年月の流れとともに、それらの音源や映像はどこかに消えていってしまった。マザーズ・オブ・インベンションのあの時の演奏の一部は１９６９年に発表されたアルバム

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「アンクル・ミート」に登場した。

ザッパは競演したブルース・イメージのレコード契約に力を貸し、彼らの「ライド・キャプテン・ライド」がヒットした。リード・ギタリストのマイク・ピネラはその後アイアン・バタフライに参加し、パーカッションのジョー・ララはクロスビー、スティルス、ナッシュ&ヤング他のアーティストと共演して有名になった。ジミ・ヘンドリックス・エクスペリエンスはマイアミからニューヨークへと飛び、あのゴージャスな曲「レイニー・デイ、ドリーム・アウェイ」をレコーディング。その曲が入ったアルバム「エレクトリック・レディランド」はその年の終わりに発表された。

僕らはといえば、弁護士のアドバイスを受け入れ、破産を宣告することにした。クライテリアに出かけ、僕らはこのバッド・ニュースをマックス、スタン、信用してくれた他のスタジオ・メンバーに伝えた。

スタン・ゴールドスタイン　マイケルがやってきた。僕ら信頼した側としては約束した支払いもないままだったから、笑顔で迎えるわけにもいかなかった。マイケルはすべての債権者たちに、その恩義にも答えるために自分たちは、これからも最善、最大の努力をしていくと言った。そして、ショーを録音したテープは大きな価値があるはずだ、と言いそえた。彼はクールだった。それで奴と僕は、また別の機会だったが、強い絆で結ばれることになったんだ。そもそも僕は債権者の代表だったし、彼は主催者の代表だったんだから、一種の敵対的友情ってやつかもね。

マイアミ・ポップ・フェスティバルの後、いくつかマイケルはコンサートをやったな。そのひとつがマイアミ・マリーン・スタジアムでやったやつで、クライテリアが音響設備を提供したよ。もっとも、金を受け取るまで、僕は音を出さなかったけどね（笑）。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

リック・オーバリー　あの後でマイアミ・ポップの赤字をカバーしようと、マイアミ・マリン・スタジアムでバーズとステッペンウルフのコンサートを企画したんだ。すると当日コンサートをスタートしようとしていると、また雨が降りだし、その雨はそれから40日降り続いたんだ。僕は財産のすべてを失ってしまった。TVの『フリッパー』で稼いで貯金しておいた金もなくなった。マイケルは店をたたみ、一文無しでニューヨークへ戻っていったよ。

グローヴは変わろうとしていた。警察はヒッピーをいじめ続け、家賃やアパート、コンドミニアムの値段は上がり続けていた。古くからある木製の家は次々壊され、そして、あちこちにヘッド・ショップがオープンしていた。金もなくして、サウス・フロリダでちょっと燃え尽きた気分。そろそろ引き払ってニューヨークへ帰る潮時かな、という気がした。

NYCから北へ90マイル、ウッドストックの町にはこのところ磁石に引きつけられるように、ミュージシャンたちが集まってきているらしかった。そんな話を聞いた時、僕は50年代に夏になるたびに行っていた、その小さな町のいかにも芸術家好みの雰囲気を思い出していた。あの町にはアーティストやボヘミアンたちが集まって作ってきた長い歴史があるのだ。ガールフレンドのソニアと僕は、さっそく自分たちの眼で様子を確かめに行くことにした。

＊ジョン・C・リリー（1915-2001）　アメリカの脳科学者。イルカとのコミュニケーションを研究し、アイソレーション・タンク（感覚遮断タンク）の開発者としても有名。ケン・ラッセル監督の映画『アルタード・ステーツ／未知への挑戦』（1979）はリリーとその変性意識状態をモデ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ルーレノ作品。

＊アレン・ギンズバーグ（１９２６−１９９７）コロンビア大学在学中にジャック・ケルアック、ウィリアム・バロウズらと知り合い、１９５６年に発表した詩集『吠える』でビート・ジェネレーションのブームを巻き起こした詩人。反戦運動から性差別撤廃、環境保護運動の活動にも積極的に参加し、ヒッピー、パンク、オルタナ世代にも大きな影響を与えた。

＊サンフランシスコ・ポスター・アーティスト　60年代半ばからサンフランシスコで、ビル・グラハムの主催するフィルモア、チェット・ヘルムズらが主催するファミリー・ドッグのロック・ダンスは、サウンド、ライトショーのみならず、そのイベントを告知するマウス＆ケリー、リック・グリフィン、ヴィクター・モスコーソら新進若手アーティストの描く、サイケデリック文字とアール・ヌーヴォー風あり、ウルトラモダン風ありの新鮮なポスターデザインが評判になり、若者たちの間で大ブーム。デザイン界にも革命をもたらした。

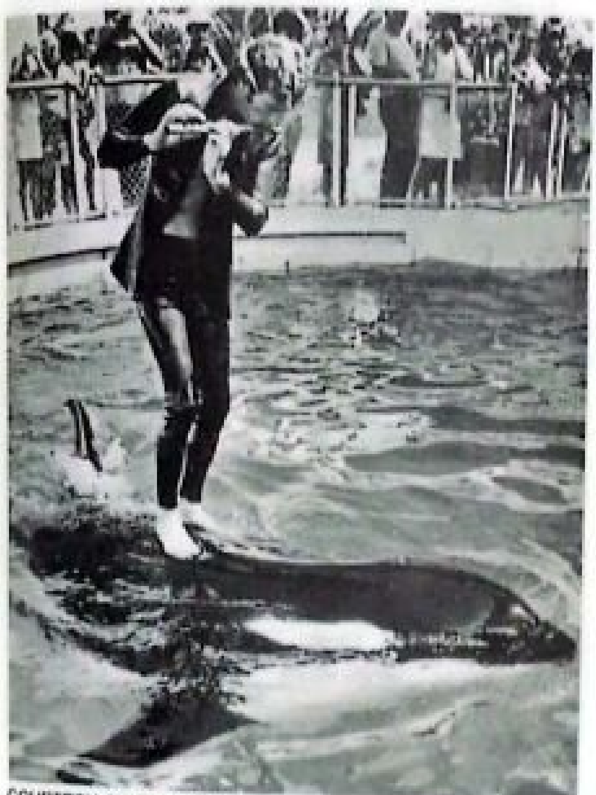
＊ヒューマン・ビー・イン　ヴェトナム戦争が激化する１９６７年の１月14日、サンフランシスコのアンダーグラウンド・ペーパー『オラクル』の発行人、アラン・コーエンらの呼びかけで、サンフランシスコ・ゴールデンゲイト・パークで行なわれた人間性回復を呼びかけた集会。インド帰りのアレン・ギンズバーグやゲイリー・スナイダーらビート詩人の朗読、グレイトフル・デッド、ジェファーソン・エアプレインやサンフランシスコを代表するロック・グループが演奏。人々は花や食べ物を持ち寄り、年齢、肌の色を超えて輪になって踊った。ビートとヒッピー、新旧のカウンター世代が一緒になったこの画期的イベントの２万人の参加者の中にはまだデビュー前のドアーズ、若き日のスティーヴン・ジョブズ、俳優のロビン・ウィリアムズらもいた。「サマー・オブ・ラヴ」の名とともに全国に拡大、ビー・イン・ブームを引き起こし、ヒッピームーブメントの原点となり、モンタレー、ウッドストック・フェスへの出発点となった。

＊ＳＴＰ　１９６７年にドラッグ・マーケットに登場したＤＯＭとも呼ばれた合成アンフェタミン系幻覚剤。ＬＳＤの何倍もの効き目、持続時間があったため、パニックを起こすケースが続出。ドラッグを精神世界への実験材料と考えていた人々に、警鐘を鳴らし、その流行は短期間で終わった。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

上・ココナッツ・グローヴの
ヘッド・ショップ・サウス店頭で、
僕とハワード（立っている）と客（1967年）
右・ヘッドショップのカウンターにて、
店員のハワード・ツァイトチェクと（1967年）



COURTESY OF RIC O'BARRY

獰猛なシャチを音楽で和ませる
リック・オーバリー、
マイアミ海洋水族館にて（1968年）

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ジョイント・プロダクションの仲間たちと。左から右へ、マーシャル・ブレヴィッツ、警備主任のジョン・エルク、僕、バリー・タラン、友人のひとり

© EDDIE KRAMER

© KEN DAVIDOFF/WWW.THEMIAMIPOPFESTIVAL.COM

1968年マイアミ・ポップ・フェスティバルのジミ・ヘンドリックス。ポスターの一枚

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

晴れた日のマイアミ・ポップ・フェスの観衆たち(5月18日)

© KEN DAVIDOFF / WWW.THEMIAMIPOPFESTIVAL.COM

ヘンドリックス到着。左からリンダ・イーストマン(後のマッカートニー)、ジミ、ミッチ・ミッチェル。マイアミ・ポップ・フェスで(1968年5月18日)

© KEN DAVIDOFF / WWW.THEMIAMIPOPFESTIVAL.COM

ステージのジミ・ヘンドリックス・エキスペリエンス。マイアミ・ポップ(5月18日)

マイアミ・ポップ楽屋のフランク・ザッパ。(5月19日)

© KEN DAVIDOFF / WWW.THEMIAMIPOPFESTIVAL.COM

出番待ちのジョン・リー・フッカー。(5月19日)

© KEN DAVIDOFF / WWW.THEMIAMIPOPFESTIVAL.COM

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

第3章

Woodstock, New York

ウッドストック、ニューヨーク

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

星空の下で、草の上に敷いた毛布に寝ころがって、ロックンロールを聴いていると、気分はまるでパラダイス！　長い赤い髪を風になびかせた女性シンガーが、全身を震わせてブルースを歌っている。

「あれは誰だい？」僕は隣に腰をおろしている男に訊く。

「エレン・マクエルウィンさ」。男は大巻きのジョイントを渡しながら言う。「ジミ・ヘンドリックスが前によくカフェ・ワで彼女のバックで弾いてたぜ。エレンはフィアー・イットセルフって新しいバックバンドを連れて、NYCからウッドストックに移ってきたんだ。この町じゃいちばんの歌姫さ。スライド・ギターもメチャうまいぜ」。

草地の上には持ってきたベッドロールを広げ、星空を見上げているカップル、VWバンによりかかってギターをつまびく者、みんな思い思いの格好で楽しんでいる。その数およそ数百人。やわらかな風が甘い香りを運び、あちらこちらで煙がたなびいている。

毎週土曜日に催されるサタデー・サウンドアウトがクールだ！、とそれまでいろんな人から聞いていたが、ウッドストックで会った誰もが口をそろえてこのイベントを賞賛する理由が、僕にはいまわかった。わかる人たちだけに知らせるイースト・コーストの秘密。場所は町から曲がりくねった田舎道を10分、一面が緑の草原。この牧歌的なセッティングがキーだ。サウンドアウトは僕たちがマイアミでつくりだそうとしたレイドバックな雰囲気を見事にかもしだしている。大きな空の下、まわりはどこまでも続く緑の丘、丘、丘、のどかな田園風景の真っ只中――音楽を楽しむなら、こうでなくちゃいけない！

あふれる緑と青い山々の懐に抱かれた静かな山村。1968年の夏の終わりに再訪したウッドストックは、[illegible]には子供の時に見た姿とはほとんど変わっていなかった。ソニアと僕は、町にたったひ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

とつしかないモーテル、ミルストリーム・モーテルにチェックインして、あたりの探索を開始した。次の日までに不動産屋は静かなチェスナット・ヒル・ロードの道沿いの、納屋を改造した美しい赤いコテージを見つけておいてくれた。モーテルの横を、きらめき流れる小川がくねくねと曲がり、僕らの新しい家のわきにもそそいでいることに気づいた時は嬉しかった。あたりの澄みきった静けさは神々しく、畏敬の念をおぼえずにはいられなかった。

ティンカー・ストリート沿いには、金物屋からカフェ、アート・ギャラリーやバラエティにとんだショップが並び、そこは絵のようなウッドストックの〝ダウンタウン〟だ。僕らのお気に入りは画材や、本、ギター弦、レコードなど多種多用な品を揃えた「ジャグラー」という店で、オーナーのジムとジーン・ヤングはバークレーから東海岸に越してきた人たちだった。僕よりは15も年上だったが、音楽好きでオープンハートの彼らは僕らにも家族のような温かさで接してくれた。

夜になると、およそ3000人、ほどよい数の町の住人は「カフェ・エスプレッソ」、「ディーニーズ」、「エレファント」、「スレッド・ヒル・カフェ」などの店に音楽を、パーティを求めてくりだすのだった。

アーティスト・コロニー、ウッドストックの歴史

町の人々は〝オランダからの入植者の子孫たちと、工芸家、舞踏家、音楽家など、波のように次々と現れた芸術家たち、そして都市生活からの確信犯的ドロップアウトたち、グリニッチ・ヴィレッジに対してグリーンのオルタナティヴを探していた反抗者たちがまじりあっている〟とディランの伝記作家、ロバート・シェルトンは書いている。たしかにこの町は、毎日汗を流して働く普通の田舎生

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

活者と自由な心を持ったボヘミアンが混在して暮らしていた。18世紀半ばにオランダ人植民者が開拓し、住み着いて農耕生活を始めたのが土地の歴史の始まり。以後、キャッツキル山脈東部の自然はこれまで60年以上、芸術家たちを保護してきたのだ。そのユニークな歴史は1903年に3人のユートピアを夢見る人々――富裕なイギリス人ラルフ・ホワイトヘッド、作家のハーヴィー・ホワイト、芸術家のボルトン・ブラウン――が、哲学者、ジョン・ラスキンの〝とどまることを知らない産業化が社会の非人間化を招く〟という教えに感銘し、その思想を実践して、理想的小社会を作ろうとウッドストックに来たことに始まる。彼らはオーバールック・マウンテンの裾野にある1200エイカーの土地にバードクリフ・アーツ・コロニーを設立。アート&クラフト運動の理想を追求する実験場にしようとしたのだ。まもなくホワイトは近くのグレンフォードでマーヴェリック・コロニーを開設し、パフォーミング・アートと音楽がこのコロニーのフォーカスだった。1912年にはNYCのアート学生リーグの支部がサマー・プログラムを始め、これに参加した画家、彫刻家の中にはプログラムが終わってもこの町に残り、居着いてしまった人たちもいたらしい。

1920年代、狂乱の20年代（ローリング・トゥエンティーズ）の波はここにも及び、手製のコスチュームで仮装したエキセントリックな参加者たちが集まり、オールナイトで飲み明かす〝バッカスたちの祭典〟がひんぱんに催されたたようだ。1915年8月に始まり、毎年の恒例となったマーヴェリック・フェスティバルの第一回のチラシには〝ワイルド・スポーツ〟が行われ、〝ダンサーのラダが美しき音楽を彩る詩のように踊り、その荘厳さに、あまりの美しさに、貴方は泣かずにはいられまい、……これらすべては月光の下、自然の石切り場劇場で行われる。歓喜にむせび泣くオーケストラ、風の中で嫉妬に燃え上がるたいまつのあかりのもとで！　午後にもまたコンサートあり。ステージでは不思議なパフォーマンス、カラフ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ルな出し物が満載!……村では1日だけマッドな芸術家たちが豪華な小旗を吊るし森へと続く道を彩る予定なり。とあった。

フォーク・ミュージックの収集家やアーロン・コープランドのようなクラシック音楽家も40年代からこの地域に暮らしていたが、ウッドストックにいきいきとした音楽シーンが生まれてきたのは、60年代の初めにアルバート・グロスマンが、ここに別荘をかまえ、ひんぱんに訪れるようになってからのこと。彼がマネージメントを手がけていたアーティストの中には、ボブ・ディランのように一日でこの土地に恋をした者も少なくなかった。僕がここへたどり着くまでに、ディランは町の外で家族とひっそりと暮らしていた。地元の人々の目には彼のバックアップ・バンドのほうがあけっぴろげで目立っていたのだろう。周囲の人々に呼ばれるままにザ・バンドと名乗るようになった彼らは、最初のアルバム『ミュージック・フロム・ビッグ・ピンク』を発表したところだった。そのアルバム名はウエスト・ソーガティーズでメンバーの数人が1967年に共同生活していた家からつけられたもの。そのピンクの家が、まもなく『ベースメント・テープス』の名で世界最初の海賊盤として出回り、伝説にもなった地下室のある家だった。レコーディングが行われたこの地下室こそ、ザ・バンドがディランとともにロック音楽に新しい潮流を産みだしたグラウンド・ゼロだったのだ。68年夏には、それまで長くハードな旅を続けてきたリック・ダンコ、リヴォン・ヘルム、ガース・ハドソン、リチャード・マニュエル、そしてロビー・ロバートソン——ザ・バンドの5人のミュージシャンはウッドストック・コミュニティのあちこちに散らばって、自然の中のボヘミアン・ライフを満喫しながら、自分たちの音楽生活を続けていた。そんな意味で彼らはウッドストックの伝統と精神を体現して広く人々に示した最初のミュージック・グループだったのかもしれない。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ガース・ハドソン　俺たちは気に入ったね、木を切って薪をこさえたり、ハンマーで親指を叩いたり、テープレコーダーやスクリーンドアを修理したり、森の中を散歩したりっていう、このライフ・スタイルがね。……人目につかずにのびのびとやれるよ。そいつは子供の時以来、俺たちみんなずっとこごぶさたしていた暮らしなんだ。

エレファント・カフェでは集まった客たちの間から、いきなり即興ジャム演奏が始まったりすることもあった。ハーモニカ奏者ですばらしいブルース・ヴォーカリストでもあるポール・バターフィールドや、卓越したシンガー・ソングライター、ティム・ハーディン、などおなじみの顔をまじえて。カフェ・エスプレッソではリック・ダンコがチェッカーズに夢中になっている姿、ディーニーズでは赤ワインを飲んでいるリチャード・マニュエルの姿をよく見かけたものだ。彼らはみんな、1年後のフェスティバルに出演することになった。60年代初めにディランのお気に入りのたまり場だったカフェ・エスプレッソは、フランス人のベルナール・パチュレが経営する店で、ベルナールはみんなの父親のような存在だった。

ベルナール・パチュレ　魔法だな。音楽家や作家、芸術家がたくさん集まってきて魔法のような不思議な空気を発散するんだ。そういう感性を持った人間が来て、その空気をキャッチしたと見ると、彼のまわりにはここに住んでそういう生き方をしている連中が集まってきて、いろいろ手助けをしてやるんだ。空気の中にある何かがそうさせるんだろうな。同じスピリット、同じ姿勢を持った誰かに会えるんじゃないかと、みんなはここにやってくるんだ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

リヴォン・ヘルム　ここの人間はオザーク・マウンテン地方の人間とよく似ている。田舎に住んでも、良い意味でのしっかりとした市民意識を持って日々の暮らしを送っている人たちだ。俺の故郷のアーカンソーの人間もそうなんだ……この土地に住むみんなは、とても祝福されているよ。

1968年の9月、この町は──後でディランが歌ったように──〝嵐からの隠れ家〟のように僕には感じられた。ベトナム戦争は拡大の一途を続け、次から次へと悲惨な事件が起こり、この年のアメリカはコントロール不能、混沌の真っ只中にあったのだ。黒人解放運動の指導者、マーティン・ルーサー・キング牧師が、そしてロバート・ケネディがあいついで凶弾に倒れ、各地で人種暴動が起こり、町は炎につつまれ、反戦デモに参加する人々は警官隊に殴り倒され、牢屋にほうりこまれ、大学キャンパスを封鎖して抗議する学生たちも次々と逮捕されていった。8月、シカゴで開かれた民主党大会に抗議して集まった人々にはガス弾がうちこまれ、逃げまどう若者たちの頭上には容赦なく警棒が振り下ろされた。アビー・ホフマン、イッピー党、ブラック・パンサー党他の活動家やリーダーたちは〝シカゴ・エイト〟と呼ばれ、暴動を煽動した容疑で起訴された。もっとも、あの頃のアビーは2週間に1回は逮捕されていたみたいだったが……。

そんな混乱と混沌、まっ暗な嵐の中にいたアメリカ全土に比べて、ウッドストックにはなんと対照的な光景が広がっていたことだろう。あのサウンドアウトの会場では、子供たちが笑い声をあげて草原を駆けまわり、大人たちは寝転んでゆっくり西の山々を染める夕焼けを眺め……そこには平和と喜びと癒しの空気があった。67年からコンサートは夏の週末ごとにウッドストックとソーガティーズを

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

細く、曲がりくねったグラスコ・ターンパイク途中のピーターバン農場で開かれていた。土地の持ち主、パン・コープランドは町でコーナー・デリを経営する、強く気丈な女性だった。トウモロコシ畑だったところに高さ6インチほどの、まにあわせで作ったようなステージ。そこに大体3、4組のアーティストが出演。エレン・マクエルワインとフィアー・イットセルフ、クリサリス、キャット・マザー、コルウィルとウィンフィールド・ブルースバンドなどのローカル・バンド、それにこの町に越してきたヴァン・モリソン、ティム・ハーディンのような全国的に知られたアーティストが時々加わり、素敵なシーンを繰りひろげていた。

演奏の合間にはセミや鳥たちのさえずりがセレナーデ。人々は隣接した牛のいる牧草地にキャンピング・カーをとめ、テントを立て……。

「こんな風にみんながキャンプできるような所で、週末の間続くようなでっかいコンサートができたらクールだと思わないか?」、僕はソニアに訊いてみた。サウンドアウトは前にマイアミで頭に浮かんだ計画を思い出させてくれた。もっと鮮明に、そしてもっと大きなヴィジョンのかけらが、まもなくひとつにまとまっていくのを、僕は見ることになっていくのだった。

運命の糸に導かれて——アーティとの出会い

NYCへのトリップで、僕はまたドン・カイダーとつながった。DKはグローヴからニューヨークへ活動の拠点を移し、マンドー・ピークマンというバンドでビブラフォンを演っていた。まもなく彼のもとに現れたマイアミ・ジャズ・カルテットのドラマーと、キーボード奏者と、彼はブルックリンのロッカーたちと合体し、トレインという新しいバンドを始めていた。DKは僕にバンドのマネージ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ャーをしてくれないか、と言ってきた。まだ見ても聴いてもいなかったが、「いいよ、チェックしてみよう」とノリで答えてしまった。彼は助けを必要としているのだし、まあいい、何かまた新しい勉強ができるかもしれないのだ。

トレインは、もろストレートなジャズからロック・フュージョンへと移行中のバンドだった。僕は彼らに才能あるシンガーでギタリストのガーランド・ジェフリーズを紹介することにした。ガーランドはイースト・ヴィレッジでインターギャラクティックといういろんな照明製品を扱う会社を経営していた。ヘッド・ショップ・サウスでストロボ・ライトをその会社から買ったのがきっかけで知り合いになったのだ。ガーランドは自作曲をヴィレッジのクラブで披露し、これが素晴らしかった。DKと彼の仲間たちは彼の書くポエティックな詩が気に入っていた。こうしてガーランドが加わると、バンドのサウンドはまとまりを見せはじめた。

ドン・カイダー　ウエストサイドの線路の横のあばら屋みたいなビルに、みんなで一緒に住んでいたんだ。そこはリハーサル・スペースにもなり、一階は拾ってきた物品を売るような店があったけど、いつ病気になって死んでも仕方ないようなヤバイところだった。どうやって生き延びていたか、もうおぼえちゃいないよ。でもきっとマイケルなら俺たちをそこから別のどこかへ連れていってくれる、そう信じていたんだ。奴は俺たちのやっていたマイアミのポスター会社でビジネス手腕を発揮してくれたんだ。はじめ2、3枚のポスターを作っていたのが、いきなり何千枚もプリントして、彼が国中に卸してくれたんだ。あのポスターで、どんとまとまった金を稼がせてくれたんだ。

トレインの仕事をする時には、冗談っぽく聞こえるけれど、ウッドストックからトレイルウェイズ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

のバスで行った。そんな往復の途中で浮かんだのだ。ウッドストックにスタジオを作れば、アーティストが田園風景の中でレコーディングができるようになる！

それって素敵じゃないか？　マイアミにクライテリアがあって、アトランティック・レコードの御用達になっているのなら、ウッドストックにもスタジオがあってしかるべきではないのだろうか？　アップステート地域には、ヴァン・モリソン、ジミ・ヘンドリックス、ジャニス・ジョプリンと、どんどん多くのミュージシャンが来ている。フレッド・ニールもココナッツ・グローヴから越してきたところだ。

スタジオ候補地を探しはじめると、町のはずれに一軒の崩れかけたビクトリア朝の屋敷と、少し離れた林の中に点在するいくつかの建物があるのを見つけた。そこは昔、アルマニア人家族が経営していたタブーズ・カントリー・インという休暇客用のスポットで、キャビンとダンス・ホール、グランド・ピアノの形をしたプール、そして優雅なあずま屋（ガゼボ）があった。現在の土地の所有者、絨毯（じゅうたん）ディーラーのアレクサンダー・タブーズ氏に会ってみると、その多彩なキャラの持ち主は、30エイカーの土地に建物つきで5000ドルで、いかがと言う。イェリー・ヒル・ロードから入った舗装されていない林道の奥まった場所は立地条件としてはどうだろう？　建物にはかなり本格的な修復が必要だろう……。しかし、僕はもう、ダンス・ホールをスタジオに、一級芸術品クラスのレコーディング施設に変えれば、都市の喧噪（けんそう）から離れて、くつろぎながら曲作り、レコーディングをしにたくさんのミュージシャンが来るはず、と目の前にそんな光景が見えてきていたのだ。

そんな一方で、10月の終わりのある日、僕はシティでトレインのドラマー、アビー・レイダーから「レコード会社の男に知り合いがひとりいる」と聞いた。「彼はキャピトル・レコードの大物だぜ」とアビー。「アーティ・コーンフェルドって奴で、おまえと同じベンソンハーストの出だぜ」。舗道に立

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

って話を聞いていた僕は、電話スタンドを見つけて彼に訊いた。「ねえ、10セント持ってる？」 僕はキャピトルに電話して、そのオフィスにつないでもらった。

アーティ・コーンフェルド　僕はキャピトルのA&Rの副社長だった。その前はもともとミュージシャンで、ソングライターとしてブリル・ビルディングで、ジェリー・ゴフィン&キャロル・キング、ニール・セダカ、リーバー&ストーラーたちと一緒に働いていたこともあったんだ。それからマーキュリー・レコードでカウシルズが大ヒットさせた何曲かを書いて、プロデュースもした。キャピトル・レコードに副社長のポストで迎えられた時は、まだ24歳だったのさ。で、ある日、秘書が「マイケル・ラングという方がお目にかかりたいとお見えになっています」と言う。それで僕は言った、「マイケル・ラングって何者だ？」 すると「僕は近所の出だって伝えてくれ、っておっしゃってましたが」。それで　ベンソンハーストの男だって、すぐにわかった。だから僕は彼女に言ったんだ、「オーケー、すぐにそいつを通してくれ！」って。

マイケルは僕が会った二番目のヒッピーだった。前に僕が契約した、後のブロンディのデボラ・ハリーと彼女のバンド、ウィンド・イン・ザ・ウィロウズが最初のヒッピーだったからね。マイケルと僕は会ったとたんに親近感を感じたんだ。そしてご近所話をしながら、一緒にスモークしたよ。それはいままで僕がやったどんなのよりもご機嫌なスモークだった。すぐに僕はマイケルに惚れちまった。だって知的な会話をしても僕らはビンビン響きあえたし、ふたりともクレイジーさ加減もそっくり。僕らはとってもハイな関係を築くことができたんだ。

はじめてアーティのオフィスに足を踏み入れた時、壁に飾られたゴールド・レコードを見て、こち

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

こちの会社人間を想像していた。ところが大違い。彼はデスクの上であぐらをかいて座っていた。クールをきどってみようってスクエアな人間の考えそうなことだなって思ったが、本当はとてもスイートな人間で心から歓迎してくれているんだって僕にはすぐにわかった。親父さんは警官で、彼は〝ご近所気質〟むきだし。つまり、すぐに僕がうちとけて心ゆるせる種類の人間だった。ベンソンハーストで僕らがふたりとも知っている人間の名前が次々とびだして、僕らはすぐに〝ダチ〟になっていた。

こうして、アッというまにゲット・トゥゲザー、僕はバンドを連れて彼に会ってもらった。だが、トレインはまだ自分たちの曲をきちんと聴かせるレベルにまで完成させていなかった。コルトレーンまがいのやたら長い即興演奏をキーボード中心で演っていた。キーボード奏者のボブ・レノックスは優秀なジャズ・プレイヤーだったが、バンド全体としては、まだまとまったグルーヴを出すには少し時間がかかりそうだった。それでも、ところどころ、みんながノッて、素晴らしいと感じられる瞬間もあった。

アーティ・コーンフェルド トレインはひどかった。でも僕はマイケルが好きだったから、彼に1万ドルの支度金を渡した。「キャピトル・スタジオにバンドを連れていって、デモを録音してきてくれよ。そうしたらそれを聴いて、会社として契約するかどうかを決めるから」と言ってね。

トレインのトリッピーなサウンドと政治的な詩はアーティの好みではなかったが、彼は僕を信頼してくれた。彼らの音楽は増えていたFMラジオ局の新しい、自由なスタイルにマッチするだろうと僕はふんでいた。アーティのかかわってきたお子様向けポップ・シングルを中心にしていたAMラジオの世界とは違い、アメリカ各都市で続々誕生していたFMステーション。その中にはもっとヘビーな

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ロック音楽をアルバムをまるまるかけることを売りにする局も多かったのだ。そして、この一連の出来事にトレインは大喜びだった。いや、少しはしゃぎすぎていたのかも……。

ドン・カイダー　マイケルは本当に俺たちのために キャピトルとの契約のチャンスをモノにしてきてくれた。それで、ある晩はりきって俺たちはいつものスペースでリハをしようとやってきた。するとどうだ、中はからっぽ。誰かが押し入って置いてあったハモンド・オルガン、俺のビブラフォン、ドラム・セット2組、ギターもアンプも、俺の服から私物までなにもかも、すっかりどこかに持っていきやがったんだ。しかも、ごていねいなことにきれいに掃除までしてくれてあったぜ！

でも、ちょうどキャピトルから金が出たばかり。それでアーティとマイケルは俺たちが必要なものは全部買いそろえていいって許可してくれた。それで俺は新品のドラム・セットにビブラフォン、持ってかれた全部を買い直したんだ。しかもキャピトルは超ダイナマイトなサウンド・システムまで俺たちにくれたんだぜ。

アーティはトレインがデモ・テープをレコーディングするためにキャピトルのレコーディング・スタジオをおさえてくれた。トレインは町のあちらこちらで演奏をしてまわった。セカンド・アベニューに3月にビル・グラハムがオープンしたフィルモア・イースト、あるいはセント・マークス・プレイスのエレクトリック・サーカスといった人気のスポットで彼らは、前衛音楽家のジョン・ケージから、セシル・テイラー、チャールズ・ミンガス、オーネット・コールマン、ドン・チェリー、ジャック・ディジョネットといった名だたるジャズ界のスター・ミュージシャンたちと共演したのだった（結局、キャピトルは彼らがレコーディングしたデモを気にいらず、契約を却下。その後トレインは

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ヴァンガード・レコードと契約を果たし、グループのアルバム『コスチュームド・キューティズ』は1970年に世に出た。

僕はもっと多くの時間をNYCのサットン・プレイスに近い56丁目のアーティと彼の奥さん、リンダのアパートで、ふたりと一緒に過ごすようになった。ビリヤードをしたり、ポットを吸ったり、朝まで話しこんだり。なんだか僕とアーティはこれまでの人生ずっとおたがいを知っていたような気分だった。彼とソウル・メイトのリンダは新しく、とてもオシャレなこの高級マンションの上階に、まだ幼い彼らの娘のジェイミーと住んでいた。まもなく彼は僕に、もっと楽にウッドストックとの行き来ができるようにと彼の会社の車、ビュイックを貸してくれた。ソニアは都会が嫌いだったから、僕はいつもひとりで出かけ、毎晩、用事がすむときちんと家へ帰った。あとになって、フェスティバルのプランニングや制作に没頭して、まったく他の時間が作れなくなると、ソニアと僕は少しずつ離れていってしまった。

夢の誕生――ウッドストック・プロジェクトを追え

アーティ・コーンフェルド　マイケルとリンダと僕はブッチ・キャシディとエッタ・プレイスとサンダンス・キッドのようになっていった。彼は僕の最初のヒッピー・フレンドさ。僕らはジョイントを吸い、一緒に36階からシティの夜景を眺めて楽しい時を過ごした。ビリヤードに熱中したり、3時、4時まで話に夢中になったりしてね。彼は僕をクロンバイン、僕は彼をクランと呼んでいた。

ある晩、彼が「アーティ、きみはもう何年もこんなことをやってきたんだろ。それで疲れたってわけだ」って言う。それで僕が「疲れたって、どういうことだい？」って訊きかえすと、奴は「つ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

まり、きみは誰かと契約して、スタジオに入り、あれこれそういうことをするけど、でも、もう昔していたみたいにクラブには行かない。そうしなければいけないって場合以外はもう新しいバンドを聞きに行かなくなっちゃったってことさ」って言ったんだ。

アーティに僕はウッドストックのサウンドアウトのこと、マイアミでやったフェスティバルの話をした。そしてそれから何週間もサウンドアウトのようなスタイルでサマー・コンサート・シリーズをやってみようぜって話し合った。それから真夜中の僕らのお気に入りタイムをしている時、ウッドストック・フェスティバルのコンセプトが生まれてきたのだった。

「なにか本当に大きな形でやってみよう！　みんなを田舎に呼んで、みんながキャンプして、そこですべてを一緒にしてやろう！」。アーティの興奮はさらにアイディアを前進させた。僕らはまたイエリー・ヒル・ロードのタプーズの土地を買って、そこを別荘つきスタジオに改造する計画の可能性についても話し合った。彼は大乗り気だった。こうして僕らは２つのプロジェクトの両方を追求することにした。

友だちでジャグラーの店の経営をやっているジム・ヤングは不動産ビジネスも手がけていた。そこで12月になると僕らは一緒にフェスティバルの開催ができそうな候補地を探しはじめた。彼にわずかだが手数料を渡して、見つけてきてくれたウルスター・カウンティの数か所を見にいった。ウッドストックの西、ルート212号に前にゴルフ・コースを作る計画があった70エイカーの広さの土地があった。クランヴィルと呼ばれている地域には、ゴーカートや小型車のレース場だった、なかなかいい場所もあった。でも、どちらの場所も僕らが思い描いているフェスの会場としては狭すぎるし、アクセスの面でも問題があった。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

年が明けるとすぐ、ソーガーティーズのそばにあったウィンストン・ファームを見にいった。ここは700エイカー以上の広さがあり、なだらかな丘のつらなる土地で、ニューヨーク・ステイト・スルーウェイにも近く、完璧だった。土地の持ち主はあのドイツ・ソーセージで有名なスカラー&ウエバー精肉会社の重鎮、スカラー氏。彼はこの土地をハンティングと週末の個人的な憩いの場所として使っていたのだ。何度か彼の代理人と話をしたところ、スカラー氏は土地を貸してもかまわないということだった。この会談の結果を伝えるとアーティは理想的じゃないか、と大喜びで賛成してくれた。そうなれば次に必要なのは、このプロジェクトに投資してくれる人間を見つけることだ。早速アーティは何人かのレコード会社の重役たちに打診をはじめた。

その頃、僕はエンターテイメント専門の弁護士をしているマイルス・ルーリーと知り合い、彼に計画を打ち明けた。フェスティバルの話も、スタジオ計画の話も彼は興奮しながら聞いてくれ、投資先を探して共同ビジネスをやりたがっているという若い資産家、ジョン・ロバーツとジョエル・ローゼンマンと会ってみては、とすすめてくれた。彼らはマンハッタンの新しいレコーディング・スタジオ作りのバックアップをしているということだから、ウッドストックのスタジオ計画にも乗ってもらえるかもしれない。

マイルスはミーティングのアポをとってくれ、2月初めの午後、僕はアッパー・イースト・サイドの彼らのマンションに出かけた。会ってみるとふたりは僕たちと同じぐらいの年齢で、その東85丁目の広い独身貴族用のスペースを2つ占領して、片方をオフィスとして使いながら共同生活をしていた。

話を始めると彼らと僕たちとはまったく正反対の世界から来たことがわかった。21歳のジョン・ロバーツは一族の委託金でなにひとつ不自由のない生活を送っていて、大製薬会社の創始者の娘だった母親が死んで、百万ドルの遺産を相続したばかり。さらにこの先、別の高額な譲渡があると言う。も

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

うひとりのジョエルはロング・アイランドの歯科医の息子で、最近エール大学のロー・スクールを卒業したばかり。彼らは有限会社チャレンジ・インターナショナルを立ち上げ、興行系プロジェクトを扱う経営パートナーだった。最初のビッグ・プロジェクト、メディア・サウンドの建設が57丁目で進んでいた。ゆったりとまたあけっぴろげな態度でハローと挨拶した時から、僕はジョンを気に入った。彼が一本気で、どんな詭弁も誇張も気取りもない現実的な性格の人間だ、ということはすぐに見て取れた。ジョエルはそのスーツ姿から最初に想像したのとは違い、少々とっつきにくい男だった。それでもなんとか自分を魅力的に見せたいと頑張っていた。彼のことはあまりよくわからなかったが、ジョンも彼もユーモアのセンスに富んでいたし、ジョエルの高らかな笑い声は気持ちよかった。こうして初対面で緊張していた僕は少し落ち着いた気持ちになれた。

1979年に出版された『限りない資本を持った若者たち』という本で、ジョエルとジョンはこの時の最初の出会いの印象をこんな風に書いていた。

コーンフェルドは長く茶色っぽい髪で、Tシャツの上に刺繍をしたチョッキを着ていた。……しかし、ラングを色づけするのはむずかしかった。大きなオーラに包まれたような黒いカールした髪、そんな髪にふちどられた顔は、悪人のように見えたかと思えば、おとなしい女性、ボーッと遠い世界を見ている夢想家、かと思えばいたずらっ子、無邪気な若者、と見るたびに表情を変えた。不愉快になるぐらいころころと変わる顔の下は、よれよれのワーク・シャツに、インディアン模様の革のベルトをしめた色褪せたリーヴァイ・ジーンズ、そしてひびわれ、よごれたカウボーイ・ブーツという格好。

だが、驚いたりあきれている暇はなかった。コーンフェルドは自分とラングを紹介したかと思う

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

と、両手でジョンの、続いてジョエルの手を握り、兄弟に親愛の情を表すかのような笑顔で微笑んだ。それは痛みにみちた秘密を分かちあおう、と言うかのようでもあり、これから一緒に敵の陣地に分けいる危険な使命を果たしに行くぞ、と言うかのような微笑みだった。ラングはすべてを受け入れるさ、と言うかのように陽気な笑顔。僕らには到底知りえぬ不思議なバイブレーションに身をゆだねているのさ、という印象の笑顔だった。

僕は多くは語らなかった。僕の父親はかつてこんなことを僕に語ってくれた。「話すのに夢中になっている時、人は学ぶことを忘れてしまうのだ」。アーティはエキスパートのようにミーティングをとりしきり、情熱をこめ、しかもポンポンと的確な言葉で僕らのウッドストック・スタジオの計画を説明した。フェスティバルについては彼らに詳細を語るつもりはなかったが、アーティはさらりと流すように話していた。時たまジョンとジョエルは僕の方をちらりちらりとのぞき見る。アーティがプレゼンをしている間、僕はニコニコ顔でいた。僕らの未来のパートナーたちは田舎にスタジオを作るというアイディアにはあまり興味がない様子だった。

ジョエル・ローゼンマン　彼らが秘密をあかすように語った話、ウッドストックにどうしてもレコーディング・スタジオを作る必要があるのだ、という話にはたいして興味がわかなかった。ウッドストックに住んでいるスーパースターたちの名前を聞いた時は一瞬ときめいたが、これらのスターたちのために巨額の金をかけて立派な施設を作らねば、という部分には十分な説得力がなかった。まだメディア・サウンドの扉が開いたわけではなかったが、僕らはそれまで専門家たちに話を聞いて、レコーディング・スタジオが投資の価値があるだけの収益をあげるには、数人のスターが数枚

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

のアルバムを作ったぐらいでは、それがどんな素晴らしいアルバムであろうが、十分ではないということを承知していたのだ。たとえそれがミリオンセラーになっても、スタジオの使用料を上げるわけにはいかないし、また彼らが次のアルバムを作る時にスタジオの使用時間を増やすわけもないのだから。

もちろん、ジョエルの専門家たちは知るよしもなかったが、成功につながるアルバムがレコーディングされたスタジオは、自分たちの瞬間の稲妻を瓶に閉じこめたいと望むアーティストたちを魅きつけ、コンスタントな仕事の依頼が続くものなのだ。そんな好例がベアーズヴィル・スタジオだ。1970年の終わり頃、アルバート・グロスマンはあのタブーズの地所から1マイルと離れていない場所にこのレコーディング施設をオープンし、以後30年、この国でもっとも人気の高いインディペンデント・スタジオのひとつとして、ローリング・ストーンズ、フォーリナー、ボニー・レイット、R.E.M.、パティ・スミス、ジェフ・バックリイ、ヴァン・モリソン、ザ・バンド、デイヴ・マシューズ、フィッシュ他、何十というメジャー・アーティストに愛され、数えきれないアルバムを生みだしたのだ。

ビー・マイ・パートナー！　ウッドストック・ベンチャーズ社設立

でも1969年2月のこの日、ジョンとジョエルが知りたがったのは、フェスティバルについてだった。もっともジョンのほうは、スタジオのアイディアにも関心を持っていたように僕には思えたが……。彼らはフェスティバルの規模、場所、チケットの値段、全体の予算額について知りたがった。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

それに対して僕らはまだフェスについて話し合う準備がないのだとかわした。僕らの目には彼らはフェスティバルのパートナーにするにはそぐわないが、スタジオ計画にはマッチしている、と映ったのだ。彼らは賢く、スタジオ計画を作成し、オペレートできる優秀な人材をそろえていたからだ。アーティと僕がそれにふさわしい美的センスと雰囲気を提供できる。アーティは彼らに言った、「フェスティバルに関して、すでに僕らは他の人間とかなり話を煮詰めているんだ。でも、わかった、また、次回来る時に予算をお目にかけるよ」。

フェスティバルのパートナーになるかどうか、アーティと僕がアラン・リヴィングストンと話し合いをしていたのは本当だった。アランは彼をキャピトル・レコードにひきぬいた人物だ。そしてベル・レコードのトップ、ラリー・アタルともその件で会っていた。ジョンとジョエルとのミーティングから数日後、ラリーからアーティに電話があり、フェスティバルへのベル・レコードの参加について会って話がしたいと彼は言ってきた。このニュースに僕らは舞い上がった。そしてアーティはジョンとジョエルに状況を知らせた。「もうフェスティバルのほうは決まっている」と彼らの参加を遠回しに断り「けれどスタジオのほうは追って話し合えればと考えているよ」と告げた。

ジョンとジョエルは僕らの短い回答に、かなりがっかりしたようだった。彼らはフェスの計画に熱くなっていたのだ。おそらく彼らはこの突拍子もないが、流動性のあるプロジェクトで投資の可能性を追求したかったのだろう。それになにより、楽しそうではないか。「僕らがプロジェクトを見つけるといつも大企業が介入して、横取りしていってしまうんだ」。ジョエルはアーティにそう言っていた。アーティと僕は話し合い、最終的な結論を出す前に、もう一度彼らのところを訪ねてみることにした。僕らはふたりとも彼らが好きになっていた。それに僕らと年齢が変わらない人間が数人加わっ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

て一緒に仕事をするのも悪くはないのでは、と考えはじめていたのだ。もし、彼らが両方のプロジェクトに参加する意志があるのなら、一緒にやることも考慮してみよう、と。

まだ、計画を練り始めた当初、僕はまだフェスティバルの総予算を計算していなかった。マイアミのイベントから概算してみると、それにかかる総費用はざっと50万ドル。概算では必要な投資額は25万ドルだった。残りは前売りチケットから出るだろう。出演者への前渡しが10万ドル、イベント前のスタッフ経費、法的手続き、オフィス費用、会場レンタル料、会場セッティングと制作費に15万ドル。ウィンストン・ファームはできれば5000ドルで借りられれば、と思っていたのだが、まだすべては何ひとつ確かではなかった。まだ原案だったが入場者10万人、2日間のイベントでチケットは1日5～6ドル。僕らは夢見て、その夢から利益をあげられるのだ（もちろん、計画が発展していくと、すべてこれらは変わっていった。会期は3日間。1日20万人の観客を想定するようになった）。その後、数回のミーティングを重ねた結果、ジョンはフェスティバルとスタジオの両方に投資することに同意した。僕らはパートナーになることになった。プロジェクトがどちらもウッドストックで展開することから、僕らは会社名をウッドストック・ベンチャーズとすることに決めた。

契約がかわされた、それはこんな風だった。

ひとつ、ローゼンマン、ロバーツは新規ビジネスへの投資をビジネスとするチャレンジ社の筆頭株主であり、取締役にしてディレクターなり。

ひとつ、ラングはローゼンマン、ロバーツにふたつの合弁ビジネスをプレゼンテーションした者なり。ひとつはニューヨーク州ソーガティーズにて行われる音楽フェスティバルの制作の呼びかけ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

契約書は20万ドルの投資、プラス、フェスティバルの制作過程での不確定費用としての10パーセントの追加投資。そしてスタジオ設立への27万5000ドル、プラス10パーセントの投資を明記していた。会社は200枚の株券を発行し、ジョンはその60枚を受け取り、ジョエルは40、アーティと僕は50ずつを保有することに決まった。さらに僕はウッドストック・ベンチャーズを受取人として自分に50万ドルの生命保険をかけることになった。そしてもし合意がなされた現金投資額がフェスティバル、あるいはスタジオの実現には不足と判明した時、さらなる融資者を獲得することが僕に義務づけられた。ジム・ヤングと僕が見つけたウィンストン・ファームでフェスティバルを開催することを前提に、〝ニューヨーク州北部でコンサートを開催することを保証する〟という文章も契約書に盛りこまれ、僕がサインした。万が一、開催許可がおりなかったり、会場候補地が使用不可能になって、ウッドストック・ベンチャーズ、およびチャレンジ社に損害が生じた場合も、僕が損害に対する責任を個人的に負うこと、そしてフェスティバルの開催日まで僕に毎週400ドルのサラリーが支給されること、などが決まった。

しかし、キャピトル・レコードとの、まだ2年間の労働契約が残っているため、アーティはこの共同合意書にはサインできなかった。そこで彼が法的に正式参加できるようになるまで、みんなの承諾のもと、僕が彼の証券を預かることになった。こうして2月29日、契約の調印がされた。

アーティと僕はフェスティバルを実現するための明確な役割とノウハウを持っている、しかし……と、契約直後からジョエルは悩みはじめていた……ジョンはもう、僕をパートナーにしておく必要がないのではないだろうか、と。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ジョエル・ローゼンマン　ジョンに向かって、こう言ったのをおぼえている。「きみは思いどおりやればいいんだ、ジョン。良いプロジェクトと良いパートナーにめぐまれたんだからな。僕なんかもう要らないだろ。きみにはマイケルとアーティがいるんだから」。

ジョンはそっと僕を目立たない場所に連れていくと、「なにかジョエルにできる役割を見つけてもらえないだろうか」、と訊いた。彼のやさしい思いやりを感じ、僕は「ジョエルが参加してくれて、とてもうれしいよ」と答えた。もちろん、これから仕事は山のように生まれてくるに違いない、きっと猫の手だって借りたくなるぐらい。スタートのペイパーワークが完了すると、僕らは仕事の役割分担をした。アーティは広報と宣伝、ジョンとジョエルは統括本部の仕事とチケットの手配を受け持つことになった。僕の仕事はフェスティバルのプロデューサーとして、出演者のブッキング、会場のデザインと設営、人材を集めてプロダクション・チームを作ることなど。スタジオ・プロジェクトを思いついた時、まっさきに浮かんだのはスタン・ゴールドスタインを起用することだった。フェスティバルにも彼が参加してくれれば、計画の具体化に大きな力を発揮してくれるだろう。

僕らがやるべき最優先事項は、フェスティバル会場の場所の決定と確保、そして6か月の期間をかけて準備すること。なんだ、朝飯前（ピース・オブ・ケーキ）じゃないか！——その時、僕にはそう思えたのだ。僕らは散開し、走りはじめたのだ。

＊ロバート・シェルトン（1926－1995）　アメリカの音楽・映画評論家。フォークソングが

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ブームになり、やがてロック音楽の人気が爆発した1958年～1968年、ニューヨーク・タイムズ紙の記者として活躍した。1960年、無名だった20歳のボブ・ディランのステージを激賞した批評がきっかけで彼のレコード契約が決まるなど、アメリカ音楽界に大きな影響を与えた。

＊ブリル・ビルディング　タイムズ・スクエアのすぐ北に位置するビルで、たくさんの音楽出版社のオフィスがあり、〝西洋社会で最も偉大なポピュラーソングの発信源〟と呼ばれた。ピアノが一台入るだけの狭いスペースでソングライターたちが曲作り。できると楽譜出版社と契約し、デモテープを録音し、その宣伝、ラジオ番組への売りこみ……と、すべてがこのビルの中でできる〝ヒットソング工場〟だった。1920年代から数々のブロードウェイのヒット曲を生んだ人々がいて〝ティン・パン・アレー〟と呼ばれた通りは、ここからはかなり南の28丁目の6thアベニューとブロードウェイの間にある。

＊ブッチ・キャシディとサンダンス・キッド　実在の列車強盗を働いた二人のアウトローを主人公にした映画『明日に向って撃て！』は1969年に公開されると（日本公開1970年）アメリカン・ニューシネマの傑作と呼ばれ大ヒット。ラストシーンのストップ・モーションは映画史に残る名シーンとして有名。主人公のふたりはポール・ニューマンとロバート・レッドフォードが演じた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

第4章

Wallkill

ウォールキル

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「ありゃあ、"ミスター・ラング"かな？ "ミス・ラング"、なんじゃないか。男かね？ 女かね？」。人々があざけるように言う声が、演壇に向かって歩いている僕の耳に届く。ひそひそと囁く声と、ワーワー、ピーピー、かん高い口笛を背中に浴びながら、僕はもう一度自分がここに来た目的に意識を集中する。そうだ、僕がここに来たのは、ウォールキルの人々に、この土地でフェスティバルを開催したいこと、そしてそれがなにひとつ心配するようなものではないことを説明し、納得してもらうためだ。ウォールキル市民ホールは満員で立錐の余地もない。人々は興奮状態。中年の主婦たち、田舎町の商売人たち、日焼け顔の農民たちは口々に、彼らが知っているヒッピー話を披露し合っている。

「まあ、なんて恐ろしい！」長い髪の一団が嵐のようにやってきて、自分たちの町をメチャクチャにするのではないかと住民たちは本気で恐れているのだ。少し高い席に並んだ6人の町会委員のひとり、ジャック・シュロッサーが小槌で机を叩いて人々に注意をうながす。

「静粛に！　これからラング氏が発言します」。

汗ばむようなこの6月なかばの夜、制作実行チームの選りすぐりの仲間と僕らのフェスティバル・プランを人々に伝えるのだ。少しでも有利な展開になれるよう、準備はしっかりとしてきたが、この人々の関心の高さには正直びっくりだ。

「みなさん、僕たちはウォールキルのすべての方々にとって良きこと、利益となるであろう計画を持ってここへ来ました」、僕は切り出した。「僕たちは宇宙人でも、麻薬中毒でもありません。自分たちが何をしているのか、きちんと心得てこの領域で仕事をしているプロフェッショナルです」。こんな風に話を始めると、人々の間に驚きの声が広がる。"女のように髪の長いヒッピー野郎だと思っていたが、なんと、こいつ俺たちにも理解できるような言葉をちゃんと話せるではないか！"渋々とではあったが、人々の敵意は少しずつ後退を始めている。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

余分な修飾ははぶいて、僕が簡潔に計画の説明を始めると、部屋は静かになっていく。「音楽とアート、食事と楽しみを提供するのです。この田園地帯で野外キャンプをします。みなさんが子供の時に楽しんだようなキャンプです。イベントを安全なものにするために、僕たちはこの世界の最高のプロ・スタッフを雇っています。毎年この町で開かれるオレンジ・カウンティ・フェアのように、このコミュニティのみなさんに不便やご迷惑をかけるようなことはないと僕たちは信じています」。

僕が話を続けると、興奮はしずまり、さきほどまでムンムンしていた部屋の温度は下がっていく。ここらへんでやめておいたほうが良さそうだ。話を締めくくろうと僕は一呼吸おいて、声をかける。

「なにかご質問がありますか?」。

「あるよ!」高校のフットボール・コーチのような男が立ち上がって、僕に質問をぶつける。「有名なミュージシャンがたくさん来て演奏するって聞いたが、そういうミュージシャンを聴きに集まってくる連中はどうなんだ? 彼らはどんな人間たちなんだい?」。

「みなさんの子供たちのような若い人たちです」、僕はためらわずに言葉を続ける。「みんな音楽が好きな子供たちですよ」。公聴席にいた若い連中が喝采の声をあげ、背広姿の大人たちの中にも嬉しそうに笑う人たちがいる。

なにがどうあろうと、僕らの意図はここにとどまること。そして2か月でフェスティバルを実現させることだ。反対意見をひっくりかえし、きっと勝てるだろう――僕は楽観的に、そう考えていた。

フェスティバルに向かって

ウッドストック・ベンチャーズを立ち上げ、共同パートナーとなった最初の数週間、ジョン、ジョ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

エル、アーティと僕の4人は、仲良くまとまったチームになれるようにおたがいに努力をしていた。ある晩、僕らは全員でアーティのマンションに集まり、みんなで輪になり、ジョイントを回しながら計画について議論した。彼らは僕らに、僕らは彼らに何を求めているのだろうと考えながら、これはなんと奇妙な取り合わせのチームなのか、と僕は思わずにはいられなかった。ジョンと僕は〝パイプズ〟について議論を始めた。ジョンはいつもの彼の快適ゾーンを離れて、初めはそわそわと落ち着かなさそうにしていたが、ジョイントで和んだのか、まもなく一緒に笑い声をあげるようになった。彼らは僕らが扉を開いてみせた、この世界に興味しんしんのようだった。それでもいままで体験してきた世界も、人生の考え方でも、僕らの間には大きな隔たりがあった。本能と直感を信じる僕、専門家の意見と調査データ、これまでの彼らの世界で重要とされてきたマーケティング・ビジネスのツールとテクニックを信じる彼ら。そのどこか中間に、ソングライティングとミュージック・プロモーションに才能を持つアーティが位置しているというわけだった。

ウッドストックを成功させるには、何もかも混じり気なしの本物でなければと僕は考えていた。さまざまなカウンターカルチャー・グループを集めて、フェスティバル・イベントの新しいパラダイムをつくりだそう。さまざまな種族が一堂に会するギャザリング・オブ・トライブズ。同じ気持ちと志を持った人々の楽園。僕が夢見ていたのはそういうものだった。新しいライフスタイルの提案をする人たち。その実験を尊重し、会場にはそのための用意をしよう。これまでどこにも見たことのないアートとビジネスの合体。その実現には、柔軟性と適応性が鍵となるだろう。でも、こんな僕のアイディアを現実のものにするには、ジョンとジョエルはあまりに保守的なのではないだろうか……。

ウッドストックのコンセプトが見取り図として、僕の頭の中で見えてくればくるほど、彼らと一緒にやっていくのはむずかしく感じられていった。僕は目をつぶり、浮かんでくるフェスティバルのパ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ートごとのヴィジョンを、ジャグラーのように空中にほうり、それがある程度しっかり形にまとまると、メンバーに伝えて実行に移してもらった。主要な組織チャート作りを進める一方、さまざまな役割を持った新しいポジションを考え、オフィスの壁に書きこみ、必要な人材を集めていった。

フェスティバルの総称は〈ウッドストック・ミュージック&アート・フェア／アクエリアン・エキスポジション〉とすることに決まった。ウッドストックを加えたのは、僕が夢見てきた自然の中のセッティングを、人々に思い浮かべてもらうためだ。〈アクエリアン・エキスポジション〉は音楽だけではなく、これが絵画、クラフト、彫刻、舞踏、演劇などアート全般を展示する催しであることを示したくて、僕が提案した名称だ。あの昔のマーヴェリック・フェスティバルの1969年版というわけだ。それに水瓶座の時代——占星術師たちが、星々や惑星の配列が20世紀後半にこの偉大なハーモニーの時代を到来させ、世界に理解と信頼、調和をもたらすだろうと予言していた——〝アクエリアン・エイジ〟へ言及しておきたかったのだ。このネーミングは、僕らのフェスティバルは人々が一緒になり、新しい時代の到来を祝福する場所でもあるのだ、と示すためだった。

この前年は大学キャンパスで、都市のゲットーで、国中の抗議デモで暴力をともなう対決、あまりにたくさんの流血事件が起きていた。しかし、ウッドストックでは政治的討論はわきに追いやって、僕らのエネルギーを平和に集中させれば、それがどんなに素晴らしいグルーヴを産み出せるものなのか、僕らはそれを確かめてみたかった。そうすればそこに僕たちは60年代の間、ずっと渇望してきた世界をつくりだすことができるはずだ。平和と理解は可能であるはず——それが僕たちの政治的メッセージだ。そして同時に僕らはそこでカウンターカルチャーの真価を検証してみよう……。

平和と音楽の3日間にしようと僕らは決めた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

どれぐらいの数の人間がやってくるのだろうか、と僕らはニューヨーク、ニュージャージー、コネティカット、マサチューセッツの主要人口密集地域でのリサーチを始めた。

その結果をまとめてみると、およそ20万人が来るだろうという答えが出た。ひとつのコンサートにはとても考えられない数字だ。これまでの最大の観客動員記録はビートルズが1965年と66年にシェイ・スタジアムで作った5万5000人。67年のモンタレー・ポップ・フェスティバルでは、3日間それぞれの日に2万5000から3万の人が集まっていたが、会場のモンタレー・フェアグラウンドでは泊まりこみはいっさいなかった。

3月の初めに僕はウィンストン・ファームの地所について不動産エージェントにコンタクトをとり、オーナーのシャラー氏に問い合わせてもらったところ、「音楽とアートのフェスティバルなら是非やりなさい」、とのこと。しかし、不動産屋が伝えた12週間で4万ドルのリース料はこちらの予定額を大きく超えていた。すぐに僕はシャラー氏のマンハッタンの弁護士へのコンタクト先を訊いてもらうように頼んだ。一方、そんな間にウッドストックでは、僕があたりでフェスを開くらしいという話が口伝えで広がっていた。まもなく僕は町のスーパーバイザー、ビル・ウォンドに呼び出しを受けた。カウンティの保健局の役人が同席する彼のオフィスで、ウォンド氏ははっきりと、「ウッドストックの町で大規模な野外コンサートは望んでいない」と僕に告げた。すると突然、不動産屋の男は僕からの電話の返事をしなくなった。ジョンとジョエルはシャラー氏の代理人へコンタクトし、3月の最後の週に面会の約束をとりつけた。

少なくとも、僕たちはウッドストックのレコーディング・スタジオの場所は確保することができた。4月17日、僕らはタプーズの地所オーナーと5万5000ドルで買うことに合意し、その手付金5500ドルを支払った。施設の見取り図の原案ができると、すぐに、ビルボード誌の記事になった。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

〝ウッドストックにレコーディング・センターが建設されることになった。このほどウッドストック・ベンチャーズ社はウッドストック・ミュージック&アート・フェアの行われる場所の近くに30エイカーの土地を購入。16トラック完備のスタジオと複合ホテル施設が誕生する。同社のジョエル・ローゼンマンによると、ウッドストック・サウンド・スタジオは、プロデューサー、アーティストがその快適な環境で音作りに専念でき、また時間の融通も自由な新しいタイプの録音施設になるとのこと。スタジオには宿泊施設、リハーサル・スタジオ、24時間使用可能なキッチン、さらにプールやテニス・コートなどのレクリエーション設備も付属している。元マイアミのクライテリア・スタジオのスタン・ゴールドスタインが建設中のスタジオのコンサルタントを務めており、完成時には同スタジオのエンジニアとなる予定だ。〟

緊急課題――トップ・タレントをゲットせよ！

会場は決まっていなかったが、僕らはフェスの開催日を8月15日に始まる週末と決定した。出演してもらいたいタレントたちが他の日程が入らぬうちに、こちらへの参加ブッキングをしておく必要があったのだ。マイアミでやったいろいろなコンサートの体験からどんなステージングが聴衆を喜ばせるのか、どんな形がだめなのか、僕は多くを学んでいた。マイアミ・ポップでは、ブルース、クラシック・ロックンロール、アシッド・ロック、ポップ、フォークなど、実験的にたくさんジャンルの違う音楽をやったが、観客はそのすべてを喜んでくれた。カウンターカルチャー世代の若者たちは、音楽の好みも枠にこだわらないオープンハートの人たちだったのだ。そこで僕は、ジミ・ヘンドリックスからジョニー・キャッシュまで、多種多彩なジャンルの希望出演者リストを作ってみた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

僕はウィリアム・モリス・エージェンシーのヘクター・モラレスのオフィスで多くの時間を過ごすようになった。彼がマイアミ・ポップの出演者のブッキングに協力してくれて以来、僕らは友だちになったのだ。このプロジェクトではヘクターの秘書が大きな助けになってくれた。まもなく、僕はこのイベントのための信用をどうすれば作れるのか、を発見した。まず、僕はビッグ・ネームのアーティストの数人に、彼らの信頼を得るべく、かなりのギャラで出演のオファーをした。たとえば向こうが7500ドルと言えば、僕は1万ドルをオファーしたのだ。こうして数人のビッグ・アーティストが出演を快諾してくれると、僕は他のエージェントやマネージャーが僕をいいかげんなプロモーターではなく、真剣に受けとめてくれるようになったのに気がついた。そして、交渉はとても楽に、またギャラもよりリーズナブルになっていった。ジェファーソン・エアプレイン、クリーデンス・クリアウォーター・リバイバル、キャンド・ヒートが真っ先に出演を承諾してくれた。「プラウド・メアリー」をスマッシュ・ヒットさせたばかりのクリーデンスは1万ドル。モンタレー・ポップに出演した2つのバンド、キャンド・ヒートは1万2500ドル、ジェファーソン・エアプレインは1万5000ドルで契約ができた。

クロスビー、スティルス&ナッシュ（CSN）はデビュー・アルバムが出る前に出演が決まった。ある日、彼らのマネージャー、デヴィッド・ゲフィンが、完成したばかりのテスト・プレス盤を持ってヘクターのオフィスにあらわれ、「これを聴くまで待てよ！」と叫んだ。そして僕らはその素晴らしさに打ちのめされた。バッファロー・スプリングフィールドとバーズはこれまで僕の二大フェイバリット・グループだったが、CSNはそのレベルをさらに高度なものにしていた。「ヘルプレスリー・ホーピング」、「組曲：青い眼のジュディ」のヴォーカル・ハーモニーは最高だった。それに「ウッデン・シップス」のギターとオルガンのインタープレイが大好きだった。後で知ったが、この曲は

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

クロスビーがココナッツ・グローヴでの冒険体験からインスパイアされて書いたものだった。「マラケシュ行急行」はヒットするだろうと、僕にはその時からわかっていた。

ゲフィンはグループの最初のツアーを始めるのにふさわしいベニューを探していた。そしてそこにいたみんなでウッドストックこそ、その場所だと意見は一致。僕はその場で彼の言い値、1万ドルを支払って、出演契約を決めたものだ。そんな具合に僕らはユニークなブッキングをしていった。まだ無名だったが、実力派のニュー・アーティスト、ジョー・コッカー、マウンテンはウッドストックで多くの人に紹介したくて、出演を決めたのだった。

3月の終わりにはもうフェスティバルは熱い話題になって、人から人へ伝わっていた。ある晩、僕とガーランド・ジェフリーズはニューヨークの、ザ・シーンにヴァン・モリソンを見にいった。ザ・シーンは当時、ジョニー・ウィンターのマネージャーをしていたスティーヴ・ポールが経営を始めた、とてもカッコいいクラブだった。僕らはスティーヴたちとおしゃべりしながら、フェスティバルの話をした。すると次の日には、もうロサンジェルスから、「自分がマネージしているバンドを出してくれないか?」と電話がかかってきた。アーティはラジオ局の友人たちに、番組でウッドストックのことを取り上げてくれと、あちこちに電話をかけはじめていた。

フェスティバルのスタッフ集めでの僕のモットーは、〝どの分野でも一番の人間を獲得せよ〟。それぞれのフィールドでもっとも優秀な人間を、そしてできることなら、僕らのやろうとしていることを理解してくれる人間を僕は探した。マイアミのスタン・ゴールドスタインに、参加は可能かを聞こうと連絡を入れると、彼はすでにクライテリアを辞め、運のいいことにニューヨークに来ていた。彼は

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ヒット・ファクトリーでサウンド・エンジニアの仕事をして、ロサンジェルスで新しい仕事先を見つけ、これから出かけようとしているところだった。すぐに僕はニューヨークへ出かけて、彼を週500ドルの（僕より100ドル高い！）サラリーで雇い、チームに加わってもらった。

スタン・ゴールドスタイン　マイケルはフェスティバルの現場で動いてほしいと仕事の依頼をしてきた。僕はフェスティバルには興味ないよ、とはっきり彼に言ったんだ。僕の関心は一流のレコーディング・エンジニアになることだったからね。するとマイケルはフェスティバルと並行してレコーディング・スタジオの建設が始まるって言うじゃないか。結局、僕は彼のフェスのデザインとスタッフ集めを手伝う約束をしたよ。出演するメジャー・アーティストが決定し、デザインが完成したら放免してもらって、ジョンとジョエルのメディア・サウンドのチーフ・エンジニアとスタジオづくりの仕事のほうに専念させてもらうって約束でね。できたら僕も新スタジオのチーフのひとりになるんだ。

僕が加わってすぐに、3日間のイベントになることが決まり、おおまかな構想ができてきた。金曜日は遅めにスタートして、メジャーな出演者ぬきで、その日、着いたアーティストや別な仕事をして遅くなって現れる連中を随時、ステージに上げていってゆったりした音楽の一日にしようということになった。土曜日、日曜日のステージは続々と有名なアーティストたちが登場だ。〝平和と音楽の三日間〟ってスローガンも決まった。マイケルは鳩とギターを組み合わせたロゴを思いつき、そのデザイン・イメージでアーノルド・スコルニックがやがて素晴らしいポスターを作ったよ。

ガルフストリーム・パーク・レース・トラックのような、中に人を入れる形の会場ではなく、一日

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

終わってもそこを離れず、キャンプしてもっと長くいられる会場、そこがひとつの大きな都市になるような体験のできる会場を僕らは必要としていた。会場に20万人の人間が3日間いるためには、どんな設備が要るのか、スタンと僕は数字を出さなくては、とリサーチを開始した。軍隊以外に僕らの計画しているような大規模なオペレーションは前例のないこと。会場に何がいくつ必要になり、それはいくらかかるのか。たとえば移動トイレ（ポータサン）の必要な数を割り出すために、僕らは公共施設のトイレがどれだけの時間にどれぐらいの人間が出入りするのか、とりあえずチェックを開始しはじめた。

スタン・ゴールドスタイン　試合が始まるよりずっと早い時間にヤンキー・スタジアムのトイレに行って、シートの数をかぞえ、その前でクリップボードを持って、何人の人がどれだけの時間に出入りするか調べたんだ。出入りした人間の数をトイレのシートの数で割って、一定時間にどれだけの人が何回トイレに行くのか、そこから計算したんだ。

アメリカ陸軍ならきっと、海外や国内の屋外地域で駐留キャンプをつくり、仮の〝町〟を作るに際して、こうした情報を持っているに違いないと僕らは考えた。そしてスタンは国防総省（ペンタゴン）に連絡を入れて、担当者と面会する約束をとったんだ。でも、どういうわけか、面会はキャンセルされてしまった。〝野外行動〟の情報が漏れるのを恐れたのかもしれない。

3月の終わりにジョンとジョエルがシャラー氏の弁護士に会いに行ったが、話し合いはうまくいかなかった。結局シャラー氏は所有地を貸さないことに決めたということだった。僕らは心配になりだした。出演者が決まり、スタッフも決まりだしたのに、いちばん肝心のフェスティバルの場所がない。

僕らはさらに遠くの土地までヘリコプターを使って探し、これはと思える場所を見つけると車でチェ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ックに働きかけた。また地面にはあちこちに雪が積もっていた。つまり、可能性のある場所でもそこへ行くにはかなり歩いて行かなければいけないということだ。

この会場探しをしている時に、LAに本社のあるアリーナ・アソシエイツ社のトム・ラウンズ、トム・ドリスコル、メル・ロレンスの3人と僕は知り合った。彼らは前に僕がやったイベントをちゃっかり観察して、僕がウッドストックに移った後の68年の12月にガルフストリーム・パーク・レース・トラックで第2回マイアミ・ポップ・フェスティバルをやっていた。このフェスで録音の仕事をしたスタッフから、僕はこのフェスの評判を耳にしていたのだ。僕は彼らを東部に招き、アクエリアン・エキスポジションへの参加の可能性をチェックした。ラウンズのバックグラウンドはラジオ、ドリスコルはカリフォルニアで大きないちご農園の経営もやっていて、メルが実質的なオペレーションを仕切っていることが判明した。これまで大きなイベントを仕切った経験がなかったので、僕はライン・プロデューサーをチームに入れ、また何百人のスタッフを動かしてくれる人材も欲しかったのだ。アリーナ・アソシエイツはひとり頭5万ドルのギャラ、プラス、チケット売り上げからのパーセンテージを要求してきた。法外な値段だった。「わざわざ来てくれてありがとう」。僕は彼らに言った、「でも、僕は自分ひとりでやることにするよ」と。

だが、ミーティングと会場探しをしている間に、メルと僕は響きあえる何かがあるのに気づき、急に仲良くなった。僕は、思ったらやってしまえ、タイプの実行型の人間で、僕がやろうとしていることをちゃんと理解できる男だった。僕は現場マネージャーを必要としていて、彼なら立派にその役を果たせる能力がありそうだった。話し合いが物別れに終わり、3人が帰る時、こっそり僕はメルに残るように言った。こうして僕は8000ドルの報酬でチームへの参加に同意してくれた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

メル・ロレンス　僕は将軍役をしてくれと言われ、そのせりふに乗って「これをやってみたいね」と言ったんだ。僕はマイケルが気に入ったんだ。彼は自信を持っている人間のオーラがあり、その存在感がまわりの人間にも自信を持たせるんだ。こんな資質を持った人間を前にしたら、信じないのが嘘ってものさ。

メルはラジオの仕事を通じて、コンサート・ビジネスの道に入り、ハワイでいくつものビッグ・コンサートを手がけていた。北カリフォルニアの田舎で開かれた最初のポップ・フェスティバル、マジック・マウンテン・フェスティバルをやり、その次の週にはモンタレー・ポップでステージづくり、フェンスの設置、交通誘導をやっていたという。僕らのフェスの現場マネージャーとして、彼ならこれらすべての仕事、いやそれ以外いろいろな仕事を手助けしてくれるだろう。

メル・ロレンス　最初のウッドストック・イベントのプランニング・ミーティングは6th・アベニューのダイナーでやったんだ。僕がまとめてきた15ページから20ページもある正式な認可を受けたコンサート・アウトラインの書類をもとに、マイケルとスタンと3人で計画を練ったんだ。そして出てきたアイディアをテーブルに置かれていた紙ナプキンに書きとめたよ（笑）。

開催候補地の発見――ウォールキルの恐怖と嫌悪

3月最後の日曜日、ジョンとジョエルはあたり一帯をドライブして、必死の思いで会場を探しまわっていた。ルート17号をジョンのポルシェでシティへ帰る途中、彼らの眼に一枚の立て札が飛びこん

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ミルズ・インダストリアル・パーク借ります!」それはNYから車で90分、オレンジ・カウンティのウォールキルの町の300エイカーの土地だった。借用価格は1ヵ月で1万ドル、ただし地域の委員会の同意が必要とされた。ふたりは30日間の猶予と相方からの契約不同意を条件として、1万ドルの小切手を支払った。彼らは7月18日にウォールキルの土地管理委員会に出席して、ミルズ・インダストリアル・パークで数日間で1万から5万人の入場が見こまれるアート・フェアを開催すると説明した。アート・フェアにロックンロールが含まれることを言わなかったのは、周到な[illegible]を恐れたからだったのだろう。そしてイベントには保証金をかけることを約束した。管理委員会の面々は不安がありながらも、僕らの計画に異存はないと彼らの判断をふたりに伝えた。

最初にこの場所を見た時の僕の気持ちは、恐怖のひとことだった。ブルドーザーで平らにされた土地は、ならされた土地のような中央をリスが走り、はげ鷹が頭上を飛びまわっていた。そこは僕が探していた風景とは正反対。田園が緑で、その美しい静かな田園風景の中を歩いているだけで気持ちよく、心を自由に解き放つような場所ではなかった。そこは醜く、冷たく、こわばり、不潔な場所だった。虫かなにかが土地から必要なものを全て奪い尽くしたあと、いらない肌だけを残していったような――。

案の定、ジョンはいつものように興奮していた。ミルズの関係者と話をすすめ、メルに土地を見せた後、僕はこの土地を受け入れられるような風景に変えることができるからと、説得した。田園風景に変えることはできないけれど、電気も水もあり、それに主要道路からすぐにアクセスできるのだし、と。ただ、それでも、フェスティバルの名前からウッドストックを削ることはさせない。僕はそれだけはあきらめるのはいやだった。ウッドストックの名前は僕がやりとげたいと思ったことすべての象徴だったのだから。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

この指とまれ！──優秀スタッフ続々と集結

僕たちはすばやく決まっていなかったポジションのスタッフを決めていった。テクニカル分野のスタッフはほとんど、ビル・グラハムのフィルモア・イーストのメンバー。ロックンロール界最高の照明ディレクターといえばチップ・モンク。名門クラブ、ヴィレッジ・ゲイトからその道に入り、１９５９年に始まった時からニューポート・フェスティバルの照明を手がけ、フィルモア・イーストのライト・デザイン、モンクレーでも、メルのマイアミ・ポップ・フェスティバルでもディレクターをしてきた第一人者だった。

そんな彼からフェスティバルについて訊きたいと電話がかかってきた時は嬉しかった。

チップ・モンク　僕がヘクター・モラレスに会いに行くと、「なあ、たった今までここにいた、カールの髪のガキが、今、この世界の一流どころをスカウトしてまわっているぜ！」と彼が教えてくれたんだ。その頃、仕事をしていなかったから、こいつはまたとないでっかいチャンス！　と思って、マイケルのところへ電話をしたんだ。「お茶でもしながら、ツラつきあわせて、話してみるかい」ってね。僕は当時、ジョン・モリスの奥さんだったアニー・ウェルデンに連絡して「この若い奴をきみとジョンのとこへ連れてって紹介してもいいかな？　ていねいにもてなしをしてもらえれば、僕らでこの話、うまく転がしていくことができるかもしれないぜ」。それで僕らは６thアベニューと13丁目の角のふたりのところで会ったんだ。

「ヘクターがきみがブッキングしてるビッグ・ネームたちのことを教えてくれたよ」と僕はマイ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ケルに言った。「それで、もっとこのことについて知りたいんだ。何か僕らで手伝えることがあるかな?」。マイケルは彼のヴィジョンを語りだした。ただし、あまり、多くは言わないで、基本的なことだけをね。これに賛同して加わるかどうかは僕らにまかせるという態度だ。まさにプロモーターや優秀な興行主のやり方だ。こちらは指図を受けるだけの立場ってわけさ。マイケルは口数の多い奴じゃなかったね。微妙な立場や難しい状況に追いこまれると、ひとりで有名になった得意のブップッをやっていたぜ。

彼は25万人を見こんでいたけれど、僕は10万から20万人ぐらいかなって気がしていた。いずれにしても巨大なイベントで、全員がかかわる催しで、やるならばきちんと、間違いなくやらなければいけないってことはあきらかだった。どこでも、誰でもマイケルを見かけて、奴が何をしているか、何が達成されようというのかを知ると、その場でサインしてチームに参加したものさ。

チップは7000ドルのサラリーでチームに加わってくれた。チャーミングで浮ついたところのない男だったし、僕らがやりとげようとしていることをよく理解してくれていた。チップの友人のジョン・モリスは、口先たくみに仕事をゲットしたという感じだった。彼はコンサート・プロモーターのビル・グラハムの片腕としてフィルモアで活躍していたから、たくさんのアーティストとマネージャーを知っていた。僕はアーティストとの折衝役として彼を雇った。彼は何人かのアーティストのブッキングをしてくれ、個々のマネージャーやエージェントから寄せられる必要な機材リストをケアしてくれた。フェスティバルの会期中、彼はアーティストのまとめ役だった。

チップとジョンはテクニカル・ディレクターとして、クリス・ランガートを推薦してくれた。これまで彼と一緒に仕事した誰もが、彼の天才的手腕を絶賛していた。クリスはNYUで舞台美術を教え、

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

フィルモアの配管、電気配線の設計工事をしていた。ウッドストックでも彼は同じ仕事をしてくれるだろう。

クリス・ランガート　いよいよ報酬（ギャラ）の話になった。するとマイケルはとてもストリートワイズの若者らしい一面を見せた。僕たちはたがいに高い額と低い額を提示して、押し問答をしているところだった。それじゃあ、コイントスして、その裏表で決めようと言いだした。でも、彼の提示額と僕の要求額にはあまりに大きな開きがあった。それで僕は言った。「コインを回して決めるのはなしだ。だって僕の生徒には12回に11回の割合で思いどおりの面を出せる奴がいるんだ」。すると彼の顔には、にんまりと大きなチェシャー猫のような笑顔が浮かんだよ。それで僕らは、間の額をとってこの件にピリオドを打った。それ以来、彼とはなんでもストレートに話せる仲になったんだ。

僕はサウンド・システムのデザインを建てるのに、ビル・ハンリーを雇った。そう、それは文字通り、これまで誰も見たことのない規模の聴衆に音を届けるシステム作りは、まさに〝建てる〟という以外のなにものでもなかった。最初にこの仕事はグレイトフル・デッドの巨大なPAシステムを考案した彼らのサウンド・エンジニア（そしてアメリカ有数のアシッド製薬者でもあった）、オーズリー・スタンリーにまかせようと考えていた。

だけど、やはり、ハンリーはこの業界では最高のライブ・サウンドマン。会ってこのプロジェクトの規模を話すと、すごく興味を持った様子。たちどころに「僕ならどうやったらいいか知ってるぜ！」とその仕事、俺がもらうぞ！　といわんばかりの勢いでこう言ってくれた。「それだけのサイズの聴衆を満足させるシステムを、僕が建ててやるよ」。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

フィラデルフィアのコンサート・ホール・パブリケーションは、ステージングやパブリシティを手がける会社で、メルのマイアミ・フェスティバルでも仕事をしたバート・コーエン、マイケル・フォアマンが運営をしていた。時々、アンダーグラウンド新聞にも記事を書いているマイケルはアーティの知り合いだった。宣伝キャンペーンを広げ、フェスティバルのプログラム・ブックを作ってもらおうと、ふたりを起用した。しかし、彼らはそれ以上のことをやりたがった。バートはジョンとジョエルを口説いて、ウエスト57丁目のウッドストック・ベンチャーズのオフィスの内装デザインをする許可をとりつけたのだ。でも、内装工事が始まるとすぐに僕ら4人はそれが無駄な金を使うバカげた仕事であることに気づいた。バートは新しいオフィスをサイケデリック色過剰なカスバのようにしてしまった。ブラックライトで蛍光カラーに光るポスターをべたべた一面に貼ったスペースは前の僕のヘッド・ショップか、エレクトリック・サーカスの店内のようで、オフィスには黄色や薄緑色のカーペットを敷いたいろいろな高さの台が並べられていた。ヒップ・デザインを気取ってみたが、やりすぎで、クールを通り越し、奇妙きてれつでオバカとしか呼べないインテリアになってしまったわけだ。

そのデザインは見るのも嫌だった。だが、僕が別の場所にオフィスが欲しかったわけは他にもあった。フェスティバルの宣伝広告と、チケット、ビジネスの統括本部はアップタウンのオフィスにまかせ、僕は誰からも干渉されずに自分の仕事をする必要があった。もともとジョンとジョエルは生い立ち的にも、この世界は完璧に不慣れ。ショーづくりのテクニカル面の作業、その工程となるとまったく彼らにはチンプンカンプンな領域だった。そんな連中に僕のことこまかな計画をどう説明すればいいのだ？　とてもついてくることはできまい。そもそも最初から僕はそれぞれが役割を分担して作業を進めるべきだと思っていた。僕はショーをプロデュース、アーティはプロモート、彼らは予算に資

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

金集めと切符の処理。いちいち僕の仕事をふたりに説明して彼らが納得するのを待っていては、絶対にフェスティバルはその期日にできるわけがない。こうして僕はヴィレッジの6thアベニューに自分のオフィスを持つことにした。そこですべてをまとめるのだ。

マイケル将軍とお祭りプロレタリアートの戦い

あいていた仕事のポジションに適任者を見つけるのに、スタン・ゴールドスタインはたぐいまれな才能を発揮してくれた。このマンハッタン、ダウンタウンの制作オフィスの代表責任者になったジョイス・ミッチェルはその中でも、欠かすことのできない最高な人間だった。息を飲むようなブルネットの髪の彼女は、これまでビートの詩人たち、テリー・サザーン、ジェームズ・ボールドウィンなどの作家たちと友だちつきあいをしてきた30代の才媛。ロバート・ケネディの選挙キャンペーンのメディア・コーディネイターを務める前はマーヴ・グリフィス、エディ・アーノルドがホストの軍用ラジオ・ショーの番組編成をしていた。マイアミ大学を卒業して、しばらくパリで暮らし、1957年からニューヨークで生活していた。

ジョイス・ミッチェル　マイケルとスタンとはリンカーン・センター近くのハンバーガー・ショップで会ったわ。このカール頭の若い子は「もし、野原に10万人の人間がいて、トイレ用の施設を用意するとなったら、あなたはどうします?」ってわたしに訊いた。そこで「そうね、2台のショベル・カーを用意して1台で溝を掘り、もう1台で溝を埋めるようにするわ」ってわたしが言うと、彼が「それは僕らがアメリカ陸軍から聞いたのよりもいい答えだな。あなたを採用します!」って。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

それでわたしは聞き返したのよ、「なんのために？　野外トイレを作るため？」って。それが始まりだったわ。もっとも自分が何に足を踏み入れようとしているのか、わかるまでは帰るわけにはいかないでしょ。すると、マイケルが言った「僕らは史上最大のロックンロール・パーティを開くんですよ」って。

彼らがわたしに最初にしてほしかった仕事は制作チームのオフィスをセットアップすること。プロダクションのマネージャーたち、チップ・モンクとジョン・モリスはどっちがどのスペースを使うかで議論していた。ジョンは広い部屋を使いたがっていたわ。でも、スペースが必要だったのは、全体のデザイン・ワークをしなければいけないメルとチップのほう。メルはウォールキルの会場の大きな立体模型をこしらえた。わたしはマイケルの部屋のすぐ隣のスペースで仕事を始めた。すべてはプロの仕事らしく、みんな真剣にそれぞれの作業に、すぐに取りかかっていたわ。

マイケルは定期的に全部門の責任者を集めてミーティングを開いていた。全員が他の人間が何をしているか理解できるようにする、彼のマネージの仕方はとてもスマートだった。そうすれば、万が一、交替が必要になってもすぐに代わって作業できるでしょ。マイケルの統括力には感心したものよ。予算額が出るとすったもんだしたもの。いちいち書類でなく、すべては口頭で伝えられるわけ。マイケルは「金を見つけてくれ」って言うだけ。さいわいわたしは大学時代、父親からうるさくせがまれて、会計簿記の授業に出ていたから、予算表を作り、プロダクション・レポートを送ることができた。とにかくすべては猛烈な速さで進んでいたわ。

クリス・ランガートを通じて、NYUで演劇学科の教授をしていたジム・ミッチェルが僕たちの購買エージェントになってくれ、ジョイスにまかせていた仕事を幾分か楽にしてくれた。ジムはいろい

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ろな会社と取引用の口座を開設して道具や機材の調達に当たってくれた。視力が衰え、健康状態も本調子ではなかったにもかかわらず、彼はどんなきつい仕事でも頑張ってくれた。

制作オフィスは褐色砂岩のビルの2つの階に机とファイル棚を並べただけ。いたって質素なプロレタリアートたちのオフィスというおもむき。チップは場所を見つけてから、わずか48時間のうちに、必要な家具をかきあつめ、たりないものは自分の手でこしらえ、オフィスに仕上げていった。僕らはまたフリー・スピリットの美人レセプショニストを見つけたが、みんな仕事で大忙し。誰も彼女をお茶に誘うどころではなかった。そうしたいと思えばオフィス内でのスモークは自由。みんなが楽しくやっていたが、それでだらだらすることはなかった。パーティをしているのではない、限られた時間と予算の中でするべき仕事があったのだ。たとえ、その仕事がスモークの中から現れてきたものであっても……。

むだづかいはできなかった。ジョイスは予算交渉で、ジョンとジョエルのアップタウン・オフィスの会計をつとめる赤毛の巨人、レネ・レヴァイン女史と年中やりあっていた。

ジョン・ロバーツ　レネはわれわれの組織に不可欠な存在になった。ことに他のスタッフにとっては彼女は母親のような存在だった。マイケルとアーティが不可解な領収書を精算しようとすると彼女の巨体はバリケードとなって、彼らの前に立ちふさがった。ジョエルと私にとっては、彼女は忠実で信頼のおける友人で、小切手帳のキーパーで、耳を引き裂くような声で正気を守る正義の人だった。辛辣なユダヤの人間で、彼女は次々と現れる人間の中から即座に物乞いを見つけることができた。弁護士、税理士、エージェント、ロック・スター、あるいは銃を持った警官であろうが、必要とあらば対決を恐れずに彼女は立ち向かっていった。私らを含め、彼女を前にしては、タジタジ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

とするしかなかった。

アーティはアップタウンでジョン、ジョエルたちと働いていたが、ふたりとの関係はすぐに気まずくなっていった。雄弁に自分のアイディアを口にしたが、そこには現実的なものとそうではないものと2種類あった。ジョンたちは金作りに一心で、現実的なプランが能率よく実行されるかどうかが関心事だった。だが、アーティは時々ハイになりすぎて、その話は焦点を失いがち。ふたりは扱いに苦労しはじめていた。一方、アーティは「ジョンとジョエルのふたりはスクエアすぎて、自分がどんなに貢献しているかわかってないんだ」と言いはった。そんな時、僕は気にしないように「彼らが脱線しないで、彼らの仕事をしているなら、あんまりかかわらないでやっていればいいじゃないか」と彼を諭した。それでもアーティが飛び過ぎだ、とか、非理性的な発言をするとか、事務所にいないとか、彼らからの不満の電話の数は日増しに多くなるばかり。「わかった、僕から話してみるよ」、と答えたものの、もめるたびに出かけていくわけにもいかなかった。もし、もう少し、僕の歳がいっていたら、彼らの間に広がるギャップを埋めるうまい方法を見つけることもできたのだろう。だが、一日20時間仕事に没頭していた僕には、そんな問題に答えを見つける余裕もなかった。

僕はほとんどの時間をニューヨークで過ごし、チェルシー・ホテルにいくつかの部屋を借り、メルであれ誰であれ、そこを仮の宿を必要とする仲間の寝場所にした。一方スタンは、僕らがオペレーション・キャンプを設置する前にトラブルの芽を摘んでおくために、4月からウォールキルに移っていた。

スタン・ゴールドスタイン 僕は先行部隊としてウォールキルに行った。あの町に実際に出かけて、

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

住みはじめたのは僕が最初だったんだ。僕は自分と仲間たちを町の人々に知ってもらおうとミドルタウンの町の新聞社、タイムズ・ヘラルド・レコード社に行って、編集長のアル・ロムとスタッフに僕らの計画を説明したんだ。それまでイベントのことは公けに発表されていなかったからね。ウォールキルの町のお目付役、ジャック・シュロッサーにも会いに行って、和気あいあいと話し合うことができた。つづいてミドルタウンの町長にも会ったが、こちらは和気あいあいというわけにはいかなかったけれど、まずまずの話ができた。それから僕は町でビジネスをしている人たちのもとを訪ねはじめた。

4月から5月にかけて、スタンはウォールキルの町を回りはじめた。地元の電気、水道会社の口座を開いたり、地元のビジネスや建設会社を探ったり。視界に入る限りでは、ウォールキルの町は問題なさそうだった。ところが5月の終わりに、地元新聞にこんな見出し記事が現れた――〝ウッドストック反対勢力、結集を始める！〟

スタン・ゴールドスタイン　最初の不満分子たちの登場だった。僕らの意図が何なのか、怪しんでいる連中がいたんだ。こういう状態になった以上、こちらから町会の集まりの席に出て行って、みんなの質問に答えるようにするのがいちばんいいと思ったんだ。

ウォールキルに移ることになったメル・ロレンスもその前にアシスタントを雇った。彼はベンソンハースト出身の旧友で、イースト・ヴィレッジのナイトクラブ、エレクトリック・サーカスでマネージャーをしていたバリー・セクンダに連絡をとった。バリーは彼のガールフレンドだったペニー・ス

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

トーリングスはどうかとメルに勧めた。テキサスに生まれ育ち、サザン・メソジスト大学を卒業した彼女はニューヨークへ出て来たばかりだった。

ペニー・ストーリングス　大学教育を受けたのにそれを活かせる仕事も見つからずあちこちをフラフラしていた頃だった。ニューヨークに出てきたものの何をしたものかって途方に暮れていたところよ。そしたらこの仕事の話が舞いこんできて、ヒッピー・タウンのど真ん中にあるオフィスに通うようになったの。念入りにメイクして、ブロンドのヘアピースをつけて。普通のビジネスマンのようなプレッピーな身なりのメル以外は、みんな長髪でファンキーな服装、女性たちはひとりもお化粧なんかしていなかった。みんなとても素敵だったから、わたしもノーメイクにしてみようと思ったんだけれど、できなかった。オフィスの毎日はとてもごきげんで、驚くようなことばかり。まるでサーカスを見ているみたいに、次々と起こるクレイジーな出来事に笑いっぱなしよ。

スタンはアレン・ギンズバーグみたいで、雄弁でとても賢い人。マイケルはいつもスタンの意見を大事に聞いていたわ。ジョイスはマイケルに連絡してくる人、面会を求めてくる人、すべてを事前にチェックして、彼女の判断で会う必要のある人、なさそうな人を選別していた。余分な用事でマイケルがわずらわされないような防波堤の役目をしていたのね。〝シニア・グループ〟に彼女は属していて、すべてわたしとは正反対。ノーメイクでフワッとした髪のボヘミアン・ルックがよく似合っていて、それが美貌と一緒になって、いっそう彼女の存在感を増していたわ。

チップはね、イギリス人ではないけれど、とてもイギリス紳士っぽい人だったから、その頃のTVのコマーシャルのキャラだった〝マナー・ザ・バトラー〟（礼儀の見本のような執事の意）ってあだ名をつけてわたしは呼んでいた。おもしろくって、ゴージャスで、とてもカッコいいの。彼とジ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ョン・モリスはすごく親切で、わたしにはかなり大甘な態度で接してくれたわ。だって何をしているのか、ほとんどと言っていいほど、わたしはわかっていなかったんだもの（笑）。

6月の最初の週、メルはペニーと少数のスタッフを連れて、ウォールキルの会場の準備に出かけた。前にもろもろの産業用地に使われていたから相当の修復作業が必要だった。敷地には農耕用の機械が置き去りにされていて、僕らはそれをどうしようかと話し合った。メルは人形のような展示物にしてはどうだろう、と素晴らしいアイディアを思いついた。マイアミ・フェスティバルでメルは地元の大学で美術を教えていた彫刻家のビル・ウォードを起用。彼は生徒たちに会場で作品を展示させていた。僕たちはウォールキルの会場でもそんな風にしたかったから、ビルに打診すると乗ってくれ、クルーを率いてニューヨーク入りすることになった。

会場に来た人々がそこを安全で、自然の中にいるような心地よい場所と感じてもらうためにはどうすればいいのだろう。メルと僕はすべてに計画をめぐらせた。たくさんの客がいろんな場所に分散していられるように、ステージ、キャンプ場、トイレ、キッチン、出店など、僕たちは会場をエリア分けして考えることにした。メルは全景の見かけから始め、それぞれのエリアをどうするかデザイン作業にとりかかった。ステージの設営、電気配線、配管は最後にまわした。万が一にもどうしようもない問題にぶつかったら……とそんな予感もあって、僕はそこに動かせないような設備をすべきではないと思ったのだ。メルと僕は計画に明確な自信があったから、僕は彼に仕事をまかせた。他の部門のチーフたちにも同じようにした。僕の望みを彼らはよく理解してくれていたから、ああしろ、こうしろと彼らにいちいち指図はしないようにした。こうしてメルと彼のチームはウォールキルに残り、僕はシティとの間を行き来し、チップとジョン・モリス、ジョイスはヴィレッジのオフィスで、プロダ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

クションに全力をあげていった。

メル・ロレンス　スタンとペニー、買い付け係のジム・ミッチェルと、僕らは会場の大きな赤い納屋にオフィスをかまえ、調達と補給問題を解決していった。ここでフェスティバルが開かれると聞きつけた人たちが「俺は大工だ」とか「庭師をやっている」とか仕事探しに現れるようになった。そこで僕は「よし、やってくれ！」とはじから雇っていったよ。

マイアミからの一行が6月の初めに到着すると、熱心にアイディアを練りはじめた。ミルズの敷地には触れるとたちまちかぶれるポイゾン・アイビーやオークがおいしげっていた。除草剤をまくのにすごく時間がかかった。僕たちは全員を、昔、子供の頃にメルが泊まりに来ていたというキャッツキルのリゾートに移した。

ペニー・ストーリングス　ブルヴィルにあったユダヤ系ファミリーが避暑に来るローゼンバーグというバンガロー村で寝泊まりを始めた。そこは50年代で時間が止まっているみたいな所で、一日3回の食事がきちんと出て、食事の間も座って、ゆっくり過ごすような場所。出てくる食事の量といったら、もうそれはいっぱい。調理しすぎの肉やポテト、でもデザートのアップル・パイは、この世のものとは思えないぐらい美味しかった。他の泊まり客と一緒に食べるんだけど、それがなんだかおかしいったらなかったわ。フロリダからビル・ウォードが奥さんのジーンとやってきた。ジーンは溶接ができるし、わたしに最初に〝マッチョ〟という言葉を教えてくれたのも彼女。フィラデルフィアでたくさんの男の兄弟の中で育ったから、彼女はわたしがそれまでに会ったどんな女性も

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

できないようなことがいっぱいできたわ。ビルと一緒に〝大地からはえてきたような〟オーガニック・アートを作るからって、古い農耕道具を探してまわっていた。

ニューヨークに戻ると、ミーティングの予定がめじろおし。僕にはアシスタントが必要になった。早速、募集するとスタンの友だちのミュージシャンを通じて、ティシア・バーナス（現姓アグリ）がやってきた。年齢は僕と同じぐらい。ここ数年間、地球を旅してまわっていた、とても魅力的な女性だった。

ティシア・バーナス・アグリ　仕事の話を聞いた瞬間、何かがわたしの体に乗り移ったような感じがした。そしてわたしは叫んでいた、「それはわたしの仕事に違いないわ。インタビューの約束をとって！」って。72ヵ国をまわり、中近東の国々をくまなく旅して、ニューヨークに戻ってきたところだった。世界を見てまわりたいって気持ちがめざめたのは1965年。まずイタリアへ行って暮らした後、アフガニスタン、パキスタン、インド、北アフリカ、ヨーロッパ中を、寝袋ひとつ持って、一日1ドルの旅をしてまわったの。あの頃は楽に、自由にそういう旅ができた、とってもいい時代だったわ。マイケルとの面接に行ったら、わたしが何をしてきたかって訊くから、サウジ・アラビアの砂漠を車で走っていたら、突然、宝石飾りの剣を持ったアラブ人の一団に遭遇した話をしたの。襲われるのかと思ったらなんと豪華なゲスト・パレスに連れていってくれた。そんな話をたくさんしたら、それが気に入ってくれたのか、マイケルはわたしを採用してくれた。

ジョイス・ミッチェル　わたしもティシアの面接に同席していた。そして彼女がサハラの物語をし

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ている時に思った。"彼女ならマイケルに時間を守らせてくれるでしょう"って。彼女は素晴らしい人だった。

ペニー・ストーリングス　ティシアは赤い髪を腰までのばしていたわ。背が高くて痩せていて、足はすらりと長く、子供のような短いスカートをはいていた。顔も体もグッド・ルッキン！　グラマーな最高のヒッピー・セクレタリーだったわ。

ティシア・バーナス・アグリ　みんなすごくフレンドリーで、前からの知り合いだったように接してくれた。マイケルのスタッフのひとり、ピーター・グッドリッチがおかしなホット・ドッグの話をしたのをよくおぼえているわ。たくさんのホット・ドッグを並べて、アメリカを横断させるって話だった。

ティシアの初仕事の日、僕はおそらくもっとも重要な職務、警備主任のポストに応募してきた候補者たちの面接をしていた。彼女は僕がフロリダで保安官をしていた男と面会しているところに同席していた。そして男が鉄条網と番犬で警備すべきだ、と主張した時、僕らは視線を交わし、無言で"ダメ"サインを出しあった。僕らがこんな風にシンクロしあえるのは素敵だった。彼が去った後、僕はティシアに「明日、ワシントンからウエス・ポメロイというセキュリティの人間が来ることになっているんだ。空港まで迎えに行ってくれないか」と頼んだ。ティシアはどんな相手にも、会って恐がらずに話ができる人間だ、と僕にはわかった。僕に必要なのはそういう能力のある人間だった。というのも、僕はその頃、これまで僕が経験してきた世界をはるかに超えた世界の人間を相手にし

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

なければならなかったからだ。政治家、ロック・スター、清掃処理員、どんな人間に会っても自分を失わず、会話できる能力が求められた。僕の読みが当たっているかどうか、とりあえず、このウエスという男に会いに行ってもらい、そのお手並みを拝見することにしよう、と僕は考えた。そして彼女はその仕事を立派にやってのけ、僕は彼女が僕の強力な援軍となってくれることを確信した。

愛と平和のポリスマン、ウエス・ポメロイ登場

ウエス・ポメロイは警察署長協会の推薦だった。紹介をしてくれた人間によれば、〝ただ法の執行をするだけの警察官とは大違い〟の男ということだった。これまで警察署長には一度もならなかったが、この世界では有名な人物。ジョンソン政権下ではＬＥＡＡ（法執行援助機関）の保安委員長として、司法長官のラムゼイ・クラークへの報告官をつとめ、ニクソン政権が誕生してジョン・ミッチェルが指名されても、ウエスはこのポストに留まることを要請された。しかし、ミッチェルとニクソン政権は、市民をむやみに逮捕せず、平和に接するよう警官や管理官を指導するＬＥＡＡのこれまでの役目を一変させ、全国の警察支所にショットガン、催涙ガス、警棒などの武器を支給する仕事を負わせた。ウエスは68年のシカゴ民主党大会の時、司法省の代表としてデイリー市長に暴動を回避するように説得したが、その努力は実らなかった。彼はニクソン政権の職を辞し、セキュリティ・コンサルタント事務所を始めた。しかし、こうした彼の経歴があったから、州や地方警察との交渉に際して、僕らに信頼を与える助けになってくれたのだろう。

ティシア・バーナス・アグリ　マイケルはウエスの面接をし、すぐにふたりはたがいを相照らす仲

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

になっていたわ。ウエスは警察上がりの人間には珍しい、愛と平和を信条にしていて、それに背くような行動は一切したくないという人間だったからよ。わたしたちはこの国の困難な時代を生き、ウエスはヒッピーたちの警察に対する考え方を変えようと努力していたわ。

「ウッドストックにゲートを壊すような意図でやってくる人間がいるとしたら、そういう人間をどう扱いますか?」、と僕はウエスに質問した。混乱が起こった時、旧来の力による法執行者の解決法は、悲しみと悪いバイブレーションを残すだけだと僕は考えていた（その後の夏、ニューポート、アトランタ、デンバーで行われたポップ・フェスティバルで僕のセオリーは、不幸にも的中した）。僕がインタビューした他の人たちは、「鉄条網を二重に張りめぐらし、その間で犬たちを放つ」とか、「50フィートごとに監視ポストを置く」とか、強硬策を主張した。だが、彼らと違って、ウエスは「きみならどうするね?」と僕の意見を訊いてくれた。いいサインだった。

僕は「ウッドストックでは誰にでもオープンな姿勢でありたい」と彼に言った。「もしチケットを買えない人間が来ても、フリーステージがあり、またメインステージの演奏が聴けるようなサウンド・システムを設置する予定だ」と言った。無料のキャンプ場、無料のキッチンも作る。コンサートが行われるメイン・エリアはフェンスとゲートを置くが、適当な価格設定をすれば、ほとんどの人間がゲートを壊すような行動はせず、ちゃんとチケットを買ってくれるだろうと、僕の考えを示した。

ウエスは「これはスマートなイベントというだけでなく、やるべき価値のあるイベントだ」、と言ってくれた。僕らはこれだけ大規模な聴衆を監視したり、コントロールするのは最初からできないことだとわかっていた。それならば、やるべきことは正しいムードを用意し、正しい空気をつくること、そうすれば彼らが自然にやってくれるはず。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

僕らはドラッグ問題についても話し合った。「もし、客たちがマリファナを吸っていたら」、ウエスは言った、「ほうっておくんだ。だって私はこれまでポットで勲章を持つ人間を見たことがないからね」。もし、ハード・ドラッグを売っている人間がいたら、――僕らはルールを決めた――ディーラーたちの一味を群衆から絶ちきり、しかるべき権威の手に引き渡そう、と。フェスティバルの会場内での警備は僕たちの手で行うべきだということも決定した。ウエスは地方警察から要員をリクルートしようと提案した。彼が悟りとはほど遠い世界に住んでいながら、悟りを持った人間であることは間違いなかった。ステロタイプな思想や、レトリックとは無縁の人間だった。ウエスは自分の仕事を哲学と人間性の理解を持ってやってきたのだ。

マイアミでオマワリたちにいじめぬかれた後で、法の執行官の仕事は人々をわずらわせることではなく、人々を助けることだと考えるこんな人物と会えて、僕は心底嬉しかった。ウエスは人を裁くことには関心がなく、それよりも未来のために人を助けることのほうにもっと関心があった。それは僕にとってもキーとなる大事な考えだった。彼は僕らの政治哲学も理解してくれた。僕はついに探していた人間を見つけたと確信したのだった。

ウエス・ポメロイ　わたしは見たもののすべてが気に入ったよ。彼らはみな、興味深く、理想を持った連中だった。壮大なアイディアを持っていて、これっぽっちも恐れず、とてもスマートだったんだ。そしてなにかをなしとげられると信じていて、わたしまで、〝そうだ、彼らならできるかもしれない〟という気分になったよ。

あんな連中とはめったに会えるもんじゃない。彼らにはたくさん金があり、それを積極的につぎこんでいた。中でもマイケルはみんなに尊敬されていたね。わたしは自分の役目を心地よくやれた

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

し、彼らもわたしがいることをそう感じていてくれた。なにしろ胸がワクワクする大きなプロジェクトだったよ。

ウエスはドン・ガスングを雇うといい、と僕らに薦めてくれた。エプシコパル教会の牧師で、かつてはLEAAでウエスの同僚だった。ドンはコミュニティ対策係として、スタンと組んでウォールキルの住民の間に広がる敵意を鎮めに動きだした。とてもフレンドリーで自由気ままなタイプの人間だった。歳は30代でカラーの高い牧師服を半分冗談で着ていたが、とても優雅でよく似合っていた。6月の初めにスタンとドンはウォールキルの町民集会に出席して、質問に答え、フェスティバルについての懸念をはらそうとした（結局、これが2週間後、僕が出席したタウンホールでの集会につながった）。

スタン・ゴールドスタイン　雪だるまのように急速に反対派はふくれあがり、僕はこっぴどくブチのめされた。僕らは許可をとったつもりでいたが、そんな許可は与えていないというのだ。ルールなど必要ならいくらでも都合次第で変更できる、という地方ならではの暗黙の了解だった。また、最初にジョンとジョエルは、どんなやかましい音楽もない、おそらく集まるのは5万人以下と誤った情報を彼らに与えていたことがわかった。静かなカントリー・ミュージックとフォーク・ミュージックのフェスティバルでどんな騒音や混乱もないと。キャンプについても一言も彼らからは聞いていない、と……トラブルが待ち受けているのはあきらかだった。僕はウッドストック・ベンチャーズへ報告を送った、〝難問が持ち上がっている。僕らは許可を取っていない。僕らは準備を進めることはできない。これは厄介なことになるだろう。弁護士がいないとはどういう意味だ？〟

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ふくれあがる妨害に対処するために、僕たちは地方弁護士、サム・イーガーを代理人として雇った。僕らにはハワード・ミルズの署名入り契約書を持っていたので、ウォールキル土地規制委員会は4月にジョンとジョエルに許可証を出した。法律的問題はクリアーされたのだ。しかし、ウォールキルのような町では、必要なら僕らの会場保有権をひっくり返すなど、いともたやすいことだったのだ。

一方、ドン・ガヌングは、住みはじめた場所でトラブルにみまわれた。彼はバーに見せかけた地元の若者たちのたまり場の2階に部屋を借りたところだった。その部屋で彼はミドルタウンの町長の娘と会っていたのだ。麻薬捜査でバーを急襲した警察が、町長の娘といるドンを見つけた。このことでウォールキル住民と僕らの関係はさらにむずかしいものになった。すべては悪くなるばかり。マイアミでの僕の経験とイヤになるほど似ていた。

現地のフィールド・オフィスにはヒッピーを嫌う住民たちのいやがらせ電話や「殺すぞ！」と脅迫電話が鳴りやまない。そしてある晩、オフィスのある納屋の壁に銃弾が撃ちこまれた。ミルズ夫妻のもとには、フェスティバルに手を貸すなら、家を焼き払うと脅迫電話がかかり、彼らは恐怖に縮みあがった。〝ウォールキルにフォーク・フェスティバル阻止の動き〟という見出しでミドルタウンの新聞は、工事の進展を止めるために〝関心ある市民委員会（CCC）〟が結成されたことを報じていた。ウォールキルの町の代理人は僕らに、フェスティバルのあらゆる事項に詳細な説明を求める。内容証明つきの質問状を送ってきた。セキュリティ、給水、排水設備、駐車、交通対策などのすべてを。そのほとんどがまだ何ひとつ具体策は決まってはいないのだ。

マイアミでの体験から、保守的人種と町の役人たちにどう相手すればいいのか、僕はすでに知っていた。ウォールキルのような町に来るには、それはいい訓練になった。家族と50年代にキャッツキル

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

で過ごし、僕は僕らが何にぶち当たったのかわかっていた。だから、僕たちはこの偏見に打ち勝つことができると僕は考えた。カウンターカルチャーの人間としても。おたがい人間どうし、どこかに通じ合える場所があるはず、と考えていたのだ。こうして、6月、ウォールキルの公聴会に制作のコア・チームと出席した時も、顔を突き合わせ、ていねいに話をすれば、人々は僕らの考え方をわかってくれるだろうと僕は信じていた。僕は人とコミュニケートするのに苦労したことはない。どんな厄介な問題でも、少しずつわかってもらえるだろうと、信じていたのだ。それにただでさえ、僕らのチームの全員が雄弁なのだから。

あの6月のウォールキルの公聴会の後、僕らは高揚感を感じながら、まだ不安を消せないでいた。僕たちは彼らを説得できただろうと思っていた。だが、ウォールキルにとどまるためには、まだこの先も長い道のりが続くようだった……。

＊グレイトフル・デッドのサウンドシステム　これは著者の勘違い。デッドの"ウォール・オブ・サウンド"はウッドストックの後年で、ダン・ヒーリーの考案によるもの。

＊テリー・サザーン（1926－1995）アメリカの作家、脚本家、エッセイスト。50年代にヴィレッジでビート作家としてスタートし、日本で発禁図書となった小説『キャンディ』を発表した後、スタンリー・キューブリック監督の映画『博士の異常な愛情』や、『ラヴド・ワン』、『イージー・ライダー』など話題作の脚本を手がける。初期ローリング・ストーンズのメンバーとの交流でも有名。

＊ジェームズ・ボールドウィン（1924－1987）アメリカの小説家、劇作家。1953年の『山にのぼりて告げよ』で世界的に注目された黒人作家で、同性愛をテーマにした『ジョヴァンニの部屋』、公民権運動家としての世界を書いた随筆『次は火だ』などで、優れた後輩作家たちを生み出した。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

© HENRY DILTZ

アーティ・コーンフェルド

© HENRY DILTZ

ウッドストック制作オフィスの顔

COURTESY OF JENNIFER ROBERTS

ジョン・ロバーツ

© PENNY STALLINGS

ジョエル・ローゼンマン

ウォールキルでの
会場の納屋に作ら
れたオフィス

© ALBERT/TIMES-HERALD RECORD

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

音響エンジニア、
ビル・ハンリーと
アーティスト接待役
ジョン・モリス

© HENRY DILTZ

© ROSA ELLIOT

アーティストのトム・
エドムンストン（帽子姿）と
メル・ロレンス

ピーター・グッドリッチ

© HENRY DILTZ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

© ROMA ELLIOT

メル・ロレンスとアート・クルーグライル

© ROMA ELLIOT

カメラマンのマイケル・ヌーヴィッツと
性技術指導のドン・ガスング

ウエス・ポメロイ助手の
リー・マックラー・ブルマー

© ROMA ELLIOT

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

© HENRY DILTZ

メルのアシスタント、
ハニー・ストーリングス

[illegible]プランを統括する[illegible]とチップ・モンク

© HENRY DILTZ

© HENRY DILTZ

ウォーナー社パブリシストのサミー・シェネアーとジョン・モリスが招待したネイティブ・アメリカン・アーティストのビリー・ソーザ

[illegible]のアシスタント、
[illegible]ティシア・バーナス

© HENRY DILTZ

第5章

New York City

ニューヨーク・シティ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「おまえが手がけている出演者をかたっぱしから出せなくしてやる！　この業界からおまえなんか締め出してやる！」

テーブルを挟んで僕の向かい側にはこの業界で一番パワフルなプロモーター、ビル・グラハムがいて、今しも噛みつかんばかりという剣幕で、大声でまくしたてているところだ。そう、そもそもこの業界のルールを作り上げたのは彼なのだ。

「俺が嫌いってか？　おまえとの契約なんか反古にしてやる！」

彼はシャベルを握る巨人のように見える。彼が食べているのは、酢漬けのニシンだけ。僕の視線に気づいて、やや冷静さを取り戻す彼……。

この数日前、ビルはジョン・モリスに電話をかけ、脅しの文句を並べた。フィルモアでグラハムの下の仕事をしているジョンは縮み上がり、弱りきった表情で、僕のオフィスに飛びこんできた。

「やばいぞ！　俺たちは終わりだ！　ビルがプラグを引っこ抜くと言っている！」

「どのビルの話だ？　何のプラグだ？」僕はジョンを諭した。「落ち着けよ」。

「きみはわかってないんだ！　相手はグラハムなんだ。そのパワーで俺たちを締め出そうとしているんだ！」

フェスティバルの僕らの出演者の計画がグラハムの手で御破算にされてしまうと、ジョンは信じきっているようだ。「彼にかけ直して、会えるようにアポを取ってくれ。僕が始末をつける。ジョン、僕を信じてもう心配なんかするなよ」。

6月の初め、ブッキングはバッチリ、契約のサインも前払いも完了し、フェスティバルは国中の噂になっている。初めての国家的イベントを僕らはやろうとしている。確かにグラハムはこの国で一番の影響力を持つ重要なロック・プロモーターかもしれないが、彼は神様ってわけではない――僕は自

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

分に言い聞かせた。フィルモアへの出演契約の際、彼がアーティストの半径50マイル内での他のベニューへの出演を禁じていることは知っている。でも僕らのフェスティバルの開催地はその倍もシティから離れたところなのだ。

ビルの世界では、僕は大変な厄介者に思われている。僕は彼を僕の世界へ引きこむ必要があった。そこでジョンと僕はセカンド・アベニューのフィルモアの隣りにあるユダヤ料理の店ラトナーズで彼と会った。

「これは俺のビジネスだ!」、開口一番、汚れたテーブルを叩きながら彼は怒鳴りだす。

「どこまでやる気なんだ、若いの。俺をやっつけるつもりかい?」

僕は彼に聞こえぬように、ホッと息をつく。ここには確かに問題がある。不合理なばかりかエゴに絡む問題だ、これは。だから、と僕は思う。これは僕が対処できる問題なのだ、と。僕はベンソンハーストでの少年時代でのある出来事を思い出した。校庭のグラウンドを暴力的に牛耳っていた連中が僕のいとこを虐(いじ)めていた。彼らはちょっと嫌な奴ら。でも、そんな時僕はいつも彼を救いだすことができた。もちろん僕自身も殴られずに、だ。恐れを見せないで相手に一目置かせることが肝心なのだ。

「まず、第一に僕らはこれをやっています。誰も止めることはできないでしょう、例えあなたでも」。何がこんな事態を起こしているのかを見抜いて、そのダイナミックスを変えてしまうのだ。まっすぐその眼を見ながら僕はビルに言った。

「僕たちの何が問題なんでしょう? 僕たちはあなたと競いあうつもりなんかありません。100マイルも離れた所でやるんですよ」。

「貴様は俺の春のショーの出演者のほとんど全員をブッキングしてるじゃないか」。彼は言う。「出演するスターたちをウッドストックでいっぺんに見られるのなら、客たちはフィルモアの個々のショ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ーのチケットを買わずに待つだろうぜ」。説明する彼の口調は前よりソフトになっていた。
その瞬間、僕の頭に解決の名案が浮かんだ。
「OK、わかったよ。僕たちはあなたのボックス・オフィスの売上げを落とそうなんてこれっぽっちも思っちゃいません。この問題を両方にとって上手く解決する方法がひとつあります。僕はフェスティバルが開かれる週まで出演者を追加するつもりでいます。だから……」、僕はまっすぐ彼に向かって言う。「これから8月いっぱいのそちらのスケジュールを僕の方に送ってください。そうしてもらえれば、僕は彼らがあっちで出演する後まで、フィルモアに出演するアーティスト名は一切アナウンスしませんよ」。
しばしの沈黙があった。彼がこの新しい提案でギアチェンジをしているのが見て取れた。僕らのやっていることは気に入らないのだろうが、本当のところ、彼には本気でそんな戦いをするつもりはなかったのだ。「OK、それならやれる！」。
グラハムは自分のショーのほとんどで司会をしている。出演者の紹介をするのが彼は好きなのだ。そこで僕は彼をフェスに招待して、一日MCをしてもらおうと思いついた。僕の申し出を聞くと、彼は少し照れたような、嬉しそうな表情を見せたが、辞退した。
「会場には行かせてもらうが、司会はお断りだ」。彼は言う。
「きみがプロデューサー。こいつはきみのショーなんだ。同じ日にふたりの神が登場するわけにはいくまい」。
ニューヨークでの事態の展開は、5月の第3週頃にはとんでもないものになっていた。オフィスはハチの巣をつついたように騒がしく、すべてが膨張しだしていた。もっと大勢のスタッフが必要にな

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

り、僕はマイアミ時代の旧友、ピーター・グッドリッチを引き入れた。ストリートワイズで、都会人で、話し上手な彼はココナッツ・グローヴではよく知られた顔だった。すべてのことを少しずつ、アートについては多くを知っているタイプ。ピーターは41歳。コロンビア前史のアートとコロンビア・ゴールドには精通していた。彼とジョイス・ミッチェルが50年代マイアミで付き合いがあったことを僕は後になって知った。とにかくピーターはマイアミからＬＡまでのすべてのクール人間を知っているみたいだった。

僕には彼のような自信を持っている人間、完璧な信頼のおける人間が必要だった。彼には出店部門を担当してもらうことにした。手作り品からコカ・コーラまでを売店で扱うのだ。森の中で服からキャンドル、陶磁器、パイプに絵画や彫刻、すべてのカウンターカルチャー的なアイテムを扱う業者の人々に出店してもらい、バザーをやる予定だった。「アースクラフト」、「魔法使いの弟子」、「毛皮の風船」、「ザナドゥ・ウェア」などに声をかけ、こちらが用意するブースを１軒３００ドルで借りてもらうのだ。早速「ディファレント・ドラマー」や「リンボー」などのヒップなブティックが応募してきた。

また会場のあちこちに飲食スタンドを作る計画だった。ただピーターをいちばん悩ませたのは食料を扱う会社を一社選ぶことだった。計画を思いついた時は食料を扱う業者などたやすく見つかり、僕らにも大きな収益をもたらしてくれるのだとタカを括っていた。ところがいざ交渉を始めてみると、野球場やアリーナ会場を専門にしているレストラン・アソシエイツ社のような大手食品納入会社は、ウッドストックでのオペレーションを断ってきた。誰もこんな大規模なイベントにサービス参加した経験がなかった。彼らは会場のキッチンに大量の食料を準備する資金の投入、人員確保、そして、ニューヨークの北までの運搬にかかるコストを心配していたのだ。万が一僕らが予想した数の人間が集

められなかったらどうなるのだ？　僕はあのコニー・アイランドを仕切るネイサンズ社をピーターが説得してくれることを期待していた。

メル・ロレンス　クルーの中でいちばん年上だったから、ピーターは到底ひとりじゃできないことをすべて自分だけでやっていた。みんな彼をリスペクトしていたよ。彼はマイケルと親しくて僕も彼と仲良くなった。彼はネイサンズのような大きなケータリングをしている会社と何度も会っていたよ。ほら、後でウインドウズ・オン・ザ・ワールド社を興して、グレイハウンドを買い取った男さ、うまくいかなかったけどね。

もう一人オフィスに欠かせない存在になったのはキンバリー・ブライト。毎週１００ドルで花をオフィスのあちこちに飾り、お香を焚いてくれた。彼女はスペースに落ち着いた空気を作ってくれ、時々午後の時間にはヨガ教室を開いて指導してくれた。ウッドストックのプログラムに彼女の名はスピリチュアル・アドバイザーとして載っている。

ジョイス・ミッチェル　毎日キンバリーがオフィス一番乗りで、すべてが清潔できちんとしているように見てくれた。わたしは〝インセンス・ガール〟と呼んでいた。とても清らかな魂を持った娘で、彼女が数時間居るだけで、周りのみんなが笑顔になっていたものよ。

史上最大のステージ案を決定せよ！

CamScannerでスキャン

僕のフェスティバルのヴィジョンは、フィジカルでエモーショナル、スピリチュアルでプラクティカル、アーティスティックでコマーシャルといった多くの要素を持つ、立体的で複合的なものに膨らんでいった。それぞれがどう絡むのかと理解に苦しむ人間もいたが、核となるグループ以外のスタッフは、大きな見取り図を理解してなくてもかまうことではない。けれどジョンとジョエルにはお金のこと以上に、このフェスティバルの意義がなんであるかわかって欲しかった。アーティは完璧にそれを理解していたが、どうやって実現するのかはわかっていなかった。そこで僕は、この冒険を始めようと思いついた時にアーティと僕が膨らませていた、いろいろなアイディアに忠実であろうと努めた。プロダクションとデザインが進行していればいいのだ。その意味ではメルとチップ、ジョン、クリス、ジョイスらのシニア・スタッフは、大きな見取り図をみんな理解してくれていたから、最後まで一緒にやれる頼もしい仲間たち、と僕は全幅の信頼を置いていた。

ジョン・モリス　ヴィジョンとアイディアを持ち、みんなのファンタジーを駆り立てていたのはマイケルさ。僕たちが達成しようとしていたことが誰かの夢、誰かの思いつきから始まっていたとすれば、それはマイケルの夢から始まったんだ。マイケルのエネルギーが実現させたってことは間違いないぜ！

プロダクション・チームのメンバーのひとりひとりの個性や持ち味がわかるようになって、僕はひそかに感謝していた。ジョンの豊富なビジネス知識と自信に満ちた態度、バランスのとれた行動に。ジョイスのマネージメントのバックグラウンドと、どんな人間にも通用する魅力に。チップとクリスには彼らの経験の深さとデザインのクオリティの高さに。彼らがプロジェクトの大きさに少しも怯(ひる)ま

ザブランを頼り、必要な才能ある人材をみな推薦してくれたことは、とってもありがたいことだった。

僕はチップの最初の契約金に、ステージ・マネージャー、デザイナー、ステージ作りの親方を見つけてくれたお礼に6000ドルを追加した。チップは、カーネギー工科大学の卒業でフィルモアやフィラデルフィア・フォーク・フェスティバルで仕事をしたステージ・デザイナーのスティーヴ・コーエンを採用した。クリスとチップとスティーヴはプロダクション・チームの中核メンバーになり、この3人と、ジョン・モリスとバート・コーエンがステージ・デザインに関する強い発言力を持つようになったので、僕はひとりひとりにプレゼンしてもらって、そこから決定案を選ぶコンペをすることにした。

僕にはいくつか要求があった。ステージがゴチャゴチャしていたり、あるいは突飛なものにしないこと。あくまでもステージは見慣れたものでごく自然体な感じにしておきたかった。さらに実用的でみんなに自信を与えられるような要素が欲しかった。マイアミ・ポップで考えたように、ステージで誰かが演奏している間に、次のバンドセッティングをすませ、演奏の転換に時間をかけない工夫だ。こうして12あまりのデザイン案が提出された。ユーモラスなもの、かなり風変わりなもの、いろいろなデザインがあった。そのひとつはまるでバースデー・ケーキ。段々が螺旋状に天に向かって伸びていた。こうした奇をてらったデザインは、僕の意向には合わない。何かもっと素朴で飾り気のないデザインはないのか？　僕が求めているのは大地から自然に生まれてきたようなデザインだ。あのサウンドアウトのステージを大きくしたような……。最終的にバート・コーエン、クリス・ランガート（ジョン・モリス推薦）とスティーヴ・コーエン（チップの選出）の3作品に絞りこまれた。メルのマイアミ・フェスの舞台デザインを手がけたバートは、そこで使ったような大きな回転式の台をトロ

CamScannerでスキャン

リーのようなシステムでつなぎ、セッティングが入れ替えできるアイディアを、今度のウッドストック・ステージ案にも応用していた。屋根は大きな傘型をして、ステージのプラットホームからのばした高いシャフトにつなげようというデザイン。トップも回転し、吊るされた24枚の旗がはためく。でもちょっとオシャレすぎて、周囲の田園風景には似合わない。

クリスのステージ案は、円形の舞台を両脇に立てた80フィートの高さの電柱からクロスバーで支える仕組み。クロスバーはピースサインの形をしている。天蓋をケーブルで引っ張ってポールにつなぎ、その下に照明が並ぶ。彼が〝現代風のショック狙い〟と称するそのデザインは、日本のどこかのアイス・スケートリンクを描いた絵からヒントを得たものらしい。とても興味深いデザインだったが、これでは素早いバンドのセット転換ができない。僕はパスしたが、クリスは別の仕事にこの設計案を活かすことができた。演奏していない時のアーティストたちのたまり場になるパビリオンのデザインに採用されたのだ。34本の柱でつくられるオープンで風通しがよくて彫刻のような構造の建築物。大きな梁を渡らせ、その上に白い一枚の巨大なテント地の〝屋根〟がかぶさる——この粗削りで、とても美しいパビリオンがウッドストック・ミュージシャンの〝楽屋〟になった。

チップはスティーヴの舞台デザイン案を支持し、いくつか注文を付け加えて、僕も同意した。下をしっかりコンクリートのブロックで囲った、地面からのびる高さ70フィートの柱。柱の上にはマッシュルームの形の巨大ルーフ。そこには250以上の照明が取り付けられる。そしてセットの速やかな転換を可能にする3つの半円形の巨大なターン・テーブルが設置されるステージ。当時としては最大のステージは建設におよそ2万ドルかかることがわかった。

出演バンド、ブッキングの困難

春の終わりに、もう一人のエネルギッシュで聡明な女性がスタッフ・チームに加わった。リー・マックラー（現ブルマー）はセキュリティとコミュニケーション対応の担当としてウエスの右腕になった。ブルックリンのシープスヘッド・ベイに生まれ、僕と同じユダヤ系家族の多い環境に育ったが、彼女はアフリカで暮らしたこともあるコスモポリタンだった。アメリカに戻るとディック・クラークのもとでザ・モンキーズのツアーを手がけ、その前座として当時無名だったジミ・ヘンドリックスを起用した。彼女はアルバート・グロスマンのオフィスで働いたこともあり、続いてビル・グラハムのスタッフとなり、そこで彼女を推薦したジョン・モリスと会ったのだった。

リー・マックラー・ブルマー　ビル・グラハムのテイストは素晴らしかったわ。彼のスキルは誰も真似できないほどずば抜けていて、フィルモア・イーストには最高のメンバーが集まっていた。彼はよくクルーに、「これは単なる金儲けの仕事ではないんだ！」、とハッパをかけていたわ。確かにあそこで働いていた人々の態度は、仕事以上の何か、みんな自分たちひとりひとり以上の大きなもののために奉仕しているという感じ。そしてその考え方が、ウッドストックのために一緒に働いている人たちにも引き継がれていったのよ。

6月初めまでに、僕はできるだけのブッキングをして、最後の仕上げに取りかかっていた。まずフェスティバル・ウィークエンドの始まる金曜日はフォークの日。そして土曜日は主に西海岸からのア

CamScannerでスキャン

ーティストをメインにしたプログラム。日曜日は世界的な大物ロック・バンドの登場。8月15日金曜日のブッキングはほぼ完了。それもリーズナブルな値段で決まっていった。ティム・ハーディンは友人でもあったから2000ドル、イギリス出身のサイケデリック・フォーク・バンドのインクレダブル・ストリング・バンドは4500ドル、僕のヘッド・ショップのサウンドトラックだったラヴィ・シャンカールも4500ドル。「アリスのレストラン」物語が、60年代の若者を代表するストーリーになったアーロー・ガスリーは5000ドル、そして社会正義の炎のキーパー、ジョーン・バエズは1万ドル。どうしても出てもらいたかったドノヴァンとジョニー・キャッシュにも出演を依頼したが辞退されてしまった。ブリリアントなソングライター、ローラ・ニーロも候補に上がったが、ステージで上がり性の彼女は、僕らのオファーを受け入れてくれなかった。

土曜日の出演ラインアップにサイモン&ガーファンクルが加われば最高だと思っていたが、この年の初めにツアーを終えたばかりのふたりは少しお互いにも疲れていたようで、夏は演奏したくないという返事。僕らのリストのトップにはドアーズの名もあったが、ジム・モリソンは3月にマイアミで逮捕されて以来、極度のパラノイア状態。自分のエージェントに「ウッドストックに出たら、ステージで暗殺されるかもしれない。やりたくないよ！」と語っていたそうだ。

ベイ・エリアのご機嫌なバンドがラインアップした土曜日にはまだいくつかバンドが入り込める余地があった。クリーデンス・クリアウォーター・リバイバルや、キャンド・ヒート、ジェファーソン・エアプレインに加えてビル・グラハムはグレイトフル・デッド（7500ドル）の出演を確約してくれた。僕はアルバート・グロスマンに掛けあいジャニス・ジョプリン（1万5000ドル）をブ

ァキングしたが、グロスマンはさらにザ・バンド（1万5000ドル）もつけてくれた。"共存国優遇"のポリシーを好む、辣腕プロモーター、グロスマンならではのやり方だった。

でもザ・バンドはプロジェクトがスタートした時からフェスティバルに参加してもらおう、と決めていたグループ。そのアルバム『ミュージック・フロム・ビッグ・ピンク』は音楽の地平線を広げた、僕には衝撃の一枚だったのだ。メンバーのリック・ダンコとリチャード・マニュエルとも個人的に知り合い、もし彼らと一緒にボブ・ディランが現れてくれればと、僕は夢見ていた。ディランは1966年以来ツアーをしていなかった。だから出演を無理強いするのは嫌だったのだ。"一度、世代のスポークスマン"と呼ばれた彼への、カウンターカルチャー世界からの要求はあまりに多かった。"そんな重荷を負わせたくない！"——僕はあえて彼には出演のオファーを出さなかったのだ。

もちろん、できることならビートルズにも出演してほしかった。でもそうなれば彼らは他の出演者を圧倒してしまうだろう。それにどっちみち彼らはもうツアーをやめていたし、解散の寸前だった。ジョン・レノンから僕はたくさん影響を受けていた。当時のビートルズの新しいレーベル、アップル社にいたクリス・オデルを通して、ジョンへの連絡を取ってもらった。ジョンの出演の実現にクリスは頑張ってくれたが、5月にアメリカ移民局は前年のドラッグ容疑を理由にアメリカへの入国を拒否。ニクソン政権は、反戦平和を掲げ、ヨーコとのベッド・イン他のプロテスト活動を続ける厄介者は、国内にいてはほしくなかったのだ。

僕はローリング・ストーンズの大ファンでもあった。だけど彼らもビートルズと同じように、もし出演すれば、僕らのメッセージへのフォーカスを、他へそらせてしまうだろう。ウッドストックは特

CamScannerでスキャン

定のひとつのバンド、あるいはいくつかのバンド・グループのためのものではない。それは人々のためのもの、人々の生活を音楽とアイディアで結ぶことが目的だった。

日曜の夜の出演リストにブラッド・スウェット&ティアーズを追加した。彼らは40年代のビッグバンドを彷彿とさせる強力ホーン・セクションを擁するホット・グループだ。1万5000ドルで契約はまとまった。さらに僕はヒット曲「イン・ア・ガダ・ダ・ヴィダ」のジャムとドラム・ソロで有名になったアイアン・バタフライにも1万ドルの出演オファーをしていた。

日曜日の真夜中、フェスティバルのトリを務めるのは、ジミ・ヘンドリックスしかなかった。ジミは僕のマイアミ・フェスに5000ドルで出演してくれたが、1年経つと今や彼は世界で最も高額のギャラを稼ぐロック・ミュージシャンになっていた。彼はマディソン・スクエア・ガーデンで15万ドルのステージをしたところだった。僕の〝共存国優遇〟ポリシーの上限は1万5000ドル。これではジミのマネージャー、マイケル・ジェフリーは飛びついてこないだろう。マイケルはウッドストックに住み、ジミは近くのウエスト・ショーカンに家を借りていた。結局僕らは5万ドルを提示したが、それは僕らが払える金額をはるかに上回っていた。僕はジミから直接〝演りたいよ〟と聞いていた。

彼は時折、予告なしでスティーヴ・ポールの「ザ・シーン」や他のクラブに現れてジャムに参加したりしていた。そこで僕は彼のマネージャー、ロン・テリーの所へ出かけた。ロンはとても日焼けした体に白いエナメル靴を履いて現れ、海岸に戻るのが待ちきれないという様子だった。僕は彼に僕らの〝共存国優遇〟ポリシーを説明し、出せる上限も1万5000ドルと説明した。でも彼は乗ってこなかった。彼はマイケル・ジェフリーにもっと高くと言い含められていたのだ（マイケルはジミがフェスティバルで最高額のプレイヤーになることに執着していたと、後でわかった）。

ヘンドリックスのブッキングにはもうひとつ問題があった。ジェフリーとテリーは彼の名がポスターやフライヤーのトップを飾るように要求してきたのだ。それはラジオや印刷広告でも彼の名前が他のアーティストよりも大きく掲載されること、そしてショーの最後を飾る要求だった。その頃までこうしたヘッドライナー・システムはこの業界での当たり前の約束事だった。だがウッドストックで僕はそれをがらりと変え、すべてのアーティストは同等に扱われるよう、アーティスト名はポスターでも広告でも同じ大きさのタイプフェイスでアルファベット順に並べるようにすることを決めていのだ。これはとても大事なことだ、と僕は考えていた。だって、たくさんのビッグネームが同列に扱われることはまた、このフェスティバルのトーンを決めることになるのだ。

僕は喉から手が出るほどジミが欲しかった。でも〝共存ポリシー〟も、表記システムのポリシーも変えたくはない。そこで僕は解決案をテリーに提案した。2セットの演奏に3万ドル。ジミはアコースティック・セットでオープニングを飾り、またバンドで最後を締めくくるのだ（その時はまったく知らなかったのだが、その6月28日のデンバー・ポップ・フェスティバルでエクスペリエンスは最後の演奏をして活動を終えていた！）。テリーはこの提案にとまどっていた。そこで僕はジェフリーに電話するように頼み、僕とマイケルは話し合って、さらに経費として2000ドルを上乗せすることで、やっと合意にこぎつけた。

僕はフェスティバルの終わりをロイ・ロジャースに出てもらい、彼の永遠のテーマ・ソング「ハッピー・トレイルズ」で締めようかとも考えていた。何しろ僕らは毎週土曜日の朝、ロイとデイル・エヴァンスとトリガーを見ながら育ってきたのだ。平和と音楽の三日間を締めくくるには最高だと思ったのだが、彼らのマネージャー、アート・ラッシュに断られてしまった。

CamScannerでスキャン

ブッキングの予算と、膨れ上がる他の予算……財政問題を何とかするには、チケット・セールスを促進することが必要だった。こうしてジョンとジョエルを助けるためにフィルモアのボックス・オフィスを担当するキース・オコナーを雇った。彼はウッドストック・ベンチャーズ・オフィスへの郵便によるメール・オーダーでのチケット購入をセットすると、各地のヘッド・ショップやブティックにもチケット販売のネットワークを作ってくれた。僕らは最初、前売りチケットを6ドルで売った。それから1日7ドル、2日で13ドル、全3日で18ドルに設定した。チケットをコード化して、偽造チケットが出回らないようにし、何人か若い女性たちを雇い、全国から寄せられるチケット注文に対応してもらった。こうして発売からわずか最初の2週間でチケットの売上げは16万9338ドルになった。

アーティは5月にキャピトル・レコードを辞め、フルタイムでジョンとジョエルと同じオフィスで仕事を始めた。彼はキャピトルで彼の個人秘書をしていたギセラ・ビトロスを連れて来た。ジョンは美しい〝ギジー〟を前にすると借りてきた子猫のようになった。そしてまもなく彼女に感化されて（感謝！）ジョンは髪をのばしはじめ、ラブ・ビーズを身に着け、アシッド・ロックにハマり始めた！

しかし、ジョンが軟化し始める一方、ジョエルは保守的な態度を変えることはなかった。アーティと彼の関係は相変わらずうまくいかず、プレッシャーとなって僕に降りかかってきた。何日も姿を見せないとか、彼らからの報告が度々入ってきた。そしてジョンとジョエルは僕らのエンタプライズでの彼の役割を疑いだし、これでは同等のパートナーとしてやれないとまで言いだした。

ウッドストック・プロモーション大作戦

フェスティバルの噂は広がり続けていた。まだフルタイムで動き出した初期、アーティと僕は、ジミ・ヘンドリックスを含むクライアントを抱える大きな広告代理店を経営するマイケル・ゴールドスタインに会いに行った。しかし、僕はゴールドスタインの旧式なやり方も態度も気に入らなかった。でも話し合いに同席した若いパブリシストの3人は僕らがどこから来たのか、ボスよりもはるかに理解してくれた。僕はその3人、ジェーン・フリードマン、パット・コステロ、ロッド・ヤコブソンに個人的にわれわれのパブリシティを手伝ってもらえるか尋ねてみた。このアイディアに情熱を感じた彼らはゴールドスタイン・アソシエイツ社を辞め、ウォートーク・コンサーンという新会社を立ち上げた。

ジェーン・フリードマン　是が非でも私たちはこのフェスティバルをやりたかった。単なるPR仕事というだけでなく……というのも私たちは当時、本気で反戦運動に参加していたから。政治的にも社会学的にもあまりに多くの出来事がある中で、ウッドストックはなんかとてもスペシャルな意味を持ちそうだ、とみんなで気づいた。もし当時の政治を真剣に考えていたら、それはもっともエキサイティングな仕事だったはず。マイケルとアーティはそういう風にフェスをつくっていた。そして私たちもフェスティバルを私たちの運動のキャンペーンとして取りこんでいった。私たちの〝変革〟への希望を託せるこのプロジェクトにどうしても関わりたかったのだ。このフェスティバルは新しい考え方と生き方に根差したものだった。

私たちはこれを成功させるためにものすごいエネルギーをつぎこんで仕事に没頭した。3か月という契約期間中、毎日朝の10時から夜中の3時過ぎまで仕事に没頭した。その3か月間で3000通の手紙を全国に送った。私たちはアンダーグラウンド・プレスの素晴らしいリストを作り、その宛先はどんどん増えていった。その当時はまだ数えるほどしか音楽誌はなく、毎日ポップ・ミュージックを取り上げるメディアなども本当に少なかった。私たちはそれを活性化しようと、毎日少しずつ新しい情報を入れて送りだしたから、みんなも理解しはじめたのだろう。それに私たちは世界中のラジオ局にもニュースを発信した。

最初のプレス・リリースは2日間のコンサートがある、と告知していた。それはもう1日追加して3日間になったと、後であらためて発表することで、もう一度記事にしてもらおうという最初からのあざとい作戦だった。そしてこの年の終わり、ウッドストックのおかげか、ウォートークは業界誌でこの年もっとも的確で効果的な活動をしたパブリシティ会社に選ばれたのだった。

ジェーン・フリードマン　国中のあらゆる場所から電話がかかってきたわ。その頃ニューヨークでのイベントについて800マイル離れた土地の人間が問い合わせをして来るなんて前代未聞のこと。〝俺たちの御近所以外のイベントなんか誰が気にかける？〟が普通でしょ。それが突然、国中のいろんな人が来たがりだしたのよ。大学新聞の編集者、大学自治体の委員長、学生運動のオーガナイザー、日刊新聞のコラムニスト、音楽ライター、ロックンロールに関心のある人々、アングラ新聞のライターやエディター、政治運動をしている人たち……ウッドストックはその存在自体がカウンターカルチャーのライフスタイルを提案する一つの政治的イベントだったのよ。

ウォートークが考えた宣伝作戦のひとつが、僕をウッドストックの〝顔〟として取り上げることだった。僕はそういうスポットに立つのは苦手だったし、フェスティバルの〝声〟になるのも何だかな……という気持ちだった。けれど、アーティは僕を励まし、自分からもある程度その役割を分かちあってくれた。僕は計画を朗々と話すより、ともかく行動すればそれが言葉となって、いつか人は理解してくれるだろうと考えるタイプの人間だった。そしてしばらくの間、フェスティバルの宣伝の場からジョンとジョエルは姿を消してしまった。ウォートークの誰かが、「彼らの資本家的なイメージは、カウンターカルチャー世界での僕らの信頼にマイナスになる」、と考えたからだった。成功させるにはその信頼は大きなキーだった。アーティもまた、彼らのストレートなビジネスマン・イメージは僕らのアンダーグラウンドでの信頼に反するものだと感じていた。こうしてアングラ世界との関係を強固なものにするために、プレス・リリースやインタビューから外されたジョエルは、ある日顔を真っ赤にして、僕らに真っ向から怒りをぶつけてきた。これにはビックリした。個人的なパブリシティが彼には重要だ、などと僕はまるっきり考えていなかったからだ。「どうして僕の名前が表に出てはいけないんだ?」と大変な剣幕だった……。でも8月の半ば、フェスティバルが大赤字ということがあきらかになった日、きっとジョエルとジョンは〝プレスに自分たちの名を加えてくれなどと言い張ったことは一度もない〟、と思ったことだろう。

最後にブッキングしたバンドはサンタナだった。それはすべてがどんどんハードになっていたあの月の、いちばん素敵な出来事だったかもしれない。6月初めにラトナーズで平和協定を結んだ後、ビル・グラハムは「自分がマネージメントを始めたベイ・エリアのバンドをリストに加えないと、デッ

ドの出演をキャンセルするぞ！」、とまた〝脅しのグラハム〟に戻っていたのだ。イッツ・ア・ビューティフル・デイとサンタナ――どちらのグループもまだレコードを出しておらず、僕は彼らの音楽を聴いたことがなかった。音楽も聴かずにアーティストをブッキングしようとは思わなかったから「テープを送ってくれ！」と僕はリクエストした。早速彼はそうしてくれ、僕はどちらのグループも気に入った。特にサンタナは脳天をぶち抜かれるような気がした。ラテン音楽の影響が顕著なカルロス・サンタナのロック・ギター、グレッグ・ローリーのソウルフルなヴォーカルとハモンド・オルガン、加えて素晴らしいリズム・セクション。僕はずっと昔に父親のナイトクラブで聴いたティト・プエンテの演奏を思い出したが、彼らの音楽には、そこにもっとヘビーにロックンロールのエッジが加えられていた。

「サンタナをやるとビルに伝えてくれ！」、僕はジョン・モリスに言った。「日曜日のショーの皮切りに彼らに演ってもらうんだ。すごいバンドだよ」。ビルは彼らの出演料を１５００ドルにまけてくれた。フェスティバルのハイライトとなったバンドを、僕はこうして大バーゲン価格で手に入れたというわけだ。

ズラリと最高のアーティストたちをブッキングし終え、業界の最良の人々が僕のチームのそれぞれの場所で動いてくれていた。それを思うと僕は一瞬、世界の頂上にいるような気分になった。しかし、7月半ばまでに、積極的にコミュニケーションの場所をつくろうとタウンホールで2回の住民との対話集会にのぞんだにもかかわらず、ウォールキルではすべてが煮詰まってきていた。〝でも、もうこれ以上悪くなることはあるまい〟、と思ったまさにその時、ニューヨークではまた新たな対立の火種が現れていた。

＊**ディック・クラーク**（1929－2012） アメリカのTV、ラジオ・パーソナリティ。1957年から始まったABC－TVの「アメリカン・バンドスタンド」の司会で有名。"アメリカ最年長のティーンエイジャー"のあだ名で親しまれ、毎年大晦日恒例の「ニューイヤーズ・ロッキン・イヴ」は現在も続く長寿番組。

＊**ロイ・ロジャース**（1912－1998） アメリカ人歌手、俳優。100本を超える西部劇映画に出演して"カウボーイの王様"と呼ばれた。特に1951～57年のTVショーに恋人のデイル・エヴァンス、金色の名馬、トリガーと出演して、"また笑顔で会おうよ、青空の下で"というエンディング・テーマとともに、子供たちに絶大な人気を博した。

CamScannerでスキャン

第6章

Downtown

ダウンタウン

CamScannerでスキャン

「おまえらのフェスティバルなんか、俺たちにはネズミのケツほどの意味もあるもんか！　そんなクソフェスティバル、俺たちの要求を呑まねえのなら、てめえの耳の穴に突っこんでやる！」

アビー・ホフマンがジョエルの面先でわめいている。無人ビルを無断占拠したイッピー党本部。ガランとした剝き出しのレンガの壁にその声がコダマする。なんとか交渉しなくてはと、必死のジョエル。アビーは言い終えてジョエルが口を開くのを待っている。ジョエルの顔は真っ青、僕には彼がおびえているのがよくわかる。もし、アビーと面識がなかったら、僕もビビっていたに違いない。だが僕は奴とその演技にはもう慣れっ子！　今、彼はジェシー・ジェームズを演じているのだ。列車を奪う代わりに、フェスティバルから何かを奪うつもりだろう。となれば、僕はビリー・ザ・キッドを演じることにしようか……。

ある晩、夜遅くまでヴィレッジ・オフィスで仕事をしていた僕は〝人民のラジオ局〟WBAI－FMでボブ・ファースがウッドストックをこき下ろすのを耳にした。DJ&コメンテイターのファース、左翼の味方を自称する男はこう言っていた。

「街では人々がこのフェスティバルはぶったくり（リップ・オフ）だと言っている！　主催者たちは人民のことなんかこれっぽっちも考えておらず、奴らは金儲けだけだ。だが音楽は人民のためのもの。フェスティバルは無料にするべきだ！」。

ファースはあのサウンドアウトでも司会を務めていたのに、どうしてこんな発言をするのだろう？　僕は怒ってラジオ局に電話してファースをつかまえた。

「ねえ、僕らがこんなに一生懸命、明け方3時まで仕事をしているのは、人々のことを考えていないからだってきみは言うのかい？」、僕は抗議した。「こんな大きなイベントを金なしでできるときみ

は思うのか？　ステージ、バンド、看護のドクターたち、会場に水にトイレに電気、その他数えきれないほどの準備をするのに、いったいいくらかかると思う？　それでも〝人民から奪うより与えろ〟ってきみは言うのかい？」「これは公平な取引なんだぞ」、僕は続けた、「それ以上のものを僕らが求めていると思うなら、そんなムーブメントなんかクソくらえだ！」。「このフェスティバルは人々が一緒になり、僕たちが自分たちの力で立派にやれることを世の中に示すチャンスなんだ。正しくこれをやって人々に正義を示す絶好のチャンスなんだぞ。それなのにきみは僕らをけなして、このフェスティバルを潰そうとしてるだけ。他人のためになるようなことなど、何ひとつしていないじゃないか。はっきりしておこう、僕らは話し合う準備があるんだ！」。

自分としても珍しく声を荒らげての抗議電話は一時間、しかしファースはとても冷静に聞いてくれた。これで考えを変えてくれればと思いながら僕は電話を切った。

翌日ヴィレッジ・オフィスにアビー・ホフマンが、ウッドストックについて話がしたい、と言いにやってきた。ミシガン州のアン・アーバーでヒッピー集会があり、そこでフェスティバルの話を聞きつけたらしい。

アビー・ホフマン　俺はマイケルに言ったんだ、「このカルチャーはストリートの人たちのものだ。俺たちはみんなでカウンターカルチャーを作り上げようとしているんだ。ロワー・イーストサイドで活動している連中に声をかけるから、おまえたちと話し合いがしたい」とね。

集まったのはイッピー党、人権のための医療委員会、アップ・アゲインスト・ザ・ウォール・マザーファッカーズ、反戦運動グループ、それに地域の家出少年やバッド・トリップした若者の世話

をするイーストサイド・サービス団体等、8～10のグループだった。マイケルはミーティングに応じたよ。

ローズ・ペイン（活動家／映像作家）イッピー党の動きを撮影している「ニューズリール」というフィルム・グループで私は活動していた。彼らは他のどの運動グループよりずっと愉快な連中だった。ある日、アビーとマイケルのオフィスに乗りこんで「このイベントは強盗と同じだ。俺たちの分け前を貰いにきたぜ！」と彼に言った。あの頃はツッパっていたのよ、私は。マイケルはキュートで髪も可愛いかった。怒って怒鳴り返すかと思ったら、とてもフレンドリーな態度で、あっさりと「オーケイ！」。拍子ぬけしちゃったわよ。アビーはフェスティバルに乗りこんで、自分たちのことをやってやろうってつもりだったのね。と同時に彼らは自分たちの敵じゃないな、とも感じていたんだと思うな。マイケルはニコニコと感じよく私たちの要求すべてに応じてくれた。

ティシア・バーナス・アグリ　すべてを飲みこむのはマイケルの才能みたいなものよ。相手が押しこんでくるなら逆らわず、一歩引いてそこにスペースを少し残すの。そうやって、いつのまにか爆弾から信管を抜きとってしまうのよね。

電話でジョンはつかまらなかったので、僕はジョエルにこの〝アビー・ショー〟のことを説明したが、彼の頭の引き出しにはないものばかり。ニュアンスを伝えるのはとても難しかった。とりあえず電話で要点だけ話し、ジョエルと一緒にイッピー党の本部でアビーと会うことにした。このところウォールキルの人々の反対やプレッシャーでへこんでいたから、アンダーグラウンドの兄妹たちから支

援をもらえれば少しは元気になるはずだ、と僕は前向きの気分だった。

活動家、急進派、政治家気取りの連中――集まってきたロワー・イーストサイド・コミュニティは、僕らがカウンターカルチャーから巻き上げようとしているのだ、と考えていた。そこまで本気で考えていないまでも、彼らはそういう態度で僕らに向かってきた。

ウッドストック・ベンチャーズという仮面をかぶった大企業体アメリカが、自分たちのアイディアを利用しようとしているのでは、と彼らは危惧しているようだった。そこで僕らがカウンターカルチャーの一部であること、一般的なルールでビジネスはするが、それは夢見てきたより良い世界を具体的な形にして、世の中にマニフェストするための手段であること。ウッドストックは人民による人民のためのものであること。そしてこのイベントで相応の利益を上げたいと投資を希望する人々の参加は拒まないこと、等々を僕は説明した。

しかし、このミーティングで問題の解決のキーとなったのが、お金だったのはなんとも皮肉なことだった。アビーは2万ドルを自分たちの主張のために寄付しろとせまってきたのだ。

「おまえたちはこのカルチャーから金を取るのだから、俺たちに還元すべきだ！」

「僕たちの主張はどうなるんだ?」、僕は切り返した。「いったいこのためにどれだけの金を使ってると思う?」

「いいかい」、彼は答えた、「スモークとアシッドをやりに都会のガキどもが田舎のおまえたちのイベントに集まってくるんだ。なんの準備もキャンプもしたことのない連中だ。だから毎日サバイバル・マニュアルを発行しに行ってやる。そして俺たちが係わってる政治活動や社会運動のことを知らせるパンフレットをまくんだ。金儲けのことしか頭にないおまえたちとは違って人民の世話をしたい

んだ、俺たちはな！」

最後の台詞はミーティングに出席した他の活動家連中に対して発せられているようだった。この寄せ集めの集合体をまとめるスポークスマンならではの発言。この前にアビーとは一度、どんな準備をしているかを話していた。でも彼の言ったことは納得ができる。

「ジョエルと検討してみる」と集まった連中に言って、僕らは部屋の外に出た。

「彼らは本当に面倒を起こすのか？」、とジョエルは尋ね、僕は「イエス」とうなずいた。「なんか他に金を払わないですむ方法はないか？」、と彼は尋ね、僕は「ノー」、と首を振った。

「ただし、彼らはやると言ったことはきちんとやる。そう僕は信じている。彼らが参加すれば会場の大きな助けにもなるし、僕らのメッセージの信用にもなるよ」。

ジョエルは幸せではなかった。彼は彼らが嫌いで、その政治哲学も、金を取られるのも嫌だった。だがこれはストリートのやりあい。ルールが違うのだ。この状況をすべての人にポジティブなものにできるはずだと僕は考えていた。

部屋に戻り、僕は言った。「みんなが助け合えるように協力してもらえるのなら、サバイバル・マニュアルを出せるように印刷機を買う費用を出そう。そして、きみらの活動を伝えるパンフレットを並べるテーブルの置けるスペースを提供するよ。僕らが十分な準備をしていないと言っていたけど、それなら会場にやってくる子供たちを助けて、僕らに協力してくれよ」。

アビーは僕の提案が気に入った様子だった。そして今度は彼らだけで協議することしばし……。こういう交渉にたけていたアビーは、僕らがどれだけの金額の用意があるかと突っこんできた。僕らは5000ドルと答えたが、最終的に1万ドルで手打ちとなった。だがジョエルは1万ドルを支払うことをしぶった。そこで僕はジョンとかけあって、現金で支払うことに彼の同意をとりつけた。

CamScannerでスキャン

アビー・ホフマン　受け取った1万ドルの半分で印刷機を買った。印刷機はまさにライフセーバー、あの印刷機を使って刷ったサバイバル・インフォメーションで命を救われた人間もいるはずだ。残りの金は、出版物や印刷用紙を運ぶトラックレンタルや、バッド・トリップした時に俺たちが使う特定のビタミン剤を買うのに使った。100枚、いや200枚のチケットをただでもらって、それをさばいてできた金はWBAI－FMの運転資金にしたね。あと残ったチケットは、フェスティバルに行きたくても切符が買えない連中にあげたりしたな。

メイン・ストリームの社会や警察に、ベトナムでの戦争や人種差別に対立する革命的コミュニティがあったんだ。それで彼らはそういう中から育ってきた音楽を大事に感じていた。だから、こういうイベントにある種の政治色を加えるのは自然なものだったろう。俺たちはフェスティバルに反対していたんじゃない。後で〈ウッドストック・ネーション〉と呼んだように、あのフェスティバルには、政治から目をそらさない視点が含まれて当然だったんだ。

攻撃は右から、左から——開催への試練

イッピー党本部での会談は6月19日、ミドルタウンのタイムズ・ヘラルド・レコード紙に、一般の人々へ向けたフェスティバルの内容を説明する僕らの声明文が掲載されたのと同じ日だった。

あきらかに今この地域の人々はあまりに感情的になって、とても理性や常識の通じない、悪意の噂を振りまいている人がいるようです。とにかく彼らは説明のつかない理由から、反対一点張りで、

町の役所にも反対の口実を用意しろと要求しています。僕らはみなさんのコミュニティに引き続き滞まり、フェスティバルを実現したいと考えています。——ウッドストック・ベンチャーズ社一同

誤解と混乱を招かぬようにと、ささやかな抗議をしたつもりが、火に油をそそいでしまったのか、ウォールキルは全面戦争になってしまった。CCC（関心ある市民委員会）の攻撃をかわそうと、僕らは新聞の半ページ広告を出して、新たに〝5000人以上の人間が集まってはならない〟というフェスティバル阻止の町議会の動きを牽制するつもりだったのだが。ミルズの近隣の地主たちから出された、〝フェスティバルの騒音は周囲の人々の生活を妨げるから禁止せよ〟という訴えにより、6月7日に州高等裁判所への出頭命令が来ていた。タイムズ・ヘラルド・レコード紙はその後の記事で、「町の代理人によると3週間以内にさらなるフェスティバル阻止の動きがあるようだ」と報じていた。CCC代表のフランク・ジェニングスは「〝健康、財産、モラルを損なうフェスティバル開催に反対する〟200人の署名を集めた」と語っていた。

メル、クリス、スタン、ウエス他の現地クルーは、衛生、排泄、給水、医療設備、交通網、駐車場、食料、セキュリティ等の計画を事細かにまとめた書類を、ウォールキルの町議会に提出した。大人数の集会を禁じる法案を議会が承認するのを封じるためだった。しかし、それでも町の役人たちは、「そんな許可もフェスティバルも認めない！」と強硬な態度を崩そうとはしなかった。

「僕らは自分たちが何をしようとしているのか承知しているし、僕らのやろうとしていることは、カウンティ全体に利益をもたらすものです」と、ウォールキルのコミュニティへの説得を僕らは続けた。フロリダ州ハランデールの警察署長、ジョージ・エマーリッチにマイアミ・ポップ・フェスティバルがいかに問題なく行われたか、「とてもよく秩序は保たれ、参加した人間の数に比べて驚くほど

CamScannerでスキャン

わずかな問題しか起きなかった」という声明書を送ってもらった。エマーリッチはこう証言していた。「人々は礼儀正しく、きちんと正しい行動をしていた。プロデューサーたちは、あらかじめきちんと起こりうる問題に対処していた」と。

コミュニティとの関係を改善するために、僕は当時メルのガールフレンドだったローナ・エリオットにPRの協力を頼んだ。ローナはまだ22歳の若さだったが、すでにいくつかのフェスティバルでラジオを通してのパブリシティの経験があった。彼女は新聞、地元ラジオやTV、キワニス・クラブなどの集まりに出席、出演をして、とても友好的な態度で、このフェスティバルがどれほどコミュニティに恩恵を与えるか、を話してまわってくれた。また、町でスクエア・ダンスの会を催し、僕らはクウィルというボストンのソフト・ロックバンドに出てもらった。クウィルのソフト・イメージのサウンドは地元民に好印象を与えてくれるだろうと考えての起用だった。

リー・マックラー・ブルマー　私たちはクウィルを起用して〝グッドウイル・ツアー〟をオーガナイズした。ウォーウィックの少年院から、近くの監獄や精神病院をまわったのよ。でもあのツアーで私たちの評判を変えられたのかどうか。なにしろ彼らは私たちを危険な連中としか見ていなかったもの。ドン・ガヌングは牧師の衣装を着て、「私たちは貯水場にLSDをまいたりしない」なんて説いていたけど……。はたしてどれだけの人間の考え方を変えられたか疑問だわ。

僕らはアンダーグラウンド・コミュニティへの真意の証明もしようと計画を立てた。ウォートークのスタッフが、マンハッタンのヴィレッジ・ゲイトでいろんな人々に呼びかけ、公開討論会を開くことにしたのだ。こんな文面の招待状がいろんなところに配送された。〝野外での平和と音楽プログラ

ムの展開を討論するセミナーを開催いたします。こぞってご参加ください。

ジェーン・フリードマン　フェスティバルの方向性をきちんとさせておきたかったの。だって「フェスティバルを妨害するぞ！」って、さまざまな政治グループから脅迫まがいの動きがあったからよ。私たちはいろんな大学の学生たちに声をかけたわ。一年間、革命のために働いてきたからこの平和と音楽の三日間を楽しい休暇にしてもいい？　ポリティックスをうるさく言わずに純粋に楽しんでいいの？　それともこれを政治的イベントにする？、どうするのか決めましょうってわけよ。

アーティと僕はウッドストックを文化的なイベントにしたかった。政治を除外するのではなく、ただ文化をきちんと僕らの手で示せば、自然に政治的メッセージとして伝わるはず、という考えだった。「これがうまく行けば、それが最大の政治的声明になるじゃないか」と僕らの意見は一致していた。

6月26日ヴィレッジ・ゲイトは満員になった。ジム・フォーラットという活動家が進行係をつとめ、彼はとても的確なおしゃべりで討論をラブ＆ピースな方向へと導いてくれた。ちょうどカリフォルニア、ノースリッジでのフェスティバルで暴力騒ぎが起こっていたので、ウエス・ポメロイと僕が、どうやって警察ともめずにやるか話した。暴力騒ぎが起こるフェスティバルと僕らのフェスティバルがどんなに違うかを説明したかったのだ。僕は他のフェスティバルの主催者たちがどんな群衆への対策をしているのか、この目で実際に見に行こうと計画していた。

「フェスティバルに参加してくれる人間全員で、そこをひとつのコミュニティにしようと考えているんだよ」、ウエスはみんなに語りかけた。「そこで起こることはプロモーターのみの責任ではなく、参加者たちの責任にもなるってことだ。もし参加者にやることを与えれば、お金を払っただけの価値

CamScannerでスキャン

のあることを与えれば、問題は起こらないよ。やってくる若者たちに僕たちがどんな設備を準備して、どんなコミュニティを作ろうとしているのか、パブリシティで伝えていくようにするのさ」。

僕も発言した。「出演者と同じようにオーディエンスも参加するってことさ。もし、みんながフェスティバルの参加者になってくれれば、彼らは他の人間の権利をリスペクトできるはずさ」。

僕は集まった人々に、これが金儲けのためのイベントではないことも伝えておきたかった。「お金のことについて言えば、イベントが実現するのに足りるだけの額を集められればそれでいいんだ。イベントが実現したらそれが一番の財産なのさ。僕らの一番の目標はそこなんだから」。

「僕たちはみんなそれぞれ、何か自分のできることをやって生活をしている。でも、もし、それが自分のためだけじゃなくて、他の人たちも喜んでもらえることなら最高だ。僕は今、そういう気持ちでやっているんだ」。気がつくと僕は自分の金銭哲学を話していた。

物質的な必要なんてその時をやれるだけで十分だ。いままで僕はひとりで、そうやって自分の夢を生きてきたのだ。でもジョンは彼とジョエルのした投資分は回収すべきだと思った。アーティと僕はこれだけの仕事をして、それだけで十分に価値ある何かを得られるだろう。

4時間の討議を終え、参加した200人あまりが投票をして、ウッドストックは最初のヴィジョンどおり『平和と音楽の3日間』として行われることになった。活動家たちはムーブメント・シティというエリアを設けて、そこにブースを置き、宣伝活動はするが、メインステージのもろもろには関与しないこと、とルールも決まった。

右翼から左翼から叩かれっぱなしだったが、逆に僕には、僕らの行くべき道がはっきりと見えてきた。そこは芸術と商業が共存する場所だ。まず人間性の尊重が最優先で、それぞれの立場の違いはあくまでも色合いの違い、として考えるべきだ。フェスティバルのエレメンツはアンダーグラウンド・

CamScannerでスキャン

ムーブメントに深く根ざしている。だけど政治が主眼なのではない。フォーカスはあくまでも〝ピース&ミュージック〟でなければ！

ヒッピー・コミューン、ホッグ・ファーム、援軍となる

同じ時期、スタンはキャンプ場やフリーキッチンの設営や運営経験の豊富なグループにコンタクトしていた。彼らホッグ・ファームは1965年にLAで生まれたコミューンで、エンタテイメントとムーブメントに係わるコミューンだった（いや、現在もそうだ！）。1969年には〝ホッグ・ファーム&フレンズ〟公演でツアーをしている時以外は、彼らはニューメキシコの自分たちの農場で生活をしていた（ホッグ・ファームの名は彼らがカリフォルニア、サンランドにある養豚場の〝ベビーシッター〟をしていた時に生まれたものだった）。

創立メンバーの一人、ヒュー・ロムニーは50年代にヴィレッジのクラブでビート詩人として、ジャズ・ミュージシャンの伴奏でポエトリー・リーディングをしていた。ジョン・コルトレーンやセロニアス・モンクのショーの前座をつとめ、60年代にはガスライトのポエトリー・ディレクター。そのユーモアとピリッと風刺の効いたフレーズで人気を集め、あの伝説のコメディアン、レニー・ブルースが彼のマネージャー役を買ってでたこともあった。

ホッグ・ファームには、あのボブ・ディランの曲「北国の少女」のモデルになったボニー・ジーン、さらにかつてケン・キージーやグレイトフル・デッドとベイエリアでアシッド・テストをしていたメリー・プランクスターズのメンバーたちもいた。サイケデリックに塗ったメリー・プランクスターズのバス〝ファーザー（遠くまで行くんだ）号〟に続き、彼らはホッグ・ファームのバス、〝ロード・

ホッグ号〟を持っていた。スタンは4月に彼らがフィラデルフィアでの事件でニューヨークを訪れた時に、最初のコンタクトをしていた。彼らはバスで旅行中に警官に止められ、メンバーのひとりが寝袋の中にカナビスの燃えさしが残ったパイプを証拠品として逮捕され、一行はその仲間の保釈金を作るために、ニューヨークでみんなそれぞれ仕事をしていたのだ。スタンはハウストン・ストリートのグレイトフル・デッドとホッグ・ファームの知り合い、キャリコ（エリザベス・ザンダミー）のロフトに彼らを訪ね、フェスティバルの話をして、参加を求めたのだった。彼らは疑わしく思いながらも、僕と会うことを約束してくれた。

ヒュー・ロムニー　僕たちの台所のテーブルにスタン・ゴールドスタインは現れた。ディック・グレゴリーのダイエットに成功したアレン・ギンズバーグって風貌の男だったよ。それで彼が「ニューヨーク州で行われるフェスティバルに参加する気はありませんか？」って言ったんだ。またブッとびすぎた奴が来たと思って追い返したんだ（笑）。

数日後、スタンと僕はコールドロンでヒューとボニー・ジーン他何人かと会った。ヒューはそのほとんど前歯のない口と、大きな羽飾りのついた麦わらのカウボーイ・ハットとともに、一度会ったら忘れられないキャラクターだった。僕の目に彼は言葉の魔術師、宇宙的ピエロのように映ったものだ。今日では、ウッドストック直後テキサスでのフェスティバルでB.B.キングが名付けた〝ウェイビー・グレイビー〟の名でみんなに知られている。あの日、コールドロンで丼にもられた玄米とゆでた野菜を食べながら、僕はウッドストックがどんな集まりで、彼らに僕がしてほしいこと——キャンプ場のフリーステージ、フリーキッチンの運営——を説明した。話をしているうちに、話題はこれまでバッ

ド・トリップをした人、とびすぎた連中をどうやってケアしてきたか――彼らはその道のベテランだった――という方向に進み、僕らの目標達成は、彼らの協力なしにはありえない、ということに僕は気づいたのだった。

「もし、キャンプ場で殴り合いが起きたらどうします？」、僕の投げた質問にヒュー・ロムニーは即座にこう答えた。「顔にパイ投げさ！」。その場で僕は彼の大ファンになった。

こうして小編成のホッグ・ファーム・グループがロード・ホッグ号で7月にニューヨークへ来て、メルのチームと子供たちのプレイグラウンド設営や、キャンプ・エリアの道路作りをしてもらうことが決まった。ヒュー・ロムニーはどうやって残りの80人あまりの仲間がニューヨークへ行けばいいのかと尋ねた。「運転してくる時間はないから飛行機で運びましょう」、と僕。その発言に彼らはどよめいたが、僕が冗談で言ったと考えているようだった。彼らの協力に僕は、キッチンやキャンプ場の器材、道具代を含めて８０００ドルを支払うことを約束した。

スタン・ゴールドスタイン　ニューメキシコに戻ったボニー・ジーンは、ホッグ・ファームから何マイルも離れた電話までの道を歩き、フェスティバル参加について、僕とあれこれ条件面の話し合いをした。そして次の電話までに彼らの要求に応えられるように僕らは準備を進めたんだ。

スタンと僕はウエス・ポメロイとホッグ・ファームにどんな役割をしてもらおうかと話し合った。ウエスは最初、「彼らは解決してくれるより多くの問題を起こす連中ではないかね？」と参加に懐疑的だった。「ホッグ・ファームの調査をしたほうがいい」、と彼は提案し、僕もその意見に賛成した。

[illegible]6月21日、スタンにニューメキシコへ飛んでもらうことにした。彼が到着したその日は、ホッグ・ファーマー・ファンクスターたちが、サンタフェ郊外のアスペン・メドウズで夏至を祝うお祭りをしている日だった。

スタン・コールドスタイン　僕は折り目の入った真っ白なズボンと真っ白なワイシャツ、手にはブリーフケースを持って出かけていった。まず、ウェスの知り合いのニューメキシコ知事直属の警備長、ジム・グラントと会い、ウェスへの郵便役として同行してもらった。彼は明快な報告書を送ってくれた。曰く「ホッグ・ファームは推薦できる。彼らの優れた芸術性（私には理解できないが……）、積極的行動と態度という点で太鼓判を押そう！」。しかし、その夏至の日以降の報告書には「彼らの組織や運営法は明瞭ではない……乳房の露出も見られた……多分彼らは、彼らのことをしているのだと理解する。その祝祭のステージは、営利目的の興行とは大きく異なるものだった」と。

ヒュー・ロムニー　スタンは大金持ちのロック・スターが持つようなオシャレなアルミのアタッシュ・ケースを下げて現れた。そして僕らを「アメリカン・エアラインのアストロジェット機に乗せてニューヨークへ飛ぶ！」と言う。ブッとんだね！　僕らはコミューンのシーンを作ってるエース格の人間を集めて、チームに加わってもらうことにした。

スタン・コールドスタイン　ホッグ・ファームの連中はとてもよくまとまって、いいシーンを作っていたから、心配なんかなかった。ジム・グラントが早めに立ち去り、あの後のバス・レースを見なかったのは幸いだった。イベントのためにケン・キージーがオレゴンから来ていて、派手に仲間

たちとポットを吸い出したんだ。それにたくさんビールを持ってきていた。あのとき居た多くの人間にとって、栓をひねって開けるスクリュートップのビールを見るのは初めてだったと思う。で、例のごとく、そのビールの中にアシッドを入れてたんだ！　サイケデリック・ビールを飲んでハイになったみんなは、その草原でパス・レースを始めた。パスは溝をさけてあっちへこっちへ。おまけにレース開始直前にサイケな飾り付けの取っ手につかまる奴、屋根に乗る奴、大勢が乗っていたんだ……いや、あれはすごい光景だったよ。

デンバーの惨劇、ニューヨークの対立劇

スタンがニューメキシコから戻るとすぐ、僕は6月27～29日の3日間、デンバーのマイル・ハイ・スタジアムで行われるポップ・フェスティバルを見に行った。そこで僕が出会ったのは、ウッドストックでは絶対に起きてほしくない光景だった。

まずフェスティバルが始まる前から、アメリカ解放戦線を名乗るグループと警察の間で小競り合いがあった。リーダーたちはこの独立記念日のプロテスト集会にたくさんの人間を動員し、集まってきた若者たちに、「コンサートをただ（フリー）にするべきだ！」とアジっていた。土曜日、僕が会場に到着した時には、ステージ左手のスタンドで暴動に備えていた完全装備の警官隊が150人ほど待機していた。彼らはゲートから闖入（ちんにゅう）しようとする連中や、抗議にやってくる連中をそうやって威嚇していたのだ。

でも僕には、まったく正反対の効果を生むのではないかと、イヤな予感がしていた。

はたしてまもなく数百人の若者がゲートを襲い、彼らを鎮圧しようとさらに多くの警官隊が現れた。

CamScannerでスキャン

石やビンを投げる若者たちと警棒で殴りかかる警官隊——結局多数の負傷者がでた。そしてジョニー・ウィンターが演奏をしている最中に正面ゲートでオマワリたちは催涙ガスを撒きはじめた。ガスは風でステージにまで届き、聴衆やスタッフの多くがひどい目に会った。最終的に警察は主催者側にゲートを開けるように指示。最後の出演グループ、クリーデンス・クリアウォーター・リバイバルの演奏が始まる頃には何千人という人々がスタジアムへなだれこんできた。

日曜日の夜にはニューヨークへ帰る予定だったが、急に僕はジョー・コッカーとグリース・バンドを聴いてみたくなった。そして、日曜は前の日より事態はさらに悪化した。切符を持たない何千人の若者たちが「フリーコンサートにしろ！」とスタジアムに押しよせ、それに対して警察は獰猛な犬たちを放ち、催涙スプレーを振りまき、警棒を振りかざして彼らに襲いかかった。警察の姿勢が暴力を誘発したのだと僕は思った。そのフェスティバルで僕は考えさせられることがいっぱいあった。そして僕らのフェスティバルではデンバーでのようなことが起こらないように、会場には一人も制服警官を置かないようにしよう、と固く心に決めたのだった。

けれど、ジョー・コッカーとグリース・バンドの演奏は最高だった。僕はジョーのプロデューサーのダニー・コーデルからもらったテープをアーティに渡し、ほとんど無名の存在だったこのシンガーを出演させることにした。初めてテープを聴いた時、ほとんどの人間が彼を黒人ソウル・シンガーだと思ったが、本当の彼は痩せたイギリス人で、痙攣したような身振りでステージを跳ね回っていた。

僕がデンバーに出かけた頃、ジョン&ジョエルとアーティの関係はひどいものになっていた。キャピトル・レコードを辞めたアーティは、もうウッドストック・ベンチャーズの一員になることに何の法的問題もなかった。僕は預かっていた持ち株をいつでも彼に渡す用意はあったが、ふたりは再三再

CamScannerでスキャン

四、「アーティをチームに加えたくない」、と僕にプレッシャーをかけてきた。責任感のない態度、わけのわからない行動……僕には毎日のように「なんとかしてくれ！」と彼らから電話があったが、何をしても両者の関係を良くすることはできなかった。

「彼を会社に入れる必要がどこにあるんだ？」、と彼らは言って「僕らで彼の持ち分を三等分しないか？」と持ちかけてきた。僕にとってはアーティの持ち分は最初の日から彼のものであり、それを取り上げるような立場ではなかった。彼らの関係のダイナミックスを変えるような知恵も、それを考える時間も僕にはない。僕はふたりに「もうプレッシャーをかけないでほしい」といい残し、デンバーに向かった。戻ってきたら僕はアーティの正式契約書にサインするつもりでいた。

「きみたち次第なんだから、うまくやってくれよ！」そう言い残して僕は発った。後でわかったことだがニューヨークを離れると僕がプロジェクトを降りて、姿をくらましたとジョエルは思いこみ、パニックになった。彼らがやるべきことをやって、僕は自分のすべきことをやる――僕が望んでいたのはそれだけだった。結局その週末、ジョエルはアーティと会って納得できるまでとことん話し合い、問題は解決。僕らはパートナーシップを維持することになった。

ピート・タウンゼントの眠れぬ夜

6月末、ジョン・モリスはブッキング・エージェントのフランク・バーサロナのマンハッタンのマンションで、ピート・タウンゼントと緊迫の一夜を過ごした。プレミア・タレント社の代表フランクはザ・フーのブッキングに大きな力を貸してくれた。この年の春、ザ・フーはアメリカ諸都市のホールや劇場で、彼らが考案したすばらしいロック・オペラ『トミー』を公演してまわっていた。僕とジ

ヨン・モリスは、ウッドストックの土曜の夜にザ・フーはうってつけのバンドだと考えていた。フランクはこのフェスティバルへの出演が、彼らの人気を広げ今後の活動に大きな影響を与えると、熱心にピートに薦めていてくれた。けれど、ピートはウッドストック出演にまったく興味を示さなかった。バンドは明らかにハード・スケジュールで疲れきっていて、ツアーが終了したらすぐに、故郷イングランドへ帰りたがっていたのだ。

そこでフランクが一計を案じ、ピートとジョンを彼の家のディナーに招待した。もし必要とあらば一晩をかけてでも、ピートをウンと言わせるまで説得するつもりでいたのだ。その晩、ジョンとフランクは何度も出演の話を持ちかけた。しかし、頑としてピートは首を振らない。午前1時、ザ・フーのロード・マネージャー、ジョン・ウルフがやってくると、フランクはウッドストック開催の同じ週、8月12日にタングルウッドでビル・グラハムのコンサートがあり、バンドがアメリカに戻ってくる予定になっていることを指摘した。それでもピートとジョン・ウルフの答えは「ノー！」。

しかし、あきらめずにフランクとジョン・モリスは徹夜作戦を開始。明け方の5時、ピートはウトウトしはじめた。それでも彼ら二人はピートを寝かせず、午前8時ついに彼は叫んだ。

「オーケー、わかった、やればいいんだろ。だからお願いだから、もう俺を寝かせてくれ！」。

こうしてやっと交渉が始まり、ウルフは1万2500ドルで契約書にサイン。その場で半分が支払われた。もちろん契約書には〝宣伝ポスター、チラシにはいかなるスター扱いもせず、出演者名はアルファベット順とする〟と明記されていた。〝これは主催者側の要請に基づくもので、当フェスティバルの重要なコンセプトである〟と。後にザ・フーは彼らのアルバム『ライヴ・アット・リーズ』のアルバム・ジャケットの内側に、この時のファクシミリで送った契約書を載せていた。

ギターに鳩のシンボルマーク

ほとんどの出演アーティストのブッキングが終わった今、次に必要なのは広告のポスターやビルボードに僕らのメッセージとともに載せるビジュアルだった。フェスティバル開催の発表をした時、デヴィッド・バードがポスターをデザインしてくれたが、僕らの求めていたイメージとはどこか違っていた。ジョン・モリスのすすめで、僕らはグラフィック・アーティストのアーノルド・スコルニックにチャンスを与えてみよう、ということになった。早速彼にコピーを渡し、メイン・メッセージは『平和と音楽の3日間』、僕はギターの上にとまっている鳩のイメージを期待していると伝えた。

数日後、アーノルドは実物大のポスターを持ってオフィスに戻ってきた。彼の娘の切り抜き絵本にヒントを得たという、そのデザインは完璧だった。赤いバックに青と緑のギター、そしてそこにとまった白い鳩。原色のみのシンプルなデザインは一目見ても大きなインパクトがあった。

アーノルド・スコルニック　僕はシェルター・アイランドに宿泊していて、その滞在中にカモメの絵ばかり描いていたんだ。そのスケッチブックからカミソリで切り抜きをして、一羽の鳩にしたんだ。

アーティはFMラジオ局からの宣伝と、アトランタの『グレート・スペックルド・バード』から、カラマズーの『ウエスタン・アクティビスト』、ミネアポリスの『ヘアー』からサンディエゴの『ドアー』まで、当時ブームのように全国で次から次へと創刊されていたアンダーグラウンド新聞に広告

CamScannerでスキャン

記事を載せ続けた。全部で40誌ぐらいだったろうか。ジョン&ジョエルとの対決の後、アーティは宣伝活動に打ちこんでいた。

アーティ・コーンフェルド　僕は前売りチケットを買う人たちのために、広告にクーポンを付けたんだ。僕らは予算を使い果たしているところだったが、この広告で少なくとも100万ドル以上の売上金が入ってきたんだ。

クーポン広告にはスコルニックがデザインしたポスターと同じように、会場のエリア案内が載っていた。

〈アートショー〉　ハドソン・バレーを囲む森や草原に絵画、彫刻が展示される予定。すでに名のある美術家、ゲットー・アーティスト、未来のアーティストたちと作品について、あるいは自然の美しさや心に浮かぶこと、何でも自由に楽しい会話を！　自分の作品の展示を希望するアーティストは連絡を乞う！

〈クラフト・バザー〉　クリエイティブな小物、ジャンク品を好む向きはバザー・エリアを回れば楽しいことうけあい！　革製品、セラミック、ビーズ、銀細工などの手作り品がいっぱい。占星術チャート、キャンプ衣類、中古靴もあり。

〈ワークショップ〉　ビーズ作りをしたい人、ギターの腕を上げたい人、詩の朗読、粘土作りをした

い人はワークショップをのぞいてみては？　習うだけではなく教える人も歓迎！

〈フード〉　コーラ、ホットドッグ、たくさんの珍しい食べ物。フルーツの盛り合わせを味わってみよう！

〈キャンプ&ウォーク〉　摩天楼のビル群や信号を見ずに3日間の散策をエンジョイ！　日を浴び、凧をあげ、料理をし、澄んだ空気を楽しもう！　テントとキャンプ用品はキャンプ・ストアーで購入可能。

6月の終わりまでに、国中の新聞にフェスティバルの記事が現れ、全米のシンジケート紙は〝リップ・ヴァン・ウィンクル・カントリーでロック音楽が！〟の見出しで紹介記事が載った。ただしこの記事にはウォールキルでのフェスティバル反対の動きやトラブルも詳細に報じられていた。

〝降参〟は僕らの辞書にはない言葉だったから、僕らのクルーは会場で準備作業を続けていた。その数は75人にものぼった。ラウンドトップという、より大きなモーテルに宿を移し、僕ら全員の食事を作ってくれる、まかないの女性たちもリクルートした。

しかし、ウォールキルでは数えきれない障害が僕らの動きを阻もうと準備されていた。僕たちが町議会に提出した分厚い計画書を具体的に実行するには、郡の保健局、町の厚生調査員、町の保健所、州水道局、町の建築指導員、郡の道路局、州運輸局、保安官オフィス、州警察、地方消防団、町の消防委員会、町の警察などの認可が必要だ、と彼らは通告してきたのだ。こんなすべての条件を満たす

ク」は到底不可能なこと」。ミドルタウンのタイムズ・ヘラルド・レコード紙にはこんな社説が載った。

あまりにも厳しい〝規制〟があり、これではわれわれから見ても彼らが毎日法廷で尋問を受け、それに勝つことは不可能と思える。町の役員たちがこの訴訟によって、巨大なアート&ミュージック・フェスティバルの主催者側が、実現への意欲を失うことを望んでいるのだろうが、我々はこの圧倒的な数の訴訟は権力の過剰な濫用ではないかと考える。確かに何千人もの人々が押し寄せる事態が出来した場合に、町民を守るための手段としては適切な政策かもしれないが、〝規制〟によって、たかがひとつのイベントを禁じるのは、あまりに不当な手段ではないか、というのが当紙の意見だ。

たとえば「地域の境界線を超えるいかなる照明も禁じる」とか「地域内でのいかなる音楽的騒音もこれを禁じる」、「地域内を超える悪臭を発生させてはならない」……これらの新規制は本当に町民のためのものなのだろうか、はなはだ疑問に思わざるをえない。8月なかば予定のフェスティバルを仮にこれで開催を阻止したとしても、毎年恒例のオレンジ・カウンティ・フェアは町の代表委員ジャック・スクロッサーと関係者が考えたこれらの光・音・匂い禁止令に違反しないとは考えられない。他にもフェアグラウンドで行われるストックカー・レースは10マイルを超える騒音なしにはありえない。やはり中止を免れることは不可能だろう。

町会委員会はこの怪物のような新政策を破棄して、もう一度、規則の公正な取り決めにその精力を傾けるべきであろう。

町会委員会の作った新法案の住民投票は7月2日に行われることになった。僕らは可決されるだろ

CamScannerでスキャン

うと予感していた。スタンはプーキシー・ジャーナル紙にこう語った。

「正義と公正な政策は、僕らもこれまでに望んできたように、それらの地域では十全に実施されてしかるべきだろう。しかし、理不尽で実現不可能な政策が行われるのならば、僕らは断固、戦うだろう！」

これまで1か月僕たちが戦ってきた数々の戦いとは違い、今度の場合だけは何かとてもイヤな予感がしたものだ。

＊**レニー・ブルース**（1925－1966）痛烈な社会風刺と毒舌で知られたコメディアン。過激なパフォーマンスに眉をひそめた警察が、公衆の面前では禁止されていた四文字語を使用した彼を逮捕。その裁判はウッディ・アレンからボブ・ディラン、多くの知識人が注目する裁判となった。波乱に満ちた人生はダスティン・ホフマン主演『レニー』（1974）で映画化されている。

＊**メリー・プランクスターズ**　1964年、新進作家ケン・キージーのもとに集まり、サイケデリックにペイントしたスクールバスで全国を回り、当時合法だったLSDをパンチドリンクに入れて、意識実験イベント〝アシッド・テスト〟を各地で開催したパイオニア・ヒッピー集団。その模様をニュー・ジャーナリズムの手法で書いたトム・ウルフの『エレクトリック・クールエイド・アシッド・テスト』（邦題・『クール・クールLSD交感テスト』）はベストセラーになった。参加メンバーには、ケルアックの『オン・ザ・ロード』の主人公、ニール・キャサディから、『ホール・アース・カタログ』を出版したステュワート・ブランド、後のジェリー・ガルシア夫人となったマウンテン・ガールら多種多彩な人々がいた。

CamScannerでスキャン

第7章

Yasgur's Farm

ヤスガー農場

CamScannerでスキャン

「万が一フェスティバルの切符を買った4万人の人間がウォールキルにやってきて、イベントがないと知った時、いったいなにが起きるのか！　僕は考えざるをえません」。
「おまえは皆に脅しをかけているのか？」満員の部屋の中に誰かの声がこだまする。
「このことで皆に秘密にすることなんてなにひとつありません！」と僕はその声に答えて言う。
「そもそも秘密にしたことが、今、われわれ全員にふりかかる問題になっているのです！」。
またしても、僕は敵意むきだしのウォールキル町民の一団に対して演説しているところだ。時は7月14日。そして僕はフェスティバルがキャンセルされても、その先には彼らにも、僕らにも、予測不能な展開が待ち受けていることを明確にしておきたかったのだ。室内に充満しているのは怒り……。
それはついこの間、警官隊と若者たちが衝突したデンバーのフェスティバル会場で、さんざん感じてきたばかりではないか……。コミュニケーションの崩壊。それはあの時とまったく同じだ。一体どうしてこんなことになってしまったのだろう？　怖れが怖れを呼び、ふくれあがったかたまりが、理性を持って話し合う気持ちも、フェアプレーの精神も、問題を解決する可能性を探す姿勢も、すべてを飲みこんでしまったのではないだろうか……。
2週間前の7月2日、5時間の会議の後、町の委員会は新たに提出された10ページの、5000人以上の集会禁止法案を5対0で承認した。そして、僕らが要求した補償契約書の金額が100万ドルから50万ドルに引き下げられ、他に毎年恒例のドラッグレースやさまざまな祭り行事が行われるオレンジ・カウンティ・フェアは、この新条例の対象外にするなど、いくつかの修正がされた。
会場予定地での建築許可がおりなかったので、僕らは町の土地管理委員会（ZBA）にアピールを行うため、この集まりにのぞんだところだ。会議の場所はちょうど3か月前に、「ミルズ・インダストリアル・パークでミュージック＆アート・フェアを開きたい」とジョンとジョエルが、ZBAか

らのゴー・サインをもらったのと同じ部屋だった。

僕は詳細に練りあげた計画を、人々にわかりやすく説明できるよう、あらかじめ練習をしておいた。メル、スタン、ドンも明快で説得力のある発言をした。スタンはこのフェスティバルが、「ミュージシャンのみならず、画家、彫刻家、映像・演劇人を含む大規模な文化的イベントであります」、と用意してきた声明文を読みあげ、僕たちが、「フェスティバル会場の牧歌的風景を損ねず、景観の保存へ最大限の努力をする」ことを誓った。

メルは地図や図表を持ちこみ、会場がコンクリートと鎖で周囲を仕切られ、道路や抜け道を計画的に設置して、客を混乱なく会場に誘導する計画を説明した。ファインアートの展示やクラフト品、食料販売の出店、医療用テント、キャンプ場、移動式トイレなど、「音楽の他にカウンティ・フェアでみなさんが見かけるたくさんの行事や施設を用意します」と結んだ。

セキュリティと交通プランはドン・ガヌングが、４００人の警備員が60の無線ラジオで相互に連絡をとり、パーキング場とステージにもセキュリティ・ガードを配置するプランをあきらかにした。そしてさらに周囲の土地を借りて、そこを駐車場に２００台のバスでコンサート来場客を会場に運ぶ予定で、「会場内への車での侵入をさせず。この駐車場でトラブルメイカーたちのチェックをするのにも有効でしょう」と説明した。

そして次は僕の番だ。「僕らはすでにこのプロジェクトに50万ドル以上のお金をつぎこんできました」、僕は彼らに言った。「とうてい取り返すことはできません。フェスティバルの実現に向けて前進しつづけているからです。過去数週間の情況によって作業は大きく遅れを生じています。でも、それは変わることでしょう。このイベントに、このプランに、そしてこの会場地に僕らは１００パーセント、コミットしているのです」。

僕の発言は室内にわきあがる怒号の声にかき消されそうだ。とっさにマイアミ・ポップ・フェスティバルで引き抜かれた2つのピストルの間に飛びこんだ時のことが脳裏に浮かぶ。やばい……こいつはもう、次の会場探しにかかる潮時じゃないだろうか？

ZBAの判定が読みあげられると室内の空気は一気に和らぐ。ミルズの地所に隣接する納屋を改装してつくった僕らのオフィスは「居住区指定地での商業的行為とみなし、町の土地区画条例に違反する。よってただちに閉鎖を命じる！」

町人たちの喝采の中で次のパンチが僕らをみまう。

「48時間以内に閉鎖。退去が行われぬ場合、当委員会は次の手続きを取るものとする！」

予定開催日まで、あとわずか1か月、なのに走っていた馬は待ち伏せにあい、逃げ出すこともできない。それなら、トットとここをずらかるしかないぜ！

次の日、ミドルタウンのタイムズ・ヘラルド・レコード紙は、この悲話をことこまかくレポートしていた。

昨日、タウンホールの混みあった室内で行われ、数時間に及んだZBAの公聴会で、これまでなんとか体面を保っていた住民とフェスティバル主催者たちの節度ある関係が、ついにほころびをあらわにした。あきらかに町民たちは、ウッドストック・ベンチャーズ社からのZBAへの長時間の内容説明にいらだちをおぼえ、フェスティバル側の人間に非難や中傷の言葉を浴びせた。長髪のラング氏（24）が立ち上がって聴衆に向かって発言を始めようとすると、「あいつ、カワいくないか？」とその髪型を揶揄する野次が会場から飛んだ。しかし、「切符を買って失望した4万人の群集がウ

オールキルに到来する可能性がないとは言えない」と氏は不気味な言葉で聴衆に応酬していた。

7月2日以来の一連の出来事を考えると、僕らに会場の建築許可がおりる可能性は、望み薄だった。7月8日、ミドルタウン消防局に出していたネイサンズ社のホットドック他のフードスタンドに人員募集許可の要請がまず却下。ネイサンズ社が要求した午後6時半から午前4時半という勤務予定を長時間過ぎで、時給1ドル75セントは低賃金過ぎるというのが、消防局側の反対理由だった。ネイサンズは彼らの出店を運営するのに300人のバイト人員を必要としていた。こうしてピーター・グッドリッチとホットドック会社との取り決めが壊れはじめた。「開催地も正式に決定されていないのなら、全面的に手を引くぞ！」とネイサンズ社は脅しをかけてきた。

7月11日、メルとローナが会場へメディア陣見学のPRツアーを行った同じ日、CCCから僕らへの禁止勧告の公聴会が開かれた。州高等裁判所のエドワード・M・オゴーマン・オブ・モンローは、まだこの時点でZBAが建築許可の裁定を下す以前での禁止勧告の申し立ては、時期尚早という見解を示した。言いかえれば、もしZBAが僕らを阻止できないなら、彼がそれをしてもいい、ということだ。

2日後、ウルスター・カウンティの議長、ウッドストック出身の共和党議員、クラーク・ベルはマスコミに、彼がロックフェラー州知事に要請状を出したことを公表した。彼は知事にフェスティバルを監視するコーディネイターを任命するよう頼んだのだった。「州兵に出動の態勢を整えることを要請する」と、そして州警察とウルスター・カウンティの保安局は、「万が一、ウッドストックの町にフェスティバル会場を探しに大勢の群集が到来する場合を想定して、その準備を進めている」と集まった記者たちに話していた。彼はボブ・ディランが住み、数年前にビートルズが休暇で訪れたせいか、

僕らが勝手にウッドストックを"ロマン化"していると非難した（実際のところ、フェスティバルの開催中、ウッドストックの町はゴースト・タウンと化したのだった）。
僕らにはウルスター・カウンティにある同名の町、ウォールキルから、苦情が届いていた。コンサートに来る人々が、僕らの会場候補地オレンジ・カウンティのウォールキルと間違えて、自分たちの町を訪れるのではないかと言うのだ。あきらかに、もうひとつのウォールキルの町にもフェスティバルの噂が行きわたり評判していたのだ。

7月15日の火曜日がDデイだった。こちらの人間が誰ひとり出席しないまま、ZBAは僕らの許可申請にイバーンの判決理由をつけて、"却下"の判を押したのだ。曰く、「提示されたプランは不明瞭かつ曖昧で不確実。加えて参加者数もきわめて不確実なものと判断する。広告・宣伝の規模から察するにウッドストック・ベンチャーズ社は、地区指定委員会の決定範囲を超える大人数の参加を意図していると考えられ、彼らの警備計画その他は住民の安全、健康を著しく損ねる危険があると考えられる」。

不信感、ショック、怒り、不満。ただちに現場オフィスから荷物を整理して段ボール箱に詰めながら、スタンは取材に来た記者のひとりにこう語っていた。「そこにフィールドがあって、8月15、16、17日が来たら人々がやって来て、でっかいサウンドを聴くんだ。どうやってそうするかって？　僕にわかるもんか。ただ僕らがフェスティバルをやることは間違いないよ」。

僕も間違いなくやるつもりだった。それは疑いのないことだ。ただし、ウォールキルで、ではない。その時、僕はなぜかホッと救われたような気分になった。そうだ、そもそもはじめから、"ウォールキルは違う"という気持ちだったのだ。そして、予感のとおり、すべては悪化しつづけた。ジョンに

電話すると、彼とジョエルはヘタリこんでいる様子。もうウォールキルが回復することはないと彼らも理解していた。僕は「新しい場所を見つけるさ」と元気づけようとしたが、「だいじょうぶだ！」と何度言いきかせても、もうこれっきりで立ち直れないという様子がありありとうかがえた。

次にアーティに電話を入れて、同じ会話をしたが、アーティは「おまえが楽天的だから、なんだか俺も元気がでてきたよ」と言う。僕も彼の信頼を感じて元気になることができた。残りのチームのみんなとも話し、僕は言った。「クヨクヨするな。きっと僕が落とし前をつけるから。フェスティバルは絶対にやるさ。ただ今は引っ越しの準備だ！」

ZBAの裁定を不服として上告する選択肢もあったが、そんなことをしていれば、コンサートの予定日には遅れてしまう。ジョンはただちに、僕らが不当にも予定地から蹴り出された旨をプレス・リリース。関係者を訴えると発表した。

ウォールキル地区管理委員会他の人間が発表した裁定はまったくの不当なものだ。よってわれわれはただちにNYCとウォールキル町会に対して、これらの不誠実な言動によって生じる損害を補償するよう法的手続きを取ることとする。これまでの野外イベントの歴史の中でもこれほどの規模と、参加者全員の安全を守るためにこれほど周到な準備をしたフェスティバルはない。そうだ、間違いのないように！　ウッドストック・フェスティバルは開催されるのだ！

メル・ロレンス　あの土地に1か月半。僕らのそそいできた汗と情熱は、お金で換算できるわけがない。僕たちは自分たちの手でひとつずつ、すべてを築きあげていた。姑息（こそく）な思いこみと嫉妬（しっと）心で土地から放り出されるまで、あの何百エイカーの土地はひとつのアート作品に生まれ変わっていた

んだ。
柱を立てる穴を掘り、オレンジ・カウンティとロックランドの電力会社が電線を敷こうとしているところだったんだ。僕は電話用の電柱を注文し、それでステージを支える計画だった。遠くから大型トラックがポールを積んで到着し、まさに彼らが荷台から「おろしはじめていいですか？」と尋ねた時だった。オフィスの電話が鳴り、委員会が建設許可を却下したという知らせが届いたんだ。ほんとに間一髪。おろしていれば、簡単にまた荷台に戻せるような代物じゃなかったからね。

大急ぎで、フェスティバルの開催場所を見つけなければならない。意気消沈している暇なんかない。僕は全員に必要な行動に移ってくれと呼びかけ、会場とオフィスの片付けをしている以外のスタッフ全員に、プレスに、地元ラジオ局に、不動産屋に、あるいは誰かに、新しいホーム探しに協力を呼びかける電話をするように頼んだ。

ペニー・ストーリングス　すぐに次のスペースに向かうようにマイケルはギアをトップ・スピードに入れていたわ。もうウォールキルがダメだと決定がくだるとマイケルは絶対にフェスは実現するんだと、逆に自信に輝いているみたいだった。

ラジオでニュースが伝わると、何人かの人間から、ここを当たってみてはと電話が入ってきた。いくつかはとんでもない場所だったが、とにかく教えられた場所は、全部当たってみた。判決の翌日の7月15日、ヴィレッジ・オフィスにいたティシアが一本の電話を受けた。それはサリバン・カウンティの男からのもので、彼は「フェスティバルにピッタリの土地を持っている」と言うのだ。

CamScannerでスキャン

ティシア・バーナス・アグリ　候補地を失った時、マイケルはみんなに「心配ない。僕らはコントロールを失っちゃいない！」と元気づけ、わたしには「ティシア、僕が弁護士事務所に行ってる間、電話にはりついてくれよ」と言った。彼とジョン、ジョエル、アーティは専任弁護士のポール・マーシャルのところへ、次の選択肢の話し合いに行った。すると彼がいない間に電話がかかってきて「僕の名前はエリオット・タイバー。来てほしいんだ！」と。それで「ほんと？　すぐにみんなで行くわ！」。電話を切るとわたしは間髪を入れずにマイケルを呼びだして、もう数分後に彼はわたしを拾って、アップステートに向かっていたわ。

夢の土地へ走れ——開催地の発見

ティシアからのニュースを聞くと、僕はメルとスタンに電話して、ティシアがくれたアドレス、ホワイト・レイクのエル・モナコ・モーテルで合流してくれと伝えた。僕のウッドストック・ベンチャーズからの支給車——プロジェクトの間、借りていた車だが——69年製ポルシェ912はわずか90分で目的地に着くことができた。ティシアと僕はNYステイト・スルーウェイを抜け、ルート17Bへ、さらにカウンティ・ロード52号線へと光速のスピードで駆けぬけた。キャッツキル山脈のサリバン郡、ベセルの町がめざす場所だ。キャッツキルの名とともに、僕の頭には子供の時に家族と夏のバケーションに出かけた時の記憶が甦っていた。

エリオットのくれた指示どおりに行くと、到りついたのは、悲しくなるほどくたびれきったモーテル。剝げかけた看板にエル・モナコの文字が読めたから、ここが僕らの目的地に間違いない。すぐに

建物から小太りの30代初めと思える男が飛び出してきて僕らに挨拶し、エリオット・タイバーだと自己紹介した。僕はすぐに、彼がかつてベンソンハーストの僕の家のすぐ近所に住んでいたエリヤフ・タイチバーグだ、と気づいた。彼はモーテルが彼の両親のもので、80室ある部屋のほんのわずかしか泊り客がいないのだと言う。

まもなく、建物の中から僕らの前に強いロシアなまりの英語を話す、やや興奮ぎみのユダヤ人女性が現れ、たちまちエリオットと口論を始めた。彼女はエリオットの母親だった。彼女はボスのようにやかましく指図するのに、エリオットはニコニコと快活な表情を変えなかった。きっと、この二人の間では、こういうことは日常茶飯事なのだろう。エリオットは僕らと会えたのが嬉しくてたまらないという様子で、自分もなんとかフェスティバルの一員になるのだと決めているようだった。彼は地所内の納屋にこしらえた劇場について話しはじめた。「毎夏、演劇フェスティバルをやっているんだ。もう今年の開催許可も取ってあるから、そう、つまり、きみたちももう許可があるってことさ！」。オフ・オフ・オフ・ブロードウェイ劇団、大地の光劇団(アース・ライト・シアター)はもうそこに2か月も居候状態でみすぼらしいルーミング・ハウスに寝泊りしていた。僕たちは候補地を見る前に、35マイル離れたウォールキルからやってくるメルとスタンを待つことにした。

そして、ついに彼らが着き、「オーケー、エリオット。きみの持っている場所を見に行こうぜ！」と僕は彼に言った。

「ついて来いよ！　自然にできた窪地(くぼち)で、フェスティバルにはきっとピッタリだよ！」、エリオットはニッコリ笑って約束してくれた。

モーテルの裏側に続く道沿いには、崩れかけた色々な建物があり、ジェリー・ルイスからエルヴィ

ス・プレスリー、往年のスターの名が描かれた手書きの看板が、それぞれの建物に付けられていた。バックヤードにちらばったバンガローはもう相当ガタが来ていて、誰も泳ぐ者もいないプールにはゴミが浮かんでいた。なだらかな傾斜の草むらを歩いていくと、地面はぬかるみ、ブーツはズブズブと泥にはまりはじめた。イヤな予感がしはじめた。

進むにつれて、僕らは少しずつ大きな泥の中にはまっていくみたいだった。とげだらけの木とまだ枝もはえない若木がおいしげった沼地だった。重たい足どりで歩き続けることしばし、僕はたまらず声を上げた。「それで、その場所まで後どれくらいなんだい?」。

「ここがそうだよ!」、エリオットは答えると、腕を大きくかくようなポーズで言った。

「もちろん、ブルドーザーで、こんな泥かきだすのはわけないだろ」。

「ここが僕らに見せたいって土地かよ?」、メルは怒ってエリオットにつかみかかった。「バカじゃないのか!?　何をしてるつもりだよ?　本気でこの場所を俺たちが使えるとでも思ったのか?」

できるだけエリオットを傷つけないように、僕も同意した。

「この土地じゃうまくいきそうにないな」。

モーテルのオフィスに戻ると僕はエリオットに尋ねた。

「もしかしたら誰かこのあたりを見せてまわってくれそうな人間を知らないかな?」

「ひとり友だちに連絡してみるよ」。はじめは、かなりしょげかえっていたが、もう彼は元気を取り戻していた。「そいつは不動産の仕事をしているんだ」。

スタンは去っていたが、メルはティシアと僕と一緒に行ってみることにした。30分ほどで、大きなビュイックに乗って抜け目のなさそうな顔つきのモリス・アブラハムという男があらわれた。彼は嬉しそうに僕らを連れて数か所を回ってくれた。

エリオットの所から、ルート17B沿いに2、3マイル走っていくと、僕らは息を飲むほど見事な田園地帯に入っていった。そこは見渡すかぎり緑の草原が広がる美しいファームランドだった。ルート17Bを右折してハルド・ロードへ。さらに4分の1マイル行くと僕らは丘の上に出た。ここだ！

「車を停めてくれ！」、僕は自分の眼が見ている風景が本物かどうか信じられないまま、叫んでいた。そこは僕のフィールド・オブ・ドリームス。このフェスティバルを思いついた時から夢に見ていた場所だった。僕たちはウォールキルを去り、ベセル――〝神の家〟に着いたのだ。車を降りると僕はこの自然がつくった緑のスタジアムの中を歩いていった。なだらかな斜面のいちばん下には少し隆起した場所があり、まるで僕らがそこにステージをつくるのを待っているようだった。他の仲間たちが合流し、メルとティシアと僕は驚きの視線をかわした。「この土地は誰の土地？」、僕はアブラハムに訊いた。

「マックス・ヤスガーさ」と彼が答えた。「マックスはこのあたりではいちばん大きな酪農家で、10の農場と2000エイカーの土地を持っているんだ。僕が電話して、きみたちに土地を貸す話に興味があるかどうか訊いてあげよう」。

「うん、ぜひ、連絡してみてくれ」、僕は興奮を抑えるのに必死だった。マックスという男と会うのに、冷静さを失った姿を見せたくはなかったのだ。また車に乗って走っていくと〝ハッピー・アベニュー〟という標識の通りがあった。僕らは公衆電話のある所まで走り、アブラハムはマックスをつかまえた。彼の家はシンプルな白塗りの農家だった。そして僕たちは40代後半のすてきなカップル、農場の持ち主のマックスとミリアム・ヤスガー夫妻に会うことができた。

「マックス、この人たちはきみの土地の一部を借りて音楽フェスティバルを開けるかって、きみに訊きに来たんだ」、アブラハムが説明した。

CamScannerでスキャン

鋭い知性を持った顔つきのマックスは、まっすぐ僕の眼を見た。

「きみたちはウォールキルで候補地を失くしたって人たちだろう?」、僕は彼の口から次に出る最悪の言葉に備え、一瞬身がまえた。だが彼の言葉は僕の思ったものとは違っていた。

「あっちの連中はきみたち若い者をつかまえて、ずいぶん不誠実な真似をしたようだな。いいとも、僕の土地を見せてあげよう。きみたちの音楽の祭典に都合のいい取引ができるかもしれんしな」。マックスは僕らと一緒に車に乗り、アブラハムは彼に僕たちが今しがたハルド・ロード沿いの野原を見てきたので、「まず、そこから始めよう」と言った。車で走る途中、マックスは自分の土地を指さしながら説明してくれる。僕の心臓は早鐘のように鳴り出し、誰かに聞こえるのではないかと心配になった。またあのフィールドに着くと、僕はティシアとメルに車にいてくれるよう頼み、アブラハムにも、僕とマックスをふたりきりにしてほしいと伝えた。マックスと僕はさっき、僕が心の中で〝帰ってきたホーム〟と感じた場所を歩いた。

「マックス、このフィールドについて話し合えるかな?」、僕は訊いた。「大きさといい、形といい、眺めといい、僕らが考えているフェスティバルには完璧な場所だよ。雰囲気も素晴らしいよ」。マックスの身のこなし方から感じられる何かが、彼とふたりきりで話すように僕に言っていた。「まるでここは、僕らが来ることをはじめから定められていた場所みたいに思えるんだ」。僕はこの場所ですぐにでも契約をかわしてしまいたい気持ちだった。僕らはあのステージを待っている少し隆起した場所まで歩いていった。

「それでどれだけの土地がきみたちには必要なのかな?」、彼が尋ねた。

「そうだな。まずこのフィールドとあなたの持っているこのまわりの土地。あと別にキャンプ場と駐車場用に600エイカーくらいが必要なんです」。

CamScannerでスキャン

「僕はここにアルファルファを植えていて他にもいろんな穀物を作っている畑地を持っているよ」とマックスは言う。「どれくらいすぐに必要なのかね?」

「今と言ったらすぐ過ぎますか?」、僕は笑顔で彼に訊いた。

マックスは笑い声を上げ、シャツのポケットから鉛筆をとりだした。舌先で鉛筆の先をなめるとメモ帳に数字を書きだした。なんてシャープな男だろう。彼はどれだけの収穫をフイにし、また種まきができるようになるまでにかかる費用を計算しているのだった。彼はこの歪状のフィールドにかかる数字をはじきだした。それはフェアな金額に思えたので、僕は即座にイエスと言った。同じように僕らが準備を開始する前に収穫できるかできないか、他のフィールドについても彼が計算して数字を出すことに僕らは同意した。かなりの金額になるようだったが、でも僕はもう知っていた。この土地が僕らのウッドストックで、マックスが僕らの救世主だということを。握手をかわした時、僕は初めて彼の左手には三本の指しかないことに気づいた。しかし、彼の握りしめる力は鉄のように強かった。そして僕は思いあたった。彼がこの土地を自分ひとりで切り拓いたということに。

アメリカン・ファーマーとの出会い

マックス・ヤスガーなしには、ウッドストックは存在しなかっただろう。サリバン・カウンティで彼は自分の言葉を守る、強い意志の男として知られていた。彼は夏の客たちが泊まりにくるゲストハウスを一軒持った農家で育った。彼の父親は彼がまだ十代の時に他界し、彼はその時から家族を支える大黒柱として働かなければいけなかったのだ。NYU(僕の母校でもあった!)で土地法を学んだが、彼の夢は彼の家族の地所を広げ、ヤスガー酪農場をはじめ、サリバン・カウンティ最大の牛乳生

CamScannerでスキャン

有者になること。彼は農場と土地を少しずつ買い続け、彼自身の酪農場を建て、ついにその夢をかなえたのだった。配達ルートを拡大し、巨大な冷凍場と低温殺菌場を建設。だが長年の重労働はマックスの体を痛めつけていた。僕と出会うまでにマックスは何度か心臓発作で倒れ、彼は寝室に酸素テントをはり、いつも近くに酸素タンクを置いて生活を続けていたのだ。

「ビジネスに戻ろうぜ！」――僕はジョンとジョエルに電話を入れ、「フェスティバルに完璧な場所を見つけたよ」、とこのニュースを伝えた。ジョンは感情を抑えた口調だったが、翌日すぐにこっちへ来て、マックスとの交渉に参加することを承知した。まあ、直接自分たちの目でこの土地を見れば、彼もジョエルもこれが奇蹟だということをわかってくれるだろう。それからアーティとジョイス・ミッチェルにも連絡し、みんなに「ホームを見つけた！」、と伝えてくれるように頼んだ。スタンへのメッセージは、〝ただちにこれまでのすべての計画表をかき集めて、大至急ベセルに帰還せよ！〟。メルはウォールキルに戻ると荷造りを急いだ。月曜日にはトラックにすべてを積んでこちらに着くとのことだった。

次の日、ジョンと僕はマックスと、弁護士で財産管理をしている彼の息子のサムと会った。僕らは5万ドルを土地の借用代金として支払い、さらになんらかの損害が生じた場合の補償金を加えて7万5000ドルを支払うことで合意した。ジョンはその額の預金小切手を用意してきていた。その後、僕らがその土地で何ができ、何ができないかなど、あれこれ他の条項について取り決め、その晩、午後10時、僕らはできあがった契約書にサインしたのだった。

ミリアム・ヤスガー　15分から20分あればマイケルは人に魅力を感じさせることができるわ。ちょ

っと話をするだけで人を安心させてしまうのよ。どんな風に進んでいくのか説明してくれたけど、まるですべてはとてもシンプルで、そんなに大したものじゃないから、うまくいくよって感じ。上手に人と調子を合わすことができる人――生まれついての詐欺師なのよ（笑）。あっ、乗せられているなって感じても、マイケルを好きにならずにいられないわ。ジョンは、とてもストレートな人間という印象だったわ。多分それまでわたしが会った人間の中でいちばん高貴な人だった。

ジョン・ロバーツ　交渉が全部終わって、僕らはニューヨークに向かって車を走らせていた。するといつものようにマイケル・ラングが最後に笑える話を決めてくれたよ。「ねえねえ」、彼が話しかけてきたんだ。「これからあんまりたくさんのことが起きるから、契約で決まった禁止事項なんて僕らはいちいちおぼえてないんじゃないかな。それにもちろん……」、ちょっと間を置いて、彼は言ったのさ。「マックスだって、おぼえちゃいないと思うよ」。

ジョエル・ローゼンマン　マックスはどこか他の酪農家と交渉が始まる前に、自分の5万ドルを受け取りたがっていた。こんな言い方をすると彼の名前を傷つけそうだから、つけ加えておかなきゃいけないな。そう、僕らが支払いをすると、その後、彼はビタ一文、僕らに要求しなかったんだ。

7月17日の金曜日頃には、僕らが会場をホワイト・レイクに移していると、ニュースがラジオや新聞で流れはじめていた。はじめマックスは、ちょっとズルく、「まだ土地をわれわれに貸すかどうか検討中だ」と記者たちに語っていた。だけど、僕は彼と固い握手をした時から、それを彼の誓いの言葉と信じていた。彼は誠実で高潔な理想家なのだ。お金のためだけに土地を貸してくれたのではない。

彼のモチベーションはそれだけではなかった。マックスは酪農場をつくって自分でもしたように、僕らにも夢をかなえるチャンスを与えてやりたかったに違いない。僕らがウォールキル会場のために作った地図や詳細なデザインなど、すべての計画を見せた時、彼は目を丸くして、僕らの勤勉さに驚いていた。「これはとても1日や2日のやっつけ仕事でできるもんじゃないな！」。彼は自分の土地に支払いを求め、僕らはそのかわり彼の協力を手に入れたのだった。

必要な許可を得るためにホワイト・レイクの役人たちと会いに行かねばならなかった。しかし、あんな目に遭ったばかりで、僕らは神経質になっていた。その様子を見ると、マックスはできるかぎり助けてあげようと約束してくれ、手始めにその週末、ベセルの町のスーパーバイザー、ダニエル・アマタッチに会わせてくれた。彼は「問題はひとつもなさそうだ」と言ってくれ、7月21日の月曜日に町会委員たちとの緊急の会合をセッティングしてくれた。僕らは猛烈な速さで動きはじめた。

ウォールキルの役人たちはウッドストック・ベンチャーズをミルズの地所から蹴り出してやろうと、厳しい立退き命令を準備していたが、もうそこはとっくにモヌケのカラ！　納屋の扉を閉めようと話している間に、馬たちは逃げだしていた、というわけだ。家具、ファイル、道具類、僕らは納屋にあった物を一切合切トラックに積みこみ、ホワイト・レイクに運んできた。僕はエリオットに交渉して、エル・モナコ・モーテルの全室を、フェスティバル会期中から、必要となったら9月まで借り切ることにした（これでモーテルは破産をまぬがれたのだった）。またモーテルはチケット発売所にもなった。僕らはくたびれた3つの部屋をオフィスにして、そこに引っ越し、残りの部屋はすべてスタッフとクルー用の宿泊所にした。さらに近くのカヌネオンガ湖にあった古いニューヨーク電話局の建物を借りて、そこにフェスティバル統括本部を設置した。マックスの地所のすぐそばに、ダイヤモンド・ホースショーという閉鎖されたホテルがあるのをペニーが見つけてきた。住めるようにするには修理

が必要だったが、そこは150人あまりの作業員を泊めるには最適の場所。ホテルのオーナーたちは〝曲聴かせてもらえればいいよ〟と快く使用を許可してくれた。クリス・ランガートと彼のチームがすぐさま修復工事にかかり、水も電気も使えるようになった。

月曜日には、電気会社、電話会社に連絡して、会場用地にパワーとコミュニケーション手段を確保。ジム・ミッチェルはステージをつくる場所のすぐわきにトレイラーを何台か運ばせ、そこが会場のプロダクション・オフィスになった。ミルズ会場ではトラックで水を運ぶ計画をしていたが、マックスの地所は、なんとも便利なことに、フィリピーニ・ポンドという名の美しく澄んだ小さな湖に隣接していた。

スモールタウンの陰謀

7月19日のキングストン・フリーマン紙はこう報じていた。

ウッドストック・ベンチャーズ社は、サリバン・カウンティで二人の人物と接触して、この地域でのフェスティバルの開催の可能性を打診した。フリーマン紙がベセルの町に2000エイカーの土地を持つ農場主マックス・ヤスガーに、彼の地所でのフェスティバル開催の可能性について尋ねたところ、ヤスガー氏は、まだ決めてはいないが、今後、主催者側の代表者と面会して話し合う予定とのこと。

ホームレスのフェスティバルについては今日さらに不思議な展開があった。ベセルの町の住人が、月曜日に記者会見を開き、〝ホワイト・レイク・ミュージック・フェスティバル〟について発表す

CamScannerでスキャン

たというのだ。しかし、このフェスティバルがアクエリアン・エキスポジションと同じものだという噂について、彼、エリオット・タイバー氏はコメントをさし控えている。

僕はエリオットに僕らをこの土地に招いてくれた電話をくれたことでは大いに感謝していたが、不用意な発言はしてほしくなかった。僕は記者会見をキャンセルし、もしことわりなしに彼がまた口を開くようなことがあれば、僕らはすぐにモーテルを引き払うぞ、と釘を刺した。町の委員たちとの会合の前に、事を荒立てるような発言はしてほしくなかったのだ。

もうひとつの問題は、やはり感謝すべき、われらが不動産エージェントのモリス・アブラハムが運んできた。彼は、もし僕らが1万ドルを用意すれば開催に必要なもろもろの許可認定を、町のさる役人たちの手で、こちらの希望どおりに確かなものにできるから、と僕に言いよってきたのだ。マックスを紹介してくれたことへの謝礼はきちんと支払うつもりだったが、これは別な問題。もし、その金を払えば、僕らの努力すべてに泥を塗ることになり、いつか戻ってきて僕らの頭を叩くことになるだろう。カルマはすべての方角に働くもの。スタンと話し合い、僕らはこのことをマックスの耳に入れておこうということにした。マックスの家に向かう途中、モリスと委員会の誰かに金を渡す代わりに、善意のあかしとして地元の病院に基金として寄附金を出すほうが賢明ではないか、と新しいアイディアが浮かび、僕らの意見は一致した。

こんな支払いの要求があったと話すと、マックスはカンカンに腹を立てた。

「モリス・アブラハムに賄賂の金を出すなんて、もってのほかだ！　この話の陰に誰がいるのか突きとめて、きみたちの祭りにどんな障害もないようにしよう。もし、障害があれば、の話だがな。この薄汚い賄賂話を公表してやるぞ！」

いまやマックスは僕らがもっとも信頼できる心強い味方だった。病院への献金のアイディアにも賛成してくれ、僕らは頑張って前進しようと握手をかわした。ジョンもすぐさま、この案に賛成してくれ、僕らは寄附金をベセル・メディカル・センターに贈った。

内なるカルマに導かれて

7月20日、日曜日、僕らは翌日のタウンホールでのミーティングの準備をしばし休み、アポロの月面着陸とニール・アームストロング宇宙飛行士が月の上を歩く姿に見入った。なんて皮肉な話だろう！ と僕は思った。アメリカは月に人間を着陸させたのだ。僕らは地上に着地するだけで必死になっているというのに……。

月曜の夜、ドン・カヌング、メル、スタンと僕は、町のスーパーバイザー、ダン・アマタッチとベセル町会委員会、ベセル土地区画委員会のメンバーに会いに行った。そこは小さな部屋で僕らはテーブルを囲んで座った。ベセルの町の人々も姿を見せたが、数人が立てるぐらいのスペースしかなく、窓から見物する人たちもいた。

メルがマックスの土地の利用の仕方をすばやく絵にして説明し、それは土地区画委員会の資料ファイルに収まった。僕らはフェスティバル会場をホワイト・レイクの東3マイル、ルート17Bとペリー・ロード、ハルド・ロード、そしてウエスト・ショア・ロードに囲まれた地域で開きたいと申し入れをした。

僕らが雇ったサリバン・カウンティの弁護士、リチャード・グロスが委員たちに、ベセルの町の主席代理人、フレデリック・スシャット氏から、〝マックスの地所は商業用、農業用の土地として認定

CamScannerでスキャン

されているから、土地管理法の問題はない〟との証言をあずかっていると話した。僕らは委員会の承認をもらえるよう、残りの建築プランも早急に提出すると約束した。

マックスは僕らのために、委員たちにフェスティバルの開催を認めてくれるよう、雄弁に語ってくれた。

「彼らが求めているのはフェアプレイ、それだけだ。かつてわれわれは髪を長くのばす人たちといううだけでバリアーを張ったが、それなら長いコートを着た連中にもバリアーを張ればいい。そして別な教会にでも行くこった」。

「私はそれが法的に問題なければ、邪魔しようとはせんよ」、僕らのプレゼンが終るとアマタッチ氏は告げた。「どんなPだろうが、Qだろうが、法を犯さなければ、この町に来るすべての人を歓迎しよう。みんなが法の下で平和に生きることが肝心だ。彼らがフェスティバルをやっても問題なかろう」。

3時間の協議がすみ、投票が行われる間、僕らはタウンホールの外で待った。あの部屋で僕らの運命が決まろうとしている！　僕は階段に腰かけて、不思議な宇宙の力に導かれたと思えるこの間の出来事を振り返っていた。ウォールキルを追放されて、わずか数時間で、マックス・ヤスガーとこの素晴らしい場所と出会えたのだ。単なる偶然とか幸運という言葉ではとても説明できることではない。そう、これはきっとカルマの力が起こしたこと——僕らは来るべくしてここに来たんだ。僕は柱廊の屋根にたなびくアメリカ国旗を見上げた。〝必要な認可を僕らは手に入れるだろう！〟、その時、僕にはわかったのだ。

どちらの委員会も満場一致で僕らを支持してくれた。ミーティングが終わった後、ドン・カヌングは集まった記者たちにこう語っていた。「僕らに青信号が出た——フェスティバルは計画どおりに開催される！　僕らはみんなとても興奮しているよ。だってわかるだろう、巨大なハードルを今跳びこ

えたんだから」。

委員会との会合の席で、僕らはフェスティバルに地元の企業もぜひ参加してほしいとアピールをした。こうしてホワイト・レイクの小さなビジネス・コミュニティの人々は両手をあげて僕らを歓迎してくれることになった。ガレージのオーナーでベセル商工会議所の会頭、ケン・ヴァン・ローンは、メディアにこう語った。「これはサリバン・カウンティ始まって以来、最大の出来事だろう。町の経済を活性化する強力なカンフル剤だ。宿泊から食事、車のメンテ、その他いろいろな形でフェスティバルはベセルへの多額の消費をうながしてくれるだろう」。後で彼が計算したところ、僕らは移ってから最初の10日間でざっと20万ドルをベセルの町に落としたのだった。

ベセルの人口はわずか2366人。特にサリバン・カウンティのこの地域は1940、50年代にリゾート地として好景気に沸いたが、やがてそれまで夏の休暇にやってきた家族連れは、他のもっとエキゾチックな保養地へ出かけるようになり、それ以後、景気は停滞してつらい時代を過ごしていたのだった。この地方の主要産業は観光と農業。近くのリバティの町にはネヴィル、グロッシンガー、コンコードなど、いくつか大きなホテルがあり、そこはニューヨーク・シティからやってくる上品な靴をはいたユダヤ系行楽客で賑わっていた。だが、もっと田舎のこの地域は壊れかけたバンガロー村や色あせたモーテルの建物がポツンポツンとあるだけ。近くのモンティチェロにはレース場があったが、多くの人を集めるアトラクションとはとても呼べなかった。ベセルの町は僕らが彼らを必要とするのと同じくらい、僕らを必要としていたのだった。

だが、すべての町民が僕らを歓迎していたわけではなかった。日曜日の夜、誰かがマックスの地所への道路の入り口に大きなベニヤのプラカードを置いていった。そこには恐ろしい文字でこう書かれ

CamScannerでスキャン

ていた。

〝マックスのヒッピー音楽フェスティバル阻止！　この町に15万人のヒッピーは要らない！　ミルクを買うな！〟

またしても僕らには悪い予兆だった。だが、マックスはその悪意のこもったメッセージを見て、逆に僕らのフェスティバルを実現に向けて、いっそう強く支援しようと気持ちを固めていた。マックスはそういう男なのだ。

すべての地元新聞が僕らの灰からの再生ストーリーを記事にしていた。「ウォールキルの人々と比べた時、この町での皆さんの歓迎は……」、ローナの発言が載っていた。「本当に圧倒されちゃうわ！郡、町、村の役職の方々からも素晴らしい協力をいただいているんです！」。ポール・マーシャルはニューズデイ誌に、この会場地への引っ越しに10万ドルがかかったと話していた。

別の新聞には、すでにチケットは7万枚売れているとの記事。この数字が伝わると、その日、ダン・アマタッチのところに心配する町民からかかってきた電話の数は20件あった。「穀物の畑に群がるバッタどもより、始末ワルいかもよ」、と住人のひとりはタイムズ・ヘラルド・レコード紙に語っていた。それでも今のところ、僕たちを恫喝（どうかつ）するような法的な動きはないようだった。

マックスは僕らをかばうように発言を続けてくれた。「彼らはとても良い子どもたちだ。僕は彼らみたいな連中は大歓迎だ」、と彼はハッケンサック・レコード・コール誌に語っていた。「僕は彼らとは世代も違うから、別のことをしてきた。でも彼らは長い髪をしてるから、法律を破るなんて思わない。そんなのはバカげた思いこみだよ。これは何か違ったものになるだろうよ。僕は何の不安も感じていないよ」。

住民たちの不安を和らげたいと思った僕は「フェスティバルの参加人数について誤解があるようで

す。新聞等では15万人と報告されていますが、あくまでもこれは3日間通じての合計数であり、一日の参加人数は一度に5万人前後となるでしょう」とコメントを発表した。これはちょっと眉唾だったが、ベセルでのこの最初の時期には必要だったのだ。

「会場周辺の住民の皆さんは、自分たちの地所へ迷惑や被害が及ぶのではと心配される方もいらっしゃるでしょう」、とウエスも隣接住民をさとすように発言した。「私たちは一日24時間それらの地所のまわりに警備員を配置します」。ウエスはさらに交通手段にはヘリコプターが使われ、誰か急患が出て病院に行く必要が生じた際にもヘリコプターが輸送することを、救急車、医者、看護婦たちが常駐することも約束した。

ジョン・ロバーツ マックスが加わったとたんに、僕らはなぜかとても気前よく、太っ腹な気分になった。あまりに事態が早く進んでいき、もう損得勘定なんてどうでもよくなってきたんだ。損得といえば、僕は、誓ってもいいが一度だって、そういう考え方はしなかったんだ。とにかく、やりとげる。大事なのはそのことだけ。今から振り返ってみれば、あの段階で僕はよくそこまで不注意になれたもんだって思うよ。だけどあの1週間前、僕らは完全にそれまでの努力をパアにされてしまったところだったんだ！　7月1日までに使ってきた75万ドルが水の泡と消え、60万ドル分のチケットを返済する破目になった。あわせて約130万ドルの大損害さ。それに比べれば、他のなにもかもが思いがけない儲けものって気分だった。もう僕らはこの先いくらの収入があるかなんて計算もしなくなっていたんだ。さもなければフェスティバルなんてできっこない。どんな付随条件があろうと、どれだけチケットを売ればトントンになるかなんてもう考えてる余裕もない。毎週チケット代が何万ドルも入ってきて、いつも資金繰りはなんとかうまくいっていた。ホワイト・レイク

CamScannerでスキャン

へ移ることになったあの最後の週までね。膨大な金額の出費に、もう収入はゼロ。出費のいくつかはまったく予期もしていなかったことにあてるものだった。そもそも最初の予算案なんて窓の外に捨てちまったよ。

奇蹟に向かって走れ――会場づくりの日々

すべては会場の敷地でいっせいに始まった。普通なら3か月はかかるだろう仕事を28日間でやらなければいけない。7月21〜22日の月、火曜日、建築資材を積んだトラックが到着した。そして僕らは会場のレイアウトを決定した。電力会社を説得して8マイル離れたところから電線を敷いてもらった。地元の電話会社の代表はバックステージ付近のプロダクション・トレイラーにたくさんの電話線を敷いてくれという、僕らのリクエストに難色を示した。出店エリアに100個の公衆電話をつけることも。最終的に、クリス・ランガートが、知り合いのオハイオの電話会社の重役に連絡を入れて、飛行機で来てもらい、彼は僕らのコンサルタントになって、僕らのわずかな持ち時間内に、このとても不可能に思える仕事を何としてもやりとげるようにと地元会社に圧力をかけてくれたのだった。電話会社はその設置代に2万ドルを請求してきた。でも会場に来た若者たちのほとんどがかけた電話はコレクト・コール。ニューヨーク電話会社はおかげで大儲けをして、その請求は帳消しになったというわけだ。

みんな何かにとりつかれたように動きまわっていた。もっとも優先しなくてはいけないことは道路作りと配管システムの設置だった。ところがマックスは地面を掘って地下にパイプを埋められるのは勘弁してくれと言う。それですべてがややこしくなってしまった。だがクリス・ランガートがうまい

方法を考えついた。これは都会にインフラを設置するのと同じこと、と見事なレイアウトを思いついたのだ。しかし、わずか1か月以内にやるのはかなりの重労働だった。僕らはまた、給水のためにいくつかの井戸を掘る許可をマックスからもらった。

メル・ロレンス　僕らは水のある場所を見つけられる魔法使いのような男を雇ったんだ。彼はアルビーノで〝神の杖〟を持って、あちこち叩いてまわった。でも驚いたことに彼がうなずいて掘った8つの穴のうち5つから水が出てきたよ。

一方、ウエスは新しいパーキング手段を考えていた。パーキング用の土地を周囲の地所から新たに借りなくてはいけないことがわかった。できればウォールキルで考えていた駐車場からバスによる会場への輸送案をやりたかったが……。結局、このパーキング場の借地代のためにさらに2万5000ドルが支払われた。

エル・モナコ・モーテルのオフィス前にいくつかテーブルを並べて、僕らは会場作り他の人員募集を始めた。半径100マイル以内の30歳以下、ハンマーが使えるすべての人間が現れたようだった。僕らは大工と作業員70人を雇い、70×80フィートのステージ、照明とサウンド・タワー、アーティスト・パビリオンづくりに当て、別の50人あまりで出店エリアづくりを頼んだ。こうしてわずか1日か2日のうちに200人を超える人間が、会場、キャンプ場作りに汗を流していた。そしてその中にはロード・ホッグ号でニューメキシコからやってきたホッグ・ファームの第1陣もいた。数週間で会場づくりに当たる人間の数は1000人を超えていった。

チップ・モンクとスティーヴ・コーエンが、彼らのブループリントとデザインを持って到着した。

CamScannerでスキャン

スティーヴはステージ建築のリーダー役に、かつてフィルモアの工事にも参加した彼の右腕、21歳のジェイ・ドレヴァースを連れてきた。メルはあの電柱を積んだトラックをホワイト・レイクに走らせてきた。僕らはゴミ処理会社と契約して、会場のゴミをブロック状に固めてから捨てるコンパクター車を派遣してもらうことにした。また、ポートサン社にも移動トイレの設置サービスを手配した。

会場作りに取りかかった初めの日から悪天候がベセル会場での作業の足をひっぱった。フィールド区分をするのに雨はひどく迷惑だったし、道路づくりも遅々として進まなかった。区分け作業は前につけたマークがわからなくなり、3度も4度もやり直し。完成した道は、ひどい土砂降りでたちまち泥に飲みこまれてしまった。作業クルーのほとんどがおいしげった草と泥に足をとられ、あるいはひざまでびしょ濡れになって仕事を続けなければならなかった。

それでもローナは新聞の取材に笑顔で答えていた。

「若い人たちはこんなことヘッチャラ。気にもしていないわ。だってこれは彼らの好きなことですもの。雨の中でハンティングしたり、魚釣りするのと同じよ」。

メル・ロレンス　僕らはとてもまとまったひとつのチームだった。木を切り倒して出店のスタンドをつくる奴もいれば、ステージづくりを頑張る奴、木々の間に道をつくる奴、みんなで一緒にひとつの目標に向かっていたんだ。この中に僕らを連れてきたのはカルマの動きなんだって、僕はみんなに言ったものさ。もし、この美しい土地をトラックなんか乗り回さないで、ていねいに道をつくるようにいつも大事にリスペクトの気持ちを持って接すれば、それはいつかカルマとなって僕たちのところへ帰ってくるんだって。誰もがそういう考え方を持って、作業にあたっていたんだ。ずっ

と狂ったように雨が降りつづいていたね。みんな週に1回、地元のクリニックへ出かけてB－12注射をしてもらったけど、あれは最高だったな！

毎朝起きると、その日中にしなければならない難しい仕事が150はあった。僕はそのひとつひとつをやっつけていった。次の朝、目がさめるとまた最初から同じように繰り返す。でも僕はその瞬間、瞬間の中にいたから、なんのプレッシャーも感じなかった。僕はチャレンジすることが好きで、バレーのように動いていく一場面、一場面が好きだったんだ。そのうち他の大勢の連中にもそういう姿勢が伝わっていった。スタッフの誰かが森の中をさまよって行く、ブツブツと「俺はもうやめた。これ以上ガマンできないよ。みんな俺の仕事にしやがってよ。絶対できっこないぜ、こんなこと！」なんてつぶやきながら。そこで僕は彼を連れ戻しに行った。「きついのはわかるよ。プレッシャーだってことも。でも、きみだけじゃないよ。こいつは俺たちみんなの背中に乗ってるんだ。ねえ、信じてくれ。みんなで一緒にやれば、僕らはきっとやりとげられるさ！」。

誰もが僕らが何に対して戦っているのか、わかっていてくれた。電話会社の男たちは、僕らのために真夜中まで頑張ってくれた。電力会社の男たちも同じだった。誰もが本当に真剣に、全力で自分の仕事をしていた。そしてその空気はみんなをつつんでいった。限られた時間の中で、ひとりひとりがヒーローのように戦っていたのだ。僕らみんなの夢の実現に向かって。

ジョエル・ローゼンマン　マイケルはいい連中を集めていた。でも僕の思うところでは、あいつは誰が必要なのか、はっきりとはわかっていなかったんだ。それで、あいつもこいつもと本当に必要な人間の倍も集めてしまった。予想以上の出費になったよ。でもそこから先は彼の功績だと思う。

CamScannerでスキャン

このプロジェクトに必要なことを見事にやってのける連中を彼は上手にまとめたんだから。

良くも悪くもすべてを活かせ——キャンペーン大作戦

ニューヨーク・オフィスから、僕たちは会場の変更をマネージャーやエージェントに知らせはじめた。すでにかわした契約書もその部分を書き換えなくてはいけない。ほとんどのアーティストがクールに受け止めてくれたが、クリーデンス・クリアウォーター・リバイバルはマネージメント会社を通じて「牛の牧場なんかで演奏するのはゴメンだ！」と言ってきた。でもさいわいなことに彼らは気持ちを変えてくれた。ジェフ・ベック・グループもキャンセルしてきたが、理由は会場変更によるものではなく、バンドのリード・シンガー、ロッド・スチュワートがフェイセズに参加を決め、グループが解散してしまったからだった。

出演者リストに僕は新たにブルース・ロック系のアーティストを加えることにした。テキサス出身の凄腕スライド・ギタリスト、ジョニー・ウィンター。イギリスから元ジョン・メイオールのグループのドラマーがリーダーのキーフ・ハートレー・バンド。もうひとつのブリティッシュ・グループで、早弾きギタリスト、アルヴィン・リーをフィーチャーしたテン・イヤーズ・アフター。さらに僕は前にクリーム、ヤングブラッズなどの仕事をしてきた名プロデューサー、フェリックス・パパラルディが結成したパワー・トリオ、マウンテンをラインアップに加えた。ベースはパパラルディ、フロントマンのレスリー・ウエストは力強いヴォーカルとホットなギタープレイで人気を集めていた新人だった。これらのバンドはみんなロバート・ジョンソンやマディ・ウォーターズといったオリジナル・ブルースマンの強い影響を受けて現れたのだ。

CamScannerでスキャン

ナ・ナも僕が目をつけていたグループだった。メンバーの多くはコロンビア大学の学生で服装もフィフティーズ・スタイル、クラシック・ロックンロールを歌う姿はまさにあの時代そのもの。バンド名は往年のドゥワップのヒット曲「ゲット・ア・ジョブ」の歌詞の一部からとったもの。ポマードで髪をなでつけ、舞台を踊り、跳びはねる彼らのアクトは、ロックンロールのルーツを思い出させると同時に、聴衆に軽い息ぬきをさせるのにうってつけだろう。そう考えて僕は彼らを出演者リストに加えることにしたのだ。セットが終わった後、楽屋へ行って、出演日の都合を訊くと、彼らは思いがけぬ招待の申し出にビックリしていた。もう、この頃にはみんなウッドストックのことを知っていたのだ。

スライ&ザ・ファミリー・ストーンはヘクター・モラレスを通じてサインをもらった。彼らのリズム&ブルースとソウルを融合させたサウンドが僕は好きだった。スライの書く詩もディープだった。彼らは早い時期にブッキングしたグループのひとつだったが、スライが突然ショーをキャンセルするという噂を聞いて、僕は出演リストから削ったのだった。だが、ヘクターが「夏のツアーもきちんとやってるし、ウッドストックは彼らにとっても大きな意味を持つから」と僕を再説得。僕はうまくいくことを祈りながら再ブッキングしたのだ。ムーディ・ブルースもラインアップに入れていたが、バンドのマネージャーから「ロンドンでレコーディング中のアルバムが思いどおりにいかず、アルバムを完成するためにアメリカ行きをあきらめざるをえない」と連絡があり、僕もあきらめざるをえなくなった。

ちょうどウォールキルで何もかもがメチャクチャになっていた頃、アップルから僕あてに一通の手紙が届いていた。ジョン・レノンは相変わらずアメリカへの入国が認められていなかったが、彼らは

CamScannerでスキャン

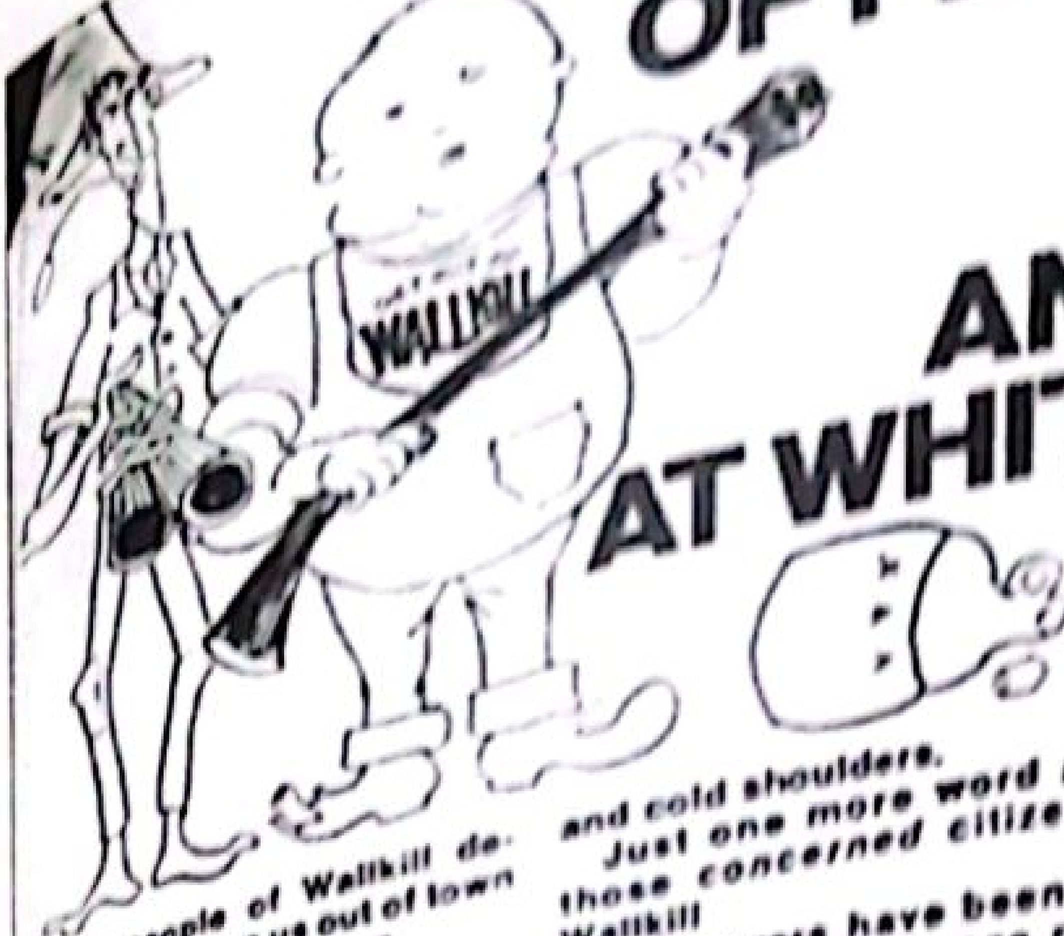
ジェームス・テイラー、ビリー・プレストンというニュー・アーティストの出演オファーをしてきた。またアップルはこちらが希望するなら、会場で上映するための実験映画と、実物大の銀色でプラスチック製のプラスティック・オノ・バンドの模型を送ってもよいと通知してきた。しかし、会場引っ越しのゴタゴタでその手紙はどこかにまぎれこんでしまい、気がついた時は、時すでに遅かった。もし、あのウィークエンドに間に合っていたら、みんな喜んでくれていたかもしれない——たとえ、プラスティック・オノ・バンドのコンセプチュアルな立てかけ模型でも……。

ウォールキル騒動の以前からも、ウッドストックの噂は至るところで飛びかっていた。いくつかの新聞・雑誌は「ジョン・レノン、そしてもしかするとディランも出演か？」と書きたてていた。でも今やそんな噂にいちいち答えているより、コンサートが行われると伝えることが先決だった。ウォートーク社のスタッフは電話をかけまくり、何百という新聞社に会場変更を知らせるプレス・リリースを送ってくれた。

ジェーン・フリードマン　あの時点で私たちは、ウッドストックはどうなるのかと、みんなから質問攻めにされていた。つぶれてほしくなかったから、毎日情報を流し続けていたわ。あのとんでもない騒ぎが起こった時は、このニュース・リリースを読むあなたはわたしたちの敵？　それとも味方？　って、はっきり問いかけをしたわ。あれはすぐれもののキャンペーンだったわね。

国中にそのニュースが流れたほど、ウォールキル会場を失ったことは、逆に最高のパブリシティ効果を上げることになった。良くも悪くもすべてを活かせ、と僕らはニューヨーク・タイムズやデイリー・ニュース他の新聞に何が起こり、かくして新しい会場に変更された旨を広告として載せることに

TO INSURE THREE DAYS OF PEACE & MUSIC WE'VE LEFT WALLKILL AND ARE NOW AT WHITE LAKE, N.Y.*



Some people of Wallkill decided to try to run us out of town before we even got there.

They were afraid.

Of what, we don't know.

We're not even sure that they know.

But anyway, to avoid a hassle, we moved our festival site to White Lake, Town of Bethel (Sullivan County), N. Y. We could have stayed, but we decided we'd rather switch now, and fight Wallkill later.

After all, the whole idea of the festival is to bring you three days of peace and music.

Not three days of dirty looks and cold shoulders.

Just one more word about those concerned citizens of Wallkill

Our lawyers have been instructed to start damage proceedings immediately.

Now to something a bit more pleasant.

Our New Site.

It's twice the size of our original site. (Who knows, maybe the people of Wallkill did us a favor?) That means twice as many trees. And twice as much grass. And twice as many acres of land to roam around on.

For those of you who have already purchased tickets, don't worry. Your tickets, even though printed Wallkill, will of course be accepted at our new festival site at White Lake in the Town of Bethel.

We'd also like at this time to thank the people of Bethel for receiving the news of our arrival so enthusiastically.

See you at White Lake, for the first aquarian exposition, Aug. 15, 16, and 17.

Woodstock Music & Art Fair

White Lake, Town of Bethel (Sullivan County), N.Y.

N.Y. Daily News July 26, 1969

CamScannerでスキャン

した。再度アーノルド・スコルニックを起用して、ふたりのヒルビリー男がショットガンを持って、密造酒のギャングの横に立っている絵を風刺のきいたタッチで描いてもらった。

広告は7月25日から1週間続けて各紙に載った。今あらためて見ると、ちょっと重たすぎる感じもあるけれど、笑えるものだった。おそらく、あの広告でさらに何千枚かのチケットが売れたのだろう。

7月25日にはヴィレッジ・ゲイトで、〝ゲットー・アーティスト〟たちがウッドストックで展示ができるように、基金集めのベネフィットが開かれた。これも僕たちが計画した宣伝戦略の一部で、いろんなタイプのアーティストにフェスティバルの存在を知らせ、彼らの作品を会場に展示したり、売ってもらうためのイベントだった。ゲットー・アーティストは後のグラフィティ・アーティストの先駆けで、ベネフィット・コンサートに参加してくれたのはマリアン・マクパートランドやレス・マッキャン、ロバータ・フラックなどの歌手たちだった。

ジョン・モリスはニューメキシコからホッグ・ファーマーたちがチャーター・ジェットで飛んでくるのなら、その飛行機にネイティブ・アメリカンのアーティストたちを同乗させて来てもらうのはどうだろう、とアイディアを出してきた。彼はホピ族の何人かのメンバーに連絡をとり、参加に応じてくれたアーティストたちが8月7日にヒュー・ロムニーの一行と飛んでくることになった。

7月28日はホワイト・レイクでの最初の記者会見の日。そしてタウンホールで警察、地元の役人、州の保健局の代表とのミーティングの日だった。それはフェスティバルのオーケーをもらってから、いちばん殺人的に忙しい週だった。

そして、またトラブルが頭をもたげだしていた。タウンホールにはウォールキルのCCCそっくりの怒れる町民たちのグループが現れたのだ。しかも、なんとグループの中には一週間前にフェスティバル開催に賛成票を投じた地区管理委員もふたりまじっているではないか。マックスの隣人の何人か

CamScannerでスキャン

と、数人の住民が一緒になって、ウッドストックは「大衆を不安にさせ、悪い病気をもたらし、交通を混乱させ、火事やさまざまな弊害をもたらす」とめいっぱい抗議の文句を並べていた。フェスティバルを阻止するためなら何でもやりかねない勢いだった。僕たちは地元の役人たちを相手に、8時間かけて質問に答え、僕らの計画を説明した。最終的に彼らはもうフェスティバルに関してのタウン・ミーティングを続ける時間も理由もない、という僕らの言い分に同意してくれた。

だが、勝利を祝う時間は短いものだった。次の日、僕はキャッツキルのジョージ・コブ判事のもとに出頭するようにという通知を2通受けとった。ひとつは、サマーキャンプ場を経営する4人のグループからで、僕らが彼らのビジネスの妨げになるという訴え、もうひとつはマックスの地所の隣のサマー・ホームのオーナーからのものだった。

〝ウッドストック・ベンチャーズ社のアクエリアン・エキスポジションが先週、安眠していた薔薇のベッドは、もう棘（とげ）のベッドに変わったのだ〟とは、ニュースを伝えたタイムズ・ヘラルド・レコード紙記者の名文。

まさにそのとおりだよ……としか僕には言えなかった。

© HENRY DILTZ

ホワイト・レイクでのフェスティバル開催を確実にするための町会委員とのミーティング風景。ベセルの町の人々が窓からのぞいている。

© HENRY DILTZ

僕とクリス・ランガートとティシア

マックス・ヤスガー農場、開催8日前の風景

© HENRY DILTZ

CamScannerでスキャン

カウネオンガ・レイクのＮＹ
テレフォン・ビルのウッドス
トック・ベンチャーズ社本部

© HENRY DILTZ

ステージ上にターンテーブルを作る(8月11日)

© HENRY DILTZ

舞台デザイナーのスティーヴ・コーエンと
僕と舞台建設監督のジェイ・ドレヴァーズ

パイプをくわえたマックス・ヤスガー(左)と僕

© BILL EPPRIDGE

© HENRY DILTZ

アーティスト、ロン・リッツ。

© HENRY DILTZ

キッズ・パークのジャングル・ジム

バスター・シンプソンが作った木工彫刻作品。

© HENRY DILTZ

CamScannerでスキャン

© HENRY DILTZ

© HENRY DILTZ

ステージの下で配線作業中のチップ・モンク

吊り上げ飛行中

映像作家のマルコム・ハート(中央)と
マイケル・マーゲッツ。地元の車修理工場で。

© HENRY DILTZ

CamScannerでスキャン

© HENRY DILTZ

アクセサリーの
ショッピングで
一息つくペニー・
ストーリングス

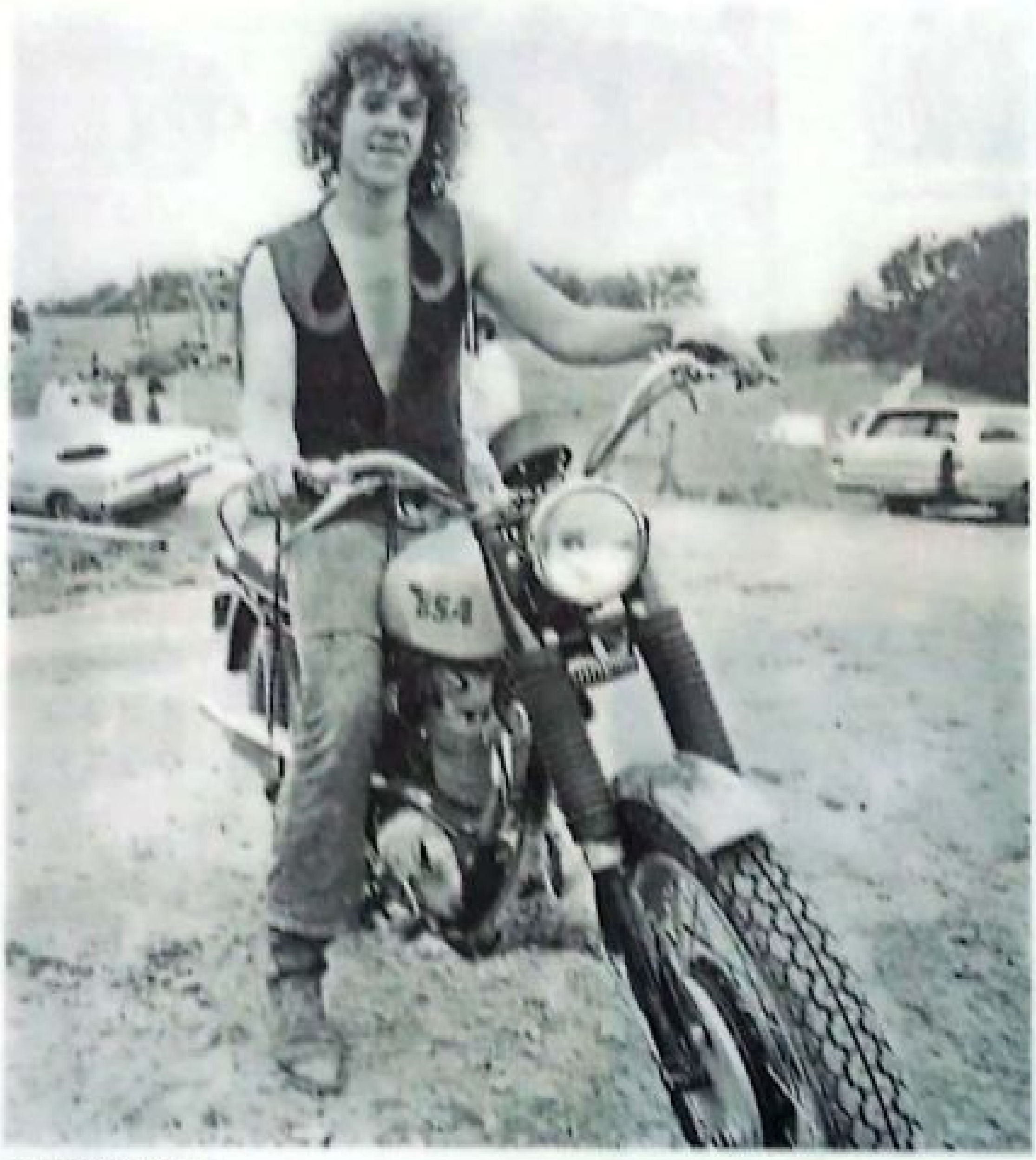
© PENNY STALLINGS

土地整備中の
ジーン・ウォード

キャンプ・エリアを点検中の僕

© PENNY STALLINGS

ホワイト・レイクのティシア。
後方右にピーター・グッドリッチ



© HENRY DILTZ

CamScannerでスキャン

© HENRY DILTZ

ホッグ・ファームとキャンプ場作り（左から）トム・ロウ、ヒュー・ロムニー、ひとりおいてスタン・ゴールドスタイン

© JIM MARSHALL

アーティとリンダ・コーンフェルドと僕

© HENRY DILTZ

左から
ヒュー・ロムニー、
アビー・ホフマン、
ポール・クラスナー

輪をつくってヘリコプター着陸場所を知らせるホッグ・ファーマーたち

© HENRY DILTZ

第8章

Bathel

ベセル

CamScannerでスキャン

「長髪の若者がジョイントを回してきたら、どうしますか?」。
「すぐに逮捕します!」。
「残念ながら、あなたは雇えません」。

マンハッタンのフィルモア・イーストの隣のラトナーズの店の2階では、ピース・サービス部隊の応募者への面接が行われていた。面接官はウエス・ポメロイ、リー・ブルマーに、イースト・ヴィレッジ9分署の署長ジョー・フィンク、南サンフランシスコの元警察署長ジョン・ファブリの4人。彼らは応募してきた大勢のニューヨークの警官にインタビューをして、その中からウッドストックで、僕らの意図にふさわしい行動がとれるかどうかを基準に、まず500人を選び出した。この人々がピース・サービス部隊になるのだ。だが、こんなに大人数のオマワリに取り囲まれるのは、僕としてはあのココナッ・グローヴでの逮捕騒ぎ以来のことで、内心ちょっとドキドキだ。でも、今、ここに集まっているほとんどのオマワリは、僕らの味方の〝オマワリさん〟なのだ。

ジョン・ファブリ、ウエス・ポメロイ、ドン・ガヌング、それにバークレー警察から引退したキャプテンのジュエル・ロスらへの支払い金を含めて、ぼくらは10万ドルを警備費用にあてていた。彼らはこれまでゴールデン・ゲイト・パークでのビー・インなどの祭りイベントで集まってきた数えきれないほど大勢の若者たちを前に、キレることもなく、いつもクールに対処してきた高潔でハイな意識を持った人たちなのだ。ジョー・フィンクも彼らと同じようにこれまで大きな力になってくれている。

ウエスが白羽の矢を立ててチームに引き入れたジュエル・ロスは、行動マニュアルを作り、ピース・サービス部隊という命名もしてくれた。さらにウエスはニューヨーク市警視長官のハワード・リアリーに連絡をとり、各分署に警察官募集の宣伝を回付する許可を取り付けてくれたのだ。来れ、警

察官よ、僕らのために手助けを!

応募者には用意した質問状に答えを書きこんでもらい、その答えが僕らの考え方に即しているかどうかで、まず振り分けを行い、第2段階としてこの面接試験、となったわけだ。

集まってきた人々の前でウエスは、こう切りだした。

「ニューヨーク州の北部で開催されるロック・フェスティバルで諸君の助けがいるんだ。そこには気楽で気まま、いろんな格好をした何千人という若い連中がやってくる。彼らの服装が奇抜だからといって目くじらを立てないでほしい。銃や警棒など、どんな種類の武器も携帯は禁止だ。きみたちの役目は、いつもの警官としての職務のほとんどの時間がそうであるように、人々を助けることだ。子供たちがどこで助けてもらえるかとやってきたら、彼らを助けてやってくれ。そこでは暴力沙汰が起こるとは思えない。それでも中には病んでいる者、混乱する者も現れるかもしれない。だから、そういう時にきみたちがニューヨークの街路でするように、親切に世話をしてもらいたいんだ。会場に行って、法を遵守することにピリピリしないで、ただ、みんなにやさしくしてやるだけのことさ。なあ、楽な仕事だろ? 人々にやさしくするだけで、50ドル稼げるんだ」。

数人の警官が席を立って出て行った。だが、およそ、350人あまりの警官は、〝田園地帯で一日、笑顔を浮かべて過ごして、小遣い稼ぎできるのはなかなか悪い話ではない〟と考えたようだ。続いてリーはひとりひとりの体のサイズを測った。彼らの〝ユニフォーム〟、つまり、ベルボトムのジーンズと、赤いTシャツ——その前面にはPEACE、後ろはあの鳩とギターのロゴがプリントされている——そしてウィンドブレイカーとヘルメットの一式を準備するために。

ウエスとドン・ガヌングに協力して、駐車スペースとキャンプ会場の設営デザインを頼もうと僕は

[illegible]に連絡を取った。[illegible]と[illegible]合ったの[illegible]ブラックライトで見る。蛍光ポスター[illegible]その後、[illegible]に本拠を置く彼の会社[illegible]ことになった。フェスティバル[illegible]おそらく[illegible]何よりの表示[illegible]会場に設置されるサインのデザイ[illegible]あのサンフランシスコのポスターアー[illegible]ケリーを起用した。彼は[illegible]農場のうちで[illegible]インターンデザイナーの仲間たちはチケットの販[illegible]それでも[illegible]

僕たちはみな[illegible]週末は電話、本でパイロット[illegible]僕らはマックスの隣[illegible]ヘリポート基地を作った[illegible]エリアの夜間照明に何マイルもの長さのクリス[illegible]ことになった。

ガード・スクーンが主宰するインターメディア・システムズに連絡を取った。ガードと知り合ったのは僕がフロリダで店をやっていた1966年頃のことで、ブラックライトで光る、蛍光ポスターやフラクタルといった商品を彼のところから仕入れていたのだ。その後、ボストンに本拠を置く彼の会社は成長をとげ、今回は僕らが必要なさまざまなサインを作ってもらうことになった。フェスティバル会場で他のエリアへの道案内や、インフォメーションの告知などで、おそらく2000枚ほどの表示板やサインが必要になるだろう、と僕らは考えていた。こうして、会場に設置されるサインのデザイン、その制作を指揮してもらおうと、インターメディア社は、あのサンフランシスコのポスターアートの第一人者のひとり、ファミリー・ドッグのメンバーだったアルトン・ケリーを起用した。彼はシルク・スクリーンの小さなプリント・ショップを作り、〝マックス農場の牛たちに平和なモーを!〟、〝グルーヴィ通り〟などの標識を作ってくれた。また、インターメディアの仲間たちはチケットの前売り枚数から試算して、キャンプ場にどれだけのスペースが必要になるか考えてくれた。それでも日増しに僕らに必要なスペースはふくれ上がっていた!

僕たちはある飛行機会社と契約をかわし、フェスティバルの行われる週末は電話一本でパイロットにヘリコプターを出動してもらえるような態勢をととのえていた。そのために、僕らはマックスの隣人からステージの後ろ側にあたる土地を借り、クリス・ランガートの設計でヘリポート基地を作ったのだ。こうしてヘリポートの、そしてキャンピング・エリアの夜間照明に何マイルもの長さのクリスマス・ライトが使われることになった。

CamScannerでスキャン

ケータリングをめぐる男たちの野望

ふくれあがるフェスティバルへの予想参加者数は、当然のことながらおどろくほど増えていた必要な食品系の出店の数にも大きな影響をおよぼすことになった。すでにあの里芋のようなウォールみんなた、の撤退で、ネイサンズ社は降り、それに代わってピーター・グッドリッチが総合の網みの網としていた歩をしていたのが、フード・フォー・ラヴという会社だった。

ピーターは前にグリニッチ・ヴィレッジで、この会社のチャールズ・バックスター、ジェフリー・コルガー、リー・ハワードと会っていたが、そこでわかった驚くべき事実は彼らがそれまで食品ビジネスをほとんど体験したことのない、しろうと同然の面々だったということだ。コルガーはアイスクリームの会社、ハワードはリバー・サイド・ブックスの経営が専門で、バックスターが彼らと組んでいたウッドストックへのケータリングを検討によってビジネスとして成功させようという構想だった。彼らはそれぞれて、この先ない儲けをビジネスとして成功させようと綿密に検討していた。若者の胃袋を満たすのに十分な量の食料を供給する準備を進めていたが、こうした量は食品、物品、出資をまとめて7万5000ドルを支払い、彼らの出店の儲けの半分をウッドストック・ベンチャーズに支払うというのが当初の合意だった。不貞腐れの事情というのではなく、この取り決めがまずかったわけではなかった。だが、もう状況は一変していて、他の選択肢はなかったのだ。

ジョン・ロバーツ　フード・ケータリングの経験がある人なら誰でもよかったのだが、ピーター・グッドリッチに言わせると「ニューヨークの町で儲けるのは彼らだけ」。ホットドッグ・バ

ンやコカ・コーラに仕入れの問い合わせをしたり、調理器材を用意しているんだ。2週間でここに来て、われわれの仕事を期待どおりやってくれるのは、彼ら以外にはないよ。彼らならやってくれるさ。彼らにまかせるか、食料はゼロか、その2つに1つしかないよ!」と、そんな具合だったんだ。

出演者たちのためのケータリングは、それに比べてずっと簡単なことだった。ある朝、どこからともなく一台のリムジンがエル・モナコ・モーテルに現れ、車から出てきたのがバリー・イムホフだった。身長は180センチ、体重は140キロはあろうかという巨体を揺すって登場した男は、これまでビル・グラハムのイベントでケータリングを手がけてきた人物だった。ニューヨークから車でやって来た彼は、自分の持っている自慢の品々を僕に見せびらかした。この日にはもうエル・モナコの駐車場には、およそ100人あまりの若者が、何かありつける仕事はないか、あるいはただ単にごろごろとたむろしていた。それはなかなかファンキーなシーンだった。バリーはスーツケースを持ち出し、僕にこう言った。

「なあ、俺があんたに何を持ってきてやったと思う? ちょっと出て来て、車の中に来いよ!」

たちまち車のまわりを若者たちが取り囲み、バリーはフードの上でスーツケースを開けてみせた。それは僕が生まれて初めて目にする携帯電話だった。

「いま、この星の上でこいつをただちに必要としている人間がいるとすれば、なあ、それはあんたさ!」と彼は言った。まるでサイエンス・フィクションの世界に迷いこんだような気分だった。

だが、すぐにこのおおげさなふるまいは小手調べのウォーミングアップのようなもの、彼の訪問の本当の狙いは別なところにある、ということに僕は気づいた。そう、ケータリングだ。リムジンとい

う、なんともアンチ・カウンターカルチャー的な車での登場に僕は不愉快な感じを持っていたが、瓶のコルクを開けるように、彼がトランクを開け、大きな銀皿の蓋をとり、その下にあった湯気をあげ、血をしたたらせたロースト肉の大きなかたまりを見せた時、僕の不快感のボルテージはマックスに達した。歓声を上げる若者たちに、バリーはビーフ肉をスライスして分け与え、たちまち彼らを味方に引き入れた。

たしかにあの電話は便利この上ないものだったが、結局、バリーのケータリングの野望はついえ、その仕事はフィルモアの近くでレストランを経営するデヴィッド〝太鼓腹〟レヴァインのオムレツ料理に落着した。アーティスト・パビリオンにバリーが料理を運ぶことはなかったが、ビル・グラハムの希望で彼は会場にトレイラーを乗り入れた。その車内冷蔵庫にはステーキが満載されていたのだ。

8月7日　ニューメキシコ州のアルバカーキからアメリカン・エアラインズの281便で、7人の赤ん坊、15人のホピ族アーティスト、総勢85人のホッグ・ファームのメンバーがJFK空港に到着した。僕たちがチャーターした便で現れたこのユニークな旅行者たちは、多くの報道陣に囲まれて、その写真は翌日のデイリー・ニュースはじめ各紙のフロント・ページに、一行の中のスター的なスポークスマン、ヒュー・ロムニーの発言とともに掲載され、大きな話題を巻き起こした。

ヒュー・ロムニー　飛行場に着くまで、こんな大変なことに加わるんだなんて、まったく想像もしていなかったよ。だって、空港の壁一面が埋まるほど世界中のマスコミが集まっているじゃないか。記者たちは僕らがセキュリティをやるのかって訊いてきた。「なんてことだい、僕らがオマワリ役だなんて！　信じられない！」って思ったものさ。それで僕は声を張り上げて「どうなんだい、僕

ら安心できるかい？」って逆に聞き返してやった。すると「ええ、もちろん」って質問した記者は言う。だから「じゃあ、大丈夫だ！」と僕。すると別の奴が「押し寄せる群衆をどうやってコントロールするつもりですか？」。それで僕は「クリームパイとセルツァー飲料でさ」って言ってやったね。なんと彼らは一語一句をていねいにメモしているじゃないか。何を話したか、あとはおぼえちゃいないよ。

ホッグ・ファームの仲間たちにセキュリティを手伝ってもらうというアイディアは、その一週間ほど前の記者会見でメルが口にした無邪気な発言から生まれたものだった。そもそもそれまでに彼らに向かってそんな役割を依頼したことはなかったから、記者たちにそんな質問をされてヒュー・ロムニーはさぞやびっくりしたに違いない。僕たちが彼らに期待していたのは、平和なスピリットのキーパーとしてキャンプ・エリア内を上手にまとめて、場の雰囲気をゆったり安らかなものにしてもらえれば、ということだったのだ。セキュリティは非番の警官たちの有志にゆだねて……。それが、なんということか、ホッグ・ファーマーたちの到着した写真にニューヨーク・ポスト誌が載せたキャプションは「彼らは一日に10万人の参加者が見こまれるフェスティバルの秩序を守るため、一日50ドル、宿、まかないつきで雇われた非番のニューヨーク市警の警官346名のセキュリティ援助部隊と合流して行動するとのこと」とあるではないか！　この記事はまもなく、とんでもない面倒を引き起こし、僕らを苦しめることになった。

いつもすべてをカッコよく、スタイリッシュにきめたがるのがジョン・モリス。ホピ族のアーティストたちをベセルまで運ぶのに、なんと彼は何台ものリムジンをブッキングしていたのだ。僕らがホ

ッグ・ファーム一行を運ぶのに用意していたのはトレイルウェイズのチャーター・バスだったというのに……。

ヨガと巨大マシュマロと笑顔——キャンプ場の情景

ベセルにはすでに何十人もの連中が先にニューメキシコからやってきて、キャンピング・エリアにテントやティーピー、簡易小屋を立て、サイケデリック・バスを停めて寝泊まりしながら、会場づくりを手伝ってくれていた。さらに、そこにあの伝説の〝もっと遠くまで〟のサインを掲げたファーザー号バスに乗って、ケン・バブズらメリー・プランクスターズの面々が20名、オレゴンから到着して合流。もとより、僕らは彼らのリーダーである作家のケン・キージーに出演の交渉をしていて、出演料の折り合いがつき次第、彼らの交通費を支払うつもりでいたのだった（残念なことにキージーは直前に不参加の意向を知らせてきた）。他にもウッドストックのオハヨー・マウンテン・コミューンのメンバーや多くのグループが、次々と姿を見せて、あっというまに大きなシーンができていった。バックミンスター・フラーが考案した幾何学的な形の木造りドームが建てられ、その中にセットされたキッチンのまわりに、彼らはたむろし、朝食の前にはみんなで集まってヨガ体操や瞑想を行った。スタンは彼らを能力に応じて、いくつかのグループに分け、それぞれがファイア・ピット掘り、森の中の通路づくり、薪集め班、あるいはフリーステージ設置班などで、ボランティア・スタッフとして、大いに力を発揮してくれた。唯一の問題発生は害虫を除去しようというグループが登場して、蚊を退治しようとDDTを散布しはじめた時。だが、この事態になった時でも、ホッグ・ファームの人々は殺虫剤の害を、一般の人々が気づくようになる、そのはるか以前から知っていて、ただちに散布を中

止させたのだった。

ブランクスターズのひとり、ポール・フォスターはホッグ・ファーマーたちのロゴ、翼をつけて飛ぶ豚の絵に目をつけ、このデザインを切った布切れの上にアルトン・ケリーがシルク・スクリーンでプリント。これはアームバンドとして、コミューン系の参加者、あるいは数を増していくボランティア・メンバーに彼らを識別するサインとして配られていった。日が暮れると彼らは全員キャンプファイアのまわりに集まり、そこには和やかな空気が流れていた。時にはウエス・ポメロイが彼の奥さんや娘たちを連れてやってきたり、スタンはほとんどの時間を彼らと一緒に過ごしていた。

スタン・ゴールドスタイン　ホッグ・ファームの連中がグッド・バイブレーションで集まってきた何百人という人々を盛り上げてくれたんだよ。そして評判は評判を呼び、イベントの1、2週間前ぐらいから、声をかけてもいなかったこっちのコミューン、あっちのコミューンから人がやってきた。僕らは彼らを歓迎したよ。ボストンでコミューン生活をしながら演劇活動をしているオーソン・ウェルズ・シアターというグループは何台ものバスに映画のプロジェクターを積んでやってきて、キャンプ場にスクリーンを張って映画を見せてくれた。切れ者たちが集まり、しかもとっても統制のとれた素晴らしいグループだったな。フェスティバルを担ったのは、誰かに雇われたのではなくて、こういうそれぞれの力を持ち寄って集まってきた人たちなんだと僕は思う。彼らはもうこの頃には、僕らが何をしているか、僕らがやってくる人々にどんなに細やかな心くばりをしているか、どんなに頑張っているかをわかっていてくれたんだ。何が問題で、どうすれば助けになるか、よくわかった連中がいて、こういう意識の高いグループがホッグ・ファームのキッチンで、ひとつになっていったのさ。毎晩、みんなで一緒に食事をしながら仕事の分担を決め、問題があるなら、

それをどうすれば解決できるか、どういう順序で何をすればいいのか、話し合ったものさ。

ホッグ・ファームの人々がキャンプ初体験者のためのグラウンドづくりに大きな力となって、まわりを引っ張ってくれた。スタン、ヒュー、そしてヨガの先生でもあるトム・ロウは、早くからやってきた若者たちにテントの立て方を教え、今度は彼らから習った連中が、別のエリアで次の連中に指導し、という風に、キャンプ場オペレーションは順番に理想的な形で広がっていき、もうイベント開催の前には、それぞれのエリアにコミュニティが生まれ、そこにはファイア・ピットがあり、たばねた薪が積み重ねられていた。会場の敷地のいたるところに、こうした自然発生的な組織が次々と誕生し、その数は主催者である僕らでも把握しきれなかった。だから後からやってきても、どこに行ってもそこには必ずテント作りの仕方を教え、どこでどうすれば必要なものが手に入るか、的確な指示をしてくれる人間がいたのだ。

ウエス・ポメロイ　ホッグ・ファームの連中は「僕らはみんな平等で、代表者とか、他の人間に代わって話をする人間なんかいないのさ」と言ってたっけ。でも、見ているとあきらかにリーダー的な存在は何人かいたね。朝はいつもヨガなんかをしていたから、私も出かけていったよ。加わりはしなかったけれど、腰をおろして見物させてもらったよ。誰かがホラ貝を吹くんだ、するとみんな起きたての足取りでふらふらと集まってくるんだ。そして、みんなで会話をかわすんだよ。とても効果的で、彼らがいてくれたのはほんとによかった。みんなそれぞれ自分たちの役割をよく承知していたよ。でも、命令されて動くような連中ではないからね、見ていると不思議なところもあった。まとめて彼らを動かそうなんて、とてもできることじゃないし、やっても徒労に終わっただろうね。

だから、僕らと議論したくなると、私はそこに出かけていって、一緒にあたりを歩いたり、たむろしたりね。とても楽しくやれたよ。ヒュー・ロムニーはいまや大の親友さ。われわれの中でいちばん彼らと親密な関わりを持ったのはスタンだろう。彼はとけこんで、いちばんよく彼らを理解し、とにかくみんなで気持ちよくやっていたな。一緒に生活していたから。彼らは私の娘たちのことをおぼえてくれ、そのことで心配なんか私は全然しなかった。彼女たちは他のどこにいるより、あそこにいるのがいちばん安全だったんだ。はるか前から私は子供たちがいつか自分たちのやりたいことをやるようになるんだろうって気づいていたしね。親だからって自分の考えを押しつけるなんて、そんなのは傲慢なことだよ。

ヒュー・ロムニー　約十人ぐらいの連中がやってきて、いろんな班に分かれて働いたんだ。僕らは押し寄せてくる人たちに、寝場所をつくるためのプラスチック製のキットを供給する係だった。僕らが、デイグロの蛍光塗料を塗りたくってブッ飛んで楽しんでるだけじゃなくて、その先でハイな意識をさらにどんな風に具体的な形にできるのかって、そんなテーマをスタンとか主催者たちは突きつけてきたのだから大したものだよ。

僕らはキャンプファイアをしたんだけど、それがあまりに大きな火だったから、「でっかいマシュマロが欲しいよな！」って僕は言ったんだ。あたり20マイルの圏内にある店という店で、あるだけのマシュマロを買ってきて、それをくっつけてひとつのどでかいマシュマロを作り、その晩はキャンプファイアで全員、大盛り上がりしたものさ。

[illegible]、みんなを結んだのは。それと僕は伝言板を作ったな。すごい早さでホチキス銃を撃ちの言葉の意味どおりだけじゃなくて、できた伝言板に人の頭が出せるぐらいの穴を

CamScannerでスキャン

あけたんだ。それでそこから頭を出して、いろんなアナウンスをしたよ。3Dの飛び出す伝言板ってわけだ。すると、ある日、僕が顔を突き出してやっていたら、マックス・ヤスガーと彼の家族が全員でそこに通りかかったのさ。彼は〝あくまでも私は大地の上に生きる人間のひとり〟って、どんな時にもあのスタンスを崩さない素晴らしい人物だった。僕らの草の根運動的なヒューマン・バイブレーションを彼は真摯に受け止めて、心を開いてくれたんだ。

ホッグ・ファームの人々はやってくるすべての人間を温かく迎え、フェスティバルのトーンをつくり、そのスピリットを人から人へと伝え、ジョイントのようにまわしていった。すぐにその空気は伝染して、僕らはみんなおたがいを祝福の気持ちで迎えるようになっていった。当時、トム・ロウと結婚していて、小さな娘たちと一緒にやってきたホッグ・ファーマー、リサ・ロウは、みんなをオーガナイズして、食料も持たず腹ぺこでやってくるだろう若者たちに食べ物を供給するために準備した、フリーキッチン（無料食事所）の料理係と調達係をしてくれた。彼女とピーター・ホワイトラビットはニューヨークの町まで出かけ、紙皿16万個、1500ポンドのバルガー麦、1500ポンドのロールド・オーツ、225ポンドの干しぶどうにナッツ、ドライ・フルーツを買ってきた。僕らは、前もって包丁、ナイフ、ステンレスのまな板や、鍋類などの費用も含めて、食料、器材調達費として3000ドルを渡していたが、それでは足りなくなり、リサはヴィレッジのオフィスを訪ね、ジョイスからさらに3000ドルを受け取って、この途方もない買い出しの旅を続けてくれた。

リサ・ロウ　彼らは私にお金を手渡したの。問題は少しもなかったわ。私はそれを好きなように使わせてもらった。私の仕事はキッチンのスタッフができるだけ簡単に、できるだけたくさんの食事

かけれるようにするとよ。ヨーグルト、ミルク、それに卵は全部ヤスガーさんのファームから産地直送。毎朝、みんなで卵料理を作って食べたわ。直接彼から買ったのよ。だって彼の酪農場はすぐ目の前だったでしょ。搾りたてのミルクに新鮮な卵、ほんとに素晴らしかった。キャンパーたちが到着し始めてからはずっと料理をしつづけ、みんなで一丸になって頑張ったわ。

ディランに会ったら、よろしくと

この時点になっても、僕はショーにもう何人か、みんながびっくりするような出演者を加えたいと考えていた。とくにウッドストックに住んでいるアーティストを出したかったのだ。こうしてポール・バターフィールドが彼のブルース・バンドと日曜の夜に演奏してくれることになった。フレッド・ニールもこの頃ココナッツ・グローヴからウッドストックに住処を移していた。彼の書いた「うわさの男」は「真夜中のカーボーイ」の映画主題歌になり、ニルソンのカバーで大ヒット。でもそんなことが、内向い人見知り的な傾向に拍車をかけていたのかもしれない。僕たちは彼を出演リストに加えたいとプレス・リリースしたが、残念なことにショーが始まる数日前に、彼は出られそうもないと連絡をしてきた。

ココナッツ・グローヴ時代に知り合ったボブ・デーシーは、その頃ウッドストックでスレッド・ヒル・カフェを経営していて、彼がボブ・ディランとのミーティングをアレンジしてくれ、僕は天にも昇るような気持ちでディランの家に出かけた。ディランの歌は、他の多くの人々にとってもそうだろうが、僕の人生に大きな意味を与えてくれた。「会場に来てくれれば、みんなどんなに喜ぶでしょう」、と僕は言うつもりだった。もちろん、それが実現すれば、事前になんのアナウンスもせずに彼に登場

CamScannerでスキャン

してもらうつもりだった。奥さんのサラが作ってくれたランチを食べながら、僕たちは当初このフェスティバルで僕がやりたかったことなどを話題に、あれこれ話し合った。彼がマスコミが勝手に作り上げた"予言者"というレッテルを不快に感じていることはわかっていた。ディランは僕らの世代でもっとも重要なアーティストなのに、1966年以後、ほとんど人前で演奏をしていなかった。でも、彼の作品の芸術性を高く評価するあまり、僕はもしかすると、彼の中のビジネス・サイドを見落としてしまっていたのかもしれない。もし、僕が彼のエージェントにそれがいかに高額であれ、出演料を払うという形で交渉していれば、彼はウッドストックからすぐ後で催されたワイト島フェスティバルでしたように、出演してくれていたかもしれない。とにかく、僕がそこで過ごした2時間あまり、彼はとても気さくな態度で、「もしかすると顔を出すかも」と言ってくれたのだった。

その週のしばらく後、アル・アロノウィッツがニューヨーク・ポスト紙でこう書いていた。

「一日前に激しい雨が降り、あたりはいっそう深い泥がつもり、これなら陶器作りでも始めてみようか、という気分になっても無理ではない……」。ウッドストック・ミュージック&アート・フェアの主催者たちは、50万ドルでも好きに使ってくれと言われたかのように、忙しく最後の準備に札束をまきちらしている模様。一方、そこから車で1時間半あまりの距離、実際のウッドストックの町では、ボブ・ディランが、フェスティバルに予告なしで登場するのではないかという噂に、こんな風に語っている。

「もし、そんな気持ちになったら、行くかもしれないな。僕は招待されているから、出かけていっても大丈夫だろう……」。フェスティバルについての僕の意見は、他のみんなの意見と同じだと思うぜ。おそらくみんな楽しい時を過ごすだろうさ。でも、もし、そうでなかったとしても、誰も責め

CamScannerでスキャン

てはいけないよ」。

フェスティバルの数日後、僕はウッドストックのティンカー通りを渡ろうとしていて、偶然、ディランと出くわした。彼はカフェ・エスプレッソのベルナール・パチュレと屋根なしのジープに乗っていた。通りかかった彼らに僕は手を振り、「来られなくて残念だったよ」という風に肩をすぼめてみせた。ディランはニヤリと笑い、帽子のふさをつまんでうなずくように会釈した。「僕もさ」と言っているようだった。

この時から、25年後、ついにディランはウッドストックのステージに立ち、僕の夢をかなえてくれたのだった。

世紀のイベントを記録した人々

マイアミ・ポップ・フェスティバルの時も僕はフェスティバルを映像で記録する計画をしていたが、今度のフェスで、アーティと僕は映像記録に関して、もっと広大なヴィジョンを持っていた。映画化権をどこかの映画会社に売りこもうとそれまで、あれこれ画策していたのだが、どの話も途中で立ち消えになっていた。D・A・ペネベイカーは67年のモンタレー・ポップ・フェスティバルを撮影していたが、完成した映画は興行的には失敗。以来、ハリウッド各社の間では、コンサート映画は当たらないというのが定説になっていたのかもしれない。とにかく、早い段階からアーティと僕は「会場の元の風景や、会場づくりの様子を撮影しておくことが重要だよ」などと、熱く語り合っていたのだ。僕は音楽、映画、写真を手がけるマルチメディア社を主宰するアラン・ダグラスと交友を深め、アラ

ンは最初の頃の撮影に投資してくれ、もっときちんとした映画が撮影できるように資金額を上げなくてはとアドバイスしてくれた。ステージの設営シーンをドキュメントすることはもちろん、カリフォルニア、テキサス、オハイオなどに撮影班を送りこみ、各地の若者たちがニューヨークへ、フェスティバル会場へと至る旅の行程を、その体験をトータルに記録しよう、と僕らはそんなアイディアも話し合っていた。しかし、残念なことに、会場がホワイト・レイクに移ることになって時間切れ、僕らの壮大なドキュメンタリー映画の構想は実現どころか、映画化さえ危ぶまれる状況に追いこまれていたのだ。

アラン・ダグラス　「マイケル、始めようぜ！」って僕は彼の背中を突いていたんだ。そうなんだ、フェスティバルが始まる2週間前になっても、映画化の話は少しも具体化していなかったんだ。僕の会社は基本的にはレコード会社だったけれど、本や映画の制作の仕事もやっていて、オフィスの中にはフィルム編集室もあったから、いわゆる〝アンダーグラウンド映像作家〟といわれる連中が普段から大勢出入りしていた。だから、僕は「そちらに何人か撮影隊を送るから、すぐに撮影をやらせてくれ！」と要求したんだ。だって、その時点でステージづくり、会場づくりが始まろうとしていたから。もし、フェスティバルを映画にするのなら、会場がどんな場所だったかを撮っておくことは不可欠。急ぐ必要があったのさ。そのころ僕はロンドンからやってきたマルコム・バートとマイケル・マーゲッツっていう名の2人のヒッピー・フィルムメイカーと仕事をしていたんだ。それにニューヨーク出身の有名な映像作家、マーティ・トップともね。僕は彼らにフィルムを渡し、カメラをレンタルして持たせると、ウッドストックへ送りこんだんだ。ちょうど2週間ぐらい前だったよ。だから、あの映画「ウッドストック」の最初のほうで見られる、準備期間の2週間ぐらい

の映像は僕らの撮影班が撮ったものなんだ。

マイケルとマルコムは元気でやる気まんまん、あたりをピョンピョン跳ね回っていた。エイヴィスで車を借りて、車のトランクのトップを外してしまって、マルコムが運転して、マイケルはトランクに入って、そこから撮影していた。彼らは昼も夜もなく四六時中、カメラを回しているみたいだった。ウエス・ポメロイの娘のジニーがホッグ・ファームのメンバーと馬に乗っているシーン、あれは彼らが撮影した素敵なシーンだった。

いよいよ、フェスティバルが始まる週になって、ベセルの会場にジョエルがやってきた。しかし、彼は意気消沈した様子で、どこに自分のエネルギーをそそげばいいのか、なんだか迷っている感じだった。まだ、僕らはいくつかの認可を取る必要があり、切符の販売所をどこにどう設置するかが、緊急の大問題だった。当然、彼が担当すべき仕事で、僕は彼に集中してやってもらいたかったのだ。ところが、ジョエルときたら、そちらの問題よりも、僕が何をしているのかがやたらと気になる様子。ことにアラン・ダグラスが送りこんできた撮影班の若者たちには、かなり立腹状態。どうも彼は、それが僕が力をひけらかすためにやっていると取ったらしく、何度も何度も、「映画作りなんかに大事な資金や時間をむだに使うなんて……」、とブツブツ繰り返す。もちろん、後になって、彼は僕らの努力の恩恵を受けることになったというのに……。ウッドストック・ベンチャーズに最大の収益をもたらしたのは、映画だったのだ。

デヴィッドとアル、モズリー兄弟のドキュメンタリー作品が大好きだった僕は、彼らと彼らのプロデューサーのピーター・ビブと会い、デヴィッドとアルは実際に会場の予定地にやってきて、個人的

に映画にしたいと多いに関心を持ってくれていたのだ。だが、資金を出してくれる人間が見つからずに悩んでいた。出演者の演奏シーンの撮影はワドレー＝モーリス・プロダクションがいいと薦めてくれたのは彼らだ。

僕と同年代のマイケル・ワドレーはコロンビア大学のメディカル・スクールをドロップアウトして、映像作家への道を選んだ変わり種で、彼が撮ったドキュメンタリー映画『ベトナム人は俺をニガーとは呼ばない』は数々の映画賞を受賞した優れた作品だった。プロデューサーのボブ・モーリスは固い信念を持った人間で、この映画を製作することを初めから心に決めていたようだ。僕と出会う前に、ワドレーは手持ちカメラでアレサ・フランクリンとジェームス・ブラウンのライブを撮影したばかりで、もっと撮りたいと意欲満々だった。ワドレー＝モーリス・プロダクションには、画面分割をしてそれぞれの画面を編集できるという、とても実験的な映像を作れる新式の編集機材があり、このマシーンを使うと3つの映像を同時にスクリーンに映し出すことができた。彼らはこれこそライブ・パフォーマンスの興奮を伝える画期的な手法だと考えていた。プロダクションのアシスタント・プロデューサー、デイル・ベルは16ミリフィルムのストックをかき集め、編成チームに3日間、昼夜をたがわず続く演奏を記録するのに十分な機材を持たせて、一緒に会場へ乗りこんできた。

デイル・ベル　フェスティバルの始まる前の土曜日に、６人の小さなグループで俺らは数台の車に分乗して、ホワイト・レイクに向かい、そこで初めてマイケル・ラングと会った。俺は知恵なんてものとは無縁の人間だけど、唯一ある知恵を声にして、こう言ったんだ。「撮影しようぜ！　そしてフィルムを持っていようぜ！　そしていろんな連中が俺たちに声をかけてくるのを待とうぜ！　そしだって、記録したネガを持っていれば、ゲームをコントロールするのは俺たちなんだ！」ってね。

ボブとマイケルと俺がたどりついた哲学はそんなものさ。だから俺たちはあそこに行って、プロデューサーを抜きにして、カメラを設置し、音と映像を記録してきた。「場所さえ確保したら、そこで動くもの、話すものすべてを撮影してこいよ！」――俺が撮影隊に出した指示はそれだけさ。

僕はまたこのイベントを、写真で記録してくれる人間を雇いたいと考えていた。するとチップ・モンクが「ヘンリー・ディルツという写真家がいいよ」と薦めてくれた。ヘンリーはロサンジェルスで活動している新進フォトグラファーで、まだ発表前だったクロスビー、スティルス＆ナッシュのデビュー・アルバムのジャケット写真を撮ったところだった。ロック・フォトグラファーになる前は、ハワイで結成したフォーク・グループ、モダン・フォーク・カルテットにいたミュージシャン。彼はハワイにいた頃、メルと会っていたとわかったし、現れるとたちまち全員と意気投合。イベントの公式フォトグラファーとしてうってつけの人間だった。

ヘンリー・ディルツ　毎朝、みんながステージづくりをしているところに行くのが楽しかったね。ステージはまるで巨大な軍艦みたいで、そこから見る緑の野原や青い空が実に美しかった。まさに海のようでそこにステージが浮かんでいるって感じでさ。男たちが、そのどでかいステージをつくっていると、キッチンを切り盛りしてるヒッピー娘たちがランチを持ってきてくれるんだ。マイケル・ラングは旧式のオートバイを持っていて、革のベストを着て、カーリーヘアを揺らしながらそのバイクでアルファルファ畑の間をやってくるんだ。なんだか天使のガキみたいな感じだったな。チップとマイケルとメルは准将軍って存在だったね。人々は注文を出したり、次々てきぱきと効率的に仕事をやっていたけど、あそこには、友情の絆があったんだ。

CamScannerでスキャン

ドリーマーズ・パラダイス――会場を飾ったアーティストたち

ベニー・ストーリングス　マイケルは仕事を進めながら、そこで浮かんだアイディアから次々新しい何かを作っていくような人間よ。鋭い直感力があるから、彼のオペレーションはまわりの人間はわけがわからなくても、すべてうまく行っていたわ。男性たちはみんなマイケルを怖がっていたから、彼らの下で働いてる身としてはおもしろいったらなかったわ。どうやって彼とやっていけばいいのかわからなくて、呆然としている姿を見ているのはね。あれはほんとに見ものだったわよ。マイケルは物静かで、神秘的な存在感があったから、彼より年上の人間や、フィルモアで仕事をしたり、コンサート・ビジネス業界やプロモーションをやってきたいわゆる〝大物たち〟には煙たがられていたわ。もっと年齢的に若いスタッフはウッドストックを、自分たちの存在を世界に示そうとか、私たちがどれだけ大きな力を持っているか知らせる、ある意味で政治的なイベントだと考えていたみたい。でもメルやジョン、チップたちは必ずしもそんな風には思っていなかったと思う。彼らはただ仕事をしていて、ポットなんか吸ってはいなかったし、わたしたちと生活したり、一緒に過ごすこともなかったし、ヒッピー精神なんてどうでもよいことだったんだわ。そんなことに、はまりたくないって。でも彼らのボスだったマイケルは正反対だった。

　いろんなドリーマーたちがやってきたわ。トム・エドムンストンなんて「みんなでお香の匂いのする、みんながタッチできるようなどでかい地球儀のような球をこしらえよう」なんて言うの。でも、それってどんなもの？　どうやって作るの？　誰もわからなかったわ（笑）。マイケルは、そういうアイディアが好き、というか、そういうインプットをしてくれる人たちを欲しがっていたわ

CamScannerでスキャン

ね。でもひるがえって考えれば、どうやってそんなものが作れるのかって、作れやしなかったのよ。

フロリダから来たアーティストたち、ロン・リッツ、ビル・ウォード、バスター・シンプソンなんて人たちが、会場にアート作品を展示してくれたの。彼らの作品はすごく斬新で素晴らしいものだった。もちろん、他にも思いっきり奇抜で、極端なものやアイディアを持ちこんでくる連中がいたけれど、いつのまにかどこかに消えていってしまったわ。

ビル・ウォード　ロン・リッツは生まれながらにリーダー的な資質を持っていた奴だ。身長は2メートルもある大柄な体で見かけはヒッピーそのもの。髭をのばし、ベルのついたチョッキを着ていたよ。すぐれたアーティストで、審美眼があり、会場ではクルーたちを魅了して、上手に使っていたっけ。アートの展示物は全部彼らが作ったんだ。でも、ある日、メルが僕のところに来て、ロンへの橋渡しを頼んできた。メルはロンのやることで、かなり頭に来ていたんだ。他人がどう思おうと、ロンはすべて自分のやりたいようにやってしまうからね。それで、ある日、ついに問題が発生しちまった。あいにく、その時、僕は現場にいなかったけれど、ロンがステージ・クルーの使っていたフォークリフトを無断で持っていってしまい、殴り合いになってしまったんだ。ロンは自分の必要なもの、すべてそんな具合にしちゃう奴だったからね。

僕らには、クルーをしていたすごい味方がいたね。そう、バスター・シンプソンはロンが中西部にいた頃からの知り合いだったんだ。バスターは今はシアトルで彫刻家として大成功しているよ。もうひとりクルーをやっていたハーブ・ソマーズも才能のあるアーティストだったんだ。なかなかの思想家で、とてもつきあいやすい奴だったんだ。それで、みんな仲良くなってアーティスト・チームが生まれたってわけなんだ。バスターと彼のガールフレンドは野外にコンセプチュアルな彫刻

の柱の彫刻もあったよ。

ペニー・ストーリングス　ある時、バスターがやってきて、「大きな水玉模様のアリス風ドレスを着た少女を見つけてほしい」って言うのよ。「どうして?」って、訊くと、「フェスティバル会場を一緒にスキップして回りたいから」、ですって（笑）。なにしろ彼らがしていたのは、みんなそんな感じの素敵なことばかりだったわ。

ステージの前に広がっている一面豊かな緑色のスペース。そのゆるやかなすり鉢状のスロープのあちらこちらに穴を掘って、さまざまな色の布地で作られた旗をつけた柱がクルーたちの手で立てられていった。そのバナーはメルが発見したブロンクスの男性アーティストが作ってくれたものだった。ピース・シンボルを中心にさまざまなデザインが組み合わされた長さ1メートル50センチほどの、見事なバナーは、客たちが到着しだすと、またたくまに、どこかに消えてしまった。

アーティスト・パビリオンからステージに出られる、花道のようなブリッジがあるといいと、僕らは考えていた。そこですぐにクリスが、デザインを考えてくれた。クリスが素晴らしいのはこういうところだ。僕にアイディアが浮かぶと、クリスがつくって形にしてくれるのだ。こうしてできたのが下の道からだと6メートルの高さにあるブリッジ。この上を歩いて行く時に見える眺めはほんとに素晴らしかった。クリスはこのブリッジをつくるにあたって、ジョン・モリスにジミ・ヘンドリックスの体重を訊き、それに典型的なグルーピーの女の子の平均体重をプラスして、さらにその数字を10倍

した重さがブリッジの許容重力と計算して、設計したのだという。まさに天才的頭脳のなせる技ではないだろうか。そして橋ができると、マイアミからやってきたアーティストが橋の横にゴージャスな壁画を描いてくれたものだ。

フェスティバル前のあの最後の数週間、医療面での救護システムをどうするか、で僕らはまた頭をつき合わせた。計画が始まった頃はニューヨークの人権メディカル・コミッティからアドバイスをもらっていたが、ウォールキルではドン・ガヌングとウエスが地域の医療関係者に相談をしていた。しかし舞台はサリバン・カウンティに移り、プランニングはまた一からやり直さざるをえなかった。ビル・ウォードが近くのワッピンガーズ・フォールズの町に、彼が１９６５年アラバマ州セルマでの公民権マーチで、ボランティア仲間として知り合ったビル・アブルッチという医師がいるから、連絡を取ってみてはと薦めてくれたのはそんな時だった。会ってみると、彼は僕らの意図を完璧に汲んでくれ、即座にサイン・オン。ただちに詳細な医療救護プランを作成してくれた。この時点でのフェス参加者の予想数に基づいて、彼は6人の医師と36人の看護婦、18人のアシスタントを手配してくれた（このメディカル・アシスタントたちには万が一のことを考え、医療ミスが発生した時の保険もかけておいた）。費用の総額は1万６０００ドル（やがてボランティアの医師たちも現れ、25人の医師と２００名の看護婦という医療部隊になった）。地元では3つの病院が待機してくれた。さらにドン・ガヌングは地元の無線ラジオのグループに協力を頼み、会場と外部との通信、連絡が円滑にできるようにスタンバイ。また彼は地元の求人センターで人員をつのり、駐車場係に70人、出店エリアに３００人、毎日の会場のゴミ収集係に２００人をリクルートしてきた。メル・ロレンスは当時としてはまだ珍しいゴミを圧縮するマシーンのある会社を見つけてきて、会場で出る膨大なゴミの処理にあたっ

てもらった。

僕らがお金を使えば使うほど、地元のコミュニティの僕らへの対応は良くなっていった。僕らは町でさまざまな必要品を買い、地元の住人を雇い、そういう状態が町の多くの人の目にはっきりと映るようになった時、最初に一部の人々が示したネガティブな態度は消えて、町の人々はやさしく、ていねいに接してくれるようになった。ホワイト・レイクの人々は、ウッドストック・スピリットに同調しだしたのだ。人々が僕らのサポーターになってくれたのは、僕らのやっていることを気に入ってくれたからなのだろうし、何より僕らがフェスティバルの実現に向かって、頑張っている姿を見てくれたからなのだろう。フェスティバル開催前の2週間は、町の何千という人々が、さまざまな形で僕らに協力を申し出てくれたのだ。それはほんとにビューティフルなことだった。

ジョン・ロバーツ　ウォールキルでやったような過ちを僕らは繰り返したくなかった。だから、僕らは誰にまず知り合うべきか、何を最初にすべきか、まず誰を説得して味方にすればいいのか、誰に会うのは避けたほうがいいのか、そういう政治的な力学に注意を払うようにしたんだ。そうした分野でしなければいけないことがたくさんあったんだ。ことにPRはすごく大事なことだった。

そう、PRといえば、僕たちの対外折衝の仕事はドン・ガスングとローナを中心にするチームが頑張ってくれていたが、時に応じてエル・モナコ・モーテルのエリオット・クイバーが協力してくれた。エリオットは彼のモーテルの納屋で共同生活している演劇グループ、アースライト・シアターの劇団員を「必要なら彼らを自由に使ってよ！」と申し出てくれて、エル・モナコの敷地でフェスティバル

のプレビューとして、この劇団の芝居をホワイト・レイクの住民たちに無料で見せてはどうかとすすめてくれた。

だが、ふたを開けてみると。それは目をおおいたくなるような混乱劇になってしまった。集まった町のお年寄り、近隣の農家の人々、たくさんの家族連れという観客の前で、アースライト・シアターはなんと当時、全裸のパフォーマンスで世界中で賛否両論、あちこちで物議をかもしていた前衛劇「オー・カルカッタ！」の1シーンを演じ、着ていた衣装を脱いで、一糸まとわぬスッポンポンの姿になったから、さあ大変。憤然と席を立つ紳士たち、あわてて子供たちの目をおおう母親たち……会場は阿鼻叫喚の大騒ぎになってしまった。

人の噂ほど恐いものはない。風に乗って僕の耳にも届いた噂は、僕とピーターがフェスティバル用に手配した大量のマリファナを積んだチャーター船がフロリダに向かっているとか……。このとんでもない（いや、とんでる？）噂話には続編があり、それはフェスティバル直前の月曜日に、フロリダ沖でその船を沿岸警備隊が捕獲した、というのだ。もちろん、根も葉もないデマだ。

カウントダウン開始——最後に笑うのは誰だ

8月11日、月曜日、いよいよカウントダウンが始まった。数千人が会場の敷地内に現れはじめたのだ。早速、僕らはキャンプグラウンドの使用は水曜日から、とアナウンスしたが、早くから会場入りしたい、とやってきた連中は動いてくれそうもない。動かそうにもぼくらは24時間ぶっとおしで、ステージの仕上げ、タワー、スタンド、道路、駐車場、配管、水飲み場、医療テント、キッチンづくり

でてんてこまいだったのだ。その他にもすませなければならない仕事が山のようにあった。現場からはもっと人手を、もっと道具をという声が怒号のように上がっていたが、どこを見ても空いている手はひとつもなかった。

会場のまわりにめぐらしたフェンスは、ところどころめくれ上がっていたし、どこを探しても、チケット・ブースらしきものは影も形もなかった。チケット販売はウッドストック・ベンチャーズでオフィスで指揮をとるジョンとジョエルの管轄だったから、配布や回収と並んで、手配が進んでいるものとばかり思っていたのだが、結局フェスティバルが始まっても、会場にチケット・ブースは現れず、ついにそのままで終わってしまった。後になって聞いたのは、チケット・ブース代わりに数台のトレイラーがやってきていたが、使われずに終わったとのことだった。

準備におおわらわで、もう少しで忘れてしまいそうだったが、僕らはまだ解決がついていない法的問題をかかえていた。会場近くのサマーキャンプの運営者や住民からフェスティバル中止の訴えが出ていたのだ。僕はポール・マーシャルから問題にならずに決着がつくだろうと聞いてはいたが、イベント数日前、8月12日の火曜日に判決が出るまで確かなことはわからなかった。当日の朝10時にドン・カメンゲとウエスがキャッツキルの地方裁判所に出廷。彼らの前で州首席判事から、開催の有無を決定する運命の判決が言い渡される予定だった。

しかし、この裁判に先立ってポールは、子供に成りすまして訴えを起こしたキャンプ・オーナー、“ディビーおじさん”のキャンプ場を訪ね、屈託のないおしゃべりをして、さりげなく彼の怒りを解いてきたらしい。おそらくこのゲリラ作戦が功を奏したのだと僕は思う。

裁判の陳述で、ポール・マーシャルは僕らがすでに140万ドルを費やし、さらにフェスティバル

終了時には30万ドルの支払いをする用意があること、前売りではなく4000枚のチケットが売れていることなど具体的な数字を上げて、これがいい加減なイベントではないことを熱情こめてアピールした。そして訴えを起こした人々の土地がもし損害をこうむった場合、賠償金の支払いの準備がこれら側にはあることも。

こうして、ウェストドン、ヴォンツ、ポール・マーシャルの長い一日は終わった。ディビーおじさん人たちは、これまでの不平不満とともに告訴を取り下げたのだ。

僕らは最後の法的ハードルを飛び越えたのだ。残るは後3日。アクエリアン・エキスポジションはスケジュールどおりに始まろうとしていた。水瓶座の時代へ向けて、僕たちは新しい意識の扉を開けられるのだろうか……。

＊バックミンスター・フラー（1895－1983）アメリカ、マサチューセッツ州出身の建築家、発明家。フラー・ドーム（ジオデシック・ドーム）を考案して一世を風靡したフラーは、「宇宙船地球号」を唱え、地球のサバイバルを考えたユートピア派の思想家でもあった。[illegible]といったその考えは弟子のスチュワート・ブランドの『全地球カタログ』などを通して60年代後半から環境問題を考える多くの人々に広がった。

＊アル・アロノウィッツ（1928－2005）アメリカのロック・ジャーナリストの草分けだった。彼はニューヨーク・ポスト紙で「ビート・ジェネレーション」の取材を命じられ、ケルアックに最初の「[illegible]体験」をさずかり、1964年、ボブ・ディランをビートルズに紹介した時も彼らの滞在中のNYのホテルにジョイントを持っていき、4人に「伝道」したことで有名。ヴェルヴェット・アンダーグラウンドの初代マネージャーをするなど、記者生活をしながら、さまざまな形で音楽シーンの発展に寄与した。

第9章

August 13-14, 1969

1969年8月13日〜14日

CamScannerでスキャン

「俺たちの出店スタンドはどうなったんだよ！　おかげで10万ドル分の食料がパアだぜ、ありがとさんよ！　こんな取引、誰がしたがると思う？　もう一度、契約条件を変えねえっていうのなら俺たちは手を引くぞ！」

「ふざけるんじゃない！　決められたとおりにきちんとやるべきことをやれよ！　おまえはこの機会につけこんで、もっと甘い汁を吸おうって魂胆だろう！」

そう言うと、ピーター・グッドリッチの拳がジェフリー・ヨルガーの顔面をヒットした。

まさか、こんなことが起こるとは想像もしていなかった。

ジェフは体を折りながら、大声をあげた、「このやろう！　殴りやがったな！」

彼は身につけていたナイフを探していた。僕が特別警備の仕事をまかせていたレニー・カウフマンが、その動きに気づき、彼と視線が合った瞬間、僕はうなずいてゴー・サイン。

すばやくレニーはヨルガーに飛びついて、はがいじめにした。

「銃をとってくるぞ！」。ジェフリーは体が自由になると、脱兎のごとくトレイラーに戻り、音を立ててドアを閉めると中からロックをかけた。

木曜日の朝——フェスティバルの前日、人々は会場にあふれだしていた。昨日から僕らは数えるのをやめてしまっていたが、おそらく6万人ぐらいが、すり鉢の中に場所取りをし、木々の間にテントを張っていた。フード・フォー・ラヴの男たちは火曜日の夜にやってきたが、まだ彼らが出店をするスタンドが半分しかできていないことに、怒っていた。それというのも、会場づくりにあたっていたクルーは、まだスタンドづくりより優先しなければいけないあちこちの現場を右往左往。肝心のステージすら完成してはいなかったのだ。

ひっきりなしの雨のおかげで、会場の周囲は泥、泥、泥。おかげで数日前までコンクリートでの土

台づくりもできていなかった。このうんざりする天候がすべての進行を遅らせ、手作り品、クラフト製品と食品関係を並べるためのブースの設営にも大ブレーキ。

前の週になんとか整備した会場内にめぐらした道路も、はじから泥の下に消えていた。

「なあ、ジェフリー、なんとかうまくやろうぜ！」。閉まったトレイラーのドアにジョン・ロバーツが叫んでいる。「今夜、集まって、この状況を抜け出す方法を探そうじゃないか！」

「やれやれ、奴の正気を疑うね」と僕らに向かって小声でジョン。だが、僕の頭の中は「〝銃を取ってくる〟だって？」……。

ジョン、メル、ジョエル、そして僕、誰もがこれが大問題であることを感じていた。もちろん、ホッグ・ファームの連中が大量のグラノラ（シリアルの一種）、ブラウン・ライス（玄米）を準備してフリー・キッチンで、やってくる人々に無料で食事を供給することは知っている。だが、もし、ホットドッグやハンバーガーを提供するはずのフード・フォー・ラヴが手を引いたら、どうなるのだ？ 腹をすかせて、怒りに駆られた何千という子供たちが僕らのところに押し寄せてくるだろう。早速、無線でウエス・ポメロイにこの想定される事態への対策を呼びかける僕ら。

「どんな形であれ、彼らとうまくやることだ！」、ウエスはそうアドバイスを送り返してくる。「絶対に子供たちを飢えさせるんじゃない。ことにニューヨークのオマワリ部隊が来なくなった、こんな状況ではな！」。

フェスティバル前の最後の2日間は、比喩的にも、実際にも、文字どおり〝火消し作業〟の日々だった。その始まりは水曜日の朝、ホワイト・レイクの電話局ビルに設置した僕らのオフィスでリーが受けた電話だった。

この前の週にニューヨークからジョー・フィンクがやってきて、あたりをチェックして、会期3日間に交替で〝バケイションついでに警備を担当する〟NYC警官たちの宿泊、まかないつきプランに問題なしのVサインを出して、帰っていったばかりだ。どんな武器も携帯せずに、用意したバスに乗りこんでくれれば、すべてはうまくいく……はずだったのだ。

ところがイースト・ヴィレッジのあの過激グループ、アップ・アゲインスト・ザ・ウォール・マザーファッカーズの連中がこんなビラを配りはじめていた。

「みんなでウッドストックへ！　そして非武装でフェスティバルの警備にやってくる豚オマワリたちに、われらの温かい歓迎をパンチでお見舞いしよう!!」。これでは官憲当局が目くじら立てないわけがない。おまけに、あの新聞の一面を飾ったホッグ・ファーム一行ケネディ空港到着の写真と、その見出しの、〝ヒッピー・ファーマーたちがニューヨーク警察の精鋭たちと一緒にセキュリティを務める〟のどうの……この記事を読んでニューヨーク市警察本部長、リアリー長官はカンカン。彼はすべてのプラグを引き抜いたのだ。

水曜日の朝、ニューヨーク市のすべての分署にテレタイプが送られてきた。

「当局は、わが市警察に勤務して法を遵守する警官たちの一部が、ウッドストック・ミュージック・アンド・アート・フェアなるイベントで主催者側の要請に応じて各種の奉仕活動に従事するという情報を入手した。……警察官の制服、楯、銃など一切の警官としての装備を持たず、またいかなる警察官の権威を示さないという雇用条件で、職務以外の労働で支払いを受けるなど、もってのほか。かかる行動は断じて認可されるものではない」。

わかりやすくいえば、この命令にそむけばクビにするぞ、ということ。ジョーはせっかく面接して、契約に合意した346名のオマワリさんが行けなくなった、とバッド・ニュースを電話口のリーに告

げた。このニュースを聞いて、ウエスは激怒した。

ウエス・ポメロイ　リアリー長官がわれわれに向かって、ドアを閉めた……彼は「ニューヨークの警官は誰ひとり、あそこへ働きに出かけてはならん」、と命令したんだ。ホッグ・ファームの記事のせいだ！「たったいま、そんなことを耳にした」なんて言っているが、嘘にきまってる。というわけで、我々の平和サービス部隊の計画のすべてが地獄へ落ちてしまった。

リー・マックラー・ブルマー　この状況をどうやって克服するか、ウエスとジョー・フィンクはあれこれ作戦を立てはじめていたわ。でもゲートもつくらないうちに会場を埋めはじめているあの数の人間を見て、もうブルっちゃっていたから、警備対策は大ピンチ！　って、みんな感じだしたのよ。

ウエスは信じていた警官たちの兄弟愛に、裏切られた気分だったに違いない。このぎりぎりの瞬間でリアリー長官が警察の協力を断ち切り、部下を引き上げさせたことには、ニューヨーク・タイムズ紙も社説で遺憾の意を表明していた。ジョーはその日丸一日、密に連絡を取り、何人かを説得して、命令に服従しないで、秘密裏に僕らのもとに送りこむと約束してくれた。一方ウエスは地方の警察署や刑務所の署長クラスに電話して、援軍を依頼したが、ほとんどが否定的な反応だった。なんとかしなければいけなかった。警官の協力も取り付けていることは、これまでフェスティバルの開催を町の当局者に納得させる大きな説得材料だったからだ。会場や会場周辺での平和を維持するためばかりではなく、僕らは警官たちに交通整理や緊急の医療救助の際の助けも期待していたのだから。

プロのセキュリティ不在のままイベントをやるなんて危険な真似をする気は、僕には毛頭なかった。ゲートや出店スタンドで無数の現金が取りかわされるのだ。そこで僕は友人に助っ人を頼むことにした。レニー・カウフマンは元バイク・ライダーで、用心棒で、冒険家で、これまでタフな状況をその頑丈な体と強靱な精神で幾度も乗り切ってきた男で、僕は彼に全幅の信頼を置いていた。彼が電話に出ると僕は彼が信頼する仲間を6、7人連れて、その晩のうちにこちらに駆けつけてくれるように頼んだ。

痺れっぱなしのステージ設営

水曜日はまたしても雨、おかげで最後の電気系工事はとても危険なものになった。主電源の設置場所のすぐ横に停まっていたトレイラーの階段は〝ホット〟、うっかり手すりなどに触れるとビリビリと痺れた。電気技師たちがいくら頑張っても、きちんとアースできず、結局、階段で何人が〝熱く痺れる〟ダンスを踊ったことだろう。急いで完成する必要があったのは荷物のローディング・ゾーンから9メートル上のステージにアンプや機材を運ぶエレベーターだった。

ビル・ハンリーはサウンドが会場のはるか彼方まで届くように設計した特製の機材を積んで到着した。彼はカスタム・ミキシング・ボードとデラックス・スピーカーを作り、この機材に300万ドルの損害保険をかけていた。タワーのてっぺんにクレーンで6個のスピーカーとホーンが吊り上げられ、ステージの前面にはモニター・スピーカーがボルトどめされた。コンサートの演奏は、僕がマイアミ・ポップ・フェスを手がけた時にジミ・ヘンドリックスと一緒に会ったエディ・クレイマーが、リー・オズボーンとともにステージの後ろのサウンド・トレイラーでレコーディングすることになった。

コンサートのレコード化権はアトランティック・レコードのアーメット・アーティガンが買った。クロスビー、スティルス&ナッシュのレーベルだ。

ハンリーはメイン・ステージのPAシステムばかりではなく、ホッグ・ファームのエリアに作ったフリーステージに小型のサウンド・システムを設置してくれた。そこでは前日、僕らが人形劇場と子供たちのプレイグラウンドを作ったばかり。敷地のまわりに僕らは金網のフェンスをはりめぐらし、フリー・エリアとメイン・ステージにより近い区域を分けるようにした。後になってフェンスに起きていたことを僕はアビー・ホフマンの友人、ローズ・ペインから聞くことができた。

ローズ・ペイン　私はフェスティバルの数日前に会場に着いて、ホッグ・ファームの連中とキャンプ生活していた。いくつものチームが切符を持たずにやってくる若者たちを入れないように会場のまわりに柱を立て、金網のフェンスをはっていたわ。毎晩、作業員がいなくなると、ポール・クラスナーと、アビーとジャン・ジャック・レベルと私はフェンスを引き倒した。柱は残しておいたけどね。他にもいろいろやったわ。〝通り抜け禁止〞って標識を見つけると、ジャン・ジャックがその上にペンキで〝人民の伝言板〞って書いて、それを目立つ所に立てたりした。森の中を抜ける道に〝ホーチミンの道〞って標識を掲げたのも私たちがやったことよ。

ムーブメント系の人たちには、このフェスのプロジェクトが始まってからずっと、フリーなエリアもあることを僕らは伝えてきた。抜け目のない連中だから、こっそり仲間たちをしのびこませるぐらいのことは想定内。それに前売りチケットの売れ行きとこれからゲートで買ってくれる参加者のことを考えると、財政的には大丈夫だろうと自信がわいてきた。それに雨で工事が遅れているのだ。僕は

フェンスのことを心配するのはやめ、ステージを完成し、サウンド・システムのチェックなど、コンサートが予定どおりスタートできることに自分の注意を向けるようにした。
　気がつくと、スティーヴ・コーエンのステージの屋根のデザインは凝り過ぎてしまっていた。2週間ほとんど不順だった天候にはばまれて、組み立てが大幅に遅れた影響も大きかったが、木製の骨組では重くなりすぎて、最初のアイディアどおりにはいかなくなっていた。うまくキャンバス布でおおって、ステージを雨に負けないようなものにしたかったが、いまやそれもむずかしくなってしまった。もともとステージの上はトラスに照明ライトを付けられるようにすることが肝心なのだが、彼は何を勘違いしていたのだろう。それは重すぎて持ち上げることもできなかった。かくしてライティング・ディレクターのチップ・モンクはショーのすべてをタワーの上から12基のスーパー・トゥルーパーで照らす羽目になった。「いいかい、ステージの下には65万ワットの電流が流れているんだぜ」。チップはそう言って僕らに注意を呼びかけた。
　ステージとタワーの建設のために僕らは一日１０００ドルで２つの巨大クレーンを借りていた。しかし、ステージの横に置いていたクレーンをそのままに、ステージを囲む木製フェンスや他のものがどんどん建ってしまい、人々が会場に到着する前にクレーンを運びだすことは不可能になってしまった。なんともドジな話だった。

チップ・モンク　必要だったのは全員を従えるだけのパワフルなリーダーシップとしっかりゆるぎないプロダクション・デザイン、それと大人でどんなことにも対処できる建築作業員たちだったんじゃないかな。でも、そんな人間はいなかった。ただ、みんなで「大丈夫、うまくいくさ」なんて言っているだけだった。ひとりとして満足に工事ができる奴なんていなかったよ。ビルをひとつつ

CamScannerでスキャン

くるぐらいの気合いでやればよかったんだ。全体の進行を見る現場監督が必要だった。プロの板金工、プロの溶接工が必要だった。デザインは素晴らしかったよ。何枚も、何枚もキャンバスの布を重ね、魚のうろこみたいだった。もっとビューティフルなステージになっていたはずなのにな。ステージだけを受け持つチームがいるべきだった。足場を作るのに集まってきたのはたった4人さ。あれは大間違いだったよ。安い予算でやろうなんてダメなんだよ。とにかく俺たちはみんな規模の大きさに圧倒されていたんだ。

ライトはヨンカーズにあるアルトマン舞台照明のチャーリーから借りてきた。でも奴は最後カンカンに怒っちまった。一個6ドルする500個借りてきたCクランプが錆び付いてしまって、もうネジも回りやしない。全部捨てるしかなかったんだ。

照明は3か所から照らすしかなかった。ひとつは左に100フィートの地点から、ひとつはステージのセンターラインから右に15度のところ、そしてもうひとつのタワーから3台でね、それからほぼ右と左15度の位置に1台ずつフォロー・スポットライト。だからたった10台のライトだったんだ。アンビエントも、バックグラウンド・ライトもなかった、それ以外なにもない、でもそれで十分だったんだ。いや、俺たちがカーニバル・ソケットと呼んでる、ほら中古車の駐車場なんかに電線にたくさん小さな電球が下がってるやつさ。あのライトがなかなかいい雰囲気を出してくれたよ。7・5ワットの電球を1フィートの間隔で並べてね、タワーの足場を固定するワイヤーにつけたから、暗闇で歩いてきた人間が鉄線にひっかかることもなかった。ロマンチックだし、あのライティングは一石二鳥の効果があったね。

全長が14マイルの水道管をぼくらはフェスティバル会場に敷いていたが、設置してから水圧は毎日

のように下がり、そのたびに僕らは水漏れ箇所をつきとめなければならなかった。人々が会場に姿を現すようになってからはなおさらだった。そこでクリスは中に年代物の陸軍が使用していたクランク電話を入れたプラスチック・ボックスを要所要所に配置した。こうして水漏れを見つけた人間が電話を鳴らし、ただちにクルーがその場所に急行し、修理をすることが簡単にできるようになった。〝危険！〟の表示板を何百と作り、水道管の走っている場所のすぐそばに立てたのも効果があった。この作戦で人々が管を踏んで、水漏れを起こすケースは格段に少なくなったのだ。

やってくる人間の数は僕らがマックス・ヤスガーに言った最初の数字を大幅に上回ることは、もう誰の目にもあきらかだった。そこで僕はそのことを話すために彼の家へ出かけることにした。もう何万という人々が姿を現していた。「およそ20万人やってくると予想していたのですが、どうもそれ以上の人間が来そうです」と僕は彼に言った。「でも、僕らはどうにかできると思います」。

僕がそう言い終わるか、終わらぬうちに彼は寝室の酸素テントに戻っていってしまった。彼の妻のミリアムは大群衆が混乱して騒ぎを起こした時、マックスが発作を起こすのでは、と心配していた。彼女がそう思うのも無理はない。誰だってそんなことになれば、心臓発作を起こしかねない。彼が酸素吸入をして、また姿を見せた時の溌剌とした表情は僕をホッとさせてくれた。彼は僕らがつくっている施設の大きさを知っていて、「準備も万端のようだから、心配なんかしていないさ」と言ってくれた。2週間の間、彼はひんぱんに様子を見にきて、僕らのそばにいてくれた。だからどんなに参加者の数が多くなっても、それはもう彼を驚かすものではなかったのだろう。

ウエス・ポメロイ　水曜日までに、もう計画を練る時間なんかなくなっていた。もし、問題が起こったら、それに対処する、やることはそれだけだったたんだ。大勢の人間が「これについてあなたど

うしてくれますっ」と私に電話をしてきた。「うちの畑に大勢の若者が入ってきているんだ！」。私たちはそういう人たちと交渉をして、彼らの作物を買い取る用意があることを伝えたよ。まだ大きくなっていないアルファルファの植わった畑の上でキャンプして、収穫をだいなしにする無神経な若者たちがいっぱいいて、そのつどわれわれを悩ませてくれた。彼らの言い分が正当なものなら、その補償はきちんとしたものさ。

軍隊のオペレーションととても似通うところがあった。ダイナミックスはまったく変わらない。できるだけのプランニングをして、供給網を作り、食べ物、トイレ、必要なものを発注して、どんどんやっていくだけだ。もし、こっちの補給ラインがだめになったら別のラインを探す、そういうことだったね。

セキュリティは会場の見回りから方向の案内、駐車場への誘導などなど、人員の交替システムの細かいプランニングが、実はできていた。ところがどっこい、あてにしていたニューヨークのオマワリ部隊が期待できなくなってしまった。するとウエスが、新しい戦術を思いついた。「会場周辺の道路が一方通行にならざるをえないので、緊急の患者が出た時の運搬、救急車の走る道を確保するための人員を派遣してほしい、という要請を州警察にしよう」というのだ。しかし、水曜日にウエスが州の白バイ部隊に出動申請した電話は、州警察の舎監の責任者と名乗る男から、にべもなくはねつけられてしまった。さらにあろうことか、一方通行にする交通プランは認めるわけにはいかないと言うのだ。

スタン・ゴールドスタイン　交通制限をする計画もつぶされるし、契約して借りることにしていた駐車スペースに道路で誘導してくれる警官もいない。駐車場所が見つからない時、ドライバーはどうすると思う？　勝手に空いてる場所に停めるだけさ。まもなく、大渋滞が始まり、かくして道路たにかたっぱしから車は置き去り。ハイウェイはご存じのとおり、駐車場と化してしまったのさ。

ちょっと脇道にそれるけれど、興味深い話をしておこうか。僕らへの協力をつっぱねた、あの警官宿舎の舎監をしていた男の話さ。ほら、アッティカ監獄で囚人たちがあまりにひどい待遇に耐えかねて暴動を起こし、看守たちを人質にして、待遇改善を要求した事件があっただろう。あの時、奴は警察部隊を率いる部隊長に任命され、島に上陸するやいなや、すぐに発砲命令を出して、囚人たちはおろか、捕虜になっていた看守たちまでも皆殺し。おまけにその事実を秘密にするよう部下たちに口封じして、隠蔽工作をしていた。とにかくそんな最悪の最低野郎だったのさ。

州警察は僕らの計画をつっぱねただけではなかった。ニューヨーク・スルーウェイの会場にいちばん近い出口に検問所を設け、出口の封鎖で仕方なくおりてくる車で疑わしい車をかたっぱしから停めさせて、乗っている人間を身体検査。かくして8人の若者が、麻薬所持他さまざまな容疑で逮捕されたが、なかにはパイプを所持していたというだけで捕まった者もいた。このニュースを聞いて、僕たちはただちに弁護士たちを面会に向かわせ、無料の法的アドバイスを与えるように指示した。結局、会期中に麻薬所持で80名の逮捕者が出たが、やってきた人間の数から考えれば、これはまずまず、ひ

CamScannerでスキャン

どい数字ではないだろう。
バス会社のショート・ラインはNYCのメイン・バスターミナル、ポート・オーソリティからベセル行きの臨時便を増発した。小さなサリバン・カウンティ空港まで飛行機で飛んでくる者もいたが、その数はわずかで、フェスティバル参加者のほとんどは車でやってきた。まるで旅のキャラバンのようにたくさんの車が列を作って町に流れこんでくると、ホワイト・レイクの住人たちは道路わきの歩道に立ち、このふってわいたサーカスのパレードのような行列に見入っていた。
アビー・ホフマンは後に、ショート・ラインのバスでニューヨークからやってきた彼の妻、アニタがした愉快な体験を披露している。

アビー・ホフマン　フリークスたちで満員のバスに乗って、このバスでスルーウェイをやってきたアニタが話してくれたんだが、乗客全員で歌ったり、笑ったり、ドープを回したり、みんなごきげんで、バスが渋滞した道で停まった時、道端でヒッチハイクしようと親指サインを出してる若い奴を見つけると、車内でとびはねながら、「乗せてやれ！　乗せてやれ！　あいつを乗せてやれ！」と大合唱。バスの運ちゃんは大汗かきながら、会社の規則があるからどうのこうの、しどろもどろで反論をまくしたてる。するとたちまちインスタント人民軍が形成され、通路では若者乗せろ決起集会だ。そして突然バスのドアが開いて、ナップザックを背負ったヒッピー少年がバスに乗りこんでくると、もう大騒ぎ（笑）。みんなふざけ、おどけ、運ちゃんもホッとしたのか、でっかい笑顔。誰かが回そうとしたジョイントは受け取りはしなかったけれど、そいつのもじゃもじゃ頭をつかまえて、かきむしるという兄弟風ジェスチャーで応じたとか。運ちゃんも乗客もみんな、ごきげんスマイルだったんだとさ。

ショート・ラインは後で、この時のバス・ドライバーたちの〝若者たちをウッドストックに運んだ喜び〟の証言を集め、ちゃっかり会社の宣伝にしていた。ドライバーのひとり、ユージン・ジェニングスは「渋滞で3時間あまり、私たちのバスは動けない状態になりました。バスの〝特急〟サインを、みんながジョークにしているのが聞こえてきましたよ。彼らの服装は少しだらしのない印象でしたが、でも、みんな清潔感のある、やさしい若者たちでしたよ。みんなで活かし、活かされという感じでしたね」、と語っていた。

水曜日の夜に数時間だけ睡眠をとり、目がさめると雲ひとつなく晴れた空。あれはその1週間でおぼえているかぎりでは初めての青空だった。〝これは、いいサインだぞ!〟と僕は思ったものだ。そしてそのとおり木曜日は、それまで抱えていた問題が自然に解決されていったのだった。ただし、フード・フォー・ラヴの起こしたゴタゴタをはじめ、いくつかの問題はそのまま。だが、ジョー・フィンクが約束してくれたとおり、ニューヨークから非番の警察官たちが次々と姿を見せ、任務につきたいと言ってきたのだ。

ウエス・ポメロイ　木曜日になると、ついに何人かの警官から話がしたい、と連絡が入ってきた。やってきた彼らは「さあ、仕事をさせてくれ」と切り出した。そこでドン・ガヌングを面会にやると、彼らは〝ロビン・フッド〟だ、〝エロール・フリン〟だとか、偽名を名乗って、現金払いでしかも以前に約束した金額よりもギャラを上げてほしいと要求してきたんだ。半分脅しをかけられたような気分がしたが、それしか他に方法はない。24時間シフトで一日100ドル、前の倍の額を払

CamScannerでスキャン

うということで彼らを雇うことにしたよ。希望どおり現金払いでね。腹が立ったが、他にどうしようもない。われわれは会場以外にもセキュリティが必要だった。近所の家や農場を警備する人間がね。彼らは上級職の保安官クラスの連中だったので、そのうちのひとりに住民たちの警護を頼んだよ。

その日の夕方、ウエスとジョン・ファブリから呼ばれ、集まってきた276人のオマワリさんたちに会って、オリエンテーションをすることになった。行ってみると、みんなもう僕らの〝ユニフォーム〟に着替えて、ウォーキー・トーキーを身につけていた。

「さあ、彼がきみたちのボスだ」と紹介された。驚いたことに笑う者はひとりもいない。「とにかく、やってもらいたいいちばんのことはみんなを助けることで、ささいな不法行為でもめごとを起こさないでほしい」、と僕は彼らに頼んだ。

「楽しい時を持つこと。でもあんまり、ハイで舞い上がらないようにしてあげてくれ!」――これはドッと受けたものだ。

すべりこみセーフ――映画契約成立

木曜日に舞いこんだ、もうひとつのグッドニュースはアーティからのものだった。ついに彼は映画化の権利を買う会社を見つけたのだ。長年、音楽業界にいた彼はワーナー・ブラザース社にいくつかのつながりを持っていた。しかも決定力を持ったお偉方とのつながりを。ワーナー・ブラザースに引き抜かれる前、フレディ・ウェイントラウブはヴィレッジで「ビター・エンド」を経営し、テッド・

アシュリーはタレント・エージェントの会社、アシュリーズ・フェイマスをやっていた。アーティがレコーディングを手がけたグループ、カウシルズのマネージメントをしていた会社だ。そしてテッドはワーナーの映画部門、ワーナー・ピクチャーズの社長に、フレディは副社長になったのだ。こうしてアーティは木曜日に彼らと会ってきた。

アーティ・コーンフェルド　僕は彼らに言ったんだ、「もし、暴動が起こって、みんな死んでしまったら、あんたがたはバカ売れの映画を手にすることになるんだ。もし、僕たちの望みどおりにいったら、最高にビューティフルな映画が生まれ、そいつは僕たちにたんまり儲けをもたらしてくれるんだ」ってね。僕たちはオフィスに腰をおろして、手にした紙と鉛筆で、映画化権の条件を書きだした。現像費を払った後、収益はワーナーとウッドストック・ベンチャーズで50／50とすること。それから（マイケル・）ワドレーを連れてきて彼と監督契約を結んだのさ。それで映画化の話は正式に契約が成立、決まりってわけだ。そして撮影のために10万ドルをもらった。契約書のサインはテッド・アシュリーと僕がしたよ。ここからあの映画が誕生したのさ。それからリムジンに跳び乗って、アップステートをめざしたんだけれど、なんてこったい。リムジンは故障して動かなくなっちまって、僕と女房はそこからヒッチハイクして、フェスティバル会場にたどりついたってわけさ。

ジョイス・ミッチェル　わたしはアーティ・コーンフェルドとフレディのミーティングに同席していたの。それでフレディはわたしに訊くのよ、「いくつのグループのレコードを出せるのか？」って。そもそも、この時、わたしはマイケルに「レコードを出せるように頑張ってきてくれ」って送りこまれてきていたから、しめた！　って思ったわ。結局、出演した中の6グループぐらいのレコ

CamScannerでスキャン

ードを出せたわ。どれもメジャーなグループではなかったけれどね。

ワーナー・ブラザースとの映画配給権の契約に関連して、金曜日に映画の監督として、マイケル・ワドレーがサインした。その日、ワーナーは出演者を会場に運ぶためのヘリコプターをチャーターするために、僕らにさらに5万ドル払ってくれた。すべてがこんな具合に直前に決まったので、アーティはミュージシャンたちが到着すると、アーティスト・パビリオンからステージに向かう道を一緒に歩きながら、映画出演を承諾してくれれば、さらに出演料の50パーセントを支払うことを説明しなければならなかった。その週末に演奏した多くのミュージシャン、グループがこの映画によって、そのキャリアを生涯続けられるほどの名声と人気を手にしたのだった。だが、映画への出演を拒否したアーティストもいた。ニール・ヤング（彼はクロスビー、スティルス＆ナッシュがステージで演奏する直前に参加したのだ）、そしてグレイトフル・デッドも首を振った（デッドはモンタレー・ポップの映画でも同じことをしていた）。アルバート・グロスマンは彼がマネージメントをてがけるアーティストたちを誰ひとり映画には出させなかった。だが、ワーナーはリッチー・ヘイヴンスだけは映画に登場させることに成功した。ザ・バンドとジャニス・ジョプリンの映像は、これからなんと25年後、ディレクターズ・カット版でやっと多くのファンのもとに届けられたのだった。

実はアーティがワーナーとの映画契約を決める前に、僕らは映画をまるまる自分たちのものにするチャンスがあったのだ。それはボブ・モーリスがジョン・ロバーツにコンタクトを取って、コダックのフィルム代、ウエスト・コーストからカメラマンたちを呼び寄せる飛行機代他もろもろで10万ドルを出資してもらえれば、と持ちかけた時のことだった。もし、その費用を工面してもらえれば、ウッドストック・ベンチャーズが完成した映画のすべての権利を所有できるという話だったのだ。しかし、

その時、なにもかも経費が予定額を上回り、とめどなく膨れあがっていることに圧倒されていたジョンは、このボブ・モーリスからの申し出を、あぶないギャンブルとしか考えられず、断ってしまったのだ。「ただのドキュメンタリー映画では一文の稼ぎもでないのでは……」と考えたジョン・ロバーツは、こうして絶好の儲け話を棒にふってしまったのだ。

木曜日の昼から、会場にはひっきりなしに人が流れこんできた。映画のアソシエイト・プロデューサー、デイル・ベル、マイケル・ワドレーと撮影隊一行もやってきた。その中にはドキュメンタリー・カメラマンのデヴィッド・メイヤーズとアル・ウェルトハイマー、エディター&アシスタント・ディレクターのセルマ・スクーンメイカー、そしてNYUのフィルム・スクールを卒業したばかりの、若き日のマーティン・スコセッシ監督の姿もあった。ユニット・スーパーバイザーのジョン・バインダーはマイケル・マーゲッツに土地の地形を尋ねた時、彼が与えてくれたアドバイスを印象深くおぼえていた。

「なにか面白いものを見つけたら、俺は反射的に撮影ボタンを押すんだ。それが映画全体のトーンを決めることにもなるのさ。こういう風に切り取りたいなんて考えないことだ。ウッドストックを自分の思うようにオーガナイズするなんてできっこないよ、そんなこと誰もできやしないんだから」。

デイル・ベル　俺は4日間で80人集め、木曜日の朝までに全員をあそこに送りこんだよ。その前にいろんなスタジオや知り合いのところで、借りたり、頼みこんだり、脅したり、盗んだりで、撮影に必要なあらゆる機材をかきあつめてさ。カメラ、レンズ、マガジン、モーター、いっぱいあればみんなが交換したりして使えるじゃないか。マイケル、クリス・ランガート、スティーヴ・コーエ

ン、チップ・モンク、みんなに感謝だね、俺はあらかじめステージの正面に4×8の合板で突き出しを作ってくれと頼んでおいたんだ。ステージの高さから4、5フィート低い所に。そうすれば俺たちの撮影班が完璧なカメラ・アングルで撮影できるもの。俺たちは全部手持ちの撮影になるかもと思ってたんだ。でも、もし彼らが突き出しを作ってくれたら、そこに8人のマガジンを取り替える係とアシスタントを置けば、音楽が演奏されている間、ずっとカメラを回し、マガジンを取り替え、誰のカメラが誰を撮り、それが何個目のロールに撮影されたか、きちんと記録しておけるもの。

撮影クルーの幾人かは、地元の人々の姿を撮影しに町へ行き、彼らのフェスティバルについての反応をフィルムにおさめた。身動きとれなくなった道路上に車を置き去りにする若者たちの様子も記録された。木曜日の午後には、渋滞は何マイルにもなり、小さなルート17Bは長さ20マイルの駐車場状態になってしまった。僕らのところにはやがて、ルート17号の渋滞がニューヨーク・スルーウェイにまでのび始めたというレポートが届きはじめた。

バリー・ティアズデイル（アンダーグラウンド・ビデオ作家）あの夏、僕は21歳。あの近くには僕の祖母のサマーハウスがあったから、昔から土地勘があるなじみのエリアだったんだ。僕は週の早いうちに出かけていってテントをはると、一度離れて、木曜日の夜に友人たちと戻ってきた。ヘルド・ロードを歩いていた時のあの気持ち、まるで人間の海の中を渡っているような気持ちはよくおぼえているよ。みんなが同じ方向に向かって歩いていた。どんな乗り物ももう乗り入れる空間なんてないんだ。車で来た連中は完全にアウトさ。あんなに人が混みあっていたことは他になかったね。あたりは真っ暗で、聞こえてくるのは人々の足音と、静かな話し声だけ。時々、誰かが歌ったり、

太鼓を鳴らしたりしていたけどね。でも、僕はまるでインドで巡礼の旅をしているみたいな気分になっていたんだ。

ロブ・ケネディ（フェスティバル参加者）僕は16歳でニュージャージーの北から友だち3人とヒッチハイクしたんだ。2つのグループに分かれて、ルート17Bを来たんだけれど、不思議なことにどちらも木曜日の夕暮れ時にベセルに着いたんだ。だから思っていたよりずっと簡単に、また一緒になれたんだ。会場まではかなり長い距離を歩かなくちゃならなかった。フェスティバルのグラウンドにかなり近くなったところで止まって、テントを立てて、食事をしたよ。そうしてる間に、友だちのマークが先に行って、「会場はすぐ先だよ！」って目を輝かせて帰ってきたんだ。

　みんなアシッドがきまっちゃっていたから、よろけながら会場入りしたね。食べ物は少ししか持ってきてなかったから、あっというまになくなってしまった。でも、お腹がすいていたって記憶はあんまりないな。みんなチケットは持っていたんだけれど、必要じゃないってことがわかった。郵便で金曜のチケットを手に入れ、土曜日、日曜日のは行けなくなった友だちから、出発の直前に買ったんだ。フェスの会場に入ると、はぐれないように、僕らは一か所決めた場所に、はりついていたよ。アシッドをやっていたから、あの人の波にはブッとんだね。トイレに行って、4人の仲間たちのいるところに戻るまでは、ちゃんと帰れるか心配で胸がドキドキしたよ。そんなんで木曜日の夜から日曜日の朝まで、僕らはそのスポットからほとんど動かずにいたね。とにかく、僕らのうちの誰ひとり、アメリカにこんなにたくさんのヒッピーがいたってことが信じられなかった。あの頃、高校では変わっているのは僕らだけ、フリークと呼ばれていたのは僕らだけだったし、近くの町に何人かいるってことは知っていたけれど、まさかあんなにたくさんいたとはね。ウッドストックが

CamScannerでスキャン

あれだけ盛り上がった、ひとつの大きな原因はそのことにもよるんじゃないかな。〝僕たちには、こんなに大勢の仲間がいたんだ！〟ってね。

コンバット・ゾーンへようこそ

姿を見せない業者やスタッフに僕たちははじから電話して、交通渋滞に巻きこまれる前に急いで来るように言った。ドクター・アブルッチがやってきてくれて、どれだけの医療スタッフが集まっているかチェックすると、もっとたくさんの薬品や人員を手配してくれた。緊急の患者を輸送するためだけではなく、物資を運搬するためにも、もっとヘリコプターの数を増やす必要もあった。

ジョンは水曜日の朝に現れ、月曜日から来ていたジョエルは、すり鉢状のあたりに何千人も人がいることに腹を立てていた。これまでにもキャンプ場にいるなら無料だと告知はしていたが、ステージの前のいちばん良いエリアが早くから来ていた連中に占領されているのは許せないというのだ。でも、彼らが来た時にはまだフェンスも、チケット係も、ブースもなにひとつ準備されていなかったのだ。ジョンはこの何千という若者たちをどうしたものか、ウエスに相談をしたが、ウエスが彼に与えたアドバイスは、「そのまま、ほっておくように。それだけの人間を追い出そうとすれば、暴動が起きても不思議ではないだろう」というのだ。

ウエス・ポメロイ　コンバット・ゾーンにいるかのようだった。すべてが刻々と変化していた。でも、われわれの力に限りがあることは明白。となれば、その状況に身をまかせるしかないだろう。一日前まではそこまでひどい状態ではなかった。そして大勢の連中が姿を見せはじめた。最善の努

力で向き合うしかなかった。わかったのはフェンスもなし、ゲートもなし。そいつはほんとにがっかりだったよ。でも、フェンスは意味がなかったな。フェンスの下に穴をあければ簡単に入れたんだ。しかも、穴をあけて、みんなに「しのびこみたかったら、できるんだぜ」、とこっそり言いふらしている連中がいたんだ。

ビル・グラハム　俺は始まる前日に行った。着いてからはずっとあたりを歩いてまわっていたが、素晴らしい風景の場所だったね。でも、スムーズに事が運ぶとはとても思えなかった。だってあんな規模の大きなイベントなのに、見取り図ってやつがないんだ。最初に必要なものがね。交通の問題とか、たくさんうまくいかないことが起こるだろうって気がした。だって9万匹のネズミが、もしひとつの穴に入ろうとしたら、どうなると思う？　問題が起こるのはみえみえだろう。

木曜日の夜にジョン、ジョエル、ピーター・グッドリッチと僕は、トレイラーにいるフード・フォー・ラヴの連中に会いにいった。ところが彼らはトレイラーから出てこようともせず、彼らの代理人という弁護士を寄こし、ジョンに最初の支度金の7万5000ドルを返済した後、「収益を100パーセント与えなければ、ブースではいっさい何の販売もしない」と言う。ジョンは食料の収益をあてにしていただけに、この一方的な申し出に言葉を失っていた。足元を見てのこの卑劣なやり口に僕らは激怒した。だが、ウエスの忠告に従って、僕らはひとまず彼らの要求をのむことにした。フェスティバルが終わってから、再交渉もありえるだろう、とひそかな希望を抱きながら……。

その晩遅く、僕らのスタッフ、200人が寝泊まりしていたダイヤモンド・ホースシューが出火し

て、全員が避難するという事件が起こった。けが人がひとりも出なかったのはさいわいだった。宿泊者の大半は会場で徹夜作業をしていたのだ。ホテルに通じる道は車がいっぱいで消防車はたどりつけなかったが、なんとかホテルにいた人間で火を消し止めることができた。出火の原因が建物の地下の老朽化した電線のショートだったことはあきらかだった。

たくさんの記者たちが車でやってきて、僕にフェスティバルを中止するのか？　とか、本当に平和と音楽の3日間になるのか？　とか、聴衆がずっと和やかでピースフルでいられるのか？　それとも他のフェスティバルがそうだったように、会場が暴力と混乱の場に変わる可能性はないのか？　とか質問の矢を浴びせた。

「もし、これがうまくいかなかったら」と僕はワシントン・ポスト紙のレポーターに言った。「誰のせいにもしないで、みんな自分を責めるべきじゃないかな。僕らのこのフェスティバルは、ひとりひとりが文化そのものであるような人たちの手で作っているんだ。もしも、それがこういうやり方でうまくいかなかったら、僕が間違っていたってこと、すべてが間違っていたってことさ！」。

これまでの数週間、ずっと僕のそばで力になっていてくれたティシアが口を開いた。

「もし、これがわたしたちが夢見てきたとおりになれば、その時、人々はこのカルチャーをいままでとは違った目で見ることになるでしょう。わたしたちについてもね」。

ティシアは僕の言いたかったことを見事に言いあらわしてくれた。

「攻め続けるんだ、動き続けるんだ！」――その週末、僕の心に父、ハリー・ラングの言葉が何度、浮かんだことだろう。

© HENRY DILTZ

ホッグ・ファームの
フリーキッチン

© HENRY DILTZ

ホッグ・ファーム伝言板。
穴から顔を出すメル

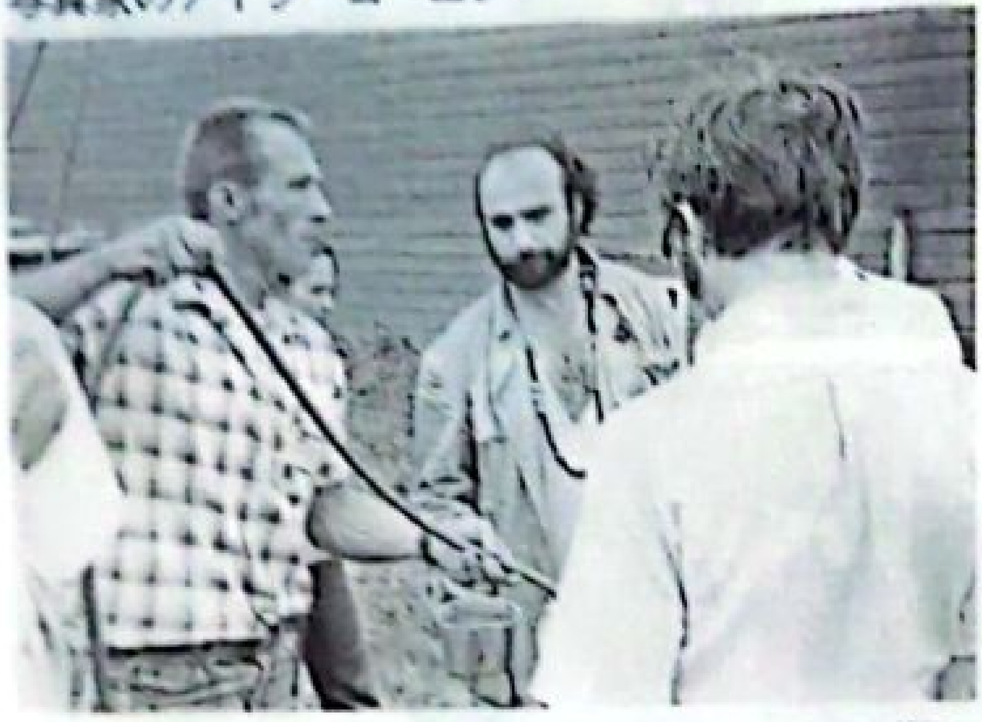
ヘンリー・ディルツ自画像。
ホッグ・ファームのバスの
ミラーを使って撮影

© HENRY DILTZ

ホッグ・ファーム・キャンプの光景

© HENRY DILTZ

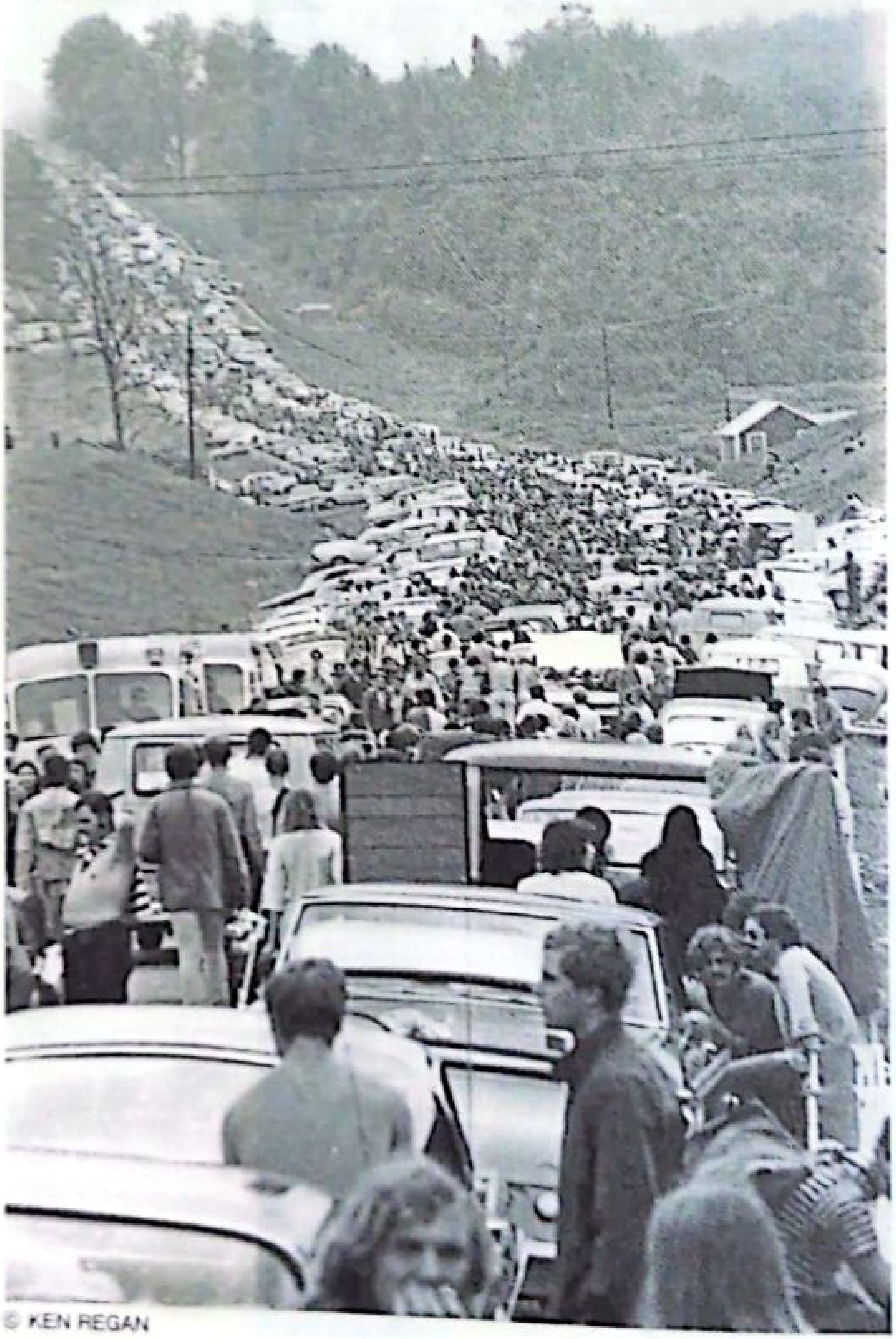
メリー・プランクスターのケン・バブズとアーティスト&写真家のアイラ・コーエン



© BARON WOLMAN

© HENRY DILTZ

平和パトロール部隊



© KEN REGAN

1969年8月15日の交通渋滞

CamScannerでスキャン

© BARON WOLMAN

© BARON WOLMAN

© KEN REGAN

(上から)探し物ゲット、森の中のブティーク、スイカ売りのスタンド、新鮮な牛乳をゲット

© BARON WOLMAN

第10章

August 15, 1969

1969年8月15日

Richie Havens
Sweetwater
Bert Sommer
Tim Hardin
Ravi Shankar
Melanie
Arlo Guthrie
Joan Baez

CamScannerでスキャン

「ヘイ、リッチー、1時間ぐらいでやってもらえるかい？」
「ダメだよ、俺はごめんさ！　誰か他の奴にやってもらってくれ！　一番バッターなんて勘弁してくれよな！」
「いいだろ、きみのバンドもいるんだし、きみならうまくやれるさ！　カッコいいぜ、最初に登場するアーティストになるなんて」
「ダメだよ、ベースの奴がまだ着いてないし、ショーの始まりが遅れているのに、俺なんかが出ていったら、みんな頭にきて、ビールの缶を投げつけるぜ！」
「じゃあ、考えといてくれよ……」
金曜日の午後3時、僕はリッチー・ヘイヴンスをなんとかフェスティバルの一番手で歌ってもらって、ショーを始めようとしているところだ。音楽は4時に開始と告知しているし、まだ観客はそわそわしはじめているわけでもないが、ステージの前に陣取っている連中は、水曜日からずっとその場で肩を並べて、〝その時〟を待ち続けているのだ。あんまり長いこと音楽のないままで待たせるのはいやだった。前にもこんな状況に遭遇したことがあるから、僕としては同じ過ちを繰り返したくはない。
これまで48時間、僕はほぼ一睡もしていなくて、なんだか気力だけで持っているような状態だ。時々気つけをやりながら、夜明けから忙しく、もう百万ぐらいのことをやり、やっと音楽が始められるところまでこぎつけたのだ。すべてのことがひとつになって、見つからなかったパズルのピースが、一気にはまるべきところにはまる。これが僕のいちばん好きなパートなのだ。これまで僕らはもういままでの人生、ずっとこれをしてきたのでは、と思えるぐらい、長い、長い間、このための準備をしてきたのだ。いよいよオープニング！　そのなんともいえぬ高揚感と、これまで一度も見たことのない大勢の人々の眺めが一緒になって、いま僕に必要なアドレナリン・ラッシュをくれるのだ。

でも、この週末の天気予報はいまいち冴えないし、まわりから聞こえてくるのは、〝なんだか悲惨な状況になるのでは……〟と陰気なつぶやきばかり。メル、スタン、ジョン・モリスにチップたちは入れ替わり立ち替わり、僕の耳元で想定されるトラブルを並べたてる。水道管の破裂に、土地に侵入する若者たちへの地主たちの文句に、未完成のフェンス……メルは〝いっそのこと残ったフェンスを外してしまっては？〟などと言い出す始末だ。ジョンとジョエルは時を追ってその数を増す〝ただ見客たち〟に弱りきっている。道路状況は悪くなるばかりで、薬品をはじめ大事なサプライは果たして無事に届くのかどうか、気が気ではない。

隣町のリバティのホリディ・インやハワード・ジョンソンに泊まっているミュージシャンの輸送用に僕らはヘリ部隊の数を増やしている。その最初の到着者の中にリッチー・ヘイヴンスと彼のバンドのギターとパーカッション奏者がいたのだ。ほぼ完成まぢかのアーティスト・パビリオンにたむろしている彼らの姿を僕はチェックずみだ。また、しばらくしたら、声をかけてみることにしよう。

リッチーはプロだ。60年代の初めからヴィレッジのコーヒーハウスで歌いはじめ、その長身の体から発するパワフルな声と、リズミカルでユニークな彼のギター奏法は定評がある。そして彼は恐れを知らぬ男なのだ。オープニング・アクトに予定していたロス出身のフォークロック・バンド、スウィートウォーターは、あきらかにリバティのモーテルからこちらに向かう途中で渋滞にひっかかってしまったのだろう。彼らの機材トラックも別な道の渋滞にはまっているらしい。今またすぐに同じことをむしかえしてリッチーにプレッシャーをかけたくはないが、彼の姿を僕の視界からのがすことはしない。また1時間ぐらい経ったら、軽くおうかがいのパンチをお見舞いしてみよう。

リッチー・ヘイヴンス　俺とギタリストのディーノ（ポール・ウィリアムス）と、ドラマーのダニ

CamScannerでスキャン

エル・ベン・ザブロンはヘリコプターの総ガラスばりのコックピットにつめこまれたんだ。パイロットのすぐ後ろに2個のコンガと2台のギターと一緒にね。上から下までガラスばりだから、足元から下の地面まできれいに見渡せるのさ。まるで空中に座っているような感じだったね。ちょっと左に傾くと木々の海だったのが、別の海に変わっていったんだ。とにかくビューティフルな光景だったね。何十万という人々が見えた時は、ポカンと口があいたよ。次の日、ニューヨーク・タイムズには20万人と載っていたけれど、そんなものじゃないさ。初日で少なくとも50万人以上が集まっていたと思う。

すごいことさ、大晦日のタイムズ・スクエアの何倍もの人波が昼の光の中、ビルも壁もない自然の中にあふれているなんて。そう、野原にあふれる人たちはブランケットみたいに、隣の丘につながる道をおおい、さらに野原の外側の森の中にまで広がっているんだ。もうあそこからは絶対にステージは見えないっていうのに。俺たちを乗せたヘリコプターはステージのすぐ後ろに着いた。外に出て見回すと三本の道がすべて人波でいっぱい、ことにステージ・エリアに近い丘の下につながる道はめちゃ混みになっていた。

でも、どこを見てもメローな雰囲気につつまれていたよ。いちばんステージのそばに陣取っていた連中だって、大声でなにかわめいてるような奴はひとりもいない。気持ちのいい夏の日に、田園地帯の真ん中で誰もがいい時を過ごしていたんだ。ポットでとんでいる奴、ポータブル・ラジオから流れる音楽で踊っている奴、フリスビーを投げている奴。寝転がってお日さまの光り浴びて昼寝している連中もいれば、ブランケットの下にもぐりこんで、なにかいいことしてるカップルもいただろう。そこで出会った連中どうしでダべったり、ワインをまわしたり、みんなそれぞれのやり方でグッド・タイム、楽しんでいたんだよ。どこから来たのか、若いか、年をとっているかなんて、

そんなことはまったく関係なくさ。あたりにはグッド・ヴァイブがあふれていたんだ。

最後の24時間はぶっ続けでの時間との戦いだった。クルーはステージの仕上げで夜を徹して働き、日が昇るころ、ついにステージ転換用の直径12メートルの回転板を設置し終えることができた。この調子でいけば――とその時僕は思った――すべてはうまくいくはずだ！

まるで、そんな僕の思いに応えるように、バックステージにきれいな女性が現れ、彼女はバッグから白いパウダーが入ったプラスティックの袋を取り出した。善きサマリア人が徹夜作業で頑張っているクルーのためにコカインを1パウンド、気つけ薬として発注していたのだった。だって、なにしろこの先にはまだ、不眠不休の週末が待ちうけているのだ。

午前8時、バックステージのプロダクション・トレイラーの前に全員のクルーが集まって、鼻を鳴らしながら輪になった。しかし、円テーブルにパウダーがあけられ、人数分に分けられ、さて、という時だった。にわかに空には雲がかかり、まるで消火栓のホースをあけたような勢いで雨が僕らの頭上に襲いかかってきたのだ。身動きする間もなかった。みんなが声もなく立ちつくす、その前で、真珠色に輝いていたパウダーは、べちゃべちゃの液状のかたまりに姿を変えていた。みんなはわれ先にと、白いペーストをテーブルからすくいとろうとしたが、時すでに遅し。大半はぽたぽた、地面にしたたり落ちてしまっていた。

神々はまた我らに正しき道を示したもうたのだった……。

フリー・コンサート・ナウ！——フェスティバル開幕

プレイボールへのカウントダウンが始まったこの時点で、僕は最後の決断をした。チップ・モンクとジョン・モリスのところへ行って、MCの仕事をふたりでやってもらうように頼んだのだ。ジョンは木曜日にビル・ハンリーがPAを設置した時から、テストのためにマイクの前に立って、会場にその声を響かせていた。彼はフィルモアでのコンサートでアナウンスを担当し、スポットライトを浴びるのが嫌いな人種ではなかった。一方、チップにとっては、これは未体験の仕事だったが、彼の言葉遣いはいつも精確で、品があったし、まずなによりも彼には堂々とした存在感があったから、彼が立派にMCをこなしてくれることは間違いなかった。

チップ・モンク　初日の朝の7時ごろ、ステージの上で作業をしていた僕のところへマイケルがやってきて、いきなりこう言うんだ。「チップ、照明のほうはたいして仕事ができなくなったことだし、きみに別の仕事をやってもらうよ。マスター・オブ・セレモニーという仕事さ」。聞いたとたんに、僕には自分の膝がガクガクとふれあって音を立てるのがわかったよ！　ビビったなんてもんじゃなかったよ、そう言われた時は。なのに、彼の口調は「やってくれよ、やっつけろよ」とさらりとしたものなんだ。僕がした最初のアナウンスはステージ正面のたまりにいる連中に立ち上がって、下がってステージ前をあけてくれってお願いさ。そのうち次々、短いメモが渡ってきたんだ。「ハロルド、後方の青いテントに行ってくれ。きみの糖尿病の薬が届いている！」なんてやつがね。つまり、それは誰かがそこで仕入れた草を売るってことなんだけど（笑）。

金曜日の朝までにマックスの農場には少なくとも20万の人間がひしめきあっていた。フェンスははじから倒されてしまい、中にはどこで切符が買えるのか一生懸命あたりを探し歩いている人たちもいたのだけれど、もう切符を集めたり、売ることなんてできないってことはあきらかだった。それでもなんとかしなければ、と僕らは必死で対処の方法を見つけようと頑張っていた。でも責任者のキース・オコナーの姿も、ジョエルの姿も僕は見つけられずにいた。そこで切符のオペレーションはどうなっているのか、メルに連絡して訊いてみたが、彼は何も聞いていないと言う。後でキースから聞いたのは、彼と他のチケット販売スタッフは、金曜の早朝に集合というスケジュール表をもらっていたとか……あんなに大勢の人間が会場内に入っていたというのに、計画はあまりにマヌケで、あまりに遅すぎたのだ。

オリジナルのプランでは午後1時にゲートを開けて、会場への入場が開始されるはずだった。でも、ゲートなんて、どこにあるのだ？　代わりにアーティが出した案は、「ふわりとした妖精風ガウンを女たちに着せて、帽子を持って会場を回って集金するのはどうだろう？」　彼は一服もきめていなくても、こんなことを思いつく奴なのだ。僕らが深刻に事態打開の討議をしているところに、カメラを回しだした男たちがいた。僕はただちにそこにいた全員にレンズの先から離れるように指示を出した。ウッドストックのドキュメンタリーは残してもらいたいが、やはり限界って部分もあるのだ。

その午後、ジョンとウエスと話し合った後に、僕らは、今では誰もが知っている結論に達した。ジョンはがっくり肩を落としていた。僕はジョン・モリスにアナウンスを頼んで、集まっているすべての参加者に僕たちの決断を告げた。

「コンサートはこれから先、フリー・コンサートとする！」。巻き起こった拍手と歓声に続けてジョ

ンは言った。「このフェスティバルを立ち上げた人たちは、これから多大な負債を負うだろう。膨大な負債を……」。このメッセージを聞いて、みんなが一緒におたがいを助けあって、ひとつになってくれることを僕たちは願った。他人事ではない、僕らはいま、それがなんであれ、この祝祭の時を成功に向かってひとりひとりの手で担うのだ。

ジョイス・ミッチェル　アナウンスがされるずっと前に、みんなこれが無料のフェスティバルになることは予感していたわ。原因はマイケルのところにやってきたたくさんのアンダーグラウンド・グループ、それにどうやってもあのいまいましいフェンスが間に合わなかったこと、そんなことが重なったからよ。他にも関係者以外にはバラせない、いろんなことがあったわ。別に陰謀とかそういうことじゃなくて、なるべくしてそうなったってこと。でも大事なことはマイケルじゃないけれど、とにかくフェスティバルをやるってこと、そのことだけだったのよ。

ウエス・ポメロイ　彼らの足を引っ張ってダウンさせたのは私じゃないかって気持ちだったよ。私がおかした失敗のせいだって。でも、私には嘘は言えなかった。だから、私はジョンにこう言ったのだ。「もう、このことで私たちができることはなにもない。きみの金を守ることは私にはできないよ」。でも、いくつかの場所に人々が献金をできるような場所を設置してはどうか、と提案したんだ。そうすれば、感謝したみんなが自分たちの気持ちを表すことができる。それはなかなか有効な提案だと思えたんだ。だって、実際に「どこでぼくらのお金を受けとってくれるんだい？」って訊いている人たちもいたんだから。でも、どういうわけか、この案が実行されることはなかったんだ。

チップとジョンがステージから、まもなくコンサートが始まると何度も念を押すようにアナウンスして、みんなを落ち着かせ、僕らはPAセットから新しいレッド・ツェッペリンとクロスビー、スティルス＆ナッシュのアルバムを流した。会場の雰囲気はとても良かった。そんな頃にプロダクション・オフィスにスティーヴン・スティルスからジョン・モリスに電話がかかり、どうもデヴィッド・ゲフィンか誰かが集まっているすごい人間の数を言ったらしく、彼とバンドの連中は演奏することをビビりだしていた。そこでジョンは「ちょっとこれを聞けよ」と受話器を持ち上げて、流れていた「青い眼のジュディ」と観客の喝采を　スティルスに聞かせたのだ。「ＯＫ！　俺たちは出るぜ！」、彼は言った、「日曜日にヘリコプターでそっちへ行くぜ！」。

ビル・グラハムがバックステージにやってきた。ジョン・モリスは彼にアドバイスをあおごうと、すさまじい道路渋滞と押しかけた人波のせいで、予定の出演者が現れていないことを告げた。だが、百戦錬磨のコンサート・プロデューサーもこの状況にはなすすべを知らなかった。無理もない、僕らが直面していたのは、これまで誰も体験したことのない事態なのだ。彼は僕に言った。

「もう、プロモーターの時間は終えて、プロデューサーの仕事にとりかかれ！」

「これだけの人間を集めたんだ！　いったい彼らをどうするつもりなんだ？」

「僕らは彼らの面倒をみるのさ、ビル」。僕はそう言って、ステージへの階段を登っていった。

午後4時、僕はステージの右手にチップが用意してくれた〝司令席〟にはりついた。ここはこの週末、僕が多くの時間を過ごすことになる場所だった。その時だ、ステージの後ろから、けたたましいバイク音が聞こえてきたのは。見るとウエスト・ショア・ロードを20台ほどのバイカーの一団が走

っていた。だが不安感は一瞬で飛び去った。彼らはNYCから、週末いつもここらを流しにくるバイカー・グループだったのだ。彼らがやってくると――ああ、なんと礼儀正しいふるまい――若者たちは道路のはじに寄って彼らに道をあけてあげていた。そして彼らが通りすぎると、また、たちまち道路は人波に飲みこまれて見えなくなってしまった。

ロブ・ケネディ（フェスティバル参加者）観客たちはまるでひとつの生き物になったみたいに、一緒に呼吸しはじめていたよ。分けへだてるものなんかなくなって、ひとつにつながっていたんだ。裸の人間、ハイになってる人間、ストレートな連中、その間にありとあらゆる種類の人間がいたよ。とってもクールな群衆だった。おもしろい話があるよ。僕の友人のひとりが、まるでシャーロック・ホームズが持っているような、でっかいパイプを持ってきていたんだ。柄の長さが10インチもあり、吹かす部分も大きくて、いつも一服で咳きこんじゃうようなのだったね。それで別の友人が咳きこんで、なんかムシのいどころが悪かったんだろう、急に怒りだして、持っていたパイプを思いきり遠くまで投げてしまったんだよ。パイプの持ち主もそれで頭にきてしまって、「投げ返して、投げ返してくれ！」と遠くの群衆に叫んだんだ。すると、突然、戻ってきたんだ。しかも、まだ燃えたままで、投げた奴の頭に命中したんだ。インスタント・カーマってやつさ！（笑）

木々の中の出店エリアのそばには、にわかにドラッグとドラッグ用品を売買する闇市場が出現した。LSD、THC、メスカリン、ペヨーテ、マッシュルームにさまざまな種類のグラスとハシシがずらり。もちろんタバコも置かれてはいたけれど、スタンドではローリング・ペイパーからパイプ、ローチ・クリップが手に入った。

一日中、会場には人、人、また人が流れこみ続けていた。ニューヨークから100マイルの距離を車でやってくるには8時間か、それ以上の時間がかかった。道路はスルーウェイ16番出口にたどりつく前に渋滞で動けなくなり、よしんば出られたとしてもその先のルート17号はもっとひどい渋滞になっていた。かくしてニューヨーク州警察は16番出口を遮断して、出られなくしてしまった。長さ12マイルのルート17Bは木曜日の夜から車がつまって、動けない状態になっていた。金曜日の午後までには会場から半径20マイル内の道路はすべて完全に麻痺してしまっていた。

グリール・マーカス（音楽ジャーナリスト）冒険大好きの僕ら『ローリング・ストーン』誌の取材チームは、渋滞なんてやっつけようぜ、と朝早くシティを出発したんだ……それでとりあえず、フェスティバル会場から8マイル離れた、ちっぽけな町、モンティチェロに着いたのだけど、そこから先は地獄の8マイル。2車線道路に何千台って車がひしめいて、1時間たってもちょろりとしか進めやしない。エンジンは沸騰する、両脇には人々がへたってる。でも不思議なことに誰もが上気した顔で微笑んでいるんだ。道わきには廃車が捨てられたままに錆び付いているんだけれどなんだか僕にはそれがオレゴン・トレイルで死んだ馬たちの骸骨（がいこつ）みたいに見えたりしてね。そのうち閃（ひらめ）いて、路肩を走りだしてはみたんだけれど、しばらく進むとアウト！　同じことを思いついた他の数千台が前でつかえていて、また止まっちまったのさ。そして何時間、やっと2車線が4車線にかわる地点までたどりついたけれど、それでもまだ、渋滞はちっとも変わらないんだ……。

車をわきに停めて、畑の中を歩きだす若い連中もかなりいたよ。先の方に行っていた若い奴らが戻ってきて、「この先はずっと車動いていないし、後6マイルあるよ」って教えてくれた。「宇宙的なトラフィック・ジャムだぜ、これは！」って笑ったものさ。すべての車がジグソーパズルのかけ

CamScannerでスキャン

らみたいにこの場所に落ちてきてそのまま永遠にここにいるんだろうぜ、って……。ホワイト・レイクへのハイウェイ沿いの光景はすごいものだったよ。誰かが言っていたように、それはどこか、モスクワから必死で逃げ帰るナポレオンの軍隊みたいだったかも。

ジョナサン・グールド（フェスティバル参加者）ルート17Bで泥に埋まって動けなくなってる車の群れに、僕らはうんざりしちゃって、わき道を曲がって自分たちの道を行こうぜってことにしたんだ。ほこりだらけの砂利道を数マイル進んだらサリバン・カウンティ空港って、ちっぽけなエアポートに出たんだ。空港なんていっても、まわりにはおんぼろな格納庫といくつかの建物と、滑走路なんてひとつあるだけの超田舎空港さ。けれど、一緒にいた仲間の誰ひとり、その先の旅のアイディアを出せないでいたっけな。それで僕の番さ。僕は当時、自尊心旺盛な似非ヒッピーで、ミュージシャン・ウォナビーで、しかもロンドンから帰りたての17歳なら、ニューヨーク北のど田舎の3日間のお出かけにするであろう、という服装をしていたんだ。ていねいに仕立てられたスエードのスポーツ・ジャケット、ふくらんだ袖の黄色のブラウス・シャツ、ベルベット地のパッチ状ベルボトム・パンツ、髪は肩まで伸び、アビエイター・サングラスでキメキメさ。僕がおぼえているかぎり、仲間のふたり、トムとクリスはもう少し地味で、上から下までデニムだったんじゃないかな。でもファッションは口ほどに雄弁なり。つまり、僕はロック・ミュージシャンで、ふたりはローディってことで、この成りすまし作戦で行こうと駐車場で車をおりると、ヘリコプターが発着している草ぼうぼうの滑走路のはじに行き、並んで順番を待っているカラフルな服装の25人ほどいた列の後についたんだ。いつか、お偉いさんみたいなのが現れて「こら、おまえたち、そこで何やってるんだ？」って怒鳴られるんじゃないかって内心ドキドキしながら待っていたっけ。ヘリコプターは

着くたびにパイロットの横の席にふたりずつ乗せては飛び立っていく。それでやっと僕らの番、クリスと僕は前かがみになってタール舗装されたポートを走り（前にTVで見ていたとおりの格好さ）、泡みたいな形のガラスのキャビンに乗りこみ、シートベルトをカチリとしめて、さあ、出発！空へと舞い上がったんだ。

もちろん、それまでヘリコプターなんて乗ったこともなかったし、低空飛行する今にも外に飛び出しそうな前の席から、ニューヨーク北の丘陵が続く田園地帯を眼下に一望するなんて思ってもいなかった……あれは短かったけど、まるで夢のような体験だったよ。舞い上がったかと思うと、そら、僕らの下には見たこともないほど大勢の人がたまった緑の野外劇場、その上を一度ぐるりと旋回して、ステージのすぐ左にある野原のポートに向かって機体は降下を始めた。フライトの間、僕とクリスは視線を合わせずに、〝ヘリコプターなんていつも乗っているぜ〟、みたいな態度をとることに神経を集中させたものだ。そして到着。化けの皮がはがれて、この恥知らずのインチキ野郎なんてつまみ出されるのはまっぴらごめんだ、とめちゃ緊張していたが、そら、ふたりのいかつい顔のヒッピー・ローディ風の男たちがヘリコプターに向かって駆けてくる。〝でも、少なくともオマワリではないらしい〟と思ったっけ。ひとりがドアの外から、エンジン音にまけぬような声で僕らに叫んだ。「何か必要かい？」、何か必要かだって？「いや、いまのところ何もいらないよ、ありがとう！」。僕らはシートベルトのバックルを外すと、外に出てガラスの泡に別れを告げ、今やエキスパートになった気分の前屈みポジションでヒッピー・ローディたちが指示する方向に、フィールドを走った。走りながら彼らは「バックステージ・エリアはあそこ」「フード・テーブルは向こう」とか手短にオリエンテーションしてくれた。そしてすぐに後のヘリでトムが到着した。彼もなんのおとがめも受けずにすんだ。こうして僕たちはウッドストック入りを果たしたんだ。足はしっ

かり地面の上に、頭はまだ雲の上に浮かべたままでね……。

その日の終わる頃、ウエスは地元のラジオ局を通じて、「もはやこ以上の来場者を受け入れるキャパシティがないので、ウッドストックへ向かう試みはしないでほしい！」と、人々に訴えた。その金曜日、おそらく100万にもおよぶ人々が会場へ向かおうとしていたが、引き返さざるをえなかったのだ。

ベニー・ストーリングス　人口の中のベビーブーム世代の全員があそこに行こうとしたから、あの日、地球はすこし傾いたんじゃないかしら。

手を叩け、歌よ響け——ソング・オブ・フリーダム

ジョイス・ミッチェル　トレイラーの中にわたしのオフィスはあったんだけれど、そのトレイラーからよ、ニューヨーク・タイムズ紙の記者が本社に電話して、〝会場は災害エリアに化している〟と報告を送ったのは。首をしめてやろうかと思ったわ。でも、〝報道の自由〟は守らなきゃいけないでしょう。わたしはステージに出る歩道橋の反対側から、走っていってメッセージを届けていたの。すぐにジミ・ヘンドリックスを来させるように、彼のエージェントと戦ったわよ。

そもそも僕の最初の計画はジミ・ヘンドリックスに予告なしでアコースティック・セットを演ってもらって、それで金曜日からのすべての始まりにしたかったのだ。でも彼はまだ会場に現れていなか

CamScannerでスキャン

った。4時半までに誰かをステージに上げなくてはいけないことは承知していたんだ。リッチーの他に一番手としてやってくれそうな可能性があったのはティム・ハーディンだけだった。アーティスト・パビリオンで彼のところに行ってみると、ちょうどギターを弾きながら、ひとりで歌っているところだった。それで僕は声をかけた。

「ヘイ、ティム、このフェスの皮切りで演ってみたくないか?」。

「だめさ、ごめんだね！　俺はいま出られないよ。俺じゃないよ、最初はごめんさ！　そんなのできないよ！」、彼は必死に訴えるようなまなざしで僕を見た。

「俺はバンドが来るのを待っているんだ」。

僕は彼がもろく傷つきやすいことを知っていた。彼はつい最近ヘロインの習慣を断ち切ろうと、メタドン治療を受けはじめたところなのだ。それだけに彼にもうプッシュしたくはなかった。ティムは友だちだったし、彼の音楽は大好きだったから、彼には最高の状態でステージに立ってほしかったのだ。これは彼にとっても大きな飛躍のチャンスなのだから。

そうなると、やはり一番手の大役はリッチーしかない。僕は彼ならその役目を立派に果たせるとわかっていた。彼のパワフルだが静かな物腰、それこそ、ここから始まるすべてのトーンを決めるために僕らが必要としていたものなのだ。なんと言っていたにせよ、彼は準備ができていたし、楽器も最小限でやれるのだ。しかし、僕が近づいてくるのを見ると、リッチーは、おどおどした様子で歩き去ろうとしていた。

リッチー・ヘイヴンス　マイケルがゆっくり俺のほうに歩いてきたんだ。彼が何を言うのか、俺にはすっかりわかっていたよ。近づいてくるにつれて、彼の笑顔がどんどん大きくなっていくんだ。

それから頭を片側にかたむけて、「リッチー、助けてくれよ。お願いだから、僕らを助けてくれなきゃいけないよ」って言うんだ。今回は彼が真剣なんだって俺にはよくわかった。でも心臓がバクバク鳴り出していたんだ。それで今度は頼むのはこちらの番になった。「マイケル、俺は5番目のはずだよ、1番じゃなくて」

「お願いだよ、リッチー、頼む、お願いだから」――ついに折れたよ。

午後5時7分、ゆったりしたオレンジ色のアフリカ・シャツと白いパンツ姿で、大きなギルドのアコースティック・ギターを持ったリッチー・ヘイヴンスはステージに進みでて、丈の高い木製のストゥールに腰をかけた。ギタリストとパーカッショニストを従え、彼はいつものなじみのクラブ、「カフェ・ワ?」にいるかのような口調で群衆に語りかけた。

「なあ、ついにやったぜ、俺たちは！　今度ばかりは本当になったんだ。もう、彼らは二度と俺たちを封じこめるなんてできやしないんだ！」

「ゲット・トゥゲザー」、「アイム・ア・ストレンジャー・ヒア」、「ハイ・フライング・バード」、「アイ・キャント・メイク・イット・エニーモア」、「ハンサム・ジョニー」――勢いのあるフォーク調の40分のセットを演奏すると、彼はストゥールをおりた。けれど、僕らはまだ次の出演者の見通しがたっていなかった。そこで僕は首を振って、続けるようにうながした。さすがに長いキャリアを持つベテラン、彼は次から次へと歌い続けてくれた。席を立ってステージを去ろうとする彼と、あわてて押し返す僕たち。彼はセット・リストを持っていなかった。それでも歌はとぎれなく続き、バンドは自在にそれに合わせた。

そしてあれは6度目、いや7度目のアンコールだったろうか、全身汗まみれになっていた彼は、つ

いにその日で僕らにサインを送ってきた――〝いいかい、これで最後だぜ〟、と。

リッチー・ヘイヴンス　もう一回、俺はステージに押し戻された。そして、気がつくともう、すべての持ち歌をやりつくしていたんだ。たとえ、どんな状況であれ、俺はこれで終わりにして、ステージを降りなくてはいけない。そこでギターをチューニングしながら、歌い忘れた曲はなかったかと頭の中で記憶のファイルをめくっていた。すると、その時またあの言葉が聞こえてきた。それはこれまでのステージで客席の人々を見るたびに浮かんできた言葉だったんだ。フリーダム！　そう、それは〝自由〟って言葉だったんだ。

それで集まっているみんなに向かって言った。「自由こそ、俺たちみんなが語る言葉さ。俺たちみんなが探し求めてきたもの……こういうことさ！」

ギターをかき鳴らしはじめると、口から自然にフリーダムって言葉がとびだしてきたよ。FREE－dom、FREE－domって、それも自然なリズムで。足が勝手に動きだして、どんどん速く、パワフルなリズムをギターにうながすんだ。その先どうなるかなんてわからない。けれど、これでいいんだって気分。気がつくとそれは、あの「時には母のない子のように」って歌、昔おばあちゃんがブルックリンで子供だった俺によく歌ってきかせてくれた古いスピリチュアル・ソングにまじっていたんだ。とても美しい、素晴らしい歌だけど、俺はもう5、6年、歌っていなかったんだ。とにかく、足の強力なリズムがぐいぐいひっぱっていくんだ。

ディーノとダニエルはついてきて、はまって、フレーズを歌いかえしてくれる。ベースはいなかったけれど、あのFREE－domが見えないベース音になったように、俺の耳のどこかで響きつづけている。それは、それまで感じ続けていた気持ち、そのままだった。ベセルがあんなに特別な場

CamScannerでスキャン

俺と一緒になり、みんなが自分たちがいるのが、まさにその自由な場所なんだって感じた、その気持ちだったんだ。俺は「FREE－dom、FREE－dom」って歌い、そのリズムが生みだすパルスが、最後のステージ・タイムでついにウッドストック・フェスティバルの核心に、俺を導いてくれたんだ。ステージからは見えなかったけれど、丘の向こう側にいる人々を感じることができたよ……「手を叩け、手を叩け！」と歌いかけると、みんなが手を叩いてくれたんだ！

圧倒的な演奏を終え、万雷の拍手に包まれてステージから歩み去るリッチーを見送ると、僕はステージの下の足場に座って、満面の笑みを浮かべている父親の姿を見つけた。そこは会場内の最高の席だったかもしれない。

誰をリッチーの後に出す？　アーティとジョン・モリスはすぐにその答えをくれた。インド人のスピリチュアル・リーダー、スワミ・サチダナンダ！　彼が集まった若者たちにメッセージをくれるというのだ。僕の古くからの友人だったピーター・マックスは、彼のもとで瞑想とヨガを学んでいて、導師と一団の弟子グループをウッドストックに連れてきていたのだ。

アーティ・コーンフェルド　議論の余地はなかったよ。だって、彼の名前を上げると即座にマイケルは「クール！」と一言、賛同のVサインを出してくれたもの。僕は「なんていかしたバイブだろう」って感動したよ。スワミは会場全体にピースな波動を送ってくれたんだ。

ジョン・モリス　小さな、それは小さな男が袈裟をまとって立っていた……。俺が連れていってステージに上げると、彼は座って、かん高い声で聴衆に語りかけた……みんなは彼の言葉を聴こうと

CamScannerでスキャン

静かになり、会場が落ち着きを取り戻したんだ。まるで祈りのような時間だった。

出演の予定はなかったけれど、ジョン・セバスチャンはみんなの顔なじみだったから、バックステージで誰、彼となく挨拶をかわし、一緒にくつろいでいた。彼を有名にしたバンド、ラヴィン・スプーンフルは前の年に解散。それで彼はカリフォルニアへ行き、ファイアサイン・シアターのコミューンで暮らし、最初のソロ・アルバムの曲作りをしていたんだ。たまたま彼は金曜日の朝にアルバニー空港で、インクレダブル・ストリング・バンドの一行と出会い、彼らの誘いに乗って、僕らがさしむけたヘリコプターに同乗して、ウッドストックに現れた、というわけだった。

ジョン・セバスチャン　それで気がつくとバックステージにお邪魔していたってわけなのさ。だって、そこにはそれまで共演した仲間、遊んだ仲間、テーブルを囲んで、ジョイントを回した仲間がいたんだもの。あれはまさに究極の仲良しコミュニティだったね。あっというまに、彼らはありとあらゆるパスをくれ、それで僕はバックステージのあたりであっちへ行ったり、こっちへ行ったりしていたんだ。フリー・フェスティバルになってしまったことでみんながその状態に対処しようとおおわらわ。出演者の順番は誰の後は誰と、決まってはいたんだけれど、うまくいかなくて、その場で決めなきゃいけなかった。だから、ステージに立っていないみんなが食事を運んだり、寝泊まりの場所を用意したり、それぞれができることで手伝っていたんだよ。

あたりを回っていたら、8×8のワーゲン・バスのテントがあって、そこはドレッシング・ルームになっていたんだ。まるで家へ帰ってきたような気分になった僕は、早くに立てられたけど、いつのまにか倒れて、みんなの足蹴にされていたその哀れなテントをひろいあげ、汚れを払っていた

んだ。それでテントをきれいに立て直していると、チップ・モンクが通りかかって「なんだ、うまいんだな」って言う。だから「だって、ここ2、3か月、こんなテントで暮らしているからね」と僕。すると彼は「素晴らしい！　じゃあ、このテントはきみが責任者で、頼むぜ！」って言うじゃないか。それで僕はテント管理人になって、インクレダブル・ストリング・バンドの楽器を全部そこにしまってあげた。ウードに12弦ギターに、シタールにマンドリンにバンジョーだ。湿気にやられないように、それらの楽器をテントのいちばん奥にしまったのさ。

まだ早い時間だったので、僕はなにが起きているのかのぞいてみようと、会場内をひとまわりしてみることにした。それは3時間もかかる長い散歩になった。ふと気がつくと木々がはえてるあたりにジャングル・ジムがあり、よく見るとクラフト系のアーティストたちがそこに彼らの小宇宙を作っていた。このあたりを歩きまわるのはなかなかマジカルな体験だった。ここに集まってきた心ある人々が作るコミュニティの、そのさまざまな表情が見られてとても愉快だったんだ。さいわい僕は誰にも気づかれなかったよ。

バックステージの一か所は友だちや家族のためのスペースだった。やってきた僕の父と母は多少驚きながらも、この光景を喜んでくれた様子で、残ってすべてを見たがった。でも、車に犬を残してきたので、一度様子を見に戻ることにした。まもなく、道が混んでいて、とても車までたどりつけそうもないと電話がかかってきた。僕はヘリコプターに彼らのピックアップを頼み、さらに犬のジョディも救出し、彼らをモンティチェロの町まで運んでもらった。まるで、これまでの自分の一生を走馬灯で見るような体験だった。僕はマイアミからリック・オーバリーを招待したが、彼はフレッド・ニールにも誘いをいれてくれていた。ピーター・マックスがいた。ウッドストックから、ココナッツ・グロ

CamScannerでスキャン

ーヴから、ブルックリンからたくさんの昔の友人たちが来てくれた。何週間も家に戻らずにいたから、ソーニャとの関係は終わりに近かったが、それでも彼女はグローヴ時代の他の友人たちとやってきてくれた。トレインの連中にも招待状を出しておいたが、あいにく彼らはスタジオでヴァンガード・レコードから出るデビュー・アルバムのレコーディング中で来られなかった。ヴァンガードはジョーン・バエズやカントリー・ジョー&ザ・フィッシュも所属する名門レーベルだった。

クリスティーン・オリヴェイラ（フェスティバル参加者）私はマイケルとソーニャとココナッツ・グローヴで仲良くなり、彼らが越してまもなくウッドストックに越してきたの。フェスティバルのプランニングを始めてから数か月、忙しそうに町を出入りするマイケルを見ていて、私たちも絶対に行こうと思っていたら、彼が切符をくれたの。会場ではホッグ・ファームの横にテントを張らせてもらったけれど、それって後で気がついたけれど、エリート・クラスの待遇だったのよね。そのエリアは自分たちだけの、小さな円形劇場があって、メイン・ステージで演奏を終えた人たちがやってきて、また歌ったり、人目を気にせずにくつろげる場所だったのよ。ホッグ・ファームは人々のための食事を用意したり、ゴミもきれいに片付けたり、みんなが見事にオーガナイズされてひとつになっている素敵な人たちだったわ。人ごみが苦手だったから、私はほとんどそのあたりで過ごしたの。だって、ステージで何を演っていても、そこでちゃんと聞けるんですもの。〝こんなことは千年に一度しか起こらない出来事〟っていう気がしたわ。それをあそこで実現できたのは、マイケルの力に寄るところが大きいと思うの。

初日はメイン・ステージの正面の聴衆の中で4時間座っていたんだけれど、〝もう、これ以上はむり〟って思って、そこから離れたの。まわりの客たちが別に悪い人たちだったってわけではない

のよ。ほとんどの人たちはイッていたわね。15、16、17歳ぐらいの、親元を離れるのは初めてって感じの若い子たち。私は26になっていたのよね。ステージからのアナウンスで「誰の誰、どこどこに、糖尿病の薬を取りに行きなさい」って何度も聞いてショックを受けたのをおぼえている。だって、そんなに大勢の人が糖尿病になっているなんて、それまで聞いたこともなかったから。起きて、あたりを歩いていると、いっぱいパイプが落ちていたわ。水道管がもれて水回りがひどいことになっていたし、道路は車の出入りもうまくできない状態になっていた。最後の最後までステージをつくっていたわね。最初の出演者たちの演奏が始まっても、まだやっていたわよ。

森の方は小さな村ができていて、出店が並び、革細工とかしぼり染めのシャツとか、とても美しいものがいっぱいあったわ。そこでは、新しいカルチャーが輝いていたのよ。大きなジャングル・ジムがあったし、プレイグラウンドができていたし、とてもゴージャスなセッティングがされていたの。あれは魔法のユートピア村だったわ。

アビー・ホフマン　みんながおたがいを探して、実に美しいシーンができていたぜ。俺はフリーステージにボビー・ニューワース、リック・ダンコ、ジョン・セバスチャンたちを連れてきて、小さなコンサートをやってもらったんだ。あれはとてもスペシャルなイベントだったよ。ジョーン・バエズは雨の中で1時間も自分の出番まで静かに待っていてくれたんだ。そこにいた他の連中に自分が誰とも知らせずにね。

ジョン・セバスチャン　リック・ダンコと、ホッグ・ファームの連中がアシッドでバッド・トリップした連中をクールアウトしている、でっかいテントに行ったんだ。キャンバス地の簡易ベッドに

みんなを寝かせて、落ち着かせてやっていた。ヒュー・ロムニーが白衣をまとって、みんなのまわりを回っていたよ。連れてこられたどの子供たちも、彼に「ヘイ、これを持っていってくれよ。もう二度と僕に見せないでくれよ」って言って、残ったのを渡していたっけ。リックと僕は精神的に不安定になっている連中を、なんとか安らかな気分にしてやろうと、思いつくかぎりのイージー・リスニング系の曲を、ふたりでかたっぱしから歌ったっけ。

バックステージでも小規模ながら素敵な即興ジャムが行われていた。ジェリー・ガルシアがミミ・ファリーニャと一緒に歌い、演奏をして、そこにいた人たちを喜ばせてくれた。一方、メイン・ステージでは金曜日のプログラムが軌道に乗り出していた。僕らはスウィートウォーターの居場所を見つけ、ヘリコプターを送りこみ、彼らはやっと会場に着くことができた。けれど、スウィートウォーターはフルートにチェロにキーボード、コンガとドラムと、ベース、それにふたりのリード・シンガー（ナンシー・ネヴィンズとアルバート・ムーア）というとても異色な楽器編成のバンドで、彼らの望むサウンドをステージですぐ出すのは、セッティングの面でも音響的にもとても困難だった。

アレックス・デル・ゾッポ（スウィートウォーター）僕らはかなり多元的で複雑なバンドだった。誰でも来れ！ で誕生したバンドだから、メンバーには男性も女性もいたし、人種的にもイタリア系、ユダヤ系、メキシコ系、アイリッシュ系の混成。ギタリストはおらず、7人が不思議な楽器編成で演奏するグループだった。残念ながらステージで演奏するには厄介なアクトで、そんなわけでサウンドチェックなしで演奏をスタートすることには慣れていたんだ。でも演奏がまるまるサウンドチェックになることには、慣れていたわけじゃない！ アルバートが知り合いと出くわして、演

CamScannerでスキャン

奏前にあのブラウン・アシッドをやってしまったのも、あんまりいい判断ではなかったよ。

フレッド・エレーラ（スィートウォーター）僕らはあのステージで最初に登場したエレクトリック・グループになったわけさ。アンプとドラムにマイクを置いてね。だから音響クルーのサウンドチェックには絶好のグループだったのさ。僕らのセットの間、彼らはずっとレベルを上げたり、下げたりしどおしで、なにひとつ、そこで落ち着くってことがなかった。僕は何がどう鳴っているのかを確かめるために、メイン・スピーカーから客席に向かって出る音を聴くしかなかった。だけど、ステージの反対側にいる連中が何を演奏しているのか、まったく聴こえなかった。あっちの連中も僕らの音が聴こえなかったんだ。自分のアンプから出る音を聴くのがせいいっぱい。でも、あんまり散らばりすぎていたおかげで、かなり僕のベースはでかい音で鳴っていたにもかかわらず、途中で消えてしまったり……。

僕らの演奏は、あの青い空のどこかに吸いこまれてしまったんだ。

あやしく揺れるようなテナー・ヴォイスでシンガー・ソングライター、バート・ソマーはステージにあぐらをかいて「ジェニファー」、「シーズ・ゴーン」、サイモン&ガーファンクルの「アメリカ」などの曲を、自らのギターとエレクトリック・ギター&ベース・プレイヤーたちの伴奏で、堂々と歌いあげた。アーティはこのフェスティバルの後、彼のアルバムを2枚、プロデュースしている。もし映画やサウンドトラック盤で取り上げられていれば、彼のその後の運命は大きく変わっていたことだろう……。

リバティのホリデイ・インにもっとたくさんのミュージシャンが到着していると連絡が入ったので、

CamScannerでスキャン

ホテルで問題がないかを確かめるために、僕らはヘリコプターでジョイスに行ってもらうことにした。

ジョイス・ミッチェル　みんながモーテルに着いて、部屋のことでもめていたわ。部屋の数がたりなかったの。ジャニスもいたわ。彼女はひどく酔っぱらっていて、大声であれこれモーテルの人間に注文をつけていたから、わたしはロビーに連れていって落ち着かせようと、なだめたり、すかしたり。グレイトフル・デッドはみんなやさしくて、部屋をシェアしてもかまわないって言ってくれたわ。ザ・フーのメンバーもいたけれど、キース・ムーンには手を焼いた。あのバカ、わたしをレイプしようとしたのよ！　彼を部屋から叩きだしてやったわ。だって、わたしにつかみかかってきたのよ。

エレン・サンダー（ロック・ジャーナリスト）わずか数マイル離れた場所では、ポップの歴史に新しいページが書きこまれようとしていたのに、ホリディ・インでは何百という数のスーパースターや彼らのツアー付き人や、取り巻きたちが足止めをくって、とぐろを巻いていたわけ。ジェファーソン・エアプレインとザ・フーは数日前に近くのタングルウッドで演奏していたから、早い時間から着いていたわ。誰かが5ドル札を25セント硬貨に両替して、ジュークボックスに入れて、「ヘイ・ジュード」をえんえん60回もかけつづけてくれた。バーにいた人間はそれでみんなで腕を組んで、一緒に左右に体を揺らしながら、笑顔でコーラス、大合唱したのよ。ジェファーソンのジャック・キャサディとマーティ・バリン、ジェリー・ガルシア、ジャニス・ジョプリン、みんないたわ。バーの隅では考えられないような高いレートでポーカー・ゲームをしている。しばらくたつと、ロザリー・ソレルスとジェリー・ガルシアが床に座って、ギターを弾き、一緒にフォーク・ソングを

歌いだしてた。ダイニング・ルームではジュディ・コリンズが長いランチョン・テーブルを囲み、レコード会社のクライヴ・デイヴィス、ジャック・ホルツマンというビッグ・ネームたちと談笑していたり……それもまあ、なかなかのシーンだったわ。

夜になって、やっとティム・ハーディンが「もう、いつでも行けるぜ」と言ってくれた。彼のバンドが到着したのだ。それでも彼はひとりでギターを持って、ステージに立ち、「イフ・アイ・ワー・ア・カーペンター」、「リーズン・トゥ・ビリーヴ」など彼が書いたゴージャスな曲を歌い上げた。彼のセットは強力に始まったのだ。

ジャイルス・マルカイン（ティム・ハーディンのギタリスト）当時、僕は20歳で、ティムのバックバンドでリズム・ギターを弾いていたんだ。彼は自分のセットの最初の半分をソロで演ったんだ。そして途中で僕らをステージに呼び出したんだ。どこまで客がいるのか、はじが見えなかったな。まるで人類のすべてが集まっていて、僕らを見ているみたいだったよ。バンドの他のメンバーは平気みたいだったけれど、僕はもうメロメロ、見えない鎖につながれてしまったみたいで、身動きしようにも体ががちがちになって動けなくなっていたんだ。そんな状態なのに、彼はいきなり、まだ書き上げてもいない曲をやるって、その曲名を僕らに向かってぶつけてきたんだ。彼の奥さんのスーザンが「スノー・ホワイト・レディ」ってヘロインについて書いた詩なんだけれど、彼は「スノー・ホワイト・レディ、キーはF！」と言って、クシャクシャの紙切れをキーボードの上に乗せると、演奏をはじめ、僕らもついていったんだ。でも、あれは悲惨だったな。彼はチャントしながらシングル・コードを弾きつづけ、あの場でメロディを探しているんだ。オーケー、どこかの小さな

CamScannerでスキャン

コーヒーハウスで演るのなら、それもいいだろうけれど、ジーザス、世界中が僕らを見ているんだぜ！　その曲から次は少しましになったけれど、でも、あそこがあんなに混みあっていなかったら、多分、人々はみんないなくなっていただろうな。それぐらい、あそこでの僕らの演奏はひどかったんだ。あんまりひどい体験だったので、その後しばらく僕は音楽界での仕事はやめちまったのさ。

ステージでティムの演奏がぼろぼろになって、僕はがっかりしてしまった。でも終わって、引き上げて来て、しばらくすると、彼は元気を取り戻して嬉しそうだった。

10時半頃、僕たちはラヴィ・シャンカールのステージを始めようとしていた。雷が鳴り出したのはその時だ。彼はアル・アロノウィッツに語っていた。「わたしはゾッとしました。もし、こんなにたくさんの人に、何か悪いことが起こっては……」。だが、ステージに上がって、彼がシタールをかなではじめるや、それは天候の問題などを超越してしまった。空気ははりつめていた。それはまさに、ああしたスピリチュアルな瞬間が訪れようとする時に人が感じる独特な空気だった。そしてやがて、誰もが〝そこに〟達するのがわかった。

ジャイルス・マルカイン　出演者の中ではラヴィ・シャンカールが、断然他の連中を圧していたな。演奏レベルの面でも彼は群をぬいていたよ。言葉はなくて、まじりけなしのピュア・ミュージックさ。彼がその音楽で聴衆にやったことはすごいことだったんだ。演奏の間に、人々は感動でたまらなくなって、何度も立ち上がって大歓声をあげていた。ひとりのすぐれたシタール・プレイヤーが誕生するまでには何世代もかかるんだって聞いたことがあるけれど、僕はそれ本当だって思うな。だって、あんな人々の心を奪う演奏、かんたんにできるものか！　あれはずっと音楽を学び、自然

にそれが体から流れ出すまでに腕を磨き、タブラ奏者のウスタッド・アラ・ラッカみたいなパートナーと長いこと一緒に演ってきて、はじめてできることだよ。彼は聴いていた人々をめざめさせ、胸がどきどきするような音楽の旅に連れて行ってくれたんだ。他の誰にもできないような体験をさせてくれたのさ。

雨の中のキャンドル・ライト――ビューティフル・ピープル

アル・アロノウィッツ（ニューヨーク・ポスト紙記者）シャンカールの演奏の途中で雨が降りだした。何度か雷も落ちた。雨は脅威だった。ステージの天蓋にたまりだした雨が、いつ覆いごと落ちてきても不思議ではないのだ。また、別の時間にフェスティバルの警備員たちは足場の上からステージが泥の中に滑り落ちる可能性があると危惧していた。しかし、驚いたことに、雨が激しくなればなるほど、その場を動くまいとする、人々の決意は固くなっていくようだった。感電の危険を回避するため音楽が中断していた一時間あまりも、人々は焚火（たきび）を囲んで、辛抱強く待っていたのだ。いや、雨が降っている中でも、彼らは満場総立ちで演奏者たちに喝采の声をあげていたのだ。

激しい雨と暗い闇の中で、早とちりしていくつかの誤報が流れた。ステージが危ないと心配する人たちも現れた。無理もない、それは丘の傾斜の上に建てられていたから、僕らは滑り出すこともあるのではと気になりだしていたのだ。でも、コンクリートで土台を作っていて、柱を支えていたから、たとえ多少動くことがあっても、それは数インチのことだろう。ステージの覆いには雨水がたまり、重くなってどんどん屋根がたれさがってきたので、翌日、土曜日の朝が来ると、僕らはクレーンでタ

CamScannerでスキャン

ーブを持ち上げ、たまっていた水をはらい落とした。そうしなければ誰かの頭上を何トンものシャワーがお見舞いしていたかもしれない。

ラヴィ・シャンカールの感動的なパフォーマンスの後、バックステージにアーティ・リップに連れられて、メラニーというフォークシンガーが姿を見せた。リップはアーティ・コーンフェルドのレコード会社関係の友人だった。彼はこの若い女性シンガーと仕事をしていて、何曲かアコースティック・ギターで彼女のミニ・セットをやらせてくれないかと僕らにもちかけた。

その時点では、ほぼ無名の存在だったが、そのかすれて不思議にふるえる声で、彼女が「ビューティフル・ピープル」の最初の一節を歌いおえると、奇蹟のような出来事が起こった。彼女の前で闇の中でひとつになっていた何千人の参加者たちはキャンドルやマッチに火をともし、それをかざして揺れはじめたのだ。彼女の歌は一瞬にして、そこにいた〝ビューティフル・ピープル〟の心をとらえたのだった。彼女は家に戻るとすぐにこの時の体験を「レイ・ダウン（キャンドルズ・イン・ザ・レイン）」という曲に書いた。それは、１９７０年、彼女、メラニーの最初のビッグ・ヒットになった。

メラニー　マジカルだったわ。あの時、わたしは初めて幽体離脱というのを体験したの。ステージに出る橋を渡っていると、わたしは体から抜けだして空中に昇っていって、そこからもうひとりのわたしがステージに歩いていき、腰をおろして、最初の数行を歌いだす姿が見えたの。わたしが出る直前に、また雨が降りだしていた。ラヴィ・シャンカールが演奏を終えた時に、チップ・モンクが「ろうそくに火をともせば、雨をとめることができるはず」ってみんなに言っていた。わたしがセットを終えた時には、丘の一面にいっぱい小さな火がまたたいていたわ。あの時、あの場所にいられたのは、ほんとに素晴らしい体験だった。集まっていた人たちがみんなでおたがいを助け合い、

支え合い、ひとつのファミリーになって生きていた。ウッドストックはわたしたちに、そういう風に生きていくことの大切さをあらためて教えてくれたんだわ。

コンサート会場で人々がキャンドル、火をともしたのは、おそらくこの時が最初だったのではないだろうか。キャンドルはライターとなり、最近では携帯電話のライトに変わってはいるが、この美しいコンサートの儀式は今日まで脈々と続いている。

雨は予定されていたアーロ・ガスリーとそのバンドの出演をあやういものにしたが、僕らはゴー・フォー・イット！　恐れずにやることを決めた。しかし、その頃までに出演がなくなったと思いこんだアーロは、緊張から解き放たれて楽しもうと考えたのか、なんと、アシッドをやってしまったのだ。彼はもうやる気をなくしていたけれど、僕らはなんとか説得して、予定どおりに彼をステージに送りこんだ。彼は「ロサンジェルスにやって来た」で始まるすばらしいセットを披露してくれた。だが、アシッドの効果はあきらか、ファンたちに向かって、ひとり会話とでも呼べるようなお喋りを始め、ディラン曲のカバー「ウォーキング・ダウン・ザ・ライン」では、いきなり歌を途中でやめ、だらだらと自分の考えを語りだしたもの……それでも、ファンたちは大喜び。アーロも満足気だった。

ジョーン・バエズは妊娠中の身重の体だったが、たび重なる出演時間の遅れを少しも気にかけていない様子だった。彼女は楽屋で咳きこんでいたメラニーにお茶を持っていってあげたり、そのふるまいはいつもみんなの鏡のように素敵だった。そういえば、その日のある時、並んで立っているとアーティは僕にこんなことを言ったものだ。「なあ、こんなすごい体験をしたあとで、どうやったら僕は46丁目、あの都会のまっただ中のオフィス仕事に戻れると思う？　こんな人生が一変するような思いをした後で」。

CamScannerでスキャン

彼はその時、自分の中に起きている意識の革命をすなおな言葉で誰かに喋りたかったのだろう。すると、その言葉を聞きつけて、ジョーンはこちらへやって来て、こう言った。「彼は〝めざめた〟ってわけね」。ジョーンはすぐれたユーモアのセンスの持ち主だった。平和主義者として有名な彼女のところへ、やはりいたずら者の過激派、アビー・ホフマンが「ささやかな贈り物です」とジャックナイフをさしだした時も、少しも慌てず、女王のような貫禄の微笑みを浮かべて受け取っていたものだ。

結局、真夜中過ぎにジョーン・バエズはステージに上がり、みんなを高揚させるようなゴスペル・ナンバー「オー・ハッピー・デイ」でそのセットを始めた。彼女は真摯なまなざしで聴衆に向かい、徴兵を拒否して収監されている彼女の夫、デヴィッド・ハリスの話をした。そして彼の好きな労働組合運動の伝説の指導者の歌、「ジョー・ヒル」を透き通るような声で歌い上げた。そして「わたしが書いた人前で歌える唯一の曲よ」と自嘲気味にコメントしながら、妹のミミと夭折した彼女の夫、リチャード・ファリーニャにインスパイアされて書いたという「スィート・サー・ギャラハッド」がそれに続く。フォーク・ソングの後はカントリー・ロック・ナンバー、グラム・パーソンズと共作した「ヒッコリー・ウインド」、「ドラッグ・ストア・トラック・ドライヴィング・マン」。さらにアカペラで「スウィング・ロウ・スイート・チャリオット」を歌うと、午後2時、あの公民権運動の行進で、自由と解放を求める人々の間で歌い継がれてきた戦いの歌「勝利をわれらに／ウィ・シャル・オーバーカム」で、彼女はこの音楽と平和の祭典の初日をしめくくった。

ジョン・モリス　金曜日の終わりには、まだやらなければいけないことが山のようにたまっていた。まだ、ほんの第1ラウンドが終わったばかりという感じで、〝ここで俺たち何ができる？　何を立

CamScannerでスキャン

てなおしする？　どこに俺たちはいる？　何が起きている？　何が不足している？　何を俺たちはやっているんだ？　頭の中に次から次へとそんな問いが浮かぶ中で、その晩も徹夜で俺たちは働き続けたんだ。大勢の連中がいるんだから、俺たちはなんとしても彼らの面倒をみなけりゃいけないんだ。絶対にうまくやってやるんだ！　って思いながらね。

一日なのに永遠に続くかと思えた金曜日。だが、それは天国の永遠でもあった。ありとあらゆる難題と、もう少しで壊れそうにまでなった設備のもろもろ。それらすべてをはねのけて、僕らは生きたのだ。もしかするとそれは実に短い、瞬間という長さだったかもしれないが、それでも僕らは生きたのだ、僕らが夢見てきた世界を。

数えてみれば百万という動きが、百万の回転が、いま集まってひとつのものとなった。そして僕は自分の本来の姿を取り戻したのだ。金曜日の夜、トレイラーのひとつにもぐりこみ、2時間の仮眠をとると、僕はもう次の新しい日を始める用意ができていた。

第11章

August 16, 1969

1969年8月16日

Quill
Country Joe McDonald
Santana
John Sebastian
Keef Hartley Band
Incredible String Band
Canned Heat
Mountain
Grateful Dead
Creedence Clearwater Revival
Janis Joplin
Sly and the Family Stone
The Who
Jefferson Airplane

CamScannerでスキャン

「もし現金で支払わないのなら、俺たちは演らないぞ！」。

土曜日の午後、グレイトフル・デッドのロード・マネージャー、ジョン・マッキンタイアとザ・フーのジョン・ウルフはプロダクション・トレイラーのすみに僕を追いつめた。彼らは感情的に熱くなっている。バンドがステージに立つ前に主催者に出演料を支払わせるのは、彼らロード・マネージャーたちの仕事だ。

「ねえ、いいかい、小切手を渡すよ」。僕は彼らに言った。「このチェックは週が明ければ現金にできるんだぜ。今はみんな同じボートの上なんだ。つまり、会場に金はないんだ。ゲートができなくて、コンサートは無料になってしまったんだ。こんなことで争うより、僕らには一緒に戦うべき相手がいるんじゃないのか」。

「そんなことは理由になるものか――問題は、いま、現金で支払うか、音楽がなくなるか、なんだぞ！」。ウルフは同じせりふを繰り返した。僕らは彼らに先に払った出演料の残りの半分、デッドには3375ドル、フーには6250ドルの支払いが残っていた。僕にはどうやれば彼らの出演時間までにそれだけの金を準備できるか、見当もつかなかった。

「現金をかき集めるには、本当に厳しい状況なんだ」。僕も同じせりふを繰り返す。「でも、小切手を渡すよ。月曜の朝に銀行へ行けば現金に変えてもらえるんだ。保証するって」。

「きちんと裏書きされたチェックならばな」と、彼らは言いはる。

どうすれば彼らに演奏をしてもらえるのだろう？　内心では、集まっているたくさんの友だちを前にして、デッドが演奏をしないなんて絶対にありえないことを僕は承知している。どんなことがあっても、彼らはもめ事を起こすようなグループではないのだ。すでにフリーステージでもジェリーはジャム演奏をしてくれているではないか。でもフーの方は予想がつかない。もしかすると彼らはずっと

CamScannerでスキャン

演奏しない口実を探していたのかもしれない。後になって証明されたことだが、そのキャリアの中でもっとも重要なショーへの出演に合意した時にも、彼らは不満たらたら。ピート・タウンゼントは到着以来、誰に会ってもしかめっつらをして、自分の殻に引きこもったままだ。こんなラヴ&ピースの祭りは、彼には向いていないのだ。

僕はまっすぐ、ウルフに向かって視線を投げる。「もしも、それが、きみの判断なら、僕はステージから、みんなにアナウンスしよう。〝ザ・フーは現金をもらわないかぎり、演奏をしないそうです〟ってね」。

音楽的にはフーが重要なグループだってことはよくわかっている。ライヴ演奏では彼らの右にでるグループはそんなにいない。だから、この発言はちょっとした賭けだった。そんなアナウンスはもちろんするつもりはない。でも、出演の順序がこれだけ大きく変わり、予定外のアクトもいっぱい現れた今となっては、たとえ彼らが登場しなくても、きっとみんなは気がつかないだろう。

ウルフとマッキンタイアは視線を交わす。「知るかよ！」、ウルフは叫ぶと、ドタドタと大股で出て行った。それから、月曜まで、彼らからの連絡は一切なかったような……。

土曜の朝、僕らのスタッフの中でいちばんの早起きはメル・ロレンスだった。夜明けに彼は会場をまわり、雨の夜をみんなが無事にやりすごせたかどうかを確かめた。メルは安全確認の係、彼はあらかじめ、いろんなことが問題なく、うまく行っているかどうかをチェックしていた。

メル・ロレンス　あのごきげんな金曜日の後、人々はあのボウル状のなだらかなスロープで、前の晩から居た場所で寝ていた。みんなぐっすりと眠っていて、あたりは静かだった。そこで僕は今度

はステージの無事を確認し、プロダクション・エリアへと足を向けた。そこでもまだ全員が眠りこんでいた。多分あれは6時かそれぐらいの時間だっただろう。会場の掃除にとりかかることにして、ゴミ袋をクルーに渡して、ボウルの片側に集めた袋を1列に並べるように指示を出した。

人々が起き出すと、メルはステージに上がり、そこから短いメッセージを送った。

「みんな、自分たちのまわりを少しきれいにしないか？　こっちからゴミ袋を配るから、まわりのゴミを集めて、その中に入れてくれよ。僕らが集めるから」

メルのアナウンスは効果をあげた。僕たちはゴミ集めのBGMに音楽を流し、土曜日へと突入した。

アビー・ホフマン　雨が降った翌朝、テントから出てきた若い子がこぶしを宙に上げると、叫んだ。「雨なんかどこかへ行っちまえ、俺たちは永遠にここにいるぞ！」。それを聞いて、俺はなんとも安らかな気持ちになった。朝の5時、俺は頭のところをくりぬいたキャンバス地の布をかぶった。その格好で俺の気分はノルマンディに上陸した兵隊たちを視察するパットン将軍だ。あたりの被害状況を視察に回ったんだ。メインのパフォーマンス・エリアは泥だらけの滑り台と化していた。壊れたテント、ひっくりかえったオートバイ、空き缶、空き瓶、ゴミがあふれていた。そうだ、あの朝、ウッドストックには、ストライキでゴミ収集がストップしたロワー・イーストサイドよりもたくさんのゴミの山があったんだ。

はじめから僕たちのゴミの除去作戦は徹底していた。ピーター、スタン、メルと僕の4人で空き缶から紙コップ、皿、包装紙などのゴミが1日にどれぐらい出るかを推測して、それにもとづき綿密な

計画を立てていたのだ。つまり、ひとりの人間が平均どれぐらいの量の、どれぐらいの重さのゴミを出すのか計算し、それが3日分、かける20万人分。割り出したその数字で、圧縮機を持った大手のゴミ処理会社と契約し、それに見合う数を会場のあちらこちらに配置していたのだ。こうして僕らがゴミを集め、圧縮機に運び、それをトラックに積んで、町のゴミ処理場に運んで捨てれば、作戦完了というわけだ。なんて素晴らしい作戦を立てたものだろう、と自画自賛しながら、1日目はとてもうまく運んだ……いや、運ぶはずだった。だが、どっこい、そうは渋滞が許さなかった。ゴミを満載したトラックは会場を出ることもできなかったのだ。

ラジオでは「交通渋滞で、食料や水や医薬品などの供給がストップして、会場は混沌として、悲惨な状況が広がっている」というニュースが流れていた。メディアは〝被災地〟という呼び方までしていた。でも、実際に会場を回って、僕が自分の目で確かめたかぎりでは、それほどひどい状態とは思えなかった。あちこち回っていると、メルと出くわした。彼はいっぱいになってあふれだしている簡易トイレをポンプで復旧しようと頑張っているところだった。金曜日は何台ものバキューム・カーが活躍していたのだが、土曜日はその車も会場を出られず、こんな事態を招いていたのだ。そこでメルは、この厄介な状況を打開するために、僕らがもっとも初期に考えていた方策を選んだ。地面に深い溝を掘り、そこに流しこんで埋めてしまうのだ。僕らはショベルカーを見つけてきて、長さ30メートルほどの広くて深い溝を掘り、そこにすべてをダンプしたのだ。

メル・ロレンス　丘の上に掘ったんだ、汚物を埋めてしまうでっかい溝をね。そしたら、次の年、その場所はトウモロコシが大収穫だったそうだよ（笑）。

ミリアム・ヤスガー　オフィスのある建物の向かいにあるトウモロコシを植えた畑を、若い子たちがオートバイで走りぬけていくから。若いトウモロコシがみんなへし折れてしまったのよ。それで早速マックスがマイケルに「きみたちに貸した土地以外の箇所の畑がだいなしにされているのを、知っているかい？」って電話をしたの。すると、まもなく、若い子たちの一団がやってきて、畑のまわりに〝畑内への乗り入れ禁止〟〝マックスの作物を荒らすべからず〟って立て札を立てていったわ。それでみんな迂回するようになって、畑を通る連中はピタッといなくなったのよ。道わきにキャンプする人たちもいて、家の車道にまで入ってきたから。わたしは「出ていって、うちで働いている人たちの車が出入りするから。この道にキャンプはしないでちょうだい」って言ったわ。それで若い子たちは道から立ち退き、うちの車道にも、酪農工場の近くにもキャンプする人間はいなくなったの。

金曜の朝に、保健局から視察のためにひとりの男の役人が送りこまれてきた。メルの話だと、僕らのしていることを中止させる可能性も十分にあったらしい。でも男は一緒に娘を連れてきていて、会場に着くやいなやその娘が姿を消してしまったんだ。それで男は週末の間ずっと娘を探すのに躍起になり、報告書どころじゃなくなってしまった。おそらく、その娘さんはどこかで、人生で最高に楽しい時を過ごしていたに違いない。

まだ朝の早い時間、僕はホッグ・ファームとムーブメント・シティの様子を見にいった。その途中、僕はなんと昔の友だちのエレン・レーミッシュとバッタリ。彼女をバイクの後ろに乗せて、僕は目的地を回る間、おしゃべりを楽しむことができた。

「ねえ、ラング、わかってる？　あなたは自分が何をしたか？」」。突然のその言葉に僕は思わず体を

震わせた。そう、いつのまにか、すべては〝しようとしたこと〟からすでに〝したこと〟にシフトしていたのだ。何日か前に僕らのスピリットを乗せてすべり出たウッドストック号は、もう、数えきれない船客を乗せて、それ独自の航跡を描いて、この草の海を渡りだしているのかもしれなかった……。

昼の間も進行が順調にいっていると思える時は、演奏の合間を見はからって、僕は医療テントからヘリポート、フリーステージやあちこちのキャンプ場、ムーブメント・シティからフリーキッチンへ――今やなかなかのものになった、〝僕たちの都市〟をこまめにバイクで回ってみることにした。会場のそれぞれのエリアがどうなっているか、相互のコミュニケーションは限られていたから、状況を把握するためには、そうする以外に方法がなかったのだ。だが、僕が案じるまでもなく、それぞれの地域でみんなが頑張っていた。イッピー党のブースで、雑誌、リアリストの発行人で、顔見知りだったポール・クラスナーの姿を見つけ、僕は挨拶を送った。

ポール・クラスナー（イッピー党創立メンバー）ウッドストックは僕らが前の年のシカゴでの民主党大会への抗議集会でやろうとした、オルタナティブな音楽イベントの理念に相通じるものがあった。理想主義と一般社会への憤りをあわせ持った、これまでとは異なる価値観を持った人々が形成する特別なコミュニティが、あそこにも生まれていた。

スタン・ゴールドスタイン　集まったみんなが自分たちで自分たちを守り、自分たちでルールを作り、自分たちでコントロールする、自立した小国家のようなものが生まれていたんだよ。

会場のまわり、いたるところに、立てかけ式の小屋や、しっかりした大きなティーピー・テントから小テント、藁を集めて作ったシェルターが並んでいて、いつのまにか無数のキャンプ村ができていた。そこでは僕らが望んでいたように、すべてを分けあって、みんなが上手に時を過ごしていた。いろんな政治的グループがいたムーブメント・シティのブースからは、どんどん人影がへっていっているようだった。ひるがえってみれば、人が集まっていたすべての場所がムーブメント・シティになっていたのだ。

トム・スマッカー（活動家・作家）他のいろんなグループのブースに並んで、あそこで僕らはMDSの出版物を置いたブースを出していた。後ろには小さな印刷機があって、それで日刊新聞を刷って出していたんだ。アビー・ホフマンがいて、SDS、マザーファッカーズ、ビースニックスのような政治グループに、スワミや、メハー・ババのようなインド系のスピリチュアル・グループから、ホット・チャウ・メインのトラック・グループの連中まで、いろんなグループがあのムーブメント・シティには集まっていた。でも、ブースは役立たずだったな。だって、シーン全体がごきげんだったから、人々はたちまちどこかへ行っちまったんだ。アジビラやら、パンフレットやらの印刷物はほとんど人手に渡ることもなく、雨に濡れていたんだよ。巨大なエネルギーが渦巻き、自由と最高の音楽と友愛の精神があふれていたあの場所では、どんな能書きもいらなかったのさ。ただ、感じれば、それで十分だった。雨と泥、水不足と暑さと寒さの中で、ホッグ・ファームの連中は本当にみんなに奉仕していたよ。イデオロギーなんて、クソくらえ、だ。

政治よりもずっと大事なのはコミュニティだった。いろんな異なった人々が集まって、仲良く、分

かちあいながら一緒になることが大事だった。ホッグ・ファームの用意したキッチンには、食べ物をもらいにいつも長い列ができていた。ポータサンのトイレと臨時に設置された公衆電話にも、やはり長い列ができていたが、不満の声を上げる人間はいなかった。若者たちは友人たちに電話し、どんなに素晴らしいことが起きているかを伝えた。すぐにメディアの報道と実際の会場の姿がどんなに違うか、人々は知りはじめていた。

僕が会場内で耳にした唯一の不満の声はフード・フォー・ラヴのスタンドで、バーガーやコーラをもらう引換券を買うために並んでいた人たちからのものだった。その列は長く、しかも券を買っても、彼らはまた列に並び直さなければならないのだ。ジェフリーたちの会社は仕入れの量を間違え、もう、残りのストックはわずかだった。そこで彼らは冷たくなったホットドッグを1ドルに値上げ——普通の価格が1個25セントだった時代だ——これはもう、腹をすかせて並んでいる子供たちの足元を見た、ぶったくり以外の何物でもなかった。これに腹を立てたのが、マザーファッカーズらムーブメント・シティの連中。そして、もちろん、腹ぺこの子供たちだった。

食料不足で子供たちが飢えているというニュースが伝わると、地元サリバン・カウンティの婦人団体や教会関係などさまざまなグループが一致団結、何千人分もの食べ物を寄付して、会場に空輸してくれたのだった。何マイルも歩いて会場にたどりついた多くの人々は、道すがら町の住民たちが「持っていきなさいよ」と食べ物や飲み物をくれた、と証言している。町で物の値段がはねあがったと書き立てる記事も目にしたが、ホワイト・レイクのほとんどの住民は、〝自分たちにできること〟をして僕らを応援してくれたのだ。

ビル・ウォード　金曜の夜に僕らは会場を離れ、ダイヤモンド・ホースシューに泊まりに行こうと

しただけれど、渋滞にひっかかって、車を置いて三マイルほど歩いて、モーテルに着いたんだ。一晩目の朝早くに起きて、車まで戻ったよ。道は置き去りにされた車がいっぱい。どこも車だらけ、人だらけさ。道路沿いの家の品のよい老夫婦が、庭に大勢のヒッピーをキャンプさせてあげていたな。水や食べ物を運んでやったり、コーラとかいろいろ分けてやってた。見かけはまったく違う人たちが、通りに座っておしゃべりしたり、いろいろ分けてあげたりしていた。

トム・スマッカー　わずかな不便がみんなにやることを与え、共存のさらなる動機を与えてくれたわけだ。それは人を気分良くしてくれるんだから。

ジャイルス・マルカイン　誰もが助け合うために集まり、ひとつの家族になっていくみたいだった。泥の中で遊び、分け合い、助け合いながらね。町の人たちも同じことを感じてたんだな。「子供たちはみんな素晴らしくいい子たちだった。私たちは彼らを助けてあげ、食べ物もなくなってしまったよ」。素晴らしかったね。みんなが最良の姿の自分を表現したんだ。雨が降っても「オーケー、じゃあ洗濯の時間だ。きれいにすることにしようぜ」ってなものさ。恐れることじゃなかった、気持ちを滅入らせることでもなかった。「ああ、降ってきたってかまうことないよ、楽しんじゃおう」さ。そして泥まで楽しんでしまったんだ。

クリスティーン・オリヴェイラ　雨が降った後は最悪、泥の都市になってしまったのよ！　わたしはテントの下にもぐりこんでいたから、濡れなかったけど、泥にはマイったわ。ぬるぬるですべってしまい、とても出店エリアまでは行けなくなってしまったの。でもジョークみたいなものよ。わ

CamScannerでスキャン

たしたちはたくさん食料を持ってきていたし、ホッグ・ファームのすぐそばにいたから、いつだって何か手に入ったわ。彼らはマクロバイオティックで、健康野菜や、玄米をごちそうしてくれたわ。美味しかったわよ。

アビー・ホフマン　公衆電話のエリアがあったな。俺たちは主催者専用の電話を使わせてもらえたし、土曜日になると、彼らがウォーキー・トーキーをくれたし、ヘリコプターへのアクセスも許可してもらった。おかしかったことに、ヘリコプターはナショナル・ガードが操縦していたんだ。いつベトナムの戦場に行くかもしれない、軍隊のパイロットたちなんだぜ。俺たちは戦争に反対する側の人間なんだっていうのにな。でも、生命の危険を救ったり、悪い水を飲まないようにしようなんて情報を伝えたりしているうちに、突如、フリー・セックスだの、裸だの、ドラッグをやるだの、反戦だの、そういうことはどうでもいいことに思えてきたんだ。結局、俺たちはみんな同じアメリカ人なんだもの。だから、俺がおぼえているかぎり、衝突なんか一度も起こらなかったよ。

バリー・ティアズデイル　あちこち会場を歩きまわっていた友だちのひとりが、「土曜日にムーブメント・シティでビデオを撮っている奴がいたよ」って教えてくれた。それで僕は「僕以外にビデオを撮ってる人間がいるわけないよ！」って言ったんだ。だって、ビデオはまだできたばかりで、持っているのは僕ひとりだけだって思っていたからね。でも気になって行ってみたら、デヴィッド・コートが携帯型のビデオを持っていたんだ。それで、僕は「きみのところに僕のを持ってこようか？」って、自分のビデオとモニター、カメラとレコーダーをそっくりムーブメント・シティに運んだんだ。それで、空いているブースにふたりでビデオ・スクリーンをセットして、みんなが自

分が話をする姿が見られるようにしてあげたのさ。まだ、そんなことができるなんて誰も知らない頃だからね。デヴィッドと僕は一緒に会場をまわり、医療テントで働いてる人たちや水を運んでいる人たちの様子を撮影したり、ムーブメント・シティのまわりでどんな活動がされているか、いろんな人たちにインタビューして、それを録画したんだ。

ヒュー・ロムニー 驚くほどのエネルギーがあったね。一度それに身をゆだねてしまえば、いくらでも動きまわれたんだ。エネルギーが動かしてくれるんだ。身震いするような感じだったよ、あれは。ウッドストックを動かしたのはボランティア・スピリットさ。みんなで瞬時にしてあの生命維持のシステムを作りだしたんだ。

どんどん人がやってきた。中には金曜日、丸一日かけてたどりついた人もいた。人の数が増えれば、それだけ怪我をしたり、手当が必要になる人間の数も増える。割れた瓶で足を切るケースが圧倒的に多かった。傷の具合が深刻な場合にはサリバン・カウンティの病院へ患者をヘリで搬送した。土曜日になると会場には20人あまりのドクターと50人の看護婦、さらにその数は増えていった。不幸な事件も起こった。土曜の朝、道路わきで寝ていたニュージャージー州、トレントン出身の17歳の少年、レイモンド・ミザックがトラクターに轢かれて死んだのだ。悲しい出来事だった。土曜日にはヘロインのオーバードースと、盲腸の悪化が原因でさらにふたりの死者がでた。また、ふたりの赤ちゃんが産まれたのも、その週末のこと。ひとりは渋滞で停まっていた車の中で、もうひとりは産気づいた母親をヘリコプターで運んだ地元の病院で産まれた。

地元の施設が満員になると、コミュニティが救いの手をのばしてくれた。モンティチェロの高校が

CamScannerでスキャン

前後になり、ローカル・エアライン、モホーク航空が、40人乗りの飛行機を無料で提供してくれ、NYCから人権医療機関のドクター、ドン・ゴールドマチャー、ジューン・ファイナーらのチームと医療品を運んでくれた。オペレーションの増加にともない、それまでスタッフ用の〝食堂〟として使われていたピンクと白の縞模様の大型テントも、まもなく野戦病院に変身することになった。

ペニー・ストーリングス　ピーター・グッドリッチがスタッフ休憩用テントの責任者だったの。でも一日目の午後までにわかったことは、私たちの誰ひとり、そこへ寝に行ったり、食事に出かけることもないってことよ。そこで私はそのテントを「医療クリニックのスペースとして使ったほうがいいんじゃない？」って提案したわけ。泥の中を裸足で歩いて怪我しちゃう子たちがいっぱいいたし、バッド・トリップでかつぎこまれる子たちで、もとから小さかった〝精神病棟〟もいっぱいになっていたから。

するとピーターは燃えるような目で私をにらんで、「自分が責任を持って用意したテントをあきらめる気はない」って言うのよ。もう彼に同調する人間なんて誰もいないっていうのに。そこで、勇気をふりしぼって、「じゃあ、私が責任を持って、ここを変えるからって言ったの。だって、もう、そうしなければならないことは、みんなわかっていたから、彼に言うべきだと思ったの。すると彼、怒りで体を震わせ、くるりと向きを変えたかと思うと、泥をけたてて駆けていってしまったの。大声で何か叫びながらね。ホッとしたことには、クリス・ランガートが私の注文を聞いてくれて、ふたりの助手と一緒に、すごい早さでテントに木と電気を敷いてくれたわ。他のクルーも出入り口の泥をならすのにベニヤ板を渡してくれ、ナショナル・ガードが供給してくれた簡易ベッドや救急医療器具を中に運びこんでくれた。

CamScannerでスキャン

ク障害の患者の看護をしていたアビー・ホフマンも、この流れに加担して、活動家ならではの行動力と持ち前の脳みそで紛争を打開しながら、大きな力となってくれた。彼はこの新設の医療テントでドクターたちと働き、ホッグ・ファームの手助けもしていた。当初は骨折した人間とバッド・トリップをした人間が同じひとつのテントにかつぎこまれて、治療を受けていたが、それはあまりいいアイディアではなかった。そこで別にバッド・トリッパーたち専用のテントを設けると、うまく行くようになった。ホッグ・ファーマーたちがケアをした。彼らのやり方は、ゆっくり、やさしく語りかけ、幻覚の妄想が消えるまで、愛情もってつき添う方を示すのだ。それから回復した患者たちをそこにとどめて、次にフリークアウトでかつぎこまれてくる人間の看護に当てるというやり方だった。

ローズ・ペイン　私はホスピタル・テントでドン・ゴールドマチャー、ジューン・ファイナーらと働いていたアビーの手伝いをしていた。ジューンはたくさんのクリニックで仕事をしていた素晴らしいドクターだった。ドンはサウス・ブロンクスでメタドン療法で、たくさんのドラッグ中毒者を治療していたドクター。かつぎこまれる連中をほとんど全部ふたりで診察していたわ。

アビー・ホフマン　大テントの中で迷わぬように、あっという間に案内用のサインが掲げられていたぜ。けが人、待合室、受付、ボランティア、休息、緊急、熱射病、鎮剤って具合に。古くからの友人が、続々とやってきた。元のシカゴ・シードの編集者のエイブ・ペックって、めちゃ元気者がボランティア係を担当してくれ、ニュースリールのローズ・ペインが情報管理係をやると名乗りでて、関係ない訪問者たちを締め出してくれた。

地元の政治家が近くで待機していたナショナル・ガードに供給物資の輸送ヘリを飛ばすように要請をしてくれ、承諾されると、何台ものヘリが出動して、サリバン・カウンティの人々が寄附してくれた水やフルーツ、一万食のサンドイッチ、缶づめといった大量の食料輸送を開始してくれた。最初に飛んできたナショナル・ガードのヘリ・パイロットは、フリーキッチンのそばの着陸場所が見つけられず、そこで誰かがスタンに連絡した。スタンは早速大勢の人間に声をかけ、空き地で集まったみんなが手をつなぎ、座って大きな輪を作ると、その真ん中に着陸地点の×マークをつけた。ヘリが到着すると、輪をつくった全員が順番に荷下ろし、運搬係になり、キッチンに食料を運びこんだのだった。

その日の午後、ニューヨーク・タイムズの記者が走りまわっていた僕をつかまえ、インタビューを申しこんできた。僕は「手短かにしてくれよ」、とこんな風に彼に喋った。

「これは予期していたとおり、雨で泥だらけの場所に集まってきた50万人の行儀のいい若者たちが作る物語ってことさ。どんな争いごとも、どんな暴力事件も、あいにくだけど起こってないんだよ！」。

同じ記者に取材を受けた州警察の上官はこう語っていた。「集まった人の規模には唖然としたものさ。これだけの若い連中がいるのに、どんな小さな事件も起こらないってことが、私には信じられんよ」。

ヘンリー・ディルツ　ステージの後ろ側に湖があって、みんなが裸で水浴びをしにいっていたよ。まるでジプシーたちのようだったね。全部服を脱いで、泳いでるんだ。それで僕は岸辺まで行って写真を撮りはじめたんだけど、誰ひとり気にする様子もない。野生の百合の花がはえている水辺で花を頭につけていた若い娘の美しい写真が撮れたよ。ラファエル前派の絵のようだったよ。

ジョーン・フリードマン　あちこち歩きまわったわ、アシッドもなにもやらずにね。でも、たくさんの人たちがみんな完全にリラックスしているのが、とても不思議でドラッギーな感じ。みんなリラックスしていて、ストレスとか緊張感、怒りやもめごとなんて、どこにもなかった。多分、すべてドラッグ。でも同時にあれだけの数の人間がかもしだす、巨大な静謐感ったら、それは素晴らしいものだったわ。アーティストたちも、みんなとてもクール。誰もがあそこにいることを誇らしく感じていたんだわ。

ボストン出身のバンド、クウィルは僕らのウォールキルでの〝パブリック・サービス〟コンサートに出演してくれたバンドで、土曜日の午後、この日のオープニング・アクトとして登場した。朝方の雨はあがり、どんどん暑く、むしむしとしてきた。クウィルは持ってきたパーカッション用の道具を次々と客席に投げこみ、演奏に加わるようみんなに呼びかけた。彼らはノリノリの若いグループで、またサウンド調整しながらの本番突入という、あまり望ましくない状態でスタート。フリー・スタイルのジャムと「ゼイ・リヴ・ザ・ライフ」、「ザッツ・ハウ・アイ・イート」などのサイケデリック調ナンバーを演った。

僕らがサンタナのセッティングをする間、ジョン・モリスはジョー・マクドナルドを口説きおとしていた。もともとジョーは日曜日にバンド〝カントリー・ジョー&ザ・フィッシュ〟としてステージに出る予定だったが、バックステージにうろついているのを見て、ジョンは彼をつかまえた。まもなくジョーがバンドを離れてソロになるだろう、という噂も流れていた。そこでジョンは「これはソロ・アクトとしてのきみの腕をためす絶好のチャンスだぜ」、と上手に口車に乗せてステージのつなぎ役を押しつけたのだった。

カントリー・ジョー・マクドナルド　「俺はギターも持ってないし、ピックもない。あるのはマッチだけだぜ」って言ったんだ。彼らはどこかからヤマハのギターを持ってきて、ストラップがわりにロープを渡すんだ。「ごていねいな準備をありがとさん」ってもんだ（笑）。いろいろとごちゃまぜのフォーク・セットを演った。みんなたいして俺に興味を持ってくれなかった。俺は真剣なまなざしでやっているのに、みんなおしゃべりしているんだ。でも、カントリー・ジョー&ザ・フィッシュは知っていてくれたから、まあ、いいさ、あたりさわりのないBGMみたいなものさ。俺がまかされた仕事はステージにいて時間をつぶせばいい、そう思っていたんだ。でも1時間ばかり演っていたら、自信のようなものがわいてくるじゃないか。まあ、退屈してるみんなに業を煮やして、居直りだしたって感じだったかも。そこでちょっと演奏を中断して、マネージャーに例のチアーをやっていいか、訊いたんだ。

それから俺は戻って、マイクの前に立つと「Fをくれよ、俺に」と叫んだ。すると、みんな向き直って俺に「F！」って言ってくれた。それから「Uをくれよ」と言うと「U！」と叫び返してきた。それであんな風になったわけだ。続けて俺は歌いだしたんだ、今度はみんなの熱い視線を感じながらね。あの時はもうアドレナリンが分泌されっぱなしだったな。

ジョーの「リング・オブ・ファイア」とか「テネシー・スタッド」にはあんまり反応しなかった聴衆だが、あの「フィッシュ・チアー」そして、ユーモラスだが辛辣な反戦ソング、「アイ・フィール・ライク・アイム・フィキシン・トゥ・ダイ・ラグ」（〝なんだか死んでしまうような気分のラグ・ソング〟）には誰もが熱くなった。それはウッドストックを代表するアンセムのひとつとなり、映画

のハイライト・シーンにもなったのだ。何十万人が声を合わせて歌った。〝だから、ワン、トゥ、スリー、何を俺たちは待っているんだ？　俺に訊くなよな。俺は気にもかけちゃいないぜ。どうせ、次はベトナム行きさ……〟。それは50万人が一緒に上げたあざやかな戦争への抗議のメッセージだった。

次のセットとの間にヒュー・ロムニーがステージに上がり、彼はすぐに〝みんなのお気に入り〟になった。

ヒュー・ロムニー　僕は出回っていた悪質なドラッグに手を出さぬよう、ずっとその状況にかかわって動きまわっていたんだ。ひとつ状況が変わると次はこっちのケース、って具合にね。で、チップにアナウンスしてもらおうと、メッセージを渡そうとして、ステージに来ていたのさ。彼は〝ブルーのアシッドには気をつけてくれ！〟なんてやっていたしな。僕を見るやチップは「上がってきて自分でアナウンスすればいいよ」。あっさりマイクの前に立たされちまった。僕がマイクの前に立ったのは、みんなの集合的意識に訴えたいと思うことがあった時だけだぜ（笑）。あの後でひどい雨になって、マスコミの連中が被災地よばわりしだした時、僕は言ったんだ。「どんな悲惨な被災地にだって、ちっぽけな楽園があるものだよ！」ってね。

ヒューは人々が抱きはじめていた〝バッド・アシッド〟への恐怖心を取り除いてくれた。「毒じゃないんだよ」って彼は言った。「それはおそまつに精製されたものなんだ」と。

次の出演者はサンタナだった。僕は彼らがこの日のみんなにエネルギーを与え、元気を増幅してくれるだろうと、その演奏を楽しみにしていた。これまで彼らは数年間、ベイ・エリアでは活発に演奏していたが、まだこちら側、イースト・コーストではその演奏を耳にした人間はほとんどいなかった

のだ。

カルロス・サンタナ　ヘリコプターで運んでもらって、僕らは朝の11時にウッドストックに到着した。被災地みたいなひどい状況だ、って聞いていた。僕はすぐに大好きなジェリー・ガルシアを見つけて、一緒にわいわいやっていた。出番は夜の8時ぐらいだから、それまでゆっくりしていてくれって言われていたんだ。

そしたら、こうなってああなって、とんでもない七転八倒のドタバタになっちまった（笑）。つまりこうさ。まず、時間があるからっていうので、僕はメスカリンをやりたくなって、いい感じになってた。ところがその効きがちょうどピークになってきた、その時に、進行役らしい奴が「さあ、今、出なかったら、もう、きみたちの演奏のチャンスはないぞ！」って言うじゃないか。それであわててステージに出てみたら、見渡すかぎり、人、人、人の海だ。体と揺れる髪と笑う歯、突き出された手でいっぱいの海。もうパニックなんてものじゃない。神様、時間のキープが狂いませんように、うまく弾けますようにって祈りながら演奏を始めたよ。前にもイッてる状態で演ったことはあったけど、こんな大勢の観衆の前じゃなかった。あの時は〝みんなのハートに、プラグインだ！それも、いっぺんにプラグインするんだ！〟みたいな気持ちだったよ。でも僕らはなんとかやりとげた、それも最高にごきげんに、だ。どんなサウンドだったか、どんな風に人々の体がはねていたか、僕は一生忘れないよ。バンドの仲間全員にとっても、あそこでの時間は最高だったんだよ。

グレッグ・ローリー（サンタナのヴォーカル&キーボード）僕らはおたがいに向けて演奏したんだ。カルロスはよく客席に背を向けて弾いていた。だって僕らはジャズ・プレイヤーのようにプレイし

ていたんだもの。たまたまわりに50万人ばかりいたって（笑）、そんな感じさ。前の方の1万とかそこら人は姿が見えても、後は髪と歯が並ぶだけ。だから恐がることなんか何もなかったんだ。もし、僕がウッドストックがどんな意図で始まり、どんな意味を後で持つようになったか知っていたら、きっと死ぬほどビブルっちまっていただろうな（笑）。

まるでモンスターなみに強力なリズム・セクション、サンタナはみんなを総立ちにして、踊らせた最初のグループだった。その光景を見ながら、僕の目には遠い土曜の夜に両親のナイトクラブでマンボを踊っていた人々の姿が、だぶって見えたものだ。カルロス・サンタナはそんなラテン・サウンドの熱狂をロックンロールと見事に融合させたのだ。それは驚異的だった。「ソウル・サクリファイス」ではマイケル・シュリーヴが、それまで僕が聴いた中でもとびきりすごいドラム・ソロに突入。さらにそこにパーカッションが重なり、カルロスのギターがすべてを熱く、高く舞い上げ、サウンドはクレッシェンド――もう、オーディエンスは全員、昇天、有頂天だった。そう、今やそこに、もうひとりのスターが誕生したことは誰の目にもあきらかだった。

マイケル・シュリーヴ（サンタナのドラマー）観客のサイズの大きいことといったら、まるで浜辺から海を見ているような感じだったな。しかも海と水平線と空がいっぺんに見えるんだぜ。見渡す限り続く人の海さ。僕らはみんなに届きゃいいなって、集まって音を出してるストリートのちんぴらの一団みたいだった。あの時の自分のドラム・ソロを聞き直すと恥ずかしくて気が狂いそうになっちゃうよ。だってひどいもんさ、それまでのグルーヴを止めちゃって、なんだか急にやわになっちゃってさ。ああしないで、こうすればよかったとかいろいろ考えちゃってね……。でも、あの客

CamScannerでスキャン

たちには受けたんだよね、まあ、とても仲間うちってノリだったからな。

ステージ前のボウル状のスペースはどんどん混んでいき、バックステージにも、どんどんアーティストや友人たちが流れこんできていた。サンタナの機材をステージからかたしている時に、チップ・モンクがジョン・セバスチャンがそばにいるのを見つけ、「2、3曲歌ってこいよ」と有無を言わせずにステージに送りだした。彼はアシッドがきまっていたけど、とにかく何とかしてみようと、まるで客席全体が昔からの友だち、みたいな調子で語りかけた。

「こいつはまったくぶっ飛ぶよ（マインドファック）！」とアシッド・ラップをしてセバスチャンは「レインボーズ・オール・オーバー・ユア・ブルース」、「ダーリン、ビー・ホーム・スーン」、「ヤンガー・ジェネレーション」を歌った。彼が忘れた歌詞をみんなに手伝ってもらいながら歌い終える前に、また日がさしはじめていた。彼は〝あれは過去最悪のパフォーマンス〟と言うが、僕はそんな風には思わない。あれだけたくさんのオーディエンスを家族のように心で抱きしめ、僕らのギャザリングが新しいコミュニティになるよう勇気づけてくれた彼はほんとに素晴らしかったと思う。

ヘンリー・ディルツ（写真家）ステージの後方に回りこんで、カラフルなジャケット姿のジョン・セバスチャンが前に広がった人の海に向かって、ステージでひとりぼっち、で佇んでいる、という感じでいるところを一枚撮った。あのしぼり染め（タイダイ）の服を来た彼がピース・サインを送っているところだ。凸凹状に並んで、どこまでもどこまでも続く人の頭。左を見渡しても、右を見てもずっと続いてる。そして丘はすっかりテント、キャンパーたちでおおわれてるって教えてくれる一枚さ。

ジョン・セバスチャン　僕はあの時着ていたリーヴァイのタイ・ダイのジーンズとジャケットを何年も着てたよ。僕のウッドストックの〝光のスーツ〟って誰かが、そう呼んでいたよ。

50万人のパーティ・タイム、ハイ・タイム

アラン・ダグラス（プロデューサー／音楽エグゼクティブ）僕が送りこんだ撮影チームから木曜日にフィルムがもうなくなったって連絡があった。それで金曜日にたくさんのカメラとフィルムを持って車に乗りこんだんだ。みんな膝の上にカメラとフィルムをのせ、6人でね。到着した時はもう遅かった。道の両側にいっぱい車が停まっている所まで行ったら、警官が僕らを止めて「申しわけないが、ここから先は行けません」って言う。それで僕らはカメラ・クルーが必要としてるものを補給するために来たって説明したんだけど「ここで停まるしかないんです。ここから先はもう進めません」って言い張るんだ。それで「会場はどこだ?」って訊くと、「この先、数マイルです」。と言って森と会場に続く小径を指さすんだ。

仕方なく僕らはみんなで機材をかついで、8時間歩き、やっとたどりついたよ。喉が渇いて着くまでドリンクを飲み続けたっけ。土曜の朝で、金曜の夜の演奏は全部すっかりミスしてしまったってわけだ。もうクタクタで、着いたとたんにその場にへたりこんでしまった。ステージの後ろにマイケルは友人や家族たちのためのスペースを用意してくれていたので、みんなでそこにテントを張った。僕はその日、長い時間テントの中でころがってた。午後になって起きて、やっとステージまで行けた。集まっていた観衆は素晴らしかったよ。マイケルは「スターは集まったみんなだ」って言っていたけれど、彼の言うとおりだった。彼らはおもしろく、とても刺激的だった。あんな風に

CamScannerでスキャン

ミュージシャンが演奏するのを聴くのは初めてだった。そう、みんな白目を剝いていたんだ。あの場所の全体が幻覚にかかってトンでいたみたいだったな。信じられない光景がいっぱいだったんだ。

エレン・サンダー　土曜日の午後に晴れ間がのぞいた。エアプレインはその晩遅い出番で、その日のトリをつとめる予定になっていたが、メンバーは皆フェスティバルを見たがっていた。ホリデイ・インに泊まっていた他の出演者たちも、みんな同じ気持ちだった。集まっている人間の数とそこで起こっている〝素晴らしき混乱〟のストーリーは刻々と伝えられていたのだ。そこでついに、およそ12台ほどの車でキャラバンが組織され、全員で出発することになった。声をかけてみんなを引っ張ってくれたひとりが、ベアーこと、スタンリー・オーズリー三世。かつて〝サンフランシスコのアシッド・キング〟の名でアメリカ中を震え上がらせた有名なサウンドマンだった。彼の薬入れひとつで、フェスティバル全体が雲の上に舞い上がることもできただろう。エアプレイン隊に同伴するのは、メンバーの妻、恋人、愛人、追っかけたち。そして4人の屈強な体つきの州警察の警官が巨大なバイクにまたがり、キャラバン隊の前後をエスコート。一行はなんなく会場にすべりこんだのだ。

　車を降りるとスターたち、ゲストたちは歩いてほどなくパビリオンに到着。テーブルには山と盛られたフルーツ、サンドイッチ、ワイン。そしてボウルにはパンチ・ドリンクがふんだんに用意されていた。するとただちにその大きなパンチ・ボウルに誰かがアシッドをこっそり……。すぐにいたずら者たちは見つかり、その場で取り押さえられ、10ガロンのパンチはグラウンドに捨てられたが、時すでに遅し。なんの疑いもなく紙コップにすくってパンチを飲んでしまった人たちがいた。彼らが飲みこんだアシッドはまもなく胃から血管に吸収され、体内を回りはじめるだろう。アル・

アロノウィッツは、飲んでいる最中に危険通報を聞き、あわてて口に含んでいたパンチを吐きだすと、怒りで顔を赤くして犯人たちに呪いの言葉を浴びせていた。

わたしたちは出演者エリアからステージに続く、小さな可愛い橋を渡っていった。それは地面から6メートルほど上、スターたちと観客席を仕切る板壁の上に吊り橋のように架けられた木の板でできた花道。そこからは何十万という人々、草原を埋めつくした人々が、その先何マイルも離れた丘のほうにまで続いている様子が一望できた。なんとも素晴らしく、豪華な眺めだった。みんなが総立ちになり、サンタナが演奏するラテン・ロックでわれを忘れるように踊っているところだった。Tシャツ姿で、手にはポップ・ドリンク、笑顔、笑顔、笑顔。そんな若者たちの巨大なひとかたまりが、私たちの目の前でよじれ、震え、はねていた。そしてその真ん中には甘い香りの煙がたちのぼり、たくさんの雲のように浮かび、流れていた。

週末の間ずっと僕は紙コップやふたが開いた瓶を渡されても、絶対に飲まないように注意していたものだ。僕はなにかを盛られて、トンでしまいたくなかった。あまりにもたくさんの大事な瞬間にかかわっていて、あまりにもたくさんの楽しいことがあって、その意識から飛び出して、どこか別なところへイッてしまうなんてとてもできなかったのだ。けれど、ウィークエンドが終わる前にアーティとリンダは〝盛られて〟しまったし、普段はとてもストレートなメルもジョイスも、アシッドをやっていたのだ。

ガルシアもオーズリーも、グレイトフル・デッドの他のメンバーは早くから来ていたが、ボブ・ウィアーとデッドのマネージャーのロック・スカリーはリムジンに乗って、こちらに向かい、途中でし

つかり渋滞につかまり、そこから会場まで歩いて、土曜日に到着したのだ。

ロック・スカリー（グレイトフル・デッドのマネージャー）銀製のアール・ヌーヴォー風のケースに入れておいた何百っていうサンシャイン・オレンジのアシッドが、えんえん雨の中を歩いてるうちに、液状になって俺の足の上を流れていたんだ。皮膚からすっかり吸収されて、とんでもないことになっちまったよ。ズボンはすっかりオレンジ色に染まり、口の中はべとべと、俺の手はめくれあがってオレンジ色の鳥の爪のようになった。俺の歩く後にはオレンジの川ができていたよ。もうギンギンな状態でそれから何日も俺は不思議なミュータントに変身して、眠りのない国をさまよい続けたんだ。

ボブ・ウィアー（グレイトフル・デッド）到着するとステージから半マイルほどのところにあったテントでキャンプ生活をしたよ。あたりをふらふら歩きまわったんだ。泥だらけだった。食べ物も設備もたりなかったね。でも、誰もがその状況にはまって、自分たちができるかぎりのことをして頑張り、とてもうまくやっていた。

ポール・カントナー（ジェファーソン・エアプレイン）まだテストしたことのない水の深みまで行こう、というのが俺たちは普段から大好きだったね。だから両手を広げてウッドストックに出かけた。それで、お手上げさ。とんでもないことになっちまったけれど、あれはいいことだったんだ。もし、すべてが完璧にオーガナイズされていたら、つまんなかっただろうな。

でも混乱と無秩序、ふたつとも俺のお気に入りの言葉だけど――それがみんなに伝わったから、

ウッドストックはウッドストックになったんだ。フェンスも、セキュリティもそんなくだらないものはすべてなしで、さ。俺はアシッドをきめて、歩きまわり、あちこちでたむろして、ワイワイみんなと楽しい時間を過ごしたのさ。人々はテントをはり、キャンプファイアをやり、料理をし、泳ぎ、踊った。あれはいわば子供たちの十字軍、素晴らしい社会実験だったんだ。その前にはあんなこと一度もなかった。激流の川下りと似ていたかもな。だって次の曲がり角で何が待ち受けているか誰も知らない。でも心配なんかする暇もない。だって岩に激突しないように、みんな瞬間、瞬間に集中して夢中でやるだけだったんだから。

ジョン・セバスチャンが歌ってくれた後、僕らはてきぱきと次に登場するキーフ・ハートレー・バンドのセッティングにとりかかった。ジャズ、ブルース、ロックを演奏するグループで、リーダーのドラマー、キーフ・ハートレーは何年もジョン・メイオールとブルースブレイカーズのメンバーとして活動していた。彼は新しいバンドに、ブルースの可能性をもっと広げようとホーン・セクションを加えていた。演奏が始まると、スリーピー・ジョン・エステスの名曲をカバーした「リーヴィング・トランク」は長いジャムになり、それは「シンニン・フォー・ユー」、「ジャスト・トゥ・クライ」などのオリジナル曲へと続いていった。

次はインクレダブル・ストリング・バンド。バンジョー、ウード、マンドリン、キーボードなどの楽器をフィーチャーしてサイケデリック・フォーク調な即興演奏をするグループだった。リード・シンガーのロビン・ウィリアムソンは、長い詩の朗読からそのセットを始めた。スコットランドで産まれたバンドは、イギリスに古くから伝わるフォーク・ソングとインディアン・ラーガ、あのラヴィ・シャンカールのモーダル音階の音楽に影響を受けていた。それがどんな風にブレンドされたか、人々

CamScannerでスキャン

は「ウェン・ユー・ファインド・アウト・フー・ユー・アー」のような曲で聴くことができた。彼らは後になってアシッド・フォークと呼ばれてブームにもなったフォーク・ムーブメントのパイオニア・ランナーだった。

キャンド・ヒートは「ゴーイング・アップ・ザ・カントリー」で文字どおり〝田舎めざしてやってきた〟観衆のハートをつかむと、ノリノリのブギ・ブルースでみんなをわかせてくれた。その中には彼らがその場のインプロヴィゼイションから、後で「ウッドストック・ブギー」と呼ばれるようになった曲もあった。僕は例のフーとデッドの支払い問題でウルフとマッキンタイアにつかまっていて、残念ながら彼らのセットの大半を聞きのがしてしまったのだ。

これは後で知ったことだが、僕のトレイラーを出たふたりはジョン・モリスをつかまえて、同じように脅しをいれていた。フーとのウッドストックでの出演契約を熱心にすすめたのがジョン。だから支払い問題に強い責任を感じたのだろう。僕は前に彼らからは手を引いては、と会議で発言をしていたから、僕では話にならないと考え、ジョンはテレフォン・ビルにいたジョエルに連絡を入れ「ただちに現金で支払いをしなければフーとデッドの出演がなくなるぞ」と言った。そして、「万が一、出演がなくなれば、群衆が怒りだして暴動だって起こりかねないぞ!」と恐ろしいイメージをジョエルの耳に吹きこんだ。

しかし、ジョン・モリスのおおげさな〝なんちゃって眉唾発言〟を作戦とも気づかず、まにうけたジョエルは、状況を即刻打開せねばと大慌て。僕らが口座を作っていたホワイト・レイクの地元銀行の頭取、チャーリー・プリンスの自宅に電話し、状況を知らせ、泣きついた。ただちに自宅からガウン姿のまま、ヘリで運ばれたチャーリーは土曜日で閉まっていた職場に入り、書き込みがされていないチェックを探してキャッシング。大きな助けになってくれたのだ。町の人々がいかに僕らを信じて

味方になってくれたかを物語る心温まるエピソードのひとつだ。

僕がステージに戻り、マウンテンがスケジュールどおり、オン・タイムでステージに躍り出た。彼らの演奏はキャンド・ヒートよりもハードなブルース。レスリー・ウエストの吠えるようなヴォーカルとつんざくようなギターが会場に響いた。またもニューフェイスだったが、聴衆は彼らを歓迎した。特に「ストーミー・マンデー」のような誰もが知っているスタンダード・ナンバーや、クリームのジャック・ブルースが書いた「空想の西部劇のテーマ」のような曲は大喝采を受けていた。キャンド・ヒートにだけやらせてはおかないぜ、と彼らもそこでインプロヴァイズ、「フォー・ヤスガーズ・ファーム」というタイトルの曲が産まれた。

レスリー・ウエスト　いちばんたくさんのアンプを持ちこんだのは俺たちだったと思うな。ステージの上で耳が麻痺しちまったぐらいさ。セッティングは野外劇場みたいになっていたっけ。サウンドはメチャでかくて、ビビるぐらいだった。でもいったん弾き始めたら、そのままずっと俺は弾き続けたね。だって止めるのが怖かったんだもの。

パビリオンの周辺には、さらにたくさんのアーティストが姿を見せ始めていた。マウンテンの一行は持ってきたたくさんのロースト・チキンを、ジャニス・ジョプリンとバンドに分けてあげていた。ジャニスはみんなにシャンパンをついで回っていた。管理人を頼まれた〝ドレッシング・ルーム〟のVWバス・テントにいない時のジョン・セバスチャンは、いつも小走りでパビリオンを出たり入ったりしていた。

ジョン・セバスチャン　この時点で僕の主な仕事は、テントをいつもドライな状態に保っておくことだった。たび重なる雨のおかげで、スライ・ストーンは服が汚れはしまいかと神経をピリピリさせていた。彼は他のどんな連中よりもはるかに立派な楽器機材を持って来ていたよ。僕は緊張をほぐしてあげようと思って、彼のところへ行ってみると、彼の妹が何かにムクれていた。そこで「ねえ、どうしたんだい？　なにか僕にできることあるかい？　テントを使うかい？」そう尋ねると、横でスライが笑い声をあげて言った。「ああ、うまい肉が食べたいんだ。ステーキがあれば、彼女はたちどころに元気になるぜ！」

はたしてシスター・ローズはビル・グラハムのトレイラーへの道を見つけ、首尾よくステーキにありつけただろうか？

次はグレイトフル・デッドの登場だった。だが悪天候に加えて、幻覚作用のもろもろが裏目に出たのだろうか――彼らは大変なトリップをすることになった。それはまずセッティングの時から始まった。みんなに最高のサウンドを聴かせようと彼らがこのイベントのためにはりきって用意してきた膨大な機材を、ステージの直径12メートルの回転台の上に積み上げていると、その重さに耐えかねてクーンテーブルを回す下のホイールがつぶれてしまい、もう押しても引いても動かない！　このアクシデントで生じた遅れは、さらに彼らのサウンド・チーフ、オーズリー・スタンリーが、「音響セットの配線が気に入らないからやり直す」と言い出したことで、さらに輪をかけた。結局、このサウンド・システムと彼らの機材回線の修復作業は、どこでどうなったのか、とんでもない結末をもたらし

CamScannerでスキャン

た。〝あれっ、ギターにふれると、ビリビリと電気ショックが！〟……

ロック・スカリー　ステージの上のライザーに俺たちの機材を積みあげていた。そしたら、俺たちのギアーが超ヘヴィーだったのか、ライザーを動かす輪がみんな壊れちまって、仕方なく積み上げたアンプや、スピーカーをひとつひとつ手でおろして、またセッティングを最初からやりなおすって、ドジなことになったんだ。これがうんざりするほど時間を食ったね。で、俺たちがブックサと運命を呪いながら作業をしてると、PAからは悪夢のようなアナウンスが聞こえてくるじゃないか！「みんな、お願いだ、タワーから降りてくれ。いましがた、誰かが落ちたそうだ！」、「茶色のアシッドを見かけてもやらないように！　バッド・アシッドが出回っているぞ！」。もう、やってしまった何千人がどうすべきかを言うべきだったのにな……。

普段なら絶対に悪い方向には考えない俺も、あの時は思ったね、〝この先、どんなひどいことが起こるんだろう？〟と。そしたら、すぐに起こっちまった。誰かがコードを引っこ抜いたみたいに、いきなりあたりは真っ暗さ。風は速度を増し、ヒューヒューと唸りだし、するとステージが小刻みに揺れだした。体に感じるようなやばい揺れ方だ。俺たちが東部の田舎者たちに見せて〝ビューティフル！〟とうならせてやろうぜ、と持ってきて、ステージの上に張ったライトショー用のどでかいテント・スクリーン。そいつが風で船の帆のようにふくらんで、今にもステージ全部を泥の海に、帆船マリー・セレステ号のように走り出させようとしていたんだ。確かに滑りだしてる感じだ。〝これってヤバくないか？　あ、あ〜、傾くぞお！〟。慌てて俺のブラザーのディッケンがマストをよじのぼり、ボウイ・ナイフで風を逃がそうと、スクリーンを切り裂く……。〝こ、これは良い兆しではありませぬぞ、キャプテン……〟。

CamScannerでスキャン

「セント・スティーヴン」で演奏が始まった。やっと、なんとか始められたな、とスタッフがホッと胸をなでおろそうとした、まさにその時だ。いきなりステージにひとりの男が躍り出て、なにやら客席に向かってばらまきだしたんだ。それは俺たちの間でもクレイジーな行動で知られている男で、彼が投げているのはLSD……よりによって警告のアナウンスがされたばかりだというのに。でも、まあ、いいか。彼が撒いていたのは紫色。だが、茶色に見えなくもない……オー、ノー、茶色のアシッドだ！　やってはならない"悪いアシッド"じゃないか！

この時、男がステージのはじから茶色のアシッドらしきものをばらまくのを見て、普段なら型破りでビザールな人の行動に目を丸くして喜ぶガルシアが、珍しく表情をくもらせていた。何か不愉快で悪いものを見ているような表情だった。その時、彼は意識を変容する薬物でとんでいる人間が絶対にしてはいけない問いかけを自分にしていたんだ。"ホワイ・ミー?"（なんだって、俺にこんなひどいことが?）。

さらに悪いことに、デッドはひどい演奏をしていた。彼らはなかなかいつもの演奏レベルに自分たちを持っていくことができず、どの曲も満足いかぬまに終わっていた。ステージで出ているサウンドもひどく、吹きこむ風は激しく、冷たかった。そしてデッドは「ラヴライト」でラスト・ナンバー、そのセットをしめくくることにした。しかし、いつもならば人々を燃え上がらせるビッグベンのヴォーカルも、聴衆をわかせることができなかったんだ。"神様ありがとう！　終わりました！"ってなものさ。

ジェリー・ガルシア　いやはや、僕らはひどかった！　どこからどこまでとっても、おそろしくみすばらしい演奏をやったものだ。僕がキメていたからか、ステージの上で青く光る玉がはねている

のが見えた。ギターの弦に触れるとそれが僕のギターに飛びこんできたっけ。アンプの後ろにいる連中が叫んでた、「ステージが傾いてる！　このステージは崩れるぞ！」。
個人的には僕は、友人たちとゆっくりしたり、いろんな連中と小規模だけどごきげんなジャム演奏をしたり、素晴らしい時を過ごしたものさ。でも、バンドでの演奏は悲惨以外の何物でもなかったんだ。

ボブ・ウィアー　演奏していた時の僕らは、雨の中のひき蛙って感じ。身動きとれず茫然自失状態さ。でも雨は僕らがあそこでした悪夢のような体験のほんの一部、もっと最悪だったのは、僕らのサウンドマンがステージの配線やらアースがなってないって言い出して、それを全部やり直したことさ。2時間もショーが中断されたんだ。それでやっと奴が満足のいく配線ができたというので、僕らは演奏しはじめた。ところがギターにさわるたびにビリビリとショックを感じるじゃないか。ステージは雨で濡れてて、僕の体にも電気が流れていたんだ！　ギターに触れながら、体がマイクに触れた時はもう死ぬ一歩手前！　野球のボールぐらいの青い閃光が走り、僕の体は後ろのアンプのところまで、ふっ飛んだよ。2、3メートルぐらいね。ウッドストックで即座に名声を決定的なものにした連中もいたけれど、僕らはあれからそこまでたどりつくのに20年かかったんだ（笑）。あれは僕らのやった最悪のステージだったんだ。

トム・コンスタンティン（デッドのキーボード奏者）ステージに僕らが立った頃には聴衆はみんなナイスにサワー・ドリンク化していた感じ。1万の体がグロテスクにひとつになった、ヒエロニマス・ボッシュの絵みたいだった。演奏中、電気が流れていたのは僕は気にならなかったな。それよ

り他のみんながよれよれで、テンポが一定にならないのがつらかった。特に長い演奏じゃなかった。僕らは40分ぐらい演っただけだよ。みんなステージが終わってホッとしていたよ。感電しながらピョコピョコやってた、アンドロイド・ロボットのジュークボックスみたいだった。

デッドが背をまるめてステージを降りたのが午後10時。僕らは急いでクリーデンス・クリアウォーター・リバイバル（CCR）のセッティングに取りかかった。デッドたちの体験を目の当たりにして、クリーデンスの連中もナーバスになっていたのかもしれないが、彼らはそぶりには見せなかった。クリーデンスはその頃、ヒット・マシーンのように出すレコード、出すレコードをかたっぱしからヒットさせていた。そしてその演奏は自信と心地よい緊迫感にあふれたものだった。「ボーン・オン・ザ・バイヨー」、「グリーン・リバー」、「バッド・ムーン・ライジング」、「プラウド・メアリー」、「アイ・プット・ア・スペル・オン・ユー」。ブルージーでパワフルなジョン・フォガティのヴォーカルとギター・リード、見事なハーモニカ・プレイがぐいぐいとみんなをひっぱり、オーディエンスの興奮は「スージーQ」のフィナーレで最高潮に達していた。

ステュ・クック（CCRベーシスト）ステージに立っても何も見えなかった。ちょっとテクニカルなトラブルがあったっけな。最初の曲が終わっても闇の中に誰がいるのかわからなかった。あたりはシーンと静まりかえっていたんだ。するとどこかから「俺たちがついているぞ！」って誰かが叫ぶのが聞こえた。OK、きっとこのコンサートは彼のためのものなんだろう！　それで次から次へ僕らは演ったよ。僕らがいったい何に巻きこまれていたのか、何のアイディアもなかった。そして後になって何が起きていたのか、やっと少しずつ見えてきたんだ。もう二度とあんなことが起こる

とは思えないな。

ジョッコ・マルセリーノ（シャ・ナ・ナのドラマー）意識に変性作用をもたらす食品医薬局（FDA）認可はされていない薬剤を少し服用してみました、なーんちゃって（笑）。とにかく、僕はひとりでいなくっちゃ。って思ったのさ。だって50万もの人間がまわりにいてはね、おちおち自分の観察もできないよ。それで僕はあたりをさんざん歩いて、丘の上にたどりついたんだ。そしたらクリーデンスが「ボーン・オン・ザ・バイヨー」なんてロックしはじめるじゃないか。それ聞いたとたんに精神世界の実験なんて、どうでもよくなっちゃって、踊りだしていたよ。

ジョン・セバスチャン　クリーデンス・クリアウォーターのセットは、ウッドストックの他のどんなパフォーマーにも負けない存在感と味わいがあったね。でも、それまで彼らはスライ・ストーンとかジミ・ヘンドリックスと同列で語られたことはなかったんじゃないかな。実にタイトで、あの力強さはサイケデリシャスな状態にいた僕には特にググッときたね。だけど、ジョン・フォガティはステージを降りてきたら、他のメンバーに「ああ、おまえら、よくもだいなしにしてくれたな」なんて言ってるんだ。

ジャニス・ジョプリンと、スタックス／ヴォルト・レヴュー風にホーン・セクションを加えた彼女のニューグループが続いてステージに上がった。だけど、その演奏は正直なところ、僕には少しガッカリだった。もちろん、ジャニスの歌はいつものように素晴らしかったが、これまでほんの数回しか演奏していなかったバンドに、彼女はしょっちゅう客席に背を向け、指示を出さなければならなかっ

CamScannerでスキャン

た。途中、ファンキーなR&Bシンガーのスヌーキー・フラワーズにオーティス・レディングの「アイ・キャント・ターン・ユー・ルース」のリードを歌わせ、自分は靴を脱ぎすてて裸足で踊ったり、楽しそうに歩きまわっていた。「トライ（ジャスト・ア・リトル・ビット・ハーダー）」と「ワーク・ミー・ロード」はリハ不足がたたってか、壮大にこけて、新しいバンドに期待していたファンを落胆させた。それでも、ファン・パワー・フォーエバー、みんなはやめないで、もっと歌ってくれと懇願した。こうして、腹の底からしぼりだすような「ピース・オブ・マイ・ハート」、「ボール・アンド・チェイン」でジャニスの長いセットは終わった。みんな疲れきって、重なりあってその場に崩れ落ちてしまうのでは、と心配になったものだ。

エレン・サンダー　「ファンと私はひとつなの！」、そう言うかのように、ジャニス・ジョプリンはみんなと踊っていた。それに応えるように彼らは熱狂的な歓声を上げ続け、エネルギーの最後の一滴を使い果たすまで、彼女をステージから去らせようとはしなかった。

真夜中のオペラ――ステージの上の牧師、道化師、魔術師たち

どんなショーを見せてくれるのだろうか――と会場の誰もがスライ&ザ・ファミリー・ストーンの登場を心待ちしていた。そんな期待に応えるように、彼らは実に派手でファンタスティックなファッションでステージにあらわれた。スライは白い房飾りのついたジャケット、シスター・ローズはプラチナの髪に房飾りびらびらのゴーゴー・ダンサーのドレス、ベーシストのラリー・グラハムは粋なスーツに大きな羽飾りのついた帽子という出で立ちで。そして、そのパフォーマンスは〝素晴らしい〟

なんて表現をはるかに超えたものだった。「マ・レディ」、「シング・ア・シンプル・ソング」、「ユー・キャン・メイク・イット・イフ・ユー・トライ」、「エブリデイ・ピープル」。そして圧巻のフィナーレ「ダンス・トゥ・ザ・ミュージック／ア・ミュージック・ラバー／アイ・ウォント・トゥ・テイク・ユー・ハイヤー」メドレーでは、スライと50万人の間で炎のように熱いコール&レスポンス——南部のリバイバル教会の伝道師と信徒たちのかけあいを彷彿とさせるような圧倒的なパフォーマンスで、スライは僕ら全員をサイケデリック・チャーチへと連れていってくれたのだった。

カルロス・サンタナ フェスティバルのピークを目撃しに出かけたよ。そうさ、スライ・ストーン、彼のステージだ。でも彼は二度とあんな素晴らしいパフォーマンスをしなかったと僕は思うんだ。ほんとに最高だったよ。彼のアフロ・ヘアーから蒸気があがるのが見えたんだ、ほんとだってば。

エレン・サンダー グレース・スリックとジャニス・ジョプリンが一緒に踊っていた。彼女たちは目をつぶり、拳を握りあい、体をぶつけあっていた。〝ハイヤー！〟——もっと高く飛べ！ とスライは聴衆に呼びかける。すると50万の聴衆、そのひとりひとりが声のかぎりに叫び返した。〝ハイヤー！〟、彼は両手を高く空に伸ばし、ピース・サインを掲げる。白い房飾りが舞い上がって波のようにそのまわりで揺れる。そして聴衆も一斉に腕を、手を、指を宙に突き出し、声をあわせて叫ぶ、〝ハイヤー！〟。ある者は嬉々として、ある者は必死の形相で。無数のヘッズの声が夜に向かって叫ぶ。それは苦悶にみちた60年代という時代から上がった叫び、願い、そして祈りの声だ——〝ハイヤー！〟もっと高く！〟

CamScannerでスキャン

スライのパフォーマンスの興奮をさますのにはしばらく時間がかかった。その役目を果たしてくれたのはアビー・ホフマン。いや、バックステージで僕をつかまえた彼は、気分をさましてくれたどころではなかった。彼はパニックにおちいっているような声で言ったのだ。「たった今、銃を持った男が走っているのを見たんだ。手を貸してくれ、奴を探さないと！」。

その時、僕は気づかなかったが、それまで24時間シフトで医療テントで頑張っていた彼は、ちょっとエッジからオフ・モードにしようと決め、1粒、いや2粒、もしかすると3粒のアシッドを口にほおりこんでいたのだった。セキュリティの人間はあたりにいなかった。それで彼と僕はガンマンを見つけに出かけた。

「あいつはステージの下にもぐりこんだのに違いない！」、アビーが自信ありげに言うので、僕らは巨大なステージの下のすみずみを見てまわった。撮影隊のアシスタントがフィルムのマガジンを交換していた。誰も見つけられぬまま捜索を続けることしばし、アビーは立ち止まって、困惑した表情で僕の方を見ると、こう言った、「なあ、死ぬのはこわくないだろ？」。

そう言われても僕はなんと言ったらいいかわからなかった。それよりも、僕はこの捜索の意味を考えはじめた。そして〝銃を持ったバカヤロー〟が〝ナイフを持ったバカヤロー〟に変わった時、僕はここで出会いそうな〝バカヤロー〟がアビーだけだと気づいた。

「朝の3時30分、そろそろステージにザ・フーが登場する時間だった。それで僕は言った、「なあ、アビー、きみの見た誰にせよ、そいつは行っちまったんだ。だから僕たちも音楽を聴きにいって、しばらくチルアウトしようぜ」。

彼も賛成したので僕らはステージに行って、他にやってきたいろんなグループのミュージシャンたちと座って、フーを見ることにした。アビーは僕の隣で落ち着かず、喋り続けていた。「俺はジョ

ン・シンクレアについて何か言わないといけないんだ！　ジョイント1本吸っただけで彼はずっとムショ暮らしなんだぞ！」。シンクレアはデトロイトの急進的ロック・グループMC5のマネージャーで、ホワイト・パンサー党の創立者。おとり捜査にはめられ、わずか2本のジョイント所持で10年の禁固刑で監獄につながれていたのだ。

「わかったよ、アビー」、僕は彼の理性に語りかけようとした、「後でチャンスがあるさ、セットの間とかにさ」。

でも彼は聞かなかった、「いいや、俺はほんとに言わないといけないんだ！　たった今だ！」。「アビー、フーが演奏しているんだぜ」僕は彼に思い出させようとした――フーは彼らのレパートリー、ロック・オペラ『トミー』の半分あたりにさしかかっていた。どうしてそんなことがわからないのか不思議だった。「彼らのセットの真ん中でスピーチなんかできないだろ。彼らに最後まで演らせてやれよ！　頭を冷やせよ！」。

ちょうど「ピンボールの魔術師」が終わった時、アビーは椅子からとびあがった。そして僕がつかまえるよりも早く、タウンゼントのマイクに駆けよった。ピートは後ろを向いてアンプの調整をしているところだった。アビーは誠実な口調で聴衆にジョン・シンクレアについて考えてみてくれ、と訴えた、彼には僕らの助けがいるのだと。そして、無邪気に楽しんでいる聴衆を責めた。まさにアビーは彼本来のトリップの真っ最中。「なあ、そこで楽しんでいるおまえたち、ジョン・シンクレアは政治犯としてブチこまれてるんだぞ……」。バシッ！　振り返って客席の方を見ると、自分のマイクの前にアビーを見つけたタウンゼントはギターで彼の頭を殴りつけたのだった。

アビーはよろめき、それから前のカメラマン席に飛びこみ、一目散でフェンスを乗りこえ、その向こうの群衆の中へと消えていってしまった。それが、その週末、僕がアビーの姿を見た最後だった。

ヘンリー・ディルツ　僕はカメラを持ってステージの前の突き出し部分、フーの真ん前にいたんだ。ロジャー・ダルトリーのふさ飾りが宙に舞い上がってカッコよかった。するとアビー・ホフマンがステージに出てきて、ピート・タウンゼントがギターをかまえて、ネックを銃剣のように彼に向けると、狙いすまして、バッカーン！　殴り殺しちゃったのかと思ったよ。

その前の演奏中にも、彼の前でかがみこんで撮影カメラをかまえていたマイケル・ワドレー監督の胸をピート・タウンゼントは蹴りつけていた。今度は彼、タウンゼントはカンカンだった。「次にこのステージを横切る奴がいたら、そいつの命はないぜ！」、彼はギブソンSGをチューニングしながら言った。聴衆は彼がジョークを言っているのだと思い、笑い声を上げ、手を叩いた。「笑えばいいぜ」、彼は冷たく言い放った。「だが、俺は本気だぜ！」。

ピート・タウンゼント　俺の反応は考えてというより反射的なものだった。アビーの言っていたことはいろんな意味で政治的に正しいんだ。ウッドストックの奴らは本当はただの偽善者どもだ。コスミックな革命だとかぬかしやがって、ただフェンスを壊して、野原を乗っ取っただけじゃないか。それで悪質なアシッドをとって、バンドにギャラも払わずに逃げようとしやがった。その間もジョン・シンクレアはでっちあげ麻薬捜査ではめられてぶちこまれたまま、ブタ箱で腐ってくたばりかけていたんだ。

ザ・フーは『トミー』の幸福感あふれる演奏を続けた。そして朝日が昇ると、彼らはモッズ時代か

らのけたたましいロックンロール・クラシック「サマータイム・ブルース」、「シェイキン・オール・オーバー」、「マイ・ジェネレーション」を演った。どれも驚くほど素晴らしい演奏だった。後になって彼らが〝ウッドストックでの演奏は平均以下のでき〟で、また〝聴衆が『トミー』にはまってくれなかったみたいだ〟と発言しているのを知ったが、とても信じられなかった。

ピート・タウンゼント 「トミー」は誰にも受けなかった。セットが終わる頃、俺はかろうじて起きていたって状態で、誰か別の奴の演奏を聞いているような気分だった。そして、バーン！ と太陽が昇ってきた。すごかったぜ。ある意味じゃ、俺たちはそんな値打ちがないって感じがしたんだ。俺たちは悪いバイブをばらまいてたんだからさ。演奏を終えると、もう昼になっていたよ。俺たちはステージをおり、車に乗って、一目散でホテルに戻ったんだ。クソ嬉しかったぜ。

ビル・グラハム ザ・フーは冴えていたな。タウンゼントは蒸気機関車みたいだった。走りだしたらどこまでも止まらない裸の黒い馬って感じだった。奴が演奏を始めたら、〝気をつけろ！ はね飛ばされるぞ！〟だ。

ロジャー・ダルトリー（ザ・フー）僕らは2時間半のセットを演った……それで僕らのバンドとしての地位が確立したんだ。それまではカルト・バンドだった僕らを、ウッドストックはロックの歴史の中に書きこみ、不動の人気と名声を与えてくれたんだ。

ザ・フーに続く出演グループ、そしてこの長い日のトリをつとめたのがジェファーソン・エアプレ

CamScannerでスキャン

インだった。しかし、フーのあの圧倒的ライブの後では、たとえ何を演ってもそれ以上の盛り上がりはあるまい。あたりはまぶしすぎるほど太陽が輝いていた、しかも、それまで24時間、ぶっ続けでパーティに興じていたエアプレインの面々……。それでも彼らは、その時のベストをつくした。キーボードで演奏に参加したのはニッキー・ホプキンス。ストーンズとの共演で知られた彼は最初ジェフ・ベック・グループでウッドストックに出演する予定だったのだ。

「たくさんヘヴィー・グループを聞いたわよね」。ステージに立つとグレース・スリックは言った。「それじゃ、これから朝のマニアック・ミュージックへようこそ!」。

グレースの美しさに僕は息を飲んだ。彼女とマーティ・バリン、ヨーマ・コーコネン、ポール・カントナーは順番にリード・ヴォーカルを取りながら「サムバディ・トゥ・ラヴ」、「ボランティアーズ」、「ホワイト・ラビット」など彼らの大ヒット曲を、長いサイケデリック・ジャムを披露した。

グレース・スリック　一晩中ずっと起きていたから、わたしは目を閉じて半分眠りながら歌ったわ。ちゃんと意識があれば、もっといい演奏ができたと思うけれど……。でもね、ロックンロールの良いところは、ぼろぼろの状態もまた良しってとこね。

彼らは憔悴(しょうすい)しきっていた。僕らもみんなも……。こうして彼らのかなでるトリッピーな子守唄を耳に、僕らのできたての〝都市(まち)〟はクレイジーなまどろみの中におりていった。

3日目を始めるのに、それはまたとない始まり方に思えた。

CamScannerでスキャン

© BARON WOLMAN

水に入ってカメラマン撮影中

© HENRY DILTZ

サイドステージで休憩中のペニー

© HENRY DILTZ

映像作家、マイケル・ワドレーとボブ・モーリス

ウッドストックで動物保護キャンペーン

© KEN REGAN

CamScannerでスキャン

© BARON WOLMAN

© JIM MARSHALL

© HENRY DILTZ

© HENRY DILTZ

© HENRY DILTZ

（右上から） 僕とジョイス・ミッチェルと電話中のティシア。僕とビル・グラハム。アーティとアルバート・グロスマン。ティム・ハーディンの様子を確認。ジョーン・バエズとジョー・コッカーのマネージャー、ディー・アンソニーとプロデューサー、ダニー・コーデル

CamScannerでスキャン

© JIM MARSHALL

© HENRY DILTZ

© HENRY DILTZ

© JIM MARSHALL

© BARON WOLMAN

(右上から) ヨーマ・コーコネンと友人。MCをするヒュー・ロムニーとチップ・モンク。8月16日土曜朝のジャニス・ジョプリンとグレース・スリック。ジェリー・ガルシア。ジョンとヨーコも登場。

CamScannerでスキャン

第12章

August 17, 1969

1969年8月17日

Joe Cocker and the Grease Band
Country Joe and the Fish
Ten Years After
The Band
Johnny Winter
Blood, Sweat, and Tears
Crosby, Stills, Nash and Young
Paul Butterfield Blues Band
Sha Na Na
Jimi Hendrix

CamScannerでスキャン

日曜日、午後4時30分。今日の最初の出演者のジョー・コッカーとグリース・バンドが彼らのセットを終えたところだ。嵐が近づいていて、とんでもないことになりそうだ。こんな大風にお目にかかるのは1966年ココナツ・グローヴを吹き荒れたトロピカル・ストーム以来のことだ。ステージ・クルーは、雨が降りだす前に機材を覆わねばと、プラスチックのシートやカバーを抱えて、あっちへこっちへとフルスピードで駆けまわっている。3日間とも天気が崩れるたびにこんな状態で、用意していたプラスチック・シートはもう残りわずか。いったい、何マイルの長さになるのだろう？　うなりを上げるカミナリと、空にギザギザ・マークの稲妻の閃光は、〝俺たち自然だって、おまえらがステージで出す轟音ぐらい楽に出せるんだぜ〟と言っているかのようだ。

ステージ係の何人かが、前に埋めたケーブルが、昨日から地面が泥に変わったあたりから剝き出しになり、見えはじめている、と注意を呼びかけている。このケーブルはステージの下からタワーへつながる電線だ。ステージの電気技師は、「ケーブルの外側の被いが擦り減り、高圧線が剝き出しになっていると思う……」と心配そうな表情。チップは「チェックするよ！」と言いながらも「この〝馬のデカマラ〟みたいなケーブルは頑丈だから、上からドンドン踏んづけられたぐらいじゃ、どうってことないだろう」といつものクール・フェイス。「このケーブルは炭鉱でも使われているもので、外側の硬質ゴムの下にもさらに、真鍮製の固いケースで念入りに被われているのだ」と言う。しかし、僕たちが顔つきあわせてこの問題を討議してるあいだに、パニクった誰かが、テレフォン・ビル本部に電話し、その電話を受けたウエスのセキュリティ仲間、ジョン・ファブリをフリークアウトさせてしまった。「すぐに電源を落とせ！」と彼。ファブリとジョエルは、暴動が始まるのと大勢が感電するのとどちらがよりヤバイか討論を始めた。僕は、「どちらも起きないようにするから心配は無用」と、ふたりへの伝言を頼んだ。

ケーブルは無事だった。だが雷をともなう嵐の間は、ステージで電気は使えない。どっちみち、しばらく電力はシャットダウンせざるをえない。

雨には、もう慣れた。次なる悩みのタネは高さ60フィートのタワー。ふたつのタワーの上にはひとつ何百ポンドという重さのスーパー・トゥルーパー・ライトが置かれている。もし、この巨大な照明器具の留め金がゆるんで、タワーから落下でもしようものなら大惨事だ。

風速60メートルの強風がタワーを揺らしている。しかもタワーの途中のポールには、まだ何人もよじのぼったまま、〝特等席〟にしがみついているし、その下には何百、何千人がかたまって、タワーを囲む太い輪……見るも恐ろしい光景だ。

チップはタワーのてっぺんにいくつも固定器具(リガー)を運び、落ちることのないよう厳重に固定する。もともとこのタワーは強風にも耐えるように設計して建てられているが、この暴風は想定外。それに、よじのぼった人間たちの重さまで計算には入れていない。のぼっている子供たちをおろし、パニックにならぬよう、まわりの群衆を遠ざけなければいけない。獰猛な風が、雨粒を弾丸のように降らせ、もう誰も彼も上から下までびしょ濡れだ！

ジョン・モリスの対応は速かった。マイクを握ると彼は人々に向かい、これから僕たちと、彼らがすべきことを伝える。「お願いだ、今すぐタワーから離れてくれ！　まわりの人はさがってタワーから離れてくれ！　誰かが怪我する前にそこを空けるんだ！　タワーから目を離さないでくれ！」。

ステージからクルー、ミュージシャン、見物人たちが濡れない場所に避難しているのに、ジョンはひとりで立っている。マイクからビリビリと体に電気が流れても、電気を切るまえに、彼には伝えなければいけないメッセージがあるのだ。

2日間ほとんど眠らず、ステージで司会を続けてきたジョンの声は、もうかすれきっている。それ

でもみんなの安全のために力をふりしぼるジョン。その手に握ったマイクは、いつ雷が落ちてもおかしくないのに、彼の態度にはひとかけらの恐れもない。

「なにかで体を覆うんだ。どうにかみんなでこいつをやり過ごそうじゃないか！」

ヒーローの笑顔がジョンの顔に浮かんでいる。

朝は青空、お日様が輝いていた。人々はヒュー・ロムニーのがらがら声で目をさましたのだ。「ベッドで寝たまま朝食の時間だ。40万人分を用意したぜ！　健康にもいい食べ物を、これからみんなに配るよ。みんなで分けあって食べよう」。

スタンとヒューはこの計画を練って、当日カップ入りのグラノラをステージエリアの数千人に配った。自分たちのスポットを奪われては、と初日から動かずにいた若者たちは、なにも食べていなかったのだ。

スタン・ゴールドスタイン　ステージの真正面に陣取っていた連中は、他の人間に場所をとられないように、サンドイッチも買いに行かず、トイレにも行かず、まったく動かないで、そこにいたんだ。ひとりのレポーターがやってきて「どうだい調子は？」と訊くと「ごきげんにやってるよ」。「ここにどれぐらいいるの？」「もう2日間ずっと、さ」。「どこかへ食べにいったりしていないの？」「いいや。もうお腹ペコペコさ」。「2日間なにひとつ食べてないってことかい？」「ああ、腹がへって死にそうだよ」。するとこのレポーターは〝ステージ正面の子供たちは飢えきっていた〟なんて、おおげさに書き立てたんだ。本当は好きな音楽を聴くためなら10フィートだって動くもんかってことだったのに。

ホッグ・ファーマーたちは、平台のトラックに、買い立てのゴミバケツをプラスチック袋で覆い、その中にグラノラをつめ、バケツを荷台いっぱい積むと、トラックを群衆の中に乗り入れた。「ゴメンよ、トラックが通るから、わきによって道をあけてくれ！　食べ物を積んだトラックが通るぞ！」

スタン・ゴールドスタイン　僕は売店で、持ってきた食料が売り切れた連中に頼んで、使わずに残っている紙皿や紙コップをゆずってもらい、フリーキッチンまで運ぶのを手伝ってもらった。他の店からも寄附してもらい、あわせると15万個ぐらいの紙皿類が用意できた。

日曜日には、前の日よりふたつ、フード・フォー・ラヴのスタンドは少なくなっていた。バカ高い値段と延々と待たされることに腹を立てた子供たちとマザーファッカーズのメンバーが、土曜日の夜に火をつけて燃やしてしまったのだ。ホッグ・ファーマーたちが駆けつけて消火にあたり、被害はスタンド2軒ですんだ。日曜の朝、ステージからブレックファースト・コールをしたヒューは、みんなに助けを呼びかけた。

「あっちにひとり、可哀想な奴がいる。ハンバーガーを売ってる男だ。昨日の晩、火事でそいつのスタンドが燃えちまった。でもまだ少し残っているそうだから、資本主義は悪くないと思っている人間は、ハンバーガーを買いにいって、奴を助けてやってくれ！」。

日曜日になるころには、ウッドストックはひとつの生き方(ア・ウェイ・オブ・ライフ)のようになってきた。目の前には僕が期待していたとおりの光景があった。群衆の中のひとつひとつの顔が前から見なれた顔、子供の時から近所で一緒に遊んできた仲間たちの顔のように見える。なんでもしばらく見ていれば、その環境に適

CamScannerでスキャン

応していく人間本来の能力、というわけか。

誰もがひとまず自分の居場所を見つけて落ち着いた。食料不足やゴミ問題、これからまもなく起こる問題に対処せねばならない。まずは水漏れ箇所に修理できる人間を遣り、必要なトラックの出し入れをどうするか考えるとしよう。

一日の始まりは、ステージで誰かが吹いた調子っぱずれの起床ラッパ。そして朝のステージのハイライトはマックス・ヤスガーの登場だった。その週末中、僕は数回にわたり彼の家に足を運んでいたが、何度か狭心症の発作を起こし、その体調は思わしくなかった。バックステージに向かってやってくる姿を見た時は、メルも僕も正直〝こいつはマズイ！〟と顔を見合わせた。でもそれも束の間、少しやつれた顔にいつもの大きな笑顔が浮かび、〝オーケー、だいじょうぶ！〟と僕らは胸をなでおろした。

ミリアム・ヤスガー　彼は何が起きているのか見にいったわ。お礼の言葉が言いたかったんだわ。やさしいふるまいに感謝しているって、みんなに一言いいたかったのね。マックスは、帰ってくるなり言ったわ。「おまえ、あの上からどんな光景が見えたと思う？　そりゃとても信じられんものだったよ！」

僕は「ステージに上がって、なにか聴衆に一言いってくれよ」と頼んだ。「だってこんな素晴らしいウィークエンドを過ごせる土地を提供してくれた恩人の姿を、みんな一目見たいと思っているに違いないもの！」。そう言うと、彼は最初照れてモジモジと少しためらっていた。でも納得させるのに

CamScannerでスキャン

時間はかからなかった。チップがつきそってマイクの前まで彼を連れていった。そしてマックスは口を開いた。

「私はファーマーだ……」。みんな大喝采で迎えた。「一度に20人を相手にどうやって話したらいいのかわからんというのに、こんな大勢に向かって、私には皆目、見当もつかんよ」。

マックスはゆっくり言葉を選びながら、だがはっきりとした口調で続けた。眼鏡から見渡すかぎりどこまでもどこまでも広がる人波を遠くまで追いながら。

「これはこれまでの歴史上、ひとつの場所で人々がつどった最大の集まりだろう。そしてきみたちは世界に証明したんだ。たとえ50万人の若者が集まっても、一緒になれば3日間音楽を聴きながら楽しく過ごせるということを。ただ音楽と楽しさ、それだけでいいってことを。諸君たちに神様の祝福があらんことを！」。

ステージで熱い気持ちを感じながら語るマックス。その姿は感動的だった。〝歴史的な集まりだ〟と人々にメッセージを送る彼を見ながら、僕はこの瞬間まで僕らを運んできてくれた数々の奇蹟のような出会い、出来事を思いながら感謝の気持ちでいっぱい。胸の中がジンと熱くなった。

マックスはずっと僕らを味方してくれた。水道の水を瓶にいれてコンサート客たちに売っている人間がいると聞くと、彼は納屋に〝タダの水アリマス〟と大きなサインを出した。水だけでなく、彼は来る人たちに牛乳、チーズ、バターを与え、一緒にあげたいからと親戚にパンを焼いて持ってこさせもしていた。看護婦だったマックスの娘は医療テントにボランティアで参加してくれ、息子のサムも交通整理をかってでてくれた。

「世代のギャップなんて、なくさねばならんさ」、彼は取材に来た記者に語っていた。「そのために

は年上の連中も、もっと今以上の努力をしなければいけないよ」

ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・フレンズ

音楽をスタートする時間が来た。午後2時、ジョー・コッカーがステージに立つ。また無名のシンガーがスターに生まれかわろうとしている。グリース・バンドの伴奏で歌いだした彼はそのソウルフルなヴォーカルと、ユニークなステージ・アクションで聴衆を驚かせた。あの日、ジョー・コッカーはエア・ギターの創始者になったと言ってもいいのではないだろうか。あるいはエア・ギターの人気を決定的なものにしたと。グリース・バンドは最初ジョーぬきでゆったりとブルース・ジャムから演奏を始め、ジョーが登場するといつものレパートリーに取りかかる。ジョーは他人の歌をカバーしても、自分の歌にしてしまう天才だ。「ディア・ランドロード」、「フィーリン・オールライト」、「ジャスト・ライク・ア・ウーマン」、「アイ・ドント・ニード・ノー・ドクター」、「アイ・シャル・ビー・リリースト」。そして彼はアシュフォード&シンプソンのパンチの効いたヒット曲「レッツ・ゴー・ゲット・ストーンド」を彼のNY滞在の体験をアドリブでまじえながら、観客への応援歌のように歌い上げた。そしてフィナーレは、彼の代表曲になった「ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ」。その歌は見事にこの週末のすべての人々のことを言いあらわしていた。彼の吠えるような、表現力豊かなテイクは、ビートルズのオリジナル・テイクを遥かにしのぎ、この歌をジョー・コッカーその人の歌に変えてしまっていた。彼らの演奏が終わろうとしていた時、急に空は暗くなっていった。地獄の扉が開こうとしていた……。

ジョー・コッカー　あの日、バンドの中で俺だけがアシッドをやっていなかったんだ。そしてそのことを少し悔やんだっけか……。演奏が始まっても途中までは、これだけ大勢の人間に俺の歌が届いているのかって半信半疑の気分だった。でも「レッツ・ゴー・ゲット・ストーンド」で、ついにヒットした。みんなを立ち上がらせることができたんだ。みんなキマッていたせいもあるけどな。そして「ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ」を演りだして、曲が終わりに近づいてきた時、みんなの気持ちがひとつになり、俺たちはその巨大なかたまりを捕まえた！　って感じたんだ。俺たちが何をしているか、みんなが受けとめてくれたって、確かな手応えを感じたんだよ。それから誰かが「ジョー、肩ごしに見てみろよ！」って叫んだ時、その気分はこなごなに砕けちまった。見上げると、どでかいまっ黒な雲がどんどんこっちの方へ近づいているじゃないか。〝ああ、どうしよう。俺たちがあれを呼んでしまったのかい？〟って思ったものさ。

電気を切っておよそ20分ほどで、嵐のピークは過ぎていった。でも雨はやまないからすぐにコンサートを再開するわけにもいかない。けれど僕はみんなにサプライズを用意しておいたのだ。アーティと僕はステージに立って上空に飛行機が飛んでくるのを見ていた。そしてまもなく、空から花が何千と滝のように降ってきた。

ビル・ウォード（グラウンド・デザイナー）まだ暗く曇っていたけど、もう雨はやんでいたよ。すると小さな飛行機が頭の上に飛んできて、花が舞い落ちてきたんだ。何千という人が立って空を見上げていたよ。みんなポカンと口を開けたまま見ていたっけ。みんなびしょ濡れで、あたりは泥だらけ。そこで泥すべりで楽しみはじめたんだ。なだらかな丘がいくつもある牧場だったからね。服

CamScannerでスキャン

全裸だままの人もいれば、着ていない人もいた。走って勢いをつけて、ドスンとお尻を落とせば泥の中をスーッと滑っていくんだ。

グリール・マーカス（音楽ジャーナリスト）"ファック・ザ・レイン、ファック・ザ・レイン"と子供たちは叫んでいた。でも、雨は新しい楽しみ方を学ぶチャンスを与えてくれたんだ。不思議な自然の贈り物ってわけだ。どこからともなく彼らの時代の聖者たちが現れた。野外音楽堂の前で、黒人の少年と白人の少年が服を脱ぐと、泥と雨の中で踊りはじめたんだ。手をつないでグルグルと。するとたちまち、まわりの人々も加わって、輪は見る見る大きくなっていった。

雨を逃れてステージの下にもぐりこんでいたひとかたまりの聴衆の中に、ムーンファイアという名の、心やさしい魔法使いがいて福音の言葉をとなえていた。赤茶色の髪に、輝く眼の長身の男で、裸足で、長いローブの下には何も身につけていなかった。彼は恋人と一緒に旅してこのフェスティバルにやってきた、と言う。彼の恋人というのは一匹の山羊だった……。片隅に彼の荷物が積まれ、その上には人間の頭蓋骨、手に持った長い杖には"動物を食べてはいけない　動物を愛そう"と彼のメッセージが書かれたボードが吊るされていた。たばねた髪が豚のしっぽのようなアルバート・グロスマンも全身濡れネズミでそばに立っていた。ゆっくりとムーンファイアは彼に近づいていって福音の言葉を述べた。グロスマンはその言葉がとても気に入ったようだった。雨はつまり、人々に新しい出会いをくれるグッドタイムを意味していたんだ。

テン・イヤーズ・アフターはその日の朝、まだ薄暗い時間に会場に到着。ジョー・コッカーの後に演奏する予定だった。ジョーと彼らはイギリスですでに顔見知りだった。ステージはまだ濡れていて、

電源をまたオンにしても安全と確認できるまで、僕はもうしばらくショーの再開を待つことにした。ところがカントリー・ジョー&ザ・フィッシュが「電気がなくてもできるから演らせてくれ！」と、騒ぎだした。嵐のおかげでスケジュールはガタガタ、かなり遅れていたが、まだステージの上は水びたし。これを片付けるにはもう少し時間が必要だった。ステージ係もまだ電源を戻すにはとても危険な状態で、マイクもアンプもセットできないと、ジョーたちにブレーキをかけた。だがジョー・マクドナルドとバリー・メルトンに〝ノー〟という答えは通用しなかった。「俺たちには電気は要らない！」と言ってステージに飛び出し、彼らはマイクもアンプも使わず、ウクレレとパーカッション、ドラムだけのアコースティック・セットで演奏を始めてしまった。

ジョイス・ミッチェル　カントリー・ジョーがやってきて言った。「もうたくさんだ。若い奴らが雨の中、泥の中で待ってるんだ。俺たちは彼らのために演奏するぜ！」。それで彼らはそのとおりにしたわ。わたしの目には、彼はビッグ・ヒーローに見えたわ。彼のしたことにどんなに感動したか、言葉ではうまく言えないわ。

カントリー・ジョー・マクドナルド　電気が切られて、若い連中は退屈しきっていた。それまでたくさんのデモでも演っていたから、アンプなしでも音を出せばみんなが応えてくれるって俺たちは知っていたんだ。気がつくと鍋やフライパンを叩いて、アジプロ劇のようなことをしていたよ。「雨よ、やめ！」ってカウベルを叩きながらチャントしていたら、オーディエンスもそれに加わって盛り上がったよ。それからみんなに飲み物を回そうって思いついた。それですごくうまくいっていたんだ。ところがフィッシュのリード・ギターのバリー・メルトンがアルミ缶のビールを2ケー

CamScannerでスキャン

ス持ってきて、客席に向かって投げ始めたらひとりの客の頭に当たっちまった。すると彼らはいっせいに俺たちに向かって物を放りだしたんだ。

グリール・マーカス フィッシュは演奏を続け、ジョーは上機嫌でニコニコ笑いっぱなし。彼らはまるで勇敢なロデオの道化師みたいだったな。ちょうど乗り手が落ちて、牛が襲いかかろうとしてる、そのピットの真ん中に駆けこんできた……みたいなね。

カントリー・ジョー・マクドナルド 俺は完全に自分の家にいる気分だった。素晴らしく自由なスペースだったんだ。1969年のカウンターカルチャーはホッとできるような場所を持っていなかったしな。髪の毛を伸ばしているだけで嫌われたり、ロッカーやヒッピーはそれだけで逮捕されたりしたんだ。だからそんなことにビクビクしないで、のびのびできるあの環境は本当に新鮮で嬉しかったよ。それでつい、俺はわが物顔で振る舞っちまったってわけだ。

ビール缶だけでなく、バリーとバンドはオレンジやシャンパンの瓶を客席に回していた。そして午後6時半、ついにまた太陽が顔を出し、僕たちは電源を回復した。すでに去っていった人たちもいたが、残った人たちは嵐で逆に元気になっていたみたいだった。フィッシュはプラグイン。いつものセットのとおり、アップビートの「ロック&ソウル・ミュージック」をリプリーズ。彼らの演奏が終わる頃には、夕闇が訪れ、テン・イヤーズ・アフターはもうステージに来ていて、彼らのアンプ機材がセットされるのを待っていた。ギタリストでヴォーカルのアルヴィン・リーは元気いっぱい、もういつでも始められるという様子だった。

CamScannerでスキャン

レオ・ライオンズ（テン・イヤーズ・アフター、ベーシスト）僕らはミズーリ州セントルイスでギグをやって朝の6時に会場に着いた。僕は何も食べていなくて、楽屋エリアに様子を見に行くと、ピート・タウンゼントがやって来て、「ふたをしていない容器のものを食べたり、飲んだりするなよ。アシッドを入れられてるぞ」と言うじゃないか。でも結局、最後の晩にはとばされていたよ。とってもすごい効きのやつだった。

雨がやんだらすぐに演奏する予定だったのにカントリー・ジョー&ザ・フィッシュが僕らを追いぬいて、ステージではねまわっていた。あんまり長いこと待たされたんで、もうすぐにでも演奏したかったよ。そしてとっとと抜け出したかったんだ。チューニングがうまくいかなかったな。最初の曲が終わると、演奏をしばらくやめてチューニングしなおしたんだけど、オーディエンスは辛抱強く待っていてくれた。素晴らしい客たちだったよ。

午後8時、アルヴィン・リーはブルージーな「スプーンフル」で演奏をはじめ、「グッド・モーニング、リトル・スクールガール」の長い演奏に入っていった。そして2時間のセットは長いインプロヴィゼーションの「アイム・ゴーイング・ホーム」で終わった。「アイム・ゴーイング・ホーム」は初期のいろんなロックンロール・ソングを下敷きにした曲で、アルヴィン・リーはギタリストとしての才能を存分に発揮していた。彼は誰かから渡された西瓜をかついでステージを去っていった。

日曜の午後にはアイアン・バタフライも出演する予定だったが、ジョン・モリスが僕に知らせてくれたのは、ギリギリの時間に彼らのエージェントから「NYCにいるからヘリコプターで迎えに来て

くれ、と電話があった」とのこと。「エージェントは迎えに来るのが当然という態度だったぜ」、とジョン。しかし、僕たちはいろんな問題で大忙し。それで僕は「こっちは問題で手いっぱいだから、もう、来なくていい、と言ってくれ」とジョンにエージェントへのメッセージを託したのだった。

リー・ドーマン（アイアン・バタフライ）二度、三度とホテルを出たり入ったりして、33丁目のヘリポートに向かったんだ。でも、ついにヘリコプターは来なかった。きっと腹をすかしている連中に食料を運ぶとか、もっと大事な用事があったんだろう。でもあそこで「イン・ア・ガダ・ダ・ヴィダ」を演っていたら最高だったろうな。

森の隠遁者たち現る――ザ・バンド登場

次の出演はザ・バンド。彼らの演奏はとても楽しみだった。リック・ダンコとリチャード・マニュエルはウッドストックの町で仲良しになっていた。そんなわけでリックは早めに会場に来て、みんなと楽しくやっていたが、残りのメンバーは嵐の前に姿を見せ、会場の人波に驚いていた。モニターが思いどおりにはならなくて、少しいらだっていた。自分たちの音を大事にする彼らにとっては、これはいつもの彼らの水準に比べて、「はるかにゆるいものになりそうだ」と少しあきらめ顔。しかし、フェスティバル会場は彼らの家のすぐそば。まあ「気楽にやろうぜ！」ということになった。

ロビー・ロバートソン（ザ・バンドのギタリスト&ソングライター）アーティストやマネージャーやレコード会社の関係者、他ありとあらゆる種類の人間たちが集まっている場所があったんだ。ま

るでフェリーニの映画のシーンだったな。とてもカラフルなジプシー・キャラバンみたいだった。

彼らが演奏を始めると、ステージに集まっていたミュージシャンたちは食いいるような目で見つめていた。陽気な「チェスト・フィーバー」で始まり、リヴォン、リック、リチャードは代わる代わるリード・ヴォーカルをとりながら「ティアーズ・オブ・レイジ」、「ジス・ホイールズ・オン・ファイア」、「ザ・ウェイト」、など彼らのアルバム「ミュージック・フロム・ビッグ・ピンク」からのナンバーを次々披露してくれた。また何曲か、次の数年レコードにもされなかった曲を演奏していた。彼らの演奏は素晴らしい、と僕は思った。しかし、その音楽はとても繊細で、陰影に富んだものだったから、彼らにとっては意味があっても、会場にひしめいていた大勢の子供たちには、理解しにくいものだったのかもしれない。

ロビー・ロバートソン　3日間、さんざん音楽漬け、悪天候にいじめられてきた人々の気分をキャッチするのはなかなか難しかった。僕らはこういう感じが合うのじゃないかと、スローで、どこか不気味なマウンテン・ミュージックを演った。僕らは考えたんだ、〝こいつらみんな、大変な思いをして頑張ってきたんだから、少しスピリチュアルな気分を送ってあげよう〟って。「ロング・ブラック・ヴェール」、「ザ・ウェイト」、それに演った他のすべての曲にどこかそういう荘厳なムードがあった。テンポの早い曲にもあったよ。だけど演奏の途中で思ったね。〝しまった。ここはこういう音楽に合った場所なのか？〟って。客席を見ると、子供たちはなんだか不思議なものを見てるみたいな目で僕らを見ていたよ。あそこではいつも俺たちが居間で演奏してる、そのまんまのスタイルで演ったんだ。でも、なんだか俺たちは嵐の中に迷いこんだ孤児みたいな気分だった（笑）。

ザ・バンドのステージが終わると、次のジョニー・ウィンターの出番に僕らはすっかりセット・チェンジしなければならなかった。あのターンテーブルが壊れていなかったら、こんな時にどんなに役立っただろう。もう真夜中を過ぎてあたりは涼しくなってきていた。そしてそれからの一時間、ウィンターは見事なスライド・プレイでテキサス・ブルースとR&Bのミックス、初期のロックンロールの名曲を演奏し、会場を熱くしてくれた。そして最後はチャック・ベリーの「ジョニー・B・グッド」で小気味よくセットを締めくくった。

次のアクトにも大がかりな機材変換が必要だった。ブラッド・スウェット&ティアーズ（BS&T）はホーン・セクションまじりの8人編成のジャズ・ロック・グループ。ドラマーのボビー・コロンビーが叩くビートに乗って、彼らは「ユーヴ・メイド・ミー・ソー・ベリー・ハッピー」と「スピニング・ホイール」のA・B面シングルの2曲を大ヒットさせていた。彼らのセットのハイライト「アンド・ウェン・アイ・ダイ」も、会場の盛り上がりからしても、次のヒットになることは間違いなかった。

グリール・マーカス 日曜日の夜のステージの上のシーンは、なかなか興味深いものだった。たくさんのグループが入れ代わり立ち代わり、セットアップし、演奏し、そこにたまって、ザ・バンドやBS&T、ポール・バターフィールドなど、次のグループの演奏をチェックしていた。その晩のキングは、長い活動歴、音楽性の高さからみても、ザ・バンドであることは間違いなかった。観客にとってはどうだったかとしても、少なくともそこにいたミュージシャンたちにとってはそうだっ

たのだ。ヘルム、ダンコ、ロバートソンたちがアンプに腰かけてジョニー・ウィンターの演奏を聴いていると、そこに新旧のスターたちが次々やってきて挨拶したり、自己紹介をしたり、彼らの音楽へのリスペクトの言葉を口にしていたのだ。BS&Tのカナダ出身の若いリード・シンガー、デヴィッド・クレイトン・トーマスは、嬉しくてたまらないという様子で、満面の笑顔。メンバーのひとりひとりに握手していた。いま上り坂で、国内の他のどんなグループよりも多くのレコードを売り、フェスティバルの観客をザ・バンドよりはるかに沸かせていたのに……。それでもトーマスはビッグ・ピンクの男たちを前に、まるで借りてきた猫のように小さくなっていたのだ。そう、歴史の中から生まれてきた本物の音楽を演奏できるのは誰か、彼は知っていたのだろう。

真夜中の必殺ハーモニー、CSN&Y、荒野の50万人を魅了

ミュージシャン、ジャーナリスト、その他たくさんの人間がステージにかたまって、次のグループの登場を熱い期待の表情で待っていた。そう、クロスビー、スティルス、ナッシュ&ヤング（CSN&Y）。ニール・ヤングはまだグループに加わったばかりで、彼らもその前日にシカゴで初めてのライブを演ったばかりだった。僕たちはみんなあのデビュー・アルバムの曲を生で聴けるのを楽しみにしていたのだ。

グラハム・ナッシュ　ヘリコプターを降りると、ジョン・セバスチャンが僕らを出迎えてくれたよ。一本火をつけて、セバスチャンのテントでパーティをしたんだけど、彼の足は泥だらけ。雨と泥の中でどんな状態だったかを、情景が目に浮かぶように話してくれた。バックステージは混乱してめ

ちゃくちゃだったっけ。観客は恐くはなかったけど、僕らを見ている他のミュージシャンたちの目が気になったね。僕とスティーヴンはヘンドリックス、ザ・バンド、BS&Tがいるのに、ちょっとビビったね。ニールは僕らと演ることにビビっていたと思うな（笑）。

デヴィッド・クロスビー　いやあ、恐かったなんてもんじゃなかったよ、あれは。俺たちが始めようとあたりを見たら、後ろには俺たちが普段からリスペクトしている音楽業界のすべての連中が輪になって見ているんだものな。みんな興味しんしんって感じでさ。だってあれはまだ人前で演る、たった2回目のギグで、誰もまだ生のステージは見たことがない。俺たちは〝通りの新顔ども〟ってわけさ。レコードはもうみんなチェックずみで、〝こいつらいったい何をやるんだ?〟って感じだったんだろう。それで、俺たちの出番らしいって聞いて、みんなやってきて、ステージの後ろにずらり。あれでビビらなかったらどうかしてるよ。ヘンドリックス、ロビー・ロバートソン、リヴォン・ヘルム、グレース・スリックにポール・カントナー……よく知っている仲間もいれば、知らない連中もずらりと並んでいたよ。

あとフェスティバルでおぼえているのは、ロッキーって友だちが、わざわざフェスティバルに持ってきてくれた極上のコロンビア・ゴールド。あれは俺たちを最高の気分にしてくれたっけ。

午前3時半、まずグラハム、スティーヴンとデヴィッドの3人がステージに現れ、彼らのセットを演った。続いてニール・ヤング、ベースのグレッグ・リーヴス、ドラムのダラス・テイラーが加わった。スティルスとヤングはバッファロー・スプリングフィールド時代からのレパートリー「ミスター・ソウル」の息を飲むようなアコースティック・バージョンの演奏をしてくれた。観客とバックス

CamScannerでスキャン

われることになった。
イト曲が飛びだしたのだ。かくしてこの曲は映画『ウッドストック』のオープニング・トラックに使
テージの全員を夢中にさせたのは、「ロング・タイム・ゴーン」。またしてもフェスティバルのハイラ

グリール・マーカス　CSN&Yの演奏は、音楽の持つあやしく、またまばゆい魅力を見事に証明するものだった。こんな不思議なパワーを持った演奏を他のどこで聴けただろう。僕はあの時そう思った。このフェスティバルの力そのものがあの演奏を可能にしたのだ、とも。そしてクロスビーと仲間たちは、祭りの終りへと僕たちを導いていった。

グラハム・ナッシュ　おそまつなセットをやっちまったって僕は思った。だって40万人を相手に、アコースティック・ギターで「グウィニヴィア」なんて曲を演って、客席の後ろまで届くと思うかい？　そんなのとても無理だよ。でも、まあ頑張って、みんなに喜んでもらえた。「青い眼のジュディ」がちょっと音程が狂っていたって？　それがなんだっていうんだ？

デヴィッド・クロスビー　神様ありがとう。俺たちはうまく演れたよ。そばでポールやグレース、ジェリー・ガルシア、俺のいいダチたちや、たくさんの仲間たちが聴いていてくれて、みんなが興奮して「ワウ、やったね！　サイコーだ！」って喜んでくれた。みんなが気に入ってくれた。だよね？　「青い眼のジュディ」を好きにならない奴なんてどこにいるんだい？

ウッドストックの町で仲良くなったもう一人の友人、ポール・バターフィールドが次の出演者だっ

た。彼のビッグ・アンサンブルのセッティングが完了したのは、もう午前6時をまわった頃だったろうか。ポールはシカゴ出身の偉大なハーモニカ・プレイヤーでヴォーカリストだ。「ボーン・アンダー・ア・バッド・サイン」、「ドリフティン・アンド・ドリフティン」、「オール・イン・ア・デイ」。ブルースを演りはじめれば、何時間でも……もう止まらなかった。ホットなホーン・セクションにはサックスフォン奏者のデヴィッド・サンボーン、ギタリストはバジー・フェルトン。バンド・メンバーには町で見かけた顔がいくつもあった。

だけど、もうクルーはヘトヘト。それでもみんななんとか力をふりしぼって頑張っていた。すり鉢状のスペースからは、どんどん人々の姿が消えていた。50万人の人間が一度に去れば、どんな悲惨なことになっていただろう。それを思うと、これは逆に喜ぶべきことだった。最後を派手に締めくくることより、成り行きにまかせ、このまま大きなため息のように、ゆっくりと消えていくほうが懸命だと僕は思った。

日曜の午後に会場に現れてから、12人のコロンビア大学の学生バンド、シャ・ナ・ナは不安気な様子で、延々と自分たちの出番が来るのを待っていた。〝自分たちの30分間の出演は、もしかするとなくなるのかもしれない〟と心配していたのだ。午前7時半、金色のラメのシャツ、DAヘアカットでキメてステージに飛び出すと、彼らは「ゲット・ア・ジョブ」、「ティーン・エンジェル」、「デューク・オブ・アール」など初期のロック・スタンダード曲を立て続けに歌い、踊った。彼らの熱くエネルギッシュなパフォーマンスは、半分眠りかけていたオーディエンスの目をさましてくれた。ジミ・ヘンドリックスの撮影の準備をしていたマイケル・ワドレーと彼のクルーは、これを見て慌てて彼ら

CamScannerでスキャン

ク」「アット・ザ・ホップ」他何曲かの演奏をフィルムに収めた。

ジョンコ・マルセリーノ（シャ・ナ・ナ）アーティスト・パビリオンで僕らは信じられないようなスターたちと話をすることができた。僕たちなんかただのヒヨッ子だっていうのに、みんなやさしく、ていねいな態度で接してくれた。演奏なんかろくにできないし、こっそりしのびこんできたみたいな僕たちにだよ！ 僕はポール・バターフィールドのファンだったけれど、あの日は嫌いだった。だって延々と演って、ちっとも終わろうとしないんだもの。そしてやっと僕らの出番が回ってきた。ジミ・ヘンの前だぜ。その頃には会場はもう難民キャンプさ。ほとんどの客がいなくなっていたよ。あの後、何年かして僕はひとりの男と会ったんだ。彼は前の晩からトリップして、いつのまにか眠ってしまい僕らの演奏で目をさまし、何がなんだかわからなかったけど、また楽しくなって「おかげで素晴らしいトリップができたよ」って言ってくれたんだ。

星条旗よ永遠なれ——ウッドストック讃歌

ジミ・ヘンドリックスは日曜日のお昼すぎに到着した。僕はバックステージで彼とマネージャーのマイケル・ジェフリーに会い、「できれば真夜中に出演してもらえないか」と頼んだ。なにしろすべてのスケジュールが遅れていたからだ。けれどジェフリーの答えはノー。何時になろうと、ジミはトリでやらせると言いはった。ジミのニュー・グループはまだ一緒に演りはじめたばかりで、彼らはウエスト・ショーカンのジミの家に泊まりこんで、ウッドストックでどんな曲を演ろうかと相談しながら、リハーサルをしていた。

僕はあらかじめ借りておいたバックステージそばのコテージに彼らを案内し、そこで待ってもらった。あいだに時々ジミはステージやアーティスト・パビリオンに顔を出していた。夕方には、もうこのままだとジミの出番は翌日の早朝になることがわかったので、ジミの気が変わって真夜中の出演をオーケーしてはくれないかと訊くことにした。それでもジェフリーは彼のセットがトリだ、と僕の要求をつっぱねた。

そしてついに、月曜日の朝8時半、ヘンドリックスとバンドはステージに向かった。たった4万人そこそこの客しか残っていないことも彼は気にしていない様子だった。その朝の彼の演奏は2時間。それまでの彼の最長のセットになった。ベースがビリー・コックス、ジュマ・サルタンとジェリー・ヴェレスがパーカッション、リズム・ギターがラリー・リー、そしてミッチ・ミッチェルがドラムス

──彼は新しいグループの紹介から始めた。

「俺たちはしばらくみんなをブッとばしてきたけれど、エクスペリエンスには少々飽きてきたんだ。それですべて変えちまおうと決めて、このバンドを演りだしたんだ。名前はジプシー・サン&レインボーズ。……まだ2回リハーサルしただけ、主にリズムのあるのを演っただけさ。でもこいつは新しく昇るお日さまの最初の光りだ。まずは、大地、つまりリズムから始めてみよう。いいかい?」

白いストラトキャスターをチューニングすると、彼は「メッセージ・トゥ・ラヴ」を、続いて「ヒア・マイ・トレイン・カミン」を弾きはじめた。バンドはインプロヴィゼーションにはおあつらえ向きで、どの曲も長いジャムになっていった。この朝のジミは、たとえ「フォクシー・レディ」を演っていても、どこか静かな雰囲気があった。カーティス・メイフィールドの「ジプシー・ウーマン」他

CamScannerでスキャン

何曲かではラリー・リーがリード・ヴォーカルで歌った。リーもジミも何回もチューニングをやり直し、ある時は「次はとても短いキーの外れた曲を演るぜ」とジョークをとばした。

この週末の間、ミュージシャン、クルー、友人たちで混みあっていた巨大なステージの上は、今はもう人影もまばらでガランとしていた。頭に赤いスカーフを巻き、ビーズをつけて、房のついた白いレザー・ジャケットを着たジミは、瞑想中の神秘的な聖者のように見えた。目を閉じ、頭を後ろにそらせ、彼は自分の音楽と一体になっていた。バンドのメンバーに囲まれてはいたが、彼はひとりだけでいるように見えた。

そして彼がアメリカ国歌を弾きはじめると、それまであちこち泥の中で疲れきって寝転んでいたオーディエンスが起き上がり、ステージの前に集まりはじめた。この3日間ほとんど眠らずにいた僕たちも、ジミのこの曲で目をさまし、そして気持ちが高揚していくのを感じた。この擦り切れるほど聴いてきたメロディ。1分ほどコードを弾いたと思うと、彼はフィードバックとディストーションで、大気を揺さぶるほどの爆撃を開始した。それは素晴らしかった。この国への喜びと愛のメッセージ、と同時に〝アメリカをずたずたに引き裂いている対立と混沌を理解しようぜ〟、とジミのギターは僕らに呼びかけていた。

ローズ・ペイン　彼があの曲を弾きだした時、私はバッド・トリッパーたちのテントで、若者たちの看護をしているところだった。その瞬間、すべてのものが動きを止めた。もし、それまでに誰かが「星条旗よ永遠なれ」なんて演ろうものなら、私たちはみんなでブーイングしたわよ。でもあの

時からあれは私たちの歌になったのよ。

トム・ロウ（ホッグ・ファーム）僕はステージの正面に立って、彼を見ていた。他にそうしている人間はほとんどいなかったよ。あの音楽、あの曲で、僕は彼がフェスティバル最良の詩人だって思った。まるで野獣の心臓の中に連れていかれ、釘をぶちこんだって感じだった。

グラハム・ナッシュ　ヘンドリックスはよかった。彼のもっといい演奏を聴いていたけれど、「星条旗よ永遠なれ」はすごかった。あれはロックンロールがもっともクリエイティブな輝きを放った2分間として、永遠に残るだろうな。

メル・ロレンス　ジミ・ヘンドリックスで目がさめた。僕は丘の上のトレイラーにいたんだ。下の方を見ると会場はゴミの山とジミの音楽を背中に立ち去っていく人々……胸がつぶれるような光景だった。そしたら、あの「星条旗よ永遠なれ」が聴こえてきて、全身が震えだしたんだ。

ジミの演奏は「星条旗よ永遠なれ」から「紫のけむり（パープル・ヘイズ）」へと移っていった。僕は68年5月のマイアミでヘリコプターから降りてきた彼がガルフ・ストリームのステージで、その曲を演奏した時のことを思い出した。もう一年以上も前なのに、あの日がまるでつい昨日のように思えた。

月曜の朝、ジミは後に「ウッドストック・インプロヴィゼーション」と呼ばれるようになったインスト曲、そして不気味な曲調の「ヴィラノヴァ・ジャンクション」を演り、午前10時半「ヘイ・ジョ

――がすべてを締めくくった。

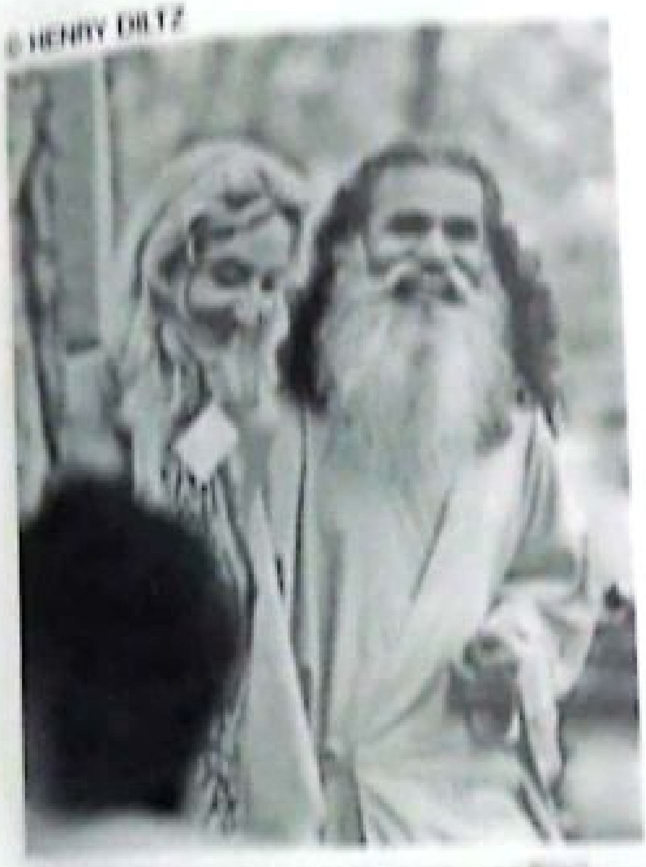
すべてが終わった。

永遠と思えた時間が今は、まばたきの一瞬のように思えた。それから何もかもが、もう同じではなくなっていったのだ。

© HENRY DILTZ

ショーのスタートはリッチー・ヘイヴンス

© HENRY DILTZ

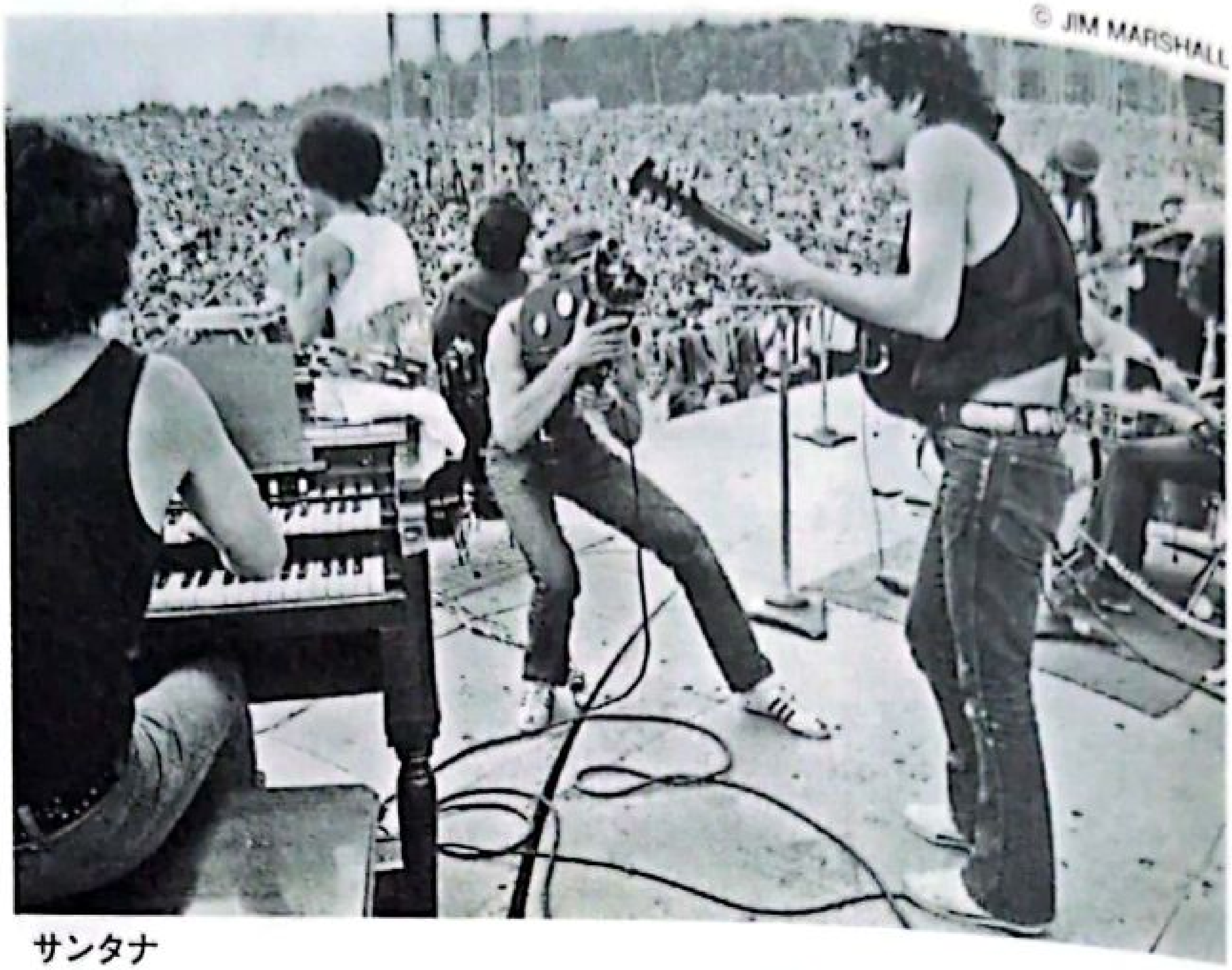


スワミ・サチダナンダと
信者たち到着（8月15日）

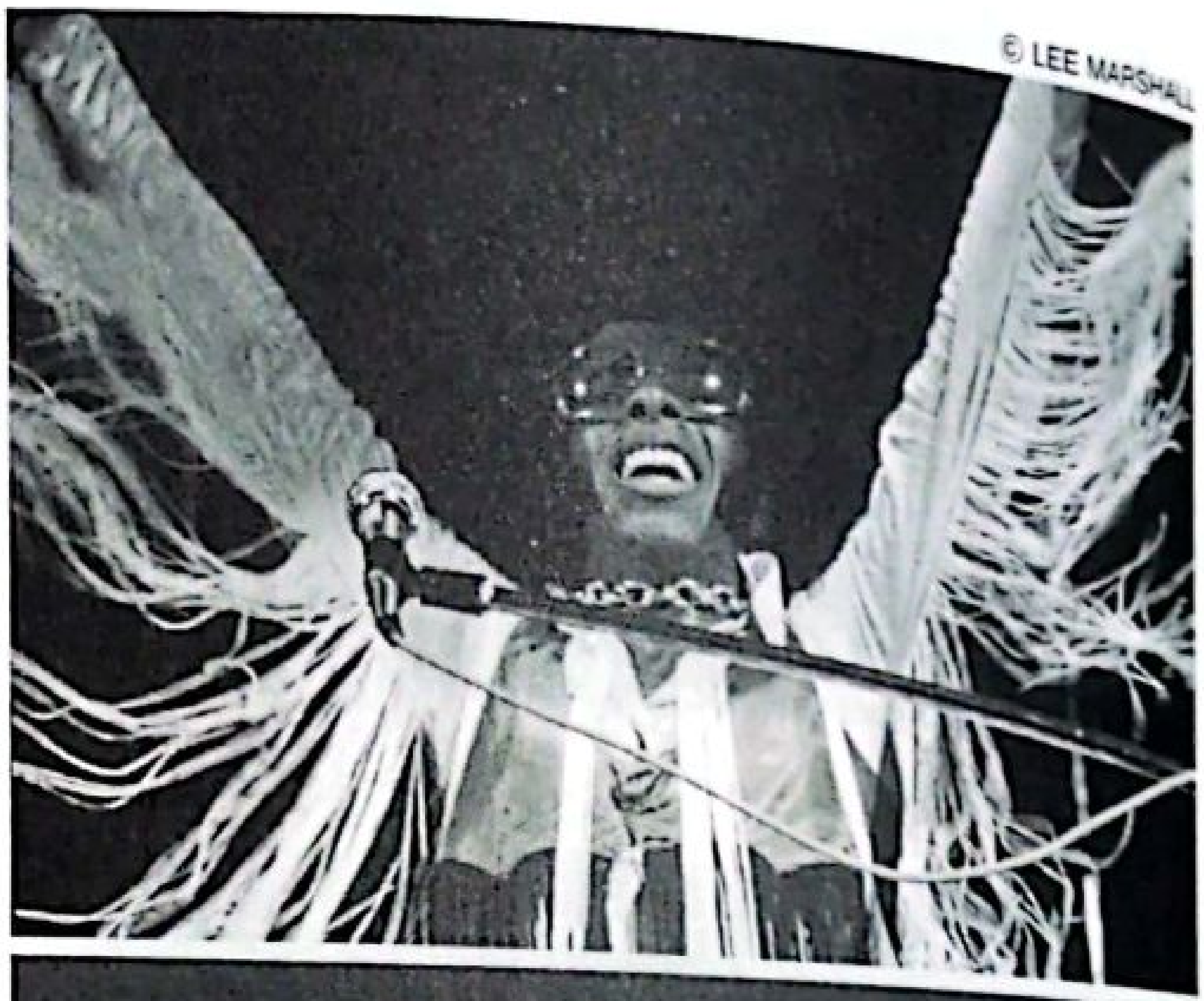
カントリー・
ジョー・
マクドナルド，
出演準備完了

© JIM MARSHALL

CamScannerでスキャン


© JIM MARSHALL

サンタナ


© LEE MARSHALL

スライ・ストーン

クロスビー、スティルス、
ナッシュ＆ヤング

© HENRY DILTZ

CamScannerでスキャン

© KEN REGAN

グレイトフル・デッド

© HENRY DILTZ

ザ・バンド

© HENRY DILTZ

ジャニス・ジョプリンとスヌーキー・フラワーズ

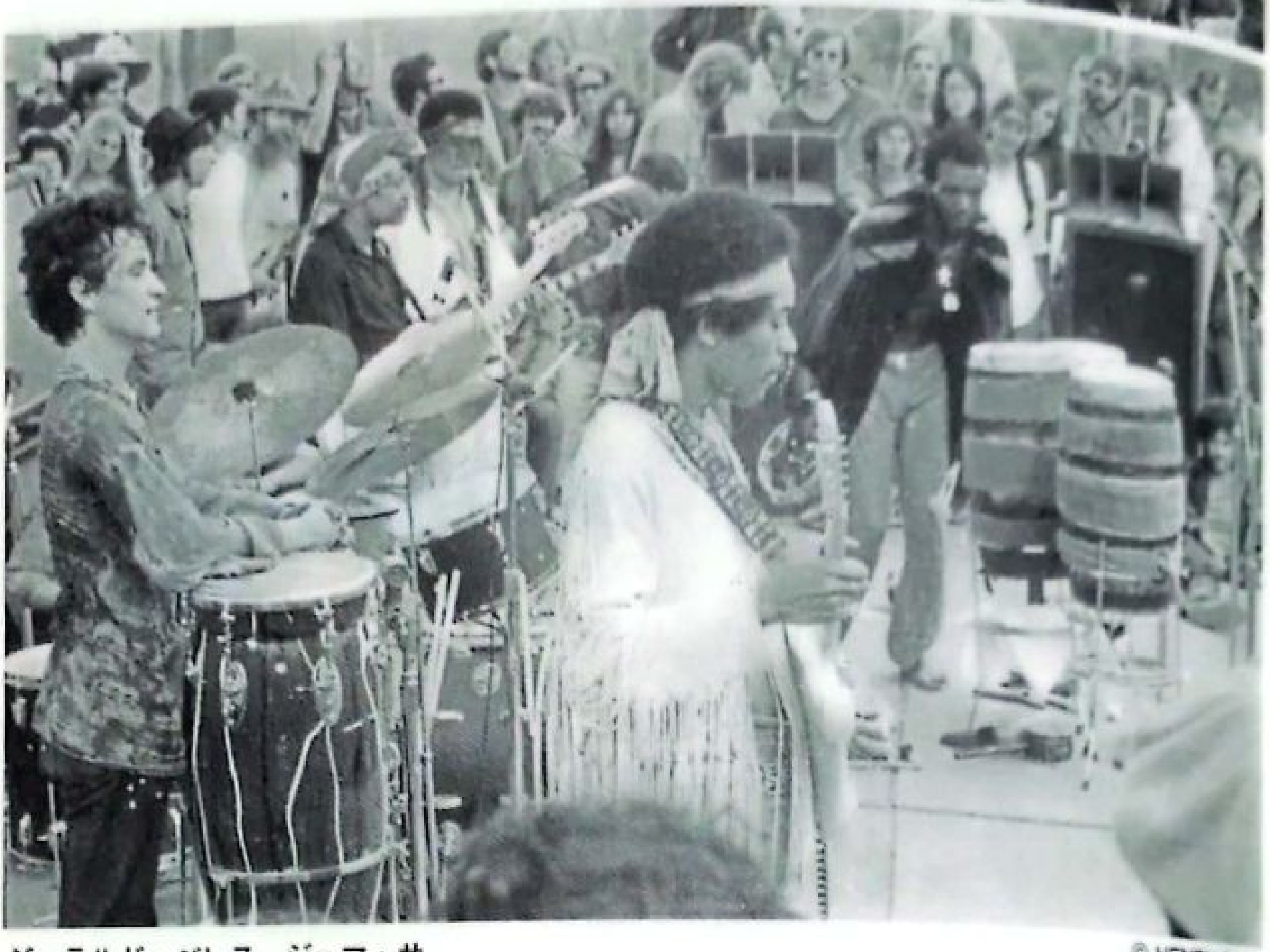
ザ・フー

© HENRY DILTZ

CamScannerでスキャン

© HENRY DILTZ

8月17日の会場風景



ジェラルド・ベレス、ジュマ・サルタン(パーカッション)、ラリー・リー(ギター)、ビリー・コックス(ベース)、ジミ・ヘンドリックス

© HENRY DILTZ

フェスティバル会場を視察するマックスとミリアム

© BILL EPPRIDGE

CamScannerでスキャン

第13章

The Aftermath

祭りの後

CamScannerでスキャン

8月18日、月曜日、午後1時、僕は今、この3週間を過ごしてきた土地を空から見おろしているところ。〝何マイルも何マイルも続く、まるで一枚のカーペットのような人の波〟——フェスティバルが最高潮の時に飛んできた人々は、口々にそう言っていたが、今、僕の目に映るのはずいぶんそれとは異なった光景だ。スウィートウォーターのメンバーのひとりは〝行けども行けどもそこは一面咲き乱れる野の花の草原〟なんて形容していたが、今、そこは行けども行けども続く泥の海だ。

ウォール街の銀行にいるジョン、ジョエル、アーティたちに会いに行かなくてはいけない。それを知ったヘリのパイロットのひとりが「お安い御用！」、とライドを提供してくれたのだ。

ヘリコプターが東に向きを変えた時、僕はステージの前の地面になにか不思議なものができているのに気づいた。大きなピース・マークだ！　脱ぎ捨てられた靴、泥だらけになった寝袋、毛布、Tシャツ、缶や瓶や紙や西瓜の皮……。それは会場に残って後片付けを手伝ってくれた若者たちが、集めたゴミで作ったピース・マークだったのだ。胸がキュンとなるのを感じながら、その時僕は思った。平和への願いを表すこのシンボル・マークが僕らのレガシーとして、この先も長く残るといい……。

瞼(まぶた)の奥に焼きついたその光景を何度も思い起こしながら、僕はマンハッタンへ、ノース・アメリカン銀行へと向かった。ウッドストックの世界を後にして、ウォール街？　いったいそこではどんな世界が僕を待っているのだろう？

ジョン、ジョエル、アーティと僕が一堂に会するのは木曜日以来のこと。財政面のあんまり楽しくない問題を協議するのだろうが、それがどんな楽しくないものなのか、僕には見当がつかない。フェスティバルが始まってから、財政問題が気になったのは、土曜日に現場本部に現れた銀行の集金車を空手で返した時だったが、それ以来今度が初めてだ。どんな問題であれ、きっと解決策は見つかるだろう。でもこの週末だけでジョンは一体何枚の小切手にサインしたのだろう？　そして前売り券の販

CamScannerでスキャン

売店からどれだけ集金できたのだろう……。

ジミ・ヘンドリックスが月曜の朝、2時間のセットを終えた時点で、フェスティバルはすべて終了した。すでに人々は日曜日から帰りだしていたので、州警察官、町のオマワリさん、ボランティアの消防隊員300人あまりが誘導して、あの金曜の渋滞騒ぎが嘘だったかのように、人も車の通行もスムーズに流れた。行きは恐いが帰りはヨイヨイ……？　行き先を書いたサインを掲げてヒッチハイクして帰る連中もいた。バス会社ショート・ラインはモンティチェロからNYCまでの直行臨時便を走らせた。新聞にはビックリするような帰り方をした若者たちの記事が載っていた。

「一台の57年型シヴォレーが、フェンダー、バンパー、フード、屋根の上に、なんと11人もの若者を乗せて走っていた。人の重さで車体は地面すれすれ、車は道の凸凹に差しかかるたびに大きな音を立てて、腹をこすっていた。記者は屋根の荷台に3人の若者を積んだニュージャージー・ナンバーのフォード・ステーション・ワゴンも目撃した」。

他の新聞にはフェス参加者を助けたホワイト・レイク住民のレポートが載っていた。

「お金も食べ物も、泊まる場所もない若者たちの姿を見て、心動かされたのだろう。自分たちの家を解放して彼らを泊めてあげた人々、そしてただで食べ物や飲み物を与えていた人々もいた。モンティチェロ警察は町の小さな公園を、ショート・ラインのバスを待つ人々の休憩所に開放していた」。

CamScannerでスキャン

バリー・ティアスデール（アンダーグラウンド・ビデオ作家）近所に息子をベトナムで亡くしたカップルがいたんだ。あの子供たちが食べる物もないと聞いたふたりは「あの子たちは腹をすかしているから、私たちがなんとかしてやらなきゃいかん！」と言って、ありったけのホットドッグを持って会場に出かけ、若い人たちに食べさせてあげていたよ。

クリスティーヌ・オリヴェイラ（フェスティバル参加者）月曜日の午後に会場を出た。でも地図もなくて、どの道を行けば家に戻れるのかわからなくて停まっていたら、町の人が「食べ物は十分にあるの？」と訊いて、サンドイッチを持ってきてくれたわ。

月曜日の朝、銀行でのミーティングに向かう前に、僕はすませられる仕事は片付けておこうと頑張っていた。メルとスタンは会場の清掃を指揮。マックスや他の農場主たちから借りた土地の修復には最低2週間、ざっと5万ドルかかると僕らは見積もった。周囲にはホッグ・ファームや他のコミューン仲間を含めて、おおよそ8000人がまだ残ってキャンプをしていた。たくさんの人間が会場のゴミ撤去に協力してくれたが、それでもあらかじめ確保していた作業員と合わせても、手は足りそうもない。そこでメルはボランティア募集を決め、まず近所のボーイ・スカウトに声をかけた。

メル・ロレンス（オペレーション・チーフ）清掃はとてもおもしろかった。近所20マイル四方の農園主から電話があって、彼らの納屋を片付けろと言うんだ。彼らの地所をきれいにする絶好のチャンスと思ったんだろうな。とりあえず集めたゴミ袋をいっぱい、最初のトラックに積みこんだ。も

う捨てていった寝袋や服がゴマンとあったね。

ペニー・ストーリングス（オペレーション・アシスタント）クリーンアップはそりゃ大変だったわ。みんながいなくなった会場は、まるでアンダーソンヴィル（南北戦争の戦場）、みたいだってメルは言ってた。グラウンドにはそこにいた人間たちの遺物を燃す煙が一面に上がっていたものよ。

ヘンリー・ディルツ（写真家）残されたのはゴミの山。食べかすを入れた袋や服、すべてが泥につかってグチャグチャ、ドロドロの状態で置き去りにされていた。まるで死体が転がっているみたいだった。ほら歴史博物館に展示されている昔の戦場写真で見るやつさ。野原に馬や、大砲や、死んだ兵隊の体が累々。あれはまさにそんな光景だったよ。

僕はスタッフ・メンバーをプロダクション・トレイラーに集め、財政的状況の見通しがつくまで、ギャラの支払いがすぐにできないことを説明しなければならなかった。その一方、記者たちは僕を取り囲み、質問攻めにした。ニューヨーク・タイムズの記者に僕らの財政的立場について尋ねられた僕は「得た金額より、はるかに多くの金を使った」と答えた。「大勢の人間が来て……その世話をしなければならなかったからね。その価値は十分にあったよ」と。タイムズの記者はその先をこう続けていた。

〝運営オフィスに使われていたトレイラーにはこの日、支払いを求める若い作業員たちがつめかけた。スポンサーたちが現金を得るまで、とりあえず「どうしても必要なものがあれば持っていってくれ」と彼らは言われた。そしてこの3日間の「分かちあいの精神」の習慣に沿うようにシャンペンや

煙草が振る舞われた。

会場の清掃とステージ等の解体が行われた次の3週間、スタンはベセルに留まった。彼は、地所や建物の損害、所有物の紛失等の被害、あるいはただゴミの撤去の要望があれば、とリクエスト用紙を作り、近くの家に配ってまわった。

スタン・ゴールドスタイン（キャンプ場世話役）熱くなった後の額の汗をふくために残ったんだ。自分たちの土地や家の芝生に、野蛮人たちが押しかけて甚大な被害を受けた、と声高に不幸を嘆く人たちがいた。かと思えば「わあ、きみたちは奇蹟を起こしたね。子供たちはみんな素晴らしい態度……どうやってあんなことができたんだい？」って感心している人たちもいた。もちろん地域で店をやっている人間、サービス業を営む人たちのほとんどは大喜びさ。それまで彼らはこんな短期間で、これほどたくさんの収益をあげたことなんてなかったんだ。

何人か裁判所に被害を訴える者もあり、その中にはこの週末レースを開く予定だったモンティチェロ・レースウェイの経営者からの訴えもあった。結局、訴訟は合計50件に上がったが、その大多数は訴えが却下されるか、裁判前に取り下げられた。フェスティバルの調査を開始せねば、と言い始める地元の政治家もいた。そのひとり、ニューバーグ出身の共和党下院議員、マーティン・マクニーリーはヘリコプターで会場を上空から視察して、「ヤスガー農場の丘から立ち上がる悪臭はこれから何年もサリバン・カウンティ住民の鼻腔を離れることはあるまい」と声明を発表し、その匂いを〝エジプト人たちの悪臭〟と喩（たと）えていた。

CamScannerでスキャン

ニューヨーク州の法務長官、ルイス・J・レクコウィッツは、NYCの高官からの要請に基づいて調査を開始すると言明。しかしレクコウィッツの関心はチケットを購入したが、会場に到りつけなかった人々への払い戻しをどうするのかということだった。けれどチケットは回収できなかったから、誰が来て、誰が来られなかったかを判断するなんて不可能な話だ。しばらく後に、ジョンとジョエルは払い戻し要求があった場合のために2万5000ドルを計上して、この問題にピリオドを打った。

みんなが会場の片付け作業を進めている間に、いろんな道具や機材がなくなっていった。これはおもに、僕たちが以前に「エリアに残されたどんな機材も持っていってかまわない」とホッグ・ファームに許可を与えていたからで、彼らはその通りにしたのだった。

ローズ・ペイン（社会活動家・フェスティバル参加者）ゴミの山を残してみんな帰っていったけど、フェスが終わっても私たちは何日か後まで残っていた。こうして私たちはステージに残っていた音響機材、印刷機、ジェネレーター、それに医療テントをちょうだいすることにしたの。ホッグ・ファームの連中はこまごましたものを集めていた。私はニューヨークの仲間に、いちばん大きなトラックをレンタルして、やってくるように頼んだ。また友だちに私の赤く小さなVWを運転してきてくれるように連絡を入れた。Uｰホール・トラックに医療テントとその一切合切を積みこみ、積みきれなかった小さな冷蔵庫はVWの後部に載せた。印刷機はレンタル・トラックに、とにかく目に見えるものはかたっぱしから全部、私たちは手に入れたのよ。トレイラーに取りつけてあったエアコンを持っていった奴もいた。私たちは印刷機をブラック・パンサー党にあげ、彼らはそれで機関誌を刷って発行したのよ。医療テントは、野外ベッドや薬品から何からすっかりブラック・パンサ

ーのフリー・クリニックに寄贈したわ。

ペニー・ストーリングス　わたしたちが借りていた建築道具をホッグ・ファームの人たちがバスに積みはじめたのを見て、「だめ、だめよ、そんなことしちゃ。来年にも必要なんだから！」とわたしは止めさせようとしたの。次の年も続いてフェスティバルはある、と思っていたのよ。あれからあちらこちらでいろんな種族の集まり（ギャザリング・オブ・トライブズ）も開かれるようになったし、この国の政治思想や哲学には大きな変化が訪れたと思う。でも、メルはわたしに向かって言ったわ。「なにを気にしているんだ？彼らに持って行かせてやれよ」って。みんなですべてを分けあう――それがヒッピー哲学ってわけ。でも、ジョンがその分の支払いをしなければいけないってわたしにはわかっていた。ジョンは素晴らしい人だったから、彼ならきっと次の夏も、お金を出してくれるんだろうって思っていたわ。

地元の役人たちの中にはフェスティバルで生じた混乱に怒る者もいたが、多くの人々は好意的な発言をしていた。サリバン・カウンティのシェリフ、ルイス・ラトナーは記者たちに「これまでにあんな礼儀正しい若者たちにお目にかかったことはない」と語り、他の警官は「われわれのパトロール・カーが泥にはまって動けなくなったら、近くにいたみんなが集まって、車ごとわれわれを泥から運び出してくれた。ここの警察官のほとんどが彼らの態度に感心していたよ」と証言していた。

緊急患者が出た場合の心配など、医療態勢には懸念する声も多かったが、ドクター・アブラッチは彼らのチームは木曜日からおよそ５０００人に治療を施したと最終報告書にまとめた。おおよそ、その半数が足の切り傷でテントに来たのだった。アブラッチ医師は彼らが扱った患者の数字を上げながら「この数字はおよそ人口30万人の都市で想定される数だろう」と語っていた。

ニューヨーク・タイムズは、僕らをあけすけに批判し、ジョンとジョエルを激怒させた。月曜日の社説は〝キャッツキルの悪夢〟という見出しで、高飛車な言いようだった。

このイベントの主催者たちは、これによってどんな混乱が生じるか、あらかじめ何の考慮もしていなかったことは明白であり、いずれその判断の甘さを釈明する機会を求められて然るべきであろう。面積600エイカーの農場に何十万人という人々をつめこんでおいて、急ごしらえの医療設備はしかも数えるほど。この事実ひとつとっても彼らの責任感の欠如はあきらかだろう。

タイムズの社説とは対称的に、マックスの言葉は僕らに寛容だった。月曜日の午後に彼は農場で記者会見を開き、集まった記者団にこう語った。

「若者たちは正直で、誠実で、みんな素晴らしい人間だった。彼らは〝僕たちはここにいる。これが僕たちの服装で、これが僕たちのモラル、これが僕たちの姿です〟、とはっきり言ったよ。この間、ひとつだって事件は起きなかった。あの子供たちは礼儀正しく、みんなですべてをシェアしていた。そしてわしの日を開いてくれたんだ。この国の人間すべてがこのことに気づくべきだろう。この週末にベセルで起きたこと、それはつまり、町の住人たちと若者たちが一緒になり、アクエリアン・フェスティバルを通じ、平和と善意と人間のやさしさ、その精神の輝かしい勝利を宣言した、ということなんだ」と。

一体全体、どれだけの人間がフェスティバルに参加したのか、確かに語れる者はひとりもいなかった。空中から撮影した写真から割り出した数は、およそ45万から50万。ホワイト・レイクの歴史家、チャーリー・フェルドマンは「70万人はいた。参加者の数は空撮写真から計算した数字だが、さらに

この数字以外に木の下で隠れていた人間がおよそ数千人はいただろう」、と語っていた。

ウォール・ストリートでの苦い時間

午後3時頃、ウォール街のヘリポートに到着した僕はめざす銀行の重役室へと急いだ。そして黒っぽいパネル貼りの大きな部屋へ跳びこむと、僕は仲間たちの姿を探した。たくさんの弁護士、銀行家、管財人たちが居並ぶ中で彼らを見つけるのは容易ではなかった。それでもやっと会長席のあたりに彼らの姿を見つけた。まわりには弁護士をしているジョンの兄のビリー、さらに何人かの弁護士タイプの人々、そしてずっと年長の老紳士——後で銀行の頭取とわかった——がいた。その部屋を最初首だけ突っこんでのぞいた時、僕に見えたのは壁一面の巨大な水槽だった。〝あの中の魚はもしかしてピラニア?〟、そう思った瞬間、僕は部屋に充満する恐れと怒りの匂いに圧倒されそうになった。

僕には知らせずに、アーティはこのミーティングに何人かの付き添いを連れてきていた。ウッドストックでまだストーンした状態だった時に、彼はアルバート・グロスマンとアーティと僕とパートナーシップに月曜日のこの集まりのことを漏らしていたのだ。ふたりはあきらかにアーティと僕とパートナーシップを組むことに興味を示したに違いない。アーティの話に儲け話の匂いを嗅ぎとったのだろう。ふたりは、ウッドストック・ベンチャーズのジョンとジョエルの持ち株を買い取る金を出してもいいと持ちかけたのだ。このフェスティバルを撮影したフィルムがこれからどれだけの金を産み出すか、彼らは直感的に理解し、その利益を手にするためにはこの大きな価値を持つ会社名が必要だとふんだのだ。

アーティ・リップ　私は戸棚に隠れたラビ（ユダヤ教聖職者）みたいな存在だった。どうやったら

みんなことができるのか。このあといったいどんなチャンスをものにできるのか？　なんてドキドキしながら考えていたものさ。大体、この乗っとり計画自体がノルマンディ上陸作戦みたいなものだ。でも私はこの業界で大勢のビッグネーム・アーティストを動かし、思いのままに事をあやつれるパワフル・プレイヤー、アルバート・グロスマンと親しい友人関係にあった。こうしてウッドストックからアーティ・コーンフェルドと一緒にヘリコプターで飛び、ウォール街に着くと、銀行の会長室に乗りこんでいったんだ。するとそこには壁に毛沢東の写真を飾り、オフィスにピラニアの入った水槽を置いている変てこな奴がいた。どう見ても、この男は前に一度、断崖から跳びおりるような経験をした奴だ、と私の目には映った。彼は自分でも、「私は型にはまった考え方はしない人間だ。左といわれたら右、右といわれたら左、絶対に真ん中でバランスを取ろうなんて思わんのだ」なんて得意気にしゃべるんだ。……ウォール街を牛耳っているのは、こんな変ちくりんなジジイたちなのか、と不思議な気持ちになったものだよ。

アーティ・コーンフェルド　僕はアーティ・リップと会議に乗りこんだ。ちょうど銀行家が水槽のピラニアに餌の肉をやっているところだった。ビューティフルな体験をしたばかりだっていうのに、僕の目の前には大嫌いな資本主義社会のすべてが並んでいたんだ。

会議はその朝の9時からずっと続いていた。ジョンは週末中ずっと、なんとかテレフォン・ビルに到りついた人間たちに次から次へと小切手を書いて渡していたのだった。そして今、彼と彼のファミリーはそれらの小切手が不渡りにならぬように銀行に百万ドルを超える保証をしなければならなかった。もうひとつの選択肢はウッドストック・ベンチャーズが破産宣告することだった。銀行の役員た

ちは、木曜日まですべての小切手に対する支払いを凍結するから、その日までにその金額を全額振りこむなり、なんらかの形で補塡してほしいと言う。会議では、なにひとつ財政のはっきりした絵は見えてこなかった。というより、誰ひとり僕にその見取り図を見せようとする人間はいなかった。少なくとも4人でそろってテーブルを囲み、置かれている状況を把握し、可能な解決策をいろんな角度から協議できるだろうと考えていたのだが……。

だが、僕たちに財産がないわけではなかった。僕らはまずたくさんの善意を産み出していた。そしておそらく歴史的とも呼べるだろうこのイベントのフィルムとそのすべてをレコーディングしたテープを持っていた。しかし、ジョンの兄、ロバーツ・ファミリーを代表するビリーは彼らが実質的にウッドストック・ベンチャーズを占有していると主張し、ジョンをバックアップしてきたという優位な立場を理由に、これから先はロバーツ一族が僕らを破産地獄から救出してやろうと、お情けモードの救済案をちらつかす。彼らにはこの先僕らのパートナーシップが続くことにはこれっぽっちの興味もないのだと、僕はその時やっと気づいた。僕がヘリポートに到着する前から、すべては決まっていたのだ。

それでも、この先ジョンがどんな苛酷な立場に立つのか、僕は考えずにはいられなかった。彼とジョエルは、ウッドストックでアーティと僕がしたような素晴らしい体験をなにひとつできなかった……、そのことを思うと、僕の胸は疼いた。どんな理由があったにしても、彼らはあの3日間、ホワイト・レイクのテレフォン・ビルに閉じこもったまま、惨めな思いで過ごし、今は僕らの支払いのために家族に忠誠を誓わなければならないのだ。

もちろん僕にも、アーティにも、ジョエルにも自分たちの持ち株を買い取るお金はなかった。僕にはまた、ずっと自分の片腕だったジョエルの立場を思うジョンのつらい気持ちが痛いほどにわかった。

CamScannerでスキャン

ロバーツ一族はジョエルをまったくのよそもの、あるいはそれ以下、単なるゴロつきくらいにしか考えていなかった。

ジョンとジョエルはフェスティバルを無料で人々に開放せざるをえなくなった時点から、激しく落ちこみ、すさんだ気持ちを怒りと憎しみの言葉にして、僕とアーティにぶつけてきたのだ。ジョンのファミリーも同じように僕らに敵意をあらわにしていた。ジョエルに対しては、おまえなど何者か、という態度。こうして事態はいきなり彼ら対僕らの戦いになっていった。僕らはもう少したくさんの情報を得た上で、再度交渉の席に着くことに同意した。

この日、泥沼と化した町にはひとかけらの喜びもなかった。

リー・マックラー・ブルマー（セキュリティ・アシスタント）会議から戻ってきたらジョンとジョエルはふたりとも困惑しきった表情をしていた。ジョンの父親が「保釈金を積んでやる」とでも言ったからだろう。後になってジョンは「もうこの先二度とあのロゴも、何ひとつウッドストックの名を冠して使うことができなくなった」と言っていた。ジョン・ロバーツは父親が生きている間、誰にもあの登録商標は渡さないと誓約したのだ。父親はウッドストックが一族の名前を汚したと考えたんだわ。私が思うに、ジョンの兄さんはずいぶん後になって、やっとあれが偉大な文化的出来事だったこと、そしてジョンがそこで大きな役割を果たしたことに気づいたのよ。けれどジョンの親父さんは死ぬまでウッドストックに関して、ジョンを許そうとはしなかったんだわ。

その後の様子がどうなったかを確かめにホワイト・レイクに帰る前に、僕には睡眠が必要だった。そこでチェルシー・ホテルに宿を取り、僕はそれから18時間眠り続けた。翌日の2時頃、ホテルを出

ようとした僕は、ロビーに全身が羽でおおわれたドレスを着たジャニス・ジョプリンがいるのに気づいた。彼女とバンド・メンバーの全員が同じホテルに泊まっていたのだ。「あんただったのね！」とジャニスが叫んだ。いったい彼女は誰に声をかけたのかとあたりを振りかえっていると、彼女は僕に跳びついてきた。

フェスティバルについての世の中の意見も一変しはじめていた。火曜日のニューヨーク・タイムズの社説は〝ベセルの次の朝〟という題で、前日よりはるかに肯定的な論調で僕らのイベントを評価していた。ボストン・グローブ紙はウッドストックをワシントン大行進に匹敵するイベントと讃えるこんな記事を掲載した。

> この国の生命力を示す偉大で、かつ積極的な重要性を持った巨大イベントとして、ウッドストック・ミュージック＆アート・フェスティバルは、その名を歴史に残すだろう。……1マイル四方の土地に、あれだけ多数の若者たちがひしめきながら、みんなが笑顔で、平和な時を過ごした。この事実は、彼らがいかに個人の尊厳、おたがいを思いやるという理念に忠実な、理想を持った人々であったかを雄弁に物語っている。……これは今、日増しに暴力が広がっているこの国にとって、大いなる希望のサインだ。

暴力が感染するのならば、非暴力もまた感染するのだ。しかも笑顔とともに。ベセルに集まった若者たちはその優しさによって、警察官を含む多数の年輩者たちと見事にコミュニケートしていた。そして世代間の断絶（ジェネレーション・ギャップ）という時代の定説をくつがえす美しい交流の物語がそこでは無数に生まれていた。このように愛と平和のシーンをもたらすイベントを〝偉大なイベント〟と呼ばずして、なんと

呼べばいいのだろう……。

だが、僕らが乗り越えていないギャップがまだひとつ残っていた。8月19日のニューヨーク・ポスト紙の連載コラムに、〝ベセルその後：ゴミと債権者たち〟という見出しでアル・アロノウィッツはこう書いていた。

このイベントを主催した4人の若僧たちは、これから先どうやって莫大な赤字を埋める金を作るのだろう？　といかぶる方たちはたくさんいるだろう。マイケル・ラングは今、笑顔で「どんなに幸福を感じているか」と語る。しかし、その一方、彼のパートナー、24歳のジョン・ロバーツはニューヨークで何十万ドルという金を、別の銀行口座に移し替えるのに必死だ。責任を四分割する合意のもとに作られた彼らのウッドストック・ベンチャーズ社は、ロバーツの個人資産によって運営されていたのだ。「ジョンはね」、この一週間着つづけのインディアン・スタイルの革のベスト姿でマイケル・ラングは「この成功をとても喜んでいるよ」と語り、「来年もこのイベントが帰ってくることを、ベセルの町、サリバン郡、そしてマックス・ヤスガーが望んでいた」と記者たちに話していた。しかし、この週末、どうして会場でジョン・ロバーツの姿を見かけなかったのだろう？「ああ」とマイケルは言った。「ジョンは来なかったんだ。とても精神的に高ぶっていたんだよ」と。

月曜日の朝にアロノウィッツから質問された時、まだ僕はウッドストック・ベンチャーズの未来を楽観的に考えていた。そしてジョンとジョエルが、わずか30分でも会場に来なかったのは何故かと訊かれた時、うまく答えることができなかった。

水曜日、僕はホワイト・レイクで後片付け作業が順調にいっているかを確かめ、スタッフに現在の状況を説明し、ジョンが全員への支払いを確約したことを告げた。

僕はピックアップ・トラックを借りて、この先どんな作業が残っているかを確かめようと、奥の方まで走っていった。広範囲にまだたくさん仕事が残っていた。レンタルした乗り物の約40台が行方不明。その半分がついに最後まで見つからなかった。湖や池の中に沈んでいる車両もあった。

その夕方、僕はシティへ戻らなければならなかった。ジョンとジョエルから、「3人で話し合いたいから彼らのマンションに来てほしい」と連絡があったのだ。サリバン・カウンティから発つ前に、僕はエル・モナコ・モーテルに寄って、エリオット・タイバーに一言挨拶して具合を確かめてやろうと思いついた。僕たちは久しぶりの出会いを喜んだ。そして僕がモーテルのオフィスを出ようとすると、「ちょっと待って！　渡すものがあるんだ！」、とエリオットが呼びとめた。エリオットは駆け足でオフィスに戻ると、紙袋をひとつ持ってきた。「ほら。僕ら初日の朝までにチケット全部売っちゃったんだ」。渡された紙袋の中には3万1000ドルの現金が入っていた。

こうして全国のチケット小売店から集まってきた額はやがて60万ドルに上った。あのフェスティバル直後のゴタゴタ騒ぎで、忘れていた大きなことをエリオットが思い出させてくれたのだった。

僕はその金をトランクのスペアタイヤの下にしまうと、ポルシェを走らせ、シティへ向かった。約束の時間8時に僕はアッパー・イーストサイドの彼らのマンション・ビルに到着し、正面に車を停めた。いったいどんな話し合いになるのかと、僕は少しピリピリしていた。これまで一緒にたくさんの難局を乗り越えてきたのに、フェスティバルが終わった今、バラバラになってしまった僕たち。今度は何が起こるのだ？

銀行での不愉快なミーティング以来、4人の関係はひどくギクシャクしたものになっていた。あの

日、リップとクロスマンが銀行のあの部屋にいるのを見た時、僕は正直、「このよく知らない連中と組んで、僕のパートナーたちと対決しろというのか？」と大きな反発を感じた。〝僕らをテーブルのこちら側に着かせたのは、ジョン・ファミリーというお化けへの恐れのせいじゃないのか？〟。僕は誰にも開かれないように心の中でそうつぶやいていた。アーティの気持ちはもうはっきりしていた。彼はもうこれ以上、ジョンとジョエルとは何の関係も持ちたくない、と決めていたのだ。

僕が32C号室のベルを鳴らすと、ジョンがドアを開けた。その顔つきは24歳の顔というより、10歳は老けているように見えた。ジョエルも憔悴しきった表情……。僕らは腰かけてさまざまな問題を話し合った。ふたりは僕のプランを尋ねたが、とにかくフェスティバルの会場をたたんで、僕らのビジネスがハマっている奇妙な状況に対処していくこと。それ以上のどんなプランも僕は持っていなかった。

ジョンは僕に「ウッドストック・ベンチャーズに残って、これからも一緒にやっていく気持ちがあるかい？」と訊いた。彼らは続けていくことを決めていたのだろう。この間、僕のジョンへのリスペクトと愛情は以前よりずっと大きくなっていた。だがジョエルとは話し合える共通の言葉が見つからない。彼のハートの持ちようはいいのだが、どうも頭の置いている場所がどこか違っていた。とどまることを選ぶべきだろうか？　しかしアーティにはもう僕らと一緒にやる気はないだろう。いろんな意味で彼らとパートナーシップを続けるほうが賢明なのだろうが、アーティを放り出すことにはまったく心の準備がなかった……。

ジョンとジョエルは信じられないという表情で僕の答えを聞いた。僕の選択が理解できないとジョンは言った。だが僕には最初から選択肢などないように思えたのだ。

マンションの部屋を出ようとして、僕はポルシェに残してきた金のことを思い出した。「忘れると

ころだった！ 僕はここへ来る前にエル・モナコに寄ってチケットのレシートを受け取ってきたんだ。手数料を引いて、残りは3万1000ドルだ。振り込みをしようか？ それとも下まで一緒に来て……」という僕の言葉を最後まで聞かないで、ジョエルはもう僕に腕をまわし、車までついてきた。

続く数週間の間に、僕ら4人は話し合ってウッドストック・ベンチャーズの解散を決めた。ベンチャーズ社は1400万ドルの負債を抱えていることがわかった。音楽業界の弁護士、ジョー・ヴィゴダがアーティと僕の代理人になった。討議は彼らが僕たちの持ち株を買い取るか、僕らが彼らのを買い取るかということに絞られていった。僕の関心はパートナーシップを終えることより、この赤字からウッドストックを抜け出させることにあった。僕たちは、払える金ができるまでしばらくふたりに負債を引き受けてもらえないかと提案をした。だがこの提案にジョンは激怒し、たちまち全員がお互いをののしり始め、結局何ひとつ解決しなかった。

もともと共通点のない人間たちをひとつにまとめるのは、昔からの僕の得意技だったが、ファミリーからのプレッシャー、一方の不信感、そしてアーティの他方との和解の可能性がないことなど、どんな点を考えてもとりあえず財政問題を早急に解決する何かを見つける他に、僕らが前に向かう方法はなかった。

アーティと僕は、ワーナー・ブラザース社のフレディー・ウエイントラウブに会いに出かけ、将来のフィルムからの取り分はなしという条件で50万ドルの前払いをしてくれるように申し出た。こうすればいくつかの支払い請求に答えて、とりあえずの危機からベンチャーズ社を救い出すことができるだろう。ところがこの申し出にウエイントラウブはノーと言った。映画が当たるか疑わしいというのだ。テッド・アシュリーとワーナーブラザースの重役たちは、彼らが金の卵を持っていることを百パーセント承知していたのだ。そして僕らが苦境にいることをひそかに喜んでいた。となればフィルム

を買いたたいても、僕らがシッポを振ってくるだろうと……。

8月29〜31日の週末、僕は休みを取って、イギリス、ワイト島フェスティバルに出かけることにした。僕はアルバート・グロスマンと、ボブ・ディランのバックをつとめるザ・バンドのメンバーと一緒に飛び立った。僕はウッドストックのスピリットが大西洋を越えてあちらに伝わったかどうかを確かめたかったのだ。もし僕らの会社が生き残れるのなら、このフェスティバルは僕たちの将来に何らかの影響を与えるはずだ、と思ったからだ。ワイト島は美しい所だったが、ショーそのものはちょっとガッカリした。そこには〝ウッドストックのマジックはない〟、と僕の目には見えたのだ。

ジョエルは僕の行動をこんな風にとらえた。

「すべてが終わると、マイケル・ラングとアーティ・コーンフェルドの二人はどこかに行方をくらまし、ワイト島にあらわれた。そしてTVショーにも登場し〝ウッドストックはもう歴史だ。僕らは次の計画に取りかかっている〟と語っていた。彼らの前のパートナーたちがまだ会場に残り、土地の後始末をし、いろんな支払いを続けているというのに……」。

パートナーたちとの訣れ——ベンチャーズ社離脱

ニューヨークに戻っても、状況は悪化し続けていた。次のミーティングで僕らは解決策を討議した。今回僕らは残りの負債額を推定して、ジョンとジョエルに15万ドルを支払って彼らにベンチャーズ社から消えてもらうか、あるいは逆に彼らが僕らに7万5000ドルを支払い、プラス僕らの負債分をなしにしてもらえるかと申し出た。これらの違う金額を割り出したのは、何か計算に基づいていたの

CamScannerでスキャン

だが、それがどんな計算だったのか、今となってはおぼえていない。僕らはウッドストック・ベンチャーズの財政状況を計算する必要があった。将来の有望な投資者にプレゼンテーションするためだ。アーティ・リップはアルバート・グロスマンのほかにも数名の後援者を見つけていた。こうして僕らに必要な金を集められる可能性が見えてきた。

結局、アーティと僕は持ち株をジョンとジョエルに売らねばならないことになった。突然ロバーツ一家は方針をガラリと変え、8月の初めにはあんなに反対していた破産をちらつかせて僕らを脅したのだ。それまでの紛糾、ゴチャゴチャ、憎しみの日々は、もうこれ以上たくさんだと思った。でも僕らが負債分を払って、会社を責任を持って僕らだけで存続したいという提案は、本心からのものだった。もしロバーツ・ファミリーが脅しのとおり破産申告をすれば、フェスティバルの仕事に係ったすべてのスタッフ、クルー、ビジネス相手への支払いはなくなってしまう。それだけは回避したかったのだ。もともと僕はウッドストック・ビジネスをするつもりはなく、コンサート・プロモーターを職業にしたいとも思っていなかった。僕は自分の夢を実現し、その成功から多くのものを得た。それだけで十分なのだ。もし、僕たちがこの問題をうまく終わらせることができなくても、少なくとも何らかの決着はつけてやろう……そんな気持ちだった。

そこで僕とアーティはベンチャーズのパートナーシップから別れることに同意したのだ。9月8日のニューヨーク・タイムズ紙はこれをニュース記事にして全国に報じた。僕らは持ち株とウッドストックの名称使用権を放棄したのだ。まだダブーズ地所の権利を買い取ることはできたが、ビルボード誌に新しいレコーディング・スタジオの建設について詳細な記事が載って以来、あのウォールキルの大騒動で、プロジェクトは保留になってしまった。

アーティと僕の持ち株総額の買い取り金額は一人3万1750ドルに決まったが、僕たちの弁護士

CamScannerでスキャン

はこの交渉は不当と考えると声明文を出し、僕らにその手紙のサインを求めた。

ジョイス・ミッチェル　ある朝、弁護士のところへ行ったことはよくおぼえているわ。わたしは弁護士の首を絞めてやろうかと思った。彼らがマイケルの権利を買い取って、会社から追い出すのは間違っている、そう思ったけど、彼には他の選択がなかったのかもね。

僕らがこの取り決めをした直後、ワーナー・ブラザースは100万ドルをジョンとジョエルに支払い、ウッドストック・ベンチャーズに、わずかな収益からの配当金を支払うという条件で、ベンチャーズが持っていた、映画所有権の残り半分を買い取ってしまった。アーティと僕なら絶対に売りはしなかっただろう。おそらくウエイントラウブとワーナーの幹部たちは、取引相手のふたりが映画の価値をよくわかっていないことに気づいていたのだろう。後になって気づいたことだが、僕らがベンチャーズを離れる前から、彼らはロバーツ一党に接触して買い取りの交渉を、僕らに知らせず、秘密裏に進めていたのだろう。

1970年3月、映画『ウッドストック』が公開されると、それはアメリカのみならず世界中の人々を熱狂させ、メガヒット作品となった。アカデミー賞で最優秀ドキュメンタリー作品賞を獲得。その他の数々の部門でもノミネート作品となっていた。映画公開からの最初の10年間で、ワーナーに5000万ドルを超える収益をもたらした。映画を上映する前の1969年のワーナーはハリウッドの8つのメジャー映画会社の中で最もランクの低い会社だった。しかし『ウッドストック』を買って、彼らは何年ぶりかの大ヒット作品に恵まれたのだ。

プレミア試写会でワーナーの会長、スティーヴ・ロスは僕の姿を見つけると、やってきて、こうい

ったものだ。「君とフレディ・ウエイントラウブは、一緒に何をやってもかまわんぞ！」。

映画そして3枚組のサウンドトラック盤を出して、ワーナーの株価はウナギ上り。今やワーナーは〝若者文化〟をビジネスの売りにする会社だった。しかし、映画がヒットしても、アルバムがベストセラーになっても、アーティと僕には一銭も入ってこなかった。

アーティ・コーンフェルド　僕らが会社を追い出されたことで、マイケルと僕はざっと5000万ドルは儲け損なったんだろう。

僕たちとジョン、ジョエルとの絆は絶たれたが、スタッフメンバーたちはウッドストック・ベンチャーズで仕事を続け、結局フェスティバル系の仕事では僕もゆるいつながりで協力を求められることもあった。訣別から6週間後、購買エージェントだったジム・ミッチェルからジョンとジョエル宛てのメモのコピーが、僕のデスクの上に置かれていた。それはジョンとジョエルが取りかかろうとしていた新しいプロジェクト提案への返事だった。彼らはウッドストックをトラベリング・ショーにしてアフリカをツアーさせようと計画していた。

それは僕にはなんだかとても滑稽に思えた。

僕はもう前に向かって歩き出していた。それでも、どこに行ってもウッドストックは僕についてまわった。けれど、こんなパッケージ・ツアーは僕には要らないのだ。

CamScannerでスキャン

終章

Epilogue

エピローグ

CamScannerでスキャン

ウッドストックから2か月、10月のよく晴れた日、ロサンジェルスで僕は車を借り、街の目抜き通り、サンセット・ストリップを走っていた。映画の企画案が持ち上がり、コロンビア・ピクチャーズ社の人間と話し合いをするために、僕はニューヨークから飛んできたところだ。街角のニューススタンドには〝ウッドストックに450000人！〟と大見出しのローリング・ストーン誌が、ライフ・マガジンのウッドストック特別号と並んで置かれている。後数か月で映画が封切られサントラ盤もリリースされるのだ。

その時、僕は隣の車線を走っていたブルーのオープンカーのドライバーがスピードを落とし、こちらへ手を振っているのに気づいた。砂色の髪に長いもみあげ、そして彫りの深い顔立ち……スティーヴン・スティルスだ！

「ヘイ、マン、こんなところで会うとはな！」、彼は大声で僕に声をかける。「俺の家までついてこいよ、聴かせたいものがあるんだ！」

「いいとも！」。なんだろう……？ と思いながら、僕は混みあった通りの交差点でハンドルを切り、彼の車の後を追う。スティルスとは8月18日の早朝、彼がヘリコプターでウッドストックの会場から飛び立って以来だ。僕らは車を右折し、ローレル・キャニオンに向かい、丘の道を上り、セキュリティ・ゲートのある小径に車を乗り入れた。メルセデス600の横に車を停め、スティルスの後について階段を数段おりると、そこは地下のミュージック・ルーム。アンプやマイクが置かれた広い部屋へ入ると、ダラス・テイラーがドラム・キットをいじっているところだった。

「マイケルにあの歌を聴かせてやろうぜ」、彼はテイラーに言うと、ハモンドB－3オルガンの前に座り演奏を始め、マイクに顔を近づけた。

神の子と会ったんだ
彼はどこかへ行く途中
それでどこへ行くんだいと尋ねると
彼は答えて言ったのさ
ヤスガーズ・ファームへ行くんだ
ロックンロール・バンドに加わって
緑の野原でキャンプして
それで魂を解放するんだ
僕らはみんな星屑
僕らは金色に輝く
そしてみんなで帰るんだ
エデンの園へ帰るんだ……

ビックリしている僕の顔を見て、スティルスは隙間のある歯を見せて笑った。
「フェスティバル会場を発ってすぐ後にさ」、スティルスは説明してくれた。「俺たちディック・キャベット・ショーに出演するジョニ・ミッチェルに会いに行ったんだ。ベセルに行くんで彼女を置いてきぼりにしてたからさ。彼女も来たがっていたけど、行ってしまったらTVの出演時間には戻ってこれないだろうってデヴィッド・ゲフィンが止めたんだ。ジョニはTVでフェスティバルの報道番組を見て、NYのゲフィンのマンションでこの歌を書いて、その晩、俺たちにテープをくれたんだ。実はこの曲、俺たちCSN&Yの次のアルバムのためにレコーディングしたばかりなんだぜ」。

CamScannerでスキャン

もう僕は完全にノックアウトされてしまった。今も僕はその歌をそんな風に聴いた時の気分を、つい昨日のことのように思い出すことができる。

フェスティバルから数週間たつと、僕のところにはいろんなビジネスの誘いの電話が、たくさんかかってくるようになった。みんな僕をこの国を代表するプロモーター、とでも思ったのだろう。でも、ありきたりのコンサートやツアーを企画することに、僕はちっとも魅力を感じなかったし、そもそもそういう仕事を追求したい、という気持ちもなかった。ウッドストックを経験した後、音楽業界の状況は、僕の目にはつまらないものばかりに見えた。ほとんど文無し状態だったが、それでも僕は自分が誰で、どこへ行きたいのか……まだ自分探しの旅を続けていた。

しかし、12月に僕はローリング・ストーンズのマネージング・チームのサム・カトラーから連絡をもらった。彼は北カリフォルニアのコンサートでせっぱつまって、ＳＯＳコールをしてきたのだ。ストーンズは12月6日にフリーコンサートをする計画でいたが。その直前に会場に予定していたシアーズポイント・レース場から断られ、カトラーは「飛んできて、助けてくれ！」と僕に泣きついてきた。聞けば、計画は始まりから悲惨の一文字。それでも、僕はできるだけの手伝いはしようと、申し出に応じた。ストーンズと彼らのスタッフは善意でファンたちを喜ばせようとフリーコンサートを思いついたので、そのことには何の問題もなかった。だが、ほとんどプランらしいプランもなく、設営の準備を甘く見ていたのが大問題だった。コンサートの会場はドタバタとオルタモント・レース場に移っていった。

あの日のオルタモントで見たものは、僕の人生の最悪の体験だった。僕の目には、はっきりとドラッグ・カルチャーのダークサイドが見えた。ありとあらゆるエキゾチックなドラッグで理性も何もか

CamScannerでスキャン

もふっとんだ連中が、人ごみの中をわけもなくうろつき回っていた。昼の部のプログラムが続く間ずっと、ステージの真下で殴打事件が起こっていたが、止めようとする人間は皆無だった。

ステージを守る役目を引き受け、そのすぐわきにバイクを停めた悪名高い集団、ヘルズ・エンジェルスが唯一のセキュリティというのが、何よりも最悪だった。彼らは後ろの方からつめかける人々に押されて、運悪くバイクに倒れかかった客たちを、かたっぱしから殴り倒した。間に入って止めようとしたジェファーソン・エアプレインのマーティ・バリンも彼らの餌食(えじき)、彼は一発のパンチでノックアウトされて意識を失ってしまった。

ガールフレンドとストーンズを見に来ていた黒人青年、メレディス・ハンターも午後の早い時間に彼らと小競り合いをしていた。一度いなくなって戻ってきた彼は拳銃を持っていた。そして彼がポケットから銃を抜いた瞬間、エンジェルスのひとりが彼の背中にナイフを突き刺した。即死だった。ハンター刺殺事件はメイズルズ・ブラザースが撮ったドキュメンタリー映画『ギミー・シェルター』にも記録されていた。

ウッドストックからわずか4か月で、人々は〝オルタモントがウッドストックに始まった美しい時代に終止符(ピリオド)を打った〟と言い始めていた。僕はそうは思わなかった。オルタモントで起きた悲惨な事件は、見通しも、適切な準備もなく、事を起こせば、それはいくらでもひどい結末になるということを示していた。もし、きちんとした準備と主催者側に確かなヴィジョンがあれば、オルタモントはベイ・エリアの最高な音楽の一日になっていたはずだ。

僕にとって終わりは5か月後、ケント州立大学でナショナル・ガードによって4人の学生が射殺された時に来た。大学のキャンパスでなんの武器も持っていないアメリカの子供たちが、制服を着た他の子供たちに銃で撃ち倒される……その衝撃的光景はニクソン政権下、無秩序からどんな狂気がもた

CamScannerでスキャン

らされるかを国中の人に知らせ、多くの人の胸に警鐘を鳴らした。この報道に反応して、ニール・ヤングはすぐに「オハイオ」を書き上げて、CSN&Yでレコーディング、数日後には全国のラジオから流れていた。「オハイオ」はどうすれば時代の悪い流れを変えられるのか、と人々の胸に問いかけた。音楽がどんな風に僕らの時代の出来事を反映し、人々の助けとなれたのか、を見事に示した歌だった。

マイケルのその後の旅

1970年、アーティと僕はまたパートナーとなり、一緒に新しいエンターテイメント・ビジネスを始めたが、長続きはしなかった。僕はアーティとリンダが大好きだったが、一緒のビジネスはうまくいかなかった。わずか1年たらずで僕たちは袂(たもと)を分かち、別々の道を歩くことになった。腹心の友とビジネスが原因で別れることは、お互いに深い心の傷を残すことになった。アーティは自分を置いてきぼりにするのかと僕を責め、僕はもう留まることはできないと悟った。それから長い年月、僕らの関係はひび割れたままになってしまった。

70年代の初めに、ガルフ+ウエスタン社から、パラマウント・レコードを運営しないかとオファーを受けたが僕は断り、その後、ジャスト・サンシャイン・レーベルとプロデューサー契約を結んで、自分の好きなアーティストたちのアルバムを作りはじめた。まだ当時、無名だったビリー・ジョエル、ネイティブ・アメリカンの血をひくシンガー・ソングライターのカレン・ダルトン、R&Bのヴォーカリスト、ベティ・デイヴィス、ブルースマンのミシシッピ・フレッド・マクダウエル、それにゴスペル・グループのヴォイシズ・オブ・イーストハーレム、他たくさんの人々のアルバムをプロデュー

スーした。

　コンサート・プロモーションもそうだったが、アーティスト・マネージメントにも、僕は魅力を感じなかった。それでも誰かフルタイムでできる人間が見つかるまでという条件で、僕はしばらくの間、ビリー・ジョエルのマネージメントを引き受けた。そんなある日のこと、ビリーと僕が飛行場へ向かう途中、カーラジオからジョー・コッカーの「ユー・アー・ソー・ビューティフル」が流れてきた。すると、ビリーは僕の方に視線を向けて、きまじめな表情で、こう言った。

「なあ、不思議だと思わないか？　いままで何度もカウントアウトをくらって負けと言われたはずなのに、こいつはいつのまにか立ち上がって、またリングに舞い戻ってくるみたいじゃないか……」。

　どういう運命のいたずらか、1976年に僕はまたジョー・コッカーとめぐりあうことになった。立ち上がることもできないほど酔っぱらって、何度もショーをだいなしにして、あの後彼が歌手としてのキャリアもだいなしにしていることは、僕も知っていた。しかし、実際にへべれけで支離滅裂な姿を見た時は、やはりショックだった。無惨と呼べるほどデブついた体は、健康志向やダイエット・ブームといった時代の流行とはまったく無縁だったことは、一目でわかった。その時、脳裏に浮かんだのはあのビリーの言葉。こうして、気がつくと、僕はしばらくの間だけ彼のマネージメントをする約束をしていた。健康と評判を回復させるのだ、と僕は彼に酒量をコントロールして、もっと自分の持っている天賦の才能を活かすようにと、口がすっぱくなるまで言い続けた。そんな努力の甲斐あって彼はまたメジャー・スターの座に返り咲き、世界で、特にヨーロッパで人気沸騰。その優れた才能に見合う活躍を続けることができた。しばらくの約束は、気がつくと16年間になっていた（そして、1991年、僕と彼とは些細な口喧嘩から、どこかの映画のようにぷいと別れることになった）。

ジョー・コッカー、そしてリッキー・リー・ジョーンズのマネージ仕事をしていた1987年、僕は西ドイツのプロモーター、ペーター・リーガーの依頼を受け、東ベルリンの壁の後ろで、25万人の東ドイツの若者たちのためのフェスティバルをプロデュース。ジョーをメイン・アクトに、東ドイツ、ロシア、西ドイツのバンドがいくつも出演して、フェスティバルは大成功だった。その勢いを駆って、僕らはドレスデンでも野外コンサートを開催し、10万人の人々を集めることができた。ドレスデンの人々が西洋人の演奏を見たのは、第二次世界大戦以来とのことだった。

これらのイベントの成功がもとで、1989年ウッドストック20周年記念イベントの計画が急浮上。僕はベルリンの壁の両側でやろうと思いついた。そう、ウッドストックのスピリットで分断されている東と西の間に橋を築こう!……そう考えたのだ。

2年間、胸のわくわくするようなミーティングを重ね、何度となく東ドイツ側の横槍を受けながら、ついに僕はホーネッカー政権から、開催してもよいという暗黙の了解を得ることができた。しかし、いざ、という時になって、ワーナー・ブラザース社とモスクワ共産党から嵐のような妨害に会い、夢のようなプロジェクトは中止の憂き目を見ることになった。ワーナーとモスクワ共産党……奇妙なカップルはベッドで、どんな睦言をかわしたのだろう?

1989年、ベルリンの壁が崩壊! という世紀のニュースが世界中を駆けめぐった日、僕はちょうどジョー・コッカーのツアーでベルリンに戻ってきたところだった。すぐさま僕たちは市長とともにコンサート集会をオーガナイズ。東と西のバンドが一緒に演奏して、両市民の快挙を祝福した。ベルリンの街頭には何百万という人が繰り出し、さらに多くの人々が〝壁をくぐりぬけて〟来ていた。

僕はこうして、歴史が誕生する、その瞬間に立ち会うことができたのだ。それは、なんと素晴らしい体験だっただろう。

CamScannerでスキャン

ウッドストック復活――25、30周年記念フェスティバル

それでももし、そんな企画を持ちかけられたら、きっと僕は反対票を投じていただろうか。1994年の25周年と、1999年のウッドストック30周年記念フェスティバルには、気持ちが動いた。あんなことがあってからも、ジョン・ロバーツと僕は時々連絡を取り合っていて、90年代の終わりにはウッドストックの話題で笑いあえるまでに、関係を修復していたのだ。こうして、また彼とジョエルと僕は顔をそろえ、25周年記念の計画を練り始めた。

1994年の夏、僕はソーガティーズのそばのシャワーランドにあるウィンストン農場の800エイカーの土地を開催地として押さえることができた。そこは、いちばん最初に僕がウッドストックをやりたいと思った場所だった。ウッドストック・ベンチャーズのオリジナル・パートナーの4分の3がまた一緒になり、僕はさらに当時ポリグラムの社長をしていたジョン・シアーをチームに招き入れた。

こうして僕らがプロデュースした記念イベントには若者たち、また彼らの両親になっていたかつての若者たち、35万人が集まってハッピーな時を過ごし、25周年にふさわしい最高なフェスティバルになった。

1994年、悲劇的な交通事故ですでにリンダは他界していたが、アーティはフロリダから駆けつけ、その8月12、13、14日の3日間を僕たちと一緒に笑顔で過ごした。もちろん、最初のウッドストック出演者たちも帰ってきた。サンタナ、ジョー・コッカー、クロスビー、スティルス&ナッシュ、さらにシェリル・クロウ、グリーン・デイ（なんとバンドのマネージャーは69年フェスのシャ・ナ・

ナウのメンバーだった）、ポルノ・フォー・パイロス（リーダーのペリー・ファレルはあの"旅するウッドストック"、ロラパルーザ・フェスティバルの創始者）、レッド・ホット・チリ・ペッパーズ、ギーテメタリカ、という当代の人気アーティスト&グループが、ステージで熱いパフォーマンスを繰り広げた。

マスコミの中には、僕たちがペプシ・コーラなど、大企業のスポンサーシップをつけたことを、"オリジナル・フェスの純粋な精神を汚した"とめくじらを立て、非難の声を上げる論者もいたが、それは時代のコンサート・ビジネスの常道。ウッドストックといえども例外ではなかった。それに、集まってきた多くの参加者はそんなことは気にもかけていなかった。さらに、ぶっちゃけて言えば、このフェスティバルにかかった費用は3000万ドルを超えた。もし、スポンサーをつけなかったら、フェスティバルのチケット代はもっとずっと高額になっていたことだろう。僕が思い描いた理想のシナリオどおりにはいかなかったが、僕らのプランが潰されることはなかったのだから、まずはよし、としなければいけない。

真のウッドストック・スタイルの、コミューナル精神はこのイベントでも甦った。今回も大雨に舞われたフェスティバル会場。それでもそこには、またニコニコ顔で天災をも楽しむあの泥人間たちがたくさんいたのだ。ウッドストック'94は収益を上げた。僕ら4人以外には……。

5年後、ウッドストック'99は7月23、24、25日に、ニューヨーク州の北、ローマの町のはずれ、モホーク・ヴァレーのグリフィス空軍基地で行われた。ウッドストック・ベンチャーズ社がライセンスを保有し、僕とジョン・シアー（今度はオグデンの社長になっていた）、オジー・キルケニーがプロデューサーを務めた。本当はまたウィンストン農場の牧歌的な風景の中で開きたかったが、ソーガティーズ町会の政治的勢力図が前回とは変わってしまい、戻ってくることを楽しみにしていた町の人々

を裏切る結果になったのは残念だった。でもひるがえって、グリフィスは雨が降ろうがへっちゃら（下はコンクリートだ）、何百というビルや建物があり、出演者も、スタッフも、クルーも、控え場所から、機材の格納スペースはありあまるほど。何百エイカーのスペースはステージ、パーキング、キャンプ、なんでもござれで、申し分なかった。そして何より、会場へのアクセスがとても楽だった。

僕はまた、ベテラン、クラシック人気ロッカーズに、いろんなジャムバンド、当時の若者たちに人気のハードエッジ系でも超過激ではないグループをミックスしたプログラムを考えていた。だが、僕の直感的思惑に反して、ラインアップは多数決で決まっていき、当時の最大級人気グループがずらり。つまり、僕があんまり好きになれそうもない、暗くて、とてもアグレッシブなバンドが大多数を占めてしまった。

まだ、このイベントのプランニングをしている頃、僕はプリンスと、「ジミ・ヘンドリックス・トリビュートはどうだろう？」と話をしていた。すると、その時、プリンスは急にドキッとするような問いを僕に投げつけたのだ。

「なんできみは、こんな不良（ナスティ）バンドばっかり出演させるんだ？」。彼の質問に僕は返す言葉が見つからなかった。

リンプ・ビズキット、コーン、レイジ・アゲインスト・ザ・マシーンが演奏している時の観客席の若者たちのモッシュ・アクトは、見ているだけでゾッとする光景だった。彼らは次々と群衆の上にジャンプして、乱暴に身を投げ出し、ボディ・サーフィン……興奮して我を忘れるような空気は伝染するように、会場に広がっていった。はたして会場の数か所で若い女性たちが暴行をうけたという報告が入り、僕たちは慄然（りつぜん）としたのだった。

天気は凶暴ともいえるほどの暑さで、救いの雨が降る様子もなかった。もちろん、水飲み場へ行け

CamScannerでスキャン

ば、いくらでもただで水は飲めたのだが、売店ではせこい商売人たちが、プラスチック・ボトルにつめた水を一瓶4ドルで、喉の渇いた客たちに売り始めた。ヤンキー・スタジアムか、ここは……？
これを聞いた僕は、業者たちにクレイジーなぶったくり値段をやめて、ただちに常識的な値段に下げるよう注意を、とスタッフを送り出した。ところが戻ってきた連中は〝もう、手遅れです〟。なんとかしなくては、と水を満載したトレイラーを何台も会場を回らせて、これに対抗した。それでも参加していた大多数の子供たちはグッドタイム。フェスティバルは、もうウッドストックというより、春休みMTVパーティと化していた。

最終日、夕暮れの午後7時、ローマの町長、郡や州のお偉方は記者会見を開き、「最高のウィークエンドを実現していただいた」、と僕らに感謝の言葉を語り、「また、ぜひ開催していただきたい」と未来の招待状をくれた。それから数時間、最後の出演バンド、レッド・ホット・チリ・ペッパーズが、あの69年ヘンドリックスのウッドストック・レパートリー、「ファイア」を演奏し始めた時だった。会場の後方で何人かが焚き火をしはじめた。すると、まもなく、50人ばかりのつっぱりグループが、他の若者たちをけしかけ、並んで停めてあった支給物資運送のトラックに次々と放火。続いて興奮した連中は売店スタンドに「解放してやろうぜ！」とたいまつを手に押し寄せた。たちまち何百人を巻きこむ大乱闘になり、ただちに、多数の警官隊が出動。すると今度は騒ぎに巻きこまれては、と四方八方に逃げ出す若者たちで、会場は大混乱。警官たちが過剰反応をしないように仲裁しなければと、僕は逆に真只中に飛びこんでいった。彼らの名誉のために言っておこう。警察は抑制のきいた行動で、実に手際よく騒ぎを鎮めたのだった。

いま、あのイベントの一連の出来事を振り返って僕は気づく。１９６９年にあんなに確かに学んだはずの教訓を、忘れていたことに——そう、自分の直感を信じることだ。

CamScannerでスキャン

＊ジョン・シアー　1973年、ニューヨーク州の北、ワトキンズ・グレンで、ウッドストックの観客動員数を上回る60万人が参加したサマー・ジャムを成功させたプロモーターのひとり。ただし、コンサートは1日のみで当時の三大人気グループ、ザ・バンド、グレイトフル・デッド、オールマン・ブラザーズ・バンドが出演。この時、彼はまだ学生で22歳。その後もグレイトフル・デッドの数々のスタジアム・コンサートを行うなど、70～80年代のライブコンサート・シーンをビル・グラハムらと支えた。ちなみにウッドストック30周年に際してMTVアンケートで〝もっとも見たいバンド〟に選ばれたのが、オリジナル・ウッドストックから2、3世代の若者たちと長く不思議な旅のシーンを作ったグレイトフル・デッドだった。

今も生きるウッドストック・スピリット

ウッドストック以来、僕は長年にわたり、アメリカで、海外の国々でたくさんのイベントをやり、また音楽、映画、その他たくさんの芸術分野で、自分の関心を追求し続けてきた。ウエス・アンダーソンが監督した『アンソニーのハッピー・モーテル』というショート・フィルムを製作し、ウエスはもちろん、すぐれた俳優、ルークとオーウェン・ウィルソンを世界に紹介した。モスクワに出かけ、クレムリン美術館と共同で、僕はミハイル・ブルガーコフ作のロシア文学の傑作、『巨匠とマルガリータ』の映画化権を獲得。現在、進行中のこのプロジェクトは2010年にクランクインをしている。

過去40年間、ウッドストックは僕の人生の部屋の象になってしまった。写真をはじめとするたくさんの記録、記念品が一目で見られるように僕はその部屋をさらに大きく広げた。そこにはファミリー、友人、冒険の時を共にした人々の姿がいっぱい。さらにこれからも増えつづけていくのだろう。

1969年のフェスティバルに出演した多くのウッドストック・アーティストが、あれが人生の大きな転回点になったと語っている。つい最近では、カルロス・サンタナがこう語っている。

「ウッドストックで僕が見た集団的冒険は、今日でも何か大きな真実の瞬間として僕らの前に現れる。ベルリンの壁が崩れた時、そこにはウッドストックがあった。ネルソン・マンデラが牢獄から解放された時も、そこにはウッドストックがあった。初のアフロ・アメリカンの大統領の誕生を僕らが祝った時も、そこにはウッドストックがあった。ウッドストックはまだ僕らが生きる毎日の中にあるのだ！」。

ジョン・レノンはかつて、こう言ったことがある。

「ここ10年間に起こった素晴らしい出来事に気づいている人間は、そう多くはないんじゃないかな。たとえば、ウッドストックさ。あそこにはこれまで最大の数の人間が集まったんだ。それも戦争のためじゃなく、なんだぜ。ローマ人か、他のそんな連中以来、あんな巨大な人数の軍隊を持ったことはないんだ。しかも彼らは誰も殺さなかったし、暴力シーンひとつ起こさなかった。あれに比べればビートルズのコンサートなんか、はるかに暴力的だったんだぜ」。

そして今は亡きアビー・ホフマン。あのホワイト・レイクの週末に参加して、そして発見したコミュニティの発展を、彼は生涯の課題として追い続けていた。あそこで感じたこと、考えたことを彼は『ウッドストック・ネーション』という一冊の本にまとめて出したほど、多くのインスピレーションを感じたのだ。1989年、彼は死の直前に言っている。

CamScannerでスキャン

「あそこで感じたユートピアのヴィジョン、あそこで見て感じたコミュニティの存在。それが大きなエネルギーとなって俺を突き動かしてくれたんだ。そんな俺のような仲間たちがたくさん街へ飛び出し、いろんな活動をした。あの時代の社会変革はそこから始まったんだ」

鋭い音楽評論、文化評論で今はアメリカを代表する知識人のひとりになったグリール・マーカス。彼はあの時のジミ・ヘンドリックスの国歌演奏の本質を、こんな風に書いている。

「あの演奏は戦争に対する、人種差別に対する、そして、きみ、彼、彼女、みんなが、〝なくなってほしい〟と願っていたすべてのものに突きつけた巨大な〝NO〟だった。しかし、それから最初の異議申し立ての力強さは壊れていき、彼は次の4分から4分半、長い困惑の時に迷いこんでいった。あの威風堂々と航海していた船に、ヘンドリックスはたくさんの亀裂を見つけ、不安、怒り、恐れ、憎しみ、差し出された愛、拒絶した愛、そのひとつひとつを演奏の中で、自分の心の中で確かめていたのだ。彼が演奏を終えた時、もうそのアンセムをうまく言葉で言える者はいなかったし、誰も安らかな気持ちになることはできなかった。だが最後は、巨大な〝YES〟だったのだ。それはアメリカという国家への脅迫であり、誘惑であり、そして招待状だった。〝早くこの危険さ、この魅力、この俺の自由さと張り合ってみろよ！〟――彼はそう言っていたのだ」

あのアメリカの大きな試練、挑戦の時代にウッドストックからひとつのコミュニティが生まれた。同じ価値観、同じような憧れを共有する人々の輪があちこちにでき、そこでさらにふくらんだ可能性への信頼と、熱い希望の思いは、地球上のいろんな場所へ広がっていった。あの8月の3日間、若者たちが一瞬垣間見た変革の可能性は、40年かかって今やっと現実の形となって、さまざまな場所

CamScannerでスキャン

ではっきりと見えるようになった。ウッドストックで人々が胸に抱いたスピリットは、今もなお成長を続けているのだ。今、そのスピリットを、人はグリーン・ムーブメントに、MoveOnなどの草の根組織の中に、あるいはどこかの訳知り顔が〝ウッドストック・モーメント〟と呼んだ、最初のアフロ・アメリカン大統領誕生の、選挙日の歓喜の群衆の中に見出すことができるだろう。あの日、泥の海の中で、ジミ・ヘンドリックスが国歌を作り変えた時、いつかバラク・オバマのようにアメリカに変化を、世界に希望をもたらすような人間が現れる——そんな未来に向かって、ジミは語りかけていたのかもしれない。

40年後、ウォール・ストリート・ジャーナルはオバマの大統領就任式を〝ワシントンのウッドストック〟と呼んだ。ワシントンの通りに百万人が一緒になって、祝福に繰り出し、喜びの時を分かちあった日、インターネットではブライアン・ハセットというブロガーが、こんな感想をうちこんでいた。

「パレードが始まり、そこで僕が会ったすべての人の表情は、喜びでキラキラと輝いていたんだ。あんな集団的恍惚といえば、1969年のウッドストックがそうだったと僕は聞いたことがある。あのフェスティバルは、このぼくたちの国の多くのことを変えたんだろうな。

でも今回のウッドストックは権力の座に就くんだ。ジミ・ヘンドリックスの『星条旗よ永遠なれ』は、きっとこれの前奏曲だったに違いない。あの新しい考えを持って燃え上がったソウルは、あれからわずか40年、いま、ここで国を動かす本物のパワーを手にいれたんだ！」。

就任式の翌日、ニューヨーク・タイムズのゲイル・コリンズのコラムには、〝泥ぬきのウッドストック〟の文字が躍っていた。

「アメリカ現代史のもっとも思い出深いイベントの2つに参加できたことは幸福と言うしかない」、彼女は書いていた。「だから私はワシントンでの就任式を、寒い日のウッドストックのようだったと

形容しよう。そこにはどちらも、素晴らしく巨大な心のコミュニティの存在が感じられた」。

1969年の後半にジミ・ヘンドリックスは、ウッドストックを祝福する一編の詩を書き残している。あの8月の夏の日に彼が音楽で表現したことが、そこには言葉で表現されていた。

泥の中、歴史の中から
あふれ輝く50万の光りの輪
神の歓喜の涙は
僕たちを洗い
僕たちはその涙を飲んだ
そして初めて
すべての人が理解した
真実はもはや隠された謎ではないことを

ジミの言葉、そしてウッドストックの精神は今日もなお、この世界のどこかで、こだましつづけている。

CamScannerでスキャン

謝辞

ウッドストックの体験を書いて本にしませんか？——と、この本の執筆依頼がまいこんだ時、まず僕の頭に浮かんだのは1969年のあの週末についてこれまで書かれたたくさんの物語のことだった。そのなかには、愉快なものもあったし、シニカルなタッチで書かれたものもあったが、そこであったことの何か一部でも知っている人間が書いたものならまだしも、ほとんど想像ででっちあげただけと思えるような最悪なものもあった。

「もし60年代に起こったことを憶えているなら、きみは実際そこにはいなかったのだ」ということわざがあるが、作業を始めて、ホリーとインタビューを集めだした僕はそのことわざを反語的に痛感することになった。それまで何年にも渡って、僕もウッドストックの物語を語る機会はあったが、当時の記憶は実はとてもぼんやりとした曖昧なものだったのだ。あの時代の僕の人生にもう一度アプローチする良い方策はないものかと、僕は思いあぐねていた。すると友人のスティーヴンが、その本をきみの声として人々に届けたいのなら、実際に書き出してみればいいよ、とすすめてくれた。それはなんとも困難な提案に思えたけれど、僕は乗ってみることにした。かくして自分の体を書くという作業に投じてみると、扉が開いた。そう僕の目の前にはさまざまな顔や場所、いろんな光景や匂いまでが、あざやかに甦ってきたのだ。こうして僕はふたたび冒険の中に、全身ではまりこんでいった。不思議な解放感を感じながら、ウッドストックで起きたこと、そこに至るまでの出来事を書いていると、その多くが自分のしてきた内面の旅の帰結であったんだということに僕は気づいた。心の中の思いをさらすようなことはけっして得意ではないのだが、この本を読んでくれるみんなが、なぜあれらのことがああいう風に起こったのか理解してもらうためには、そうすることが必要なのでは、と僕には思えてきたのだ。

ホリーと僕はグルーヴを見つけた。本づくりで僕らの感じたグルーヴがいま、この本を手にしているあな

CamScannerでスキャン

たにも届いていればよいのだが……。

この本づくりに力を貸してくれたすべての人に感謝したい。インタビューに快く応じて、思い出を、思いを伝えてくれた人々に。ティシア・バーナス・アグリ、ポーラ・バットソン、デイル・ベル、リー・マックラー・ブルマー、アイリス・プレスト、ステュ・クック、デヴィッド・クロスビー、アラン・ダグラス、ローナ・エリオット、ジェーン・フリードマン、スーザン&ディック・ゴールドマン、スタン・ゴールドスタイン、ジョナサン・グールド、ウェイヴィ・グレイヴィ、ドン・カイダー、ロブ・ケネディ、アーティ・コーンフェルド、エディ・クレイマー、リサ・ロウ、トム・ロウ、メル・ロレンス、ジャイルス・マルカイン、ジョッコ・マルセリーノ、ピーター・マックス、ジョイス・ミッチェル、チップ・モンク、グラハム・ナッシュ、リック・オーバリー、クリスティーン・オリヴェイラ、ローズ・ペイン、アーティ・リップ、グレッグ・ローリー、マーシャ・ルービン、カルロス・サンタナ、マイケル・シュリーヴ、ペニー・ストーリングス、スティーヴン・スティルス、パリー・ティアズデイル、ビル・ウォード、ロバート・ウォーレン、そしてジェレミー・ウィルバーに。

すでに他界した人々とのインタビューを提供してくれたジョエル・マコワーの好意にも感謝したい。この物語をどんな風に語るべきか探していた時に適格なアドバイス、ガイダンスをくれたスティーヴン・サボルタにもスペシャル・サンクス。この物語は語るべき価値のあるものだと熱い励ましをくれた出版社ＥＣＣＯのダル・ハルパーン、本つくりをスムーズに進めてくれたアビゲイル・ホルスタイン、素敵なブック・デザインをしてくれたスーエット・イー・チョン、専門知識を駆使して尽力してくれたキャサリン・ベイカー。冷静な判断と豊富な知識、そして「前よりも一歩先に、そう進んでいけば、気がつくと着いているわ」という魔法の言葉を教えてくれたサラ・ラジン――みんな、ありがとう。自分たちの物語を語り、励ましの言葉をくれたリー・ブルマーとペニー・ストーリングスにも熱い感謝を。そして特にユーモアと粘り強い態度で僕を優しく鞭打ってくれたホリー・ジョージ・ウォーレンに深い、深い感謝を！もし、それらがなかったら、

僕はまだ書き終えてもいなかっただろう。

天国のリング・コーンフェルドに。彼女の愛と支えが僕とアーティをあの苦しい日々、導きの力となってくれたのだ。

あまりに若くしてこの世を去ってしまった友、ジョン・ロバーツに。その高貴な人柄は今も僕の憧れであり、目標を与えてくれるのだ。

タマラ、ハリー、ラズロに。夜遅く、朝早く「このページを書き上げなきゃいけないんだ！」と悲鳴をあげる僕にじっと我慢してくれたきみたちに。

真のマジックは人々の中にある。そのことをよく理解し、たくさんのスペシャル・モーメントをカメラでとらえてくれたフォトグラファー諸氏に、大いなる感謝を！　僕らのチームに加わり、大活躍してくれたヘンリー・ディルツ。ジム・マーシャル、リー・マーシャル、ケン・リーガン、バロン・ウォルマンに。そしてマイアミ・ポップを記録してくれたケン・デヴィッドフ、エディ・クレーマーに。

また僕らの記述係をしてくれたジュディ・ホイットフィールドや、他のさまざまな面で尽力、協力をいただいたダミアン・テイビス・トーマン、ニコール・ゴールドスタイン、ケリーアン・キウイアテク、ボブ・モーリス、ビル・ラッシュ、アンディ・ザックス、チャールズ・クロス、そしてミドルタウンのタイムズ・ヘラルド・レコード紙にも感謝したい。

そして最後に一緒に働いてくれた仲間たち、演奏をしてくれたミュージシャンたち、参加し、困難に耐え、僕らの人生を永遠に変えてくれたすべての人々に！

マイケル・ラング

ニューヨーク州ウッドストックにて　２００９年3月

[illegible]

[illegible]・制作関係者

アーティ・コーンフェルド Artie Kornfeld（ウッドストック・ベンチャーズ）マイアミで自分のエンターテインメント会社を経営。

アーティ・リップ Artie Ripp レコード会社取締役 ロサンゼルスでアーティ・リップ・プロダクションを経営。

アビー・ホフマン Abbie Hoffman（政治活動家・作家）1989年に自殺。

アラン・ダグラス Alan Douglas（音楽会社重役）パリを拠点に映画・音楽制作活動。

ウェス・ポメロイ Wes Pomeroy（セキュリティ主任）1994年に他界。

クリス・ラングハート Chris Langhart（テクニカル・ディレクター、デザイナー）ペンシルバニアの田舎で暮らしている。

ジェーン・フリードマン Jane Friedman（宣伝・広報）ウッドストックの後、パティ・スミスらのアーティストのマネージメントを手がけ、現在も出版業界で活動を続けている。

ジョイス・ミッチェル Joyce Mitchell（制作管理）引退して「アメリカの僻地、ハドソン・ヴァレーの2000年の選挙で共和党を支持した唯一の郡に引っ越し」、彼女が主催した最後のパーティは出演したバンドは[illegible]。参加者の数は50人にも満たなかった。「毎朝、壮麗な木々に囲まれた家で心地よく目を覚まし、書物、友人たちの中で、ひとりの世界市民として、孫たち、配偶者と暮らす喜びをかみしめ、これまでの人生のすべての瞬間、瞬間に感謝しながら過ごしている」。

ジョエル・ローゼンマン Joel Rosenman（ウッドストック・ベンチャーズ社パートナー）NYCのJ.R.キャピタル合資会社社長。

ジョン・モリス John Morris（制作エリア・ディレクター）サンタ・フェでネイティブ・アメリカンのアーティストたちと仕事をしている。

ジョン・ロバーツ John Roberts（ウッドストック・ベンチャーズ社パートナー）2001年に癌で他界。

スタン・ゴールドスタイン Stan Goldstein（キャンプ場世話役・人材発掘）LAで最近ミキサー業に復帰。[illegible]グループ、リノ・ジョーンズのコンサート映画、カリフォルニア州スラブ・シティの無断居住者たち

CamScannerでスキャン

ペニー・ストーリングス Penny Stallings（メル・ロレンスの助手） LAとニューオーリンズを行き来。最近、自著『ロックンロール・コンフィデンシャル』と『フレッシュ&ファンタジー』をアップルのiPhoneとiTouchにアップした。

ヘンリー・ディルツ Henry Diltz（写真家） ニューヨーク、ロサンジェルス、カリフォルニアのラ・ホヤに音楽のファインアート写真を展示する〝モリソン・ホテル・ギャラリー〟をオープン。LAを拠点に写真家として活躍する一方、音楽グループMFQで度々日本公演もしている。

マックス・ヤスガー Max Yasgur（酪農家・会場提供者） 1973年に心臓発作で他界。

ミリアム・ヤスガー Miriam Yasgur（マックスの妻&パートナー） フロリダに在住。

メル・ロレンス Mel Lawrence（オペレーション・チーフ） カリフォルニアのヴェニス・ビーチに在住。ケーブル・ネットワークのアクション／リアリティ番組やドキュメンタリーを制作している。〝スポンサーが見つかった時はね〟。

リー・マックラー・ブルマー Lee Mackler Blumer（ウエス・ポメロイのアシスタント） 25周年、30周年記念コンサートにマイケル・ラングの呼びかけで数名のウッドストック同窓生と参加協力。M2ラウンジでイベント・ディレクターをつとめる一方、40周年記念イベントを企画中だ。「だってまだウッドストックは私の人生そのものだから!」。

リサ・ロウ Lisa Law（ホッグ・ファーム）『ルック』誌の専属カメラマンだった時代からヒッピー時代に撮影した写真をまとめた『フラッシング・オン・ザ・シックスティーズ』を発表。サンタ・フェ在住。

＊30周年コンサートでNHKが彼女を中心に作ったドキュメンタリー番組「30年目のウッドストック」は日本でも反響を呼んだ。

リック・オーバリー Rick O'Barry（ジョイント・プロダクション・パートナー） ODP（オリジナル・ドルフィン・プロジェクト）を創設して、イルカや他の哺乳動物の保護を訴え続けている。

＊日本にも1977年ローリング・ココナツ・レビュー（セイヴ・ザ・ウェール・コンサート）でフレッド・ニール、リッチー・ヘイヴンス、ジョン・セバスチャン、カントリー・ジョー・マクドナルド、ウェイヴィ・グレイヴィ、ジャクソン・ブラウン、エリック・アンダーソンらと来日している。

（＊この海外ミュージシャンと協力して行なわれた日本初の海洋生物保護・環境保護チャリティ・コンサートはまもなくCD・DVD化の予定）。

CamScannerでスキャン

ローズ・ペイン Roz Payne（社会活動家・フェス参加者）バーモント州バーリントン・カレッジで急進的60年代史と哲学を教えている。彼女が参加した60年代の運動の「ニューズリール」の映画、写真、ドキュメント資料が www.newsreel.us で見られる。

ローナ・エリオット Rona Elliot（メディア広報）NBC－TVの人気番組「トゥデイ・ショー」に10年間出演して、全米に知られる彼女は、新聞、雑誌、ラジオ、インターネットでも音楽ジャーナリストとして活躍を続けている。グラミー・ミュージアムの教育委員会の委員も務める。

〈フェスティバル参加者〉

クリスティン・オリヴェイラ Christine Oliveira ニューヨーク州ウッドストック郊外で、2才から7才児のニュームーン保育園を開き、園長を続けている。

ジョナサン・グールド Jonathan Gould 高名なジャズドラム奏者、アラン・ドーソンに師事。バンド活動、レコーディング・スタジオで仕事をして、90年代には執筆活動も始め、『キャント・バイ・ミー・ラブ：ビートルズ、イギリスとアメリカ』を発表した。

ロブ・ケネディ Rob Kennedy 医療用のマリファナを栽培。ブラジル出身のアンクル・ブッチャーとフロントマン・エキストラオーディネアを結成。レコーディング、演奏ツアー活動を続けている。

〈フェスティバル不参加バンド〉

トレイン Train 1970年にヴァンガード・レコードから「コスチュームド・キューティーズ」を発表。ガーランド・ジェフリーズはソロ・アーティストとしてニューヨークを中心にレコーディング、演奏を続けている。ドン・カイザーはリック・ジェームスら多くのアーティストと共演。ボブ・レノックスはベルリンで、ペール・ブルーというグループを結成し、ビブラフォンを演奏。現在はノース・カロライナで、前衛音楽家たちとレコーディングをしたり、パフォーマンス・アーティストたちと共演をして活動を続けている。

〈フェスティバル演奏者〉

カルロス・サンタナ Carlos Santana レコーディング、演奏活動を続けている。

カントリー・ジョー・マクドナルド Country Joe McDonald バークレー在住、同上。

ジャイルス・マルカイン *Giles Malkine*（ティム・ハーディンのリズムギター奏者）ウッドストック郊外に暮らし、ミハイル・ホロウィッツとデュオで演奏、レコーディング活動を続けている。

ジョー・コッカー Joe Cocker 世界中をまわり、演奏、レコーディングを続ける。最新アルバムは2007年発表の『わが心の聖歌』Hymn for My Soul。

ジョン・セバスチャン John Sebastian ウッドストックに住み、近所のたくさんのミュージシャンと演奏したり、コミュニティ・プロジェクトを促進したり、レコーディング活動を続けている。

ティム・ハーディン Tim Hardin 1980年にヘロインの過剰摂取で死亡。

デヴィッド・クロスビー David Crosby スティルス、ナッシュと、時にはニール・ヤングと演奏をしている。

ノエル・レディング Noel Redding（ジミ・ヘンドリックス・エキスペリエンスのベーシスト）2003年に他界。

ミッチ・ミッチェル Mitch Mitchell（ジミ・ヘンドリックス・エキスペリエンスのドラマー）2008年にジミ・ヘンドリックス・ミュージックのセレブレーション・ツアーでアメリカ各地を回った後、燃え尽きたようにオレゴン州ポートランドで死亡。

リック・ダンコ Rick Danko ロビー・ロバートソンが抜けた後も、ザ・バンドとして、ソロ・アーティストとして、あるいは他のユニットで活動を続け、1999年に心臓発作で他界した。ウッドストックで行なわれたメモリアル・コンサートには、彼を愛した大勢のミュージシャン、友人たちが参加した。

リッチー・ヘイヴンス Richie Havens レコーディング、演奏活動を続ける一方、さまざまな美術活動、社会活動、子供たちのための教育活動のリーダーとしても活躍。社会思想家としてもユニークなコメントをNYタイムズに発表したり、ウッドストックで最初の火をともした男の活躍は留まることを知らない。最新アルバムは『Nobody Left to Crown』。

＊25周年では〝商業主義的なビッグ・イベント〟に反対して、オリジナル会場で小規模ながら〝ウッドストック・スピリットをキープする〟フェスティバルを開いていた。

（この記述は原著刊行の2009年時点でのものです。）

ウッドストックへの道

40年の時空を超えて
主宰者が明かしたリアル・ストーリー

2012年8月25日初版第1刷発行

著者　マイケル・ラング
訳者　室矢憲治
発行者　蔵敏則
発行所　株式会社小学館
〒101-8001　東京都千代田区一ツ橋2-3-1
電話（編集）03-3230-5126
（販売）03-5281-3555
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　牧製本印刷株式会社
DTP制作　株式会社昭和ブライト

ブックデザイン　漆畑一己（ファブ）
編集・構成　島本脩二
編集　佐藤千里（小学館）
校正　石内康夫
編集協力　松田ようこ（エルミーダイム）
協力　アキ中林

造本には十分注意をしておりますが、
印刷、製本などの製造上の不備がございましたら、
「制作局コールセンター」（フリーダイヤル0120-336-340）にご連絡ください。
（電話受付は、土・日・祝日を除く9:30～17:30です）

Ⓡ <公益社団法人日本複製権センター委託出版物>
本書を無断で複写（コピー）することは、
著作権法上の例外を除き、禁じられています。
本書をコピーされる場合は、
事前に日本複製権センター（JRRC）の許諾を受けてください。
JRRC <http://www.jrrc.or.jp　e-mail:jrrc_info@jrrc.or.jp　Tel.03-3401-2382>

本書の電子データ化等の無断複製は
著作権法上での例外を除き禁じられています。
代行業者等の第三者による本書の電子的複製も認められておりません。

© Kenji Muroya　© Shogakukan 2012 Printed in Japan
ISBN978-4-09-388252-1

CamScannerでスキャン